上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書７

―長野市内その５―

大星山古墳群・北平１号墳
（おおぼしやまこふんぐん　きただいらいちごうふん）

1996

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 7

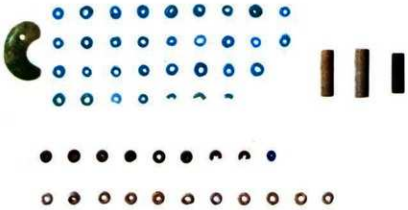
—長野市内その5—

大星山古墳群・北平1号墳

1996

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

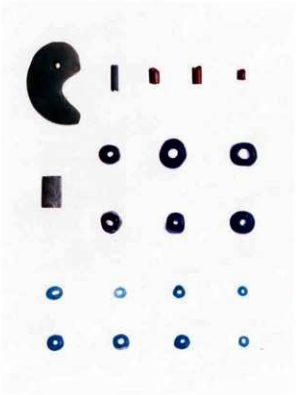
大星山古墳群



玉
3号墳（上）
4号墳（中）
2号墳（下）

金銅製飾金具
2号墳

北平1号墳



北平1号墳出土玉類

北平1号墳出土外来系土器

序

上信越自動車道は、善光寺平の千曲川東岸の山沿いを北進しますが、そこは自然堤防や山麓部の遺跡の宝庫でもあります。この地域で、(財)長野県埋蔵文化財センターは昭和62年に長野自動車道建設にかかわる発掘調査を開始して以来、上信越自動車道・北陸新幹線を中心に調査を継続してきました。関係の皆様のお陰をもちまして、これらの発掘調査は平成7年度においてほぼ終了させることができました。その間、石川条里・篠ノ井・屋代・松原・川田条里・榎田遺跡など膨大な遺構・遺物量の大遺跡が続出し、調査は困難を乗り越えつつ遂行されました。事業を円滑に進めるために、当センターとしても職員の増員など、体制の整備を図ってきましたが、ここに至るまでには関係のかたがたのなみなみならぬ御労苦があったものと思います。今後の事業の中心はこれらの整理作業となります。

大星山古墳群・北平1号墳はともに高速道路本線ではなく、盛土用の土採用地に所在したため、調査されることになったものです。前者は川田条里遺跡を、後者は松原遺跡を見下ろす山上に立地し、これらの大遺跡の調査に並行して発掘調査が行われました。

両遺跡では弥生時代末から古墳時代前半期の墳墓を発掘調査しましたが、これらは地域においてこれまで知られなかった様相を示し、弥生時代から古墳時代へという時代の転換点をあきらかにする貴重な資料を提供することができました。また、ともに調査例の少ない中・近世の遺構をともなっております。周辺ではさまざまな時代の集落跡・水田跡を調査しており、今後、整理作業を進展させるなかで、本書の内容と併せて、地域社会の全体像に迫ることもできるかと思われます。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた日本道路公団名古屋建設局・同長野工事事務所・長野県高速道局・同長野高速道事務所・長野市・同教育委員会など関係機関、対策委員会をはじめとする地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業に御協力いただいた多くの方々、直接の御指導を賜った長野県教育委員会の皆様に、心より感謝申し上げる次第であります。

平成8年3月31日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長　佐藤　善處

例　　言

1　本書は上信越自動車道建設にともなう採土工事に係わる長野市大星山古墳群（遺跡記号ＢＯＢ）・長野市北平１号墳（BKA）の発掘調査報告書である。

2　両遺跡の概要は、(財) 長野県埋蔵文化財センター・他の刊行になる出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

3　整理作業・編集の都合により、両遺跡をそれぞれ第１部・第２部とした。そのため、挿図はそれぞれ別個に番号を付した。

4　第１部の遺物番号は３ないし４桁で示している。最初の数字は１～４号墳を示し、後の数字は01からそれぞれの通し番号とした。

5　発掘調査・整理・執筆・刊行にかかる体制・分担は、本文中に示した。

6　発掘調査から本書の刊行に至るまで多くのかたがたのご指導・ご協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。

7　出土遺物・調査に係わる記録・資料は(財)長野県埋蔵文化財センターが保管しているが、今後、長野県立歴史館に移管される。

8　大星山古墳群・北平１号墳　調査報告書抄録

書　　名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書
副　書　名	大星山古墳群（おおぼしやまこふんぐん）・北平（きただいら）１号墳
巻　　次	長野市内その５
シリーズ名	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	20
編　・　著　者	土屋　積・青木一男・町田勝則
編集・発行機関	財団法人　長野県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒387　長野県更埴市屋代　長野県立歴史館　TEL　026－274－3891
発行年月日	1996年３月31日

所収遺跡名	大星山古墳群（おおぼしやまこふんぐん）	遺跡所在地	長野県（ながのけん）長野市（ながのし）若穂（わかほ）川田（かわだ）下和田（しもわだ）		
長野県埋文センター遺跡記号	ＢＯＢ	地図 25000分の１	『長野』	位置 標高	北緯　36°35′30″ 東経　138°14′30″ 標高390m
発掘調査期間	1990年４月５日～同年10月５日			発掘調査面積	2,000㎡
発掘調査原因	上信越自動車道建設に伴う路線外採土用地の事前調査				
主な遺構	円墳１基・方墳３基（竪穴式石槨５・石槨１）・組合式石槨１			時代	古墳時代前期～中期
主な遺物	鉄鏃・鉄鎌・やりがんな・弓飾鋲・ガラス小玉 勾玉・滑石白玉・土師器			時代	古墳時代前期～中期

所収遺跡名	北平（きただいら）遺（ゆい）・北平（きただいら）古墳群（こふんぐん） 北平１号墳	遺跡所在地	長野県（ながのけん）長野市（ながのし）松代町（まつしろまち）大字（おあざ）東条（ひがしでうじょう）字（あざ）北平（きただいら）		
長野県埋文センター遺跡記号	ＢＫＡ	地図 25000分の１	『信濃松代』	位置 標高	北緯　36°34′ 東経138°13′　標高496m
発掘調査期間	1990年12月５日～1991年７月28日			発掘調査面積	2220㎡
発掘調査原因	上信越自動車道建設に伴う路線外採土用地の事前調査				
主な遺構	墳２基 墳丘墓１基			時代	中世 古墳時代前期
主な遺物	銭貨、土師器、ガラス小玉、勾玉、管玉			時代	中世　古墳時代前期

本 文 目 次

巻頭図版
序
例言・抄録

第一部　　大星山古墳群

第1章　発掘調査に至るまで
第1節　大星山古墳群の環境……3
1　名称・位置……3
2　環境……3
第2節　調査に至る経緯……9
第3節　調査体制……10
1　調査体制……10
2　協力者……10
3　作業分担……10
第4節　調査日誌抄……11
第5節　調査方法……12

第2章　発掘調査
第1節　大星山3号墳の調査……13
1　発掘の経過……13
2　墳丘……17
(1)　墳丘の築成……17
(2)　墳丘施設……17
(3)　遺物の出土状態……20
3　石槨……20
(1)　墓壙……20
(2)　第1石槨……23
(3)　第1石槨の副葬品出土状態……25
(4)　第2石槨……26
(5)　第2石槨の副葬品出土状態……27
(6)　組合式箱形石棺……27
4　出土遺物……28
(1)　土器……28
(2)　鉄器……29
(3)　玉類・石製品……31
第2節　大星山1号墳の調査……32
1　発掘の経過……32
2　墳丘……34
(1)　墳丘の築成……34
(2)　墳丘施設……36
(3)　遺物の出土状態……37
3　石槨……39
(1)　第1石槨……39
(2)　第1石槨の副葬品出土状態……40
(3)　第2石槨……41
(4)　第2石槨の副葬品出土状態……44
4　出土遺物……44
(1)　土器……44
(2)　鉄器……46
(3)　玉類……47
第3節　大星山4号墳の調査……49
1　発掘の経過……49
2　墳丘……50
(1)　墳丘の築成……50
(2)　遺物の出土状態……51
3　石槨……52
(1)　墓壙……52
(2)　石槨……58
(3)　副葬品出土状態……59
4　出土遺物……60
(1)　土器……60
(2)　鉄器……61
(3)　玉類・石製品……61
第4節　大星山2号墳の調査……63
1　発掘の経過……63
2　墳丘……64
(1)　墳丘の築成……64

(2) 墳丘施設……66
(3) 遺物の出土状態……67
3 石棺……68
(1) 石棺……68
(2) 副葬品出土状態……71
4 出土遺物……72
(1) 土器……72
(2) 鉄器……74
(3) 飾金具・玉類……76
第5節 古墳時代以外の遺構と遺物……77
1 石祠と石仏……77
(1) 石祠……77
(2) 遺物……77
2 中世火葬墓……78
(1) 遺構……78
(2) 遺物……80
3 4号墳石棺内の埋葬……80
(1) 土壙墓……80
(2) 遺物……80
4 縄文時代以前の遺物……83
5 小考……83

第3章 調査の成果と課題
第1節 遺物組成と編年……84
1 土器……84
2 金属器……87
3 玉……89
4 小結……91
第2節 遺構の構造と遺物の出土状態……92
1 墳丘……92
2 石棺……93
3 合掌形天井と組合式石棺……96
4 土器の出土状態……97
第3節 大星山古墳群の歴史的位置……98
1 大星山古墳群の形成……98
2 中期以降の積石塚と合掌構造について……98
3 4・5世紀の菩光寺平……99

第二部　北平1号墳・北平塚

第1章 発掘調査に至るまで……105
第1節 北平塚・北平1号墳の環境……105
1 名称・位置・概要……105
2 環境……106
3 層序と調査範囲……108
(1)層序……108
(2)調査範囲……108
第2節 調査に至る経緯……109
1 調査の経緯……109
第3節 調査体制……110
第4節 調査経過と方法……111
1 調査経過……111
2 調査方法……111

第2章 発掘調査
第1節 北平1号墳の調査……112
1 発掘の経過……112
2 墳丘……113
(1)墳丘の形……113
(2)削り出しと盛土……115
(3)占地……116
3 棚と棺……116
(1)埋葬主体部の調査……116
(2)第1号埋葬主体部……117
①墓壙・礫郷状施設……117
②棺……118
(3)第2号埋葬主体部……118
①墓壙……118
②礫郷状施設と棺……118
4 出土遺物……119
(1)土器……119
①第1号埋葬主体部出土土器……119
②第2号埋葬主体部出土土器……121
(2)玉類……123

(3)遺物出土状況 …… 123
①棺上に堆置された土器群 …… 123
②身につけた玉・まかれた玉 …… 125
5 まとめ …… 126
(1)北平1号墳の時間的位置づけ …… 126
①時間軸の概要 …… 126
②北平1号墳出土土器群の位置 …… 128
(2)千曲川流域の墳墓の変遷 …… 130
①墳丘の形態とその変遷 …… 130
②墓域のあり方 …… 131
(3)儀礼と器 …… 132
(4)山上墓のあり方 …… 134
(5)長野盆地南部における
蛭川流域の集団のあり方 …… 135
第2節 北平墓の調査 …… 138
1 調査の概要 …… 138
2 北平1号墓 …… 138
3 北平2号墓 …… 138
4 まとめ …… 141
(1)境界稜線上の墓群 …… 141
(2)境界守護としての墓 …… 141
第3節 北平尾根の調査 …… 142
1 古墳以前の遺物 …… 142
(1)概観 …… 142
(2)石器 …… 142
①石核 …… 142
②剥片・破片 …… 142
③刃器(微細な剥離痕を留める石屑) …… 142
④石鏃 …… 142
⑤石錐 …… 143
⑥打製石斧 …… 143
(3)まとめ …… 143
2 古代・中世の遺構と遺物 …… 147
(1)遺構 …… 147
(2)遺物 …… 147
①出土状況 …… 149

第3章 胎土分析 …… 150
第1節 北平1号墳出土土器の
重鉱物胎土分析にあたって …… 150
1 今回明らかにしたい点 …… 150
2 胎土肉眼分類 …… 150
第2節 北平1号墳より出土した
土器の胎土の特徴 …… 152
1 試料 …… 152
2 分析方法 …… 152
3 分析結果 …… 153
(1)胎土の分類 …… 153
4 考察 …… 155
(1)土器胎土からみた北平1号墳と
松原遺跡との関係について …… 155
(2)土器胎土中の重鉱物の由来について …… 155
5 まとめ …… 156

第一部　大星山古墳群

挿図目次

第１図　大星山古墳群の位置（１：4,000,000）
第２図　常光寺平南部の遺跡（１：150,000）
第３図　大窟古墳群と大星山古墳群（１：38,000）
第４図　周辺の遺跡と大星山古墳群の位置の錯綜（１：20,000）
第５図　大星山古墳群の分布（１：2,000）
第６図　古墳群全体図（１：600）
第７図　採土工事計画（１：3,000）
第８図　グリッド設定図（１：800）
第９図　３号墳　墳丘（原地形）（１：400）
第10図　３号墳　墳丘（表土除去後）（１：200）
第11図　３号墳　トレンチ・石槨・岩盤の位置（１：200）
第12図　３号墳　墳丘断面（１：100）
第13図　３号墳　葺石（１：100）
第14図　３号墳　葺石立面拡大（１：40）
第15図　３号墳　墓壙上面（遺物出土位置）（１：40）
第16図　３号墳　墓壙構築過程（１：60）
第17図　３号墳　第１石槨（１：40）
第18図　３号墳　第１石槨の副葬品出土位置（１：30）
第19図　３号墳　第２石槨（副葬品出土位置）（１：30）
第20図　３号墳　組合式箱形石棺（構築過程）（１：30）
第21図　３号墳　出土土器（１：４）
第22図　３号墳　出土鉄器・砥石（１：２）
第23図　３号墳　石槨内出土玉類（１：１）
第24図　１号墳　墳丘（原地形）（１：400）
第25図　１号墳　トレンチ・石槨・岩盤の位置（１：200）
第26図　１号墳　第１石槨礫床の状態（１：40）
第27図　１号墳　墳丘断面（１：100）
第28図　１号墳　墳丘土器出土位置（１：200）
第29図　１号墳　第１石槨（１：40）
第30図　１号墳　第１石槨の墓壙（１：40）
第31図　１号墳　第１石槨の副葬品出土位置（１：30）
第32図　１号墳　第２石槨（１：40）
第33図　１号墳　第２石槨の墓壙（遺物出土位置）（１：40）
第34図　１号墳　テラス・周溝出土土器（１：４）
第35図　１号墳　出土鉄器（１：２）
第36図　１号墳　出土玉類（１：１）
第37図　４号墳　墳丘（原地形）（１：400）
第38図　４号墳　トンンチ・石槨・他の位置（１：200）
第39図　４号墳　墳丘断面（１：80）
第40図　４号墳　墳丘遺物出土位置（１：125）
第41図　４号墳　石槨と墓壙（１：60）
第42図　４号墳　墓壙外郭・内郭ライン（１：80）
第43図　４号墳　墓壙と石槨最下段の石（１：60）
第44図　４号墳　石槨（１：30）
第45図　４号墳　石槨石積の延長部（左１：60，右１：30）
第46図　４号墳　石槨の副葬品出土位置（１：30）
第47図　４号墳　墳丘出土土器（１：４）
第48図　４号墳　出土鉄器・石製紡錘車（１：２）
第49図　４号墳　石槨内出土玉類（１：１）
第50図　２号墳　墳丘（原地形）（１：400）
第51図　２号墳　トンンチ・石槨・岩盤の位置（１：200）
第52図　２号墳　墳丘断面（１：100，１：50）
第53図　２号墳　周溝中の崩落葺石（１：40）
第54図　２号墳　石棺上面の被覆（１：40）
第55図　２号墳　石棺（１：40）
第56図　２号墳　石棺の据り方（１：40）
第57図　２号墳　石棺の副葬品出土位置（１：20）
第58図　２号墳　出土土器（１：４）
第59図　２号墳　出土土器（拓本）（１：３）
第60図　２号墳　石棺内出土直刀（１：４）
第61図　２号墳　石棺内出土鉄器（１：２）

第62図　2号墳　石棺内出土白玉・金銅製品（1：1）
第63図　古代～近世遺構の位置（1：800）
第64図　石祠・火葬墓の位置（1：400）
第65図　石祠・石段・石垣（1：60）
第66図　石祠（1：40）
第67図　火葬墓の分布・石組（1：40）
第68図　4号墳　石棺内の墓（遺物出土状態）（1：40）
第69図　古墳時代以外の遺物（1：4）
第70図　土器編年図
第71図　周辺地域の土器比較資料（1：6）
第72図　金属器の組成と編年（1：4）
第73図　周辺古墳の鉄鏃（1：4）
第74図　原地形の復元（1：300）
第75図　3号墳第1石棺の構築過程
第76図　4号墳石棺の構築過程
第77図　埴輪頭位
第78図　2号墳石棺の構造と類例
第79図　集団関係と古墳築造の概念図

表目次

第1表　長野県史地名表
第2表　玉類計測表
第3表　大星山古墳群の埴輪施設

写真図版目次

巻頭上段　大星山古墳群出土玉類
PL. 1　大星山古墳群の遠景
PL. 2　大星山古墳群周囲の景観
PL. 3　3号墳の調査経過
PL. 4　3号墳第1石棺の遺物出土状況
PL. 5　3号墳第1石棺
PL. 6　3号墳第1石棺の細部
PL. 7　3号墳第1石棺の墓壙
PL. 8　3号墳第2石棺
PL. 9　3号墳葺石
PL. 10　3号墳葺石・組合式箱形石棺
PL. 11　3号墳墳丘
PL. 12　1号墳の調査経過
PL. 13　1号墳礫床
PL. 14　1号墳第1石棺
PL. 15　1号墳第1石棺の細部
PL. 16　1号墳第1石棺墓壙・第2石棺
PL. 17　1号墳第2石棺の細部
PL. 18　1号墳第2石棺の細部・墓壙
PL. 19　1号墳周溝
PL. 20　1号墳墳丘
PL. 21　1号墳墳丘
PL. 22　4号墳遠景・石棺
PL. 23　4号墳石棺
PL. 24　4号墳石棺の細部
PL. 25　4号墳石棺の細部
PL. 26　4号墳石棺の細部・墓壙
PL. 27　4号墳墓壙
PL. 28　4号墳墓壙
PL. 29　2号墳墳丘・周溝
PL. 30　2号墳石棺
PL. 31　2号墳石棺の細部
PL. 32　2号墳石棺の細部・墳丘
PL. 33　石祠・木造祠
PL. 34　石仏(1)
PL. 35　石仏(2)
PL. 36　平安時代墓・中世火葬墓
PL. 37　1・2号墳墳丘断面
PL. 38　3号墳墳丘断面
PL. 39　出土土器(1)
PL. 40　出土土器(2)
PL. 41　出土土器(3)
PL. 42　3号墳出土金属器
PL. 43　1号墳出土金属器
PL. 44　4号墳出土金属器・玉類
PL. 45　2号墳出土金属器
PL. 46　平安時代墓・3号墳出土品

第二部　北平塚・北平１号墳

挿図目次

第１図　全体遺構分布図
第２図　立地概念図
第３図　周辺遺跡分布図
第４図　北平尾根と松原遺跡の周辺図
第５図　基本土層図
第６図　調査グリッド設定図
第７図　調査・整理進行図
第８図　北平尾根地形測量図
第９図　北平１号墳墳丘断面図
第10図　北平１号墳墳丘測量図
第11図　北平１号墳墳丘土層図
第12図　北平１号墳の占地
第13図　第１号埋葬主体部
第14図　第２号埋葬主体部
第15図　第１号埋葬主体部出土土器実測図
第16図　第１、２号埋葬主体部出土土器実測図
第17図　玉類実測図
第18図　埋葬主体部土器出土状況図
第19図　棺上土器集中部平面図
第20図　棺床部玉類出土状況図
第21図　長野盆地南部の土器変遷図
第22図　北平１号墳出土土器群と集落出土土器
第23図　千曲川流域の墳墓の変遷
第24図　篠ノ井タイプ墳丘墓の変遷
第25図　自然堤防および山上の墓域のあり方
第26図　墳墓出土土器群
第27図　長野盆地南部の集落概念図
第28図　北平２号塚出土鉄貨
第29図　北平１号塚平面図および断面図
第30図　北平２号塚平面図および断面図
第31図　サト・ヤマ・異界の概念図
第32図　丸山古墳平面および断面図
第33図　北平尾根石器出土分布図
第34図　北平尾根出土石器
第35図　古代中世の遺構および土器分布図
第36図　北平尾根出土土器、鉄器、銭貨
第37図　グリッド別古代・中世土器重量
第38図　北平古代・中世土器分布図
第39図　重鉱物砂土分析サンプルナンバーおよび採取位置
第40図　試料の重鉱物組成
第41図　斜方輝石―単斜輝石―角閃石三角ダイアグラム
第42図　試料の重鉱物組成（砂土の種類別）

挿表目次

第１表　玉類観察表
第２表　土器編年対応表
第３表　墳墓出土土器組成
第４表　北平２号塚出土銭貨
第５表　北平尾根出土石器組成
第６表　石器観察表
第７表　北平尾根出土遺物観察表
第８表　北平１号墳重鉱物砂土分析サンプル
第９表　重鉱物分析結果

写真図版目次

巻頭下段　北平１号墳出土玉類、外来系土器
PL. 47　遺跡全景
PL. 48　北平１号墳　遺構(1)
PL. 49　北平１号墳　遺構(2)
PL. 50　北平１号墳　遺構(3)
PL. 51　北平塚・北平尾根　遺構(1)
PL. 52　北平１号墳　土器(1)　第１号埋葬主体部
PL. 53　北平１号墳　土器(2)　第１号埋葬主体部
PL. 54　北平１号墳　土器(3)　第２号埋葬主体部
PL. 55　北平１号墳・北平塚・北平尾根　出土遺物(1)
PL. 56　北平尾根　出土遺物(2)
PL. 57　北平１号墳　砂土分析

第一部　大星山古墳群

第１章　発掘調査に至るまで

第１節　大星山古墳群の環境

１　名称・位置（第１・２・３図）

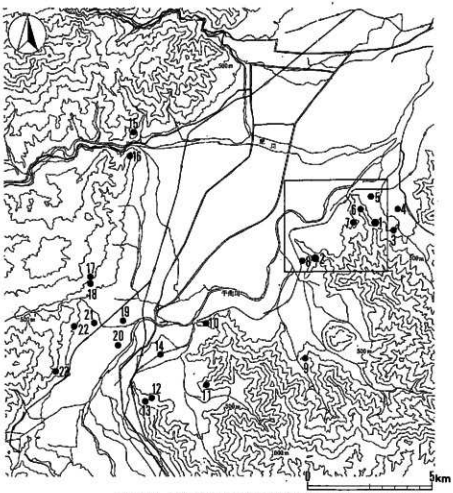
大星山古墳群は長野市若穂川田大字下和田字虚空蔵山に所在する。地元で虚空蔵山と通称するこの小尾根は、直下の下和田地区の共有地である。長野市若穂は旧綿内村・川田村・保科村が合併した旧若穂町であるが、虚空蔵山は保科村と川田村の村境になる。この尾根は、大室古墳群の中心である大室谷と保科川・赤野田川扇状地を画して北行する奇妙山系の尾根から扇状地側に派生した支脈である。大星山とはこの尾根全体を言うようであり、この古墳群より約１㎞西北の尾根上の大室18号墳は大星山前方後円墳と呼称されることがあるが、本書の大星山とは別であり、大室古墳群北山支群に含められる。大室18号墳付近より北の尾根頂部には北山支群の円墳群が存在する。反対側の谷は大室古墳群中心部の大室谷支群である。

調査以前の長野市教育委員会の遺跡分布図では大星山古墳群の位置を当該地ではなく、実際には古墳が存在しなかった南東に隣接する別の支脈上に示している（第４図）。一方、長野県史地名表には、大星山古墳群として１～６号墳までの横穴式石室墳があげられている（第１表）。そのうち６号墳は地番・立地が一致することから今回調査の１号墳に相当するものと思われる。墳丘上の石祠が横穴式石室と誤認されたものであろう。しかし、地名表では１～５号墳は山麓に立地するとされているが、周囲の山麓部では南東側の谷に１基の横穴式石室墳が確認できるだけである。従来の分布図の大星山古墳群は存在せず、地名表と今回調査古墳との異同ははっきりしないことになる。ここであらためて、本書の４基の古墳をもって大星山古墳群として確定させたい。その場合、時期・立地がおおきく異なる南東側谷の横穴式石室墳は別に名称を考えるべきであろう。

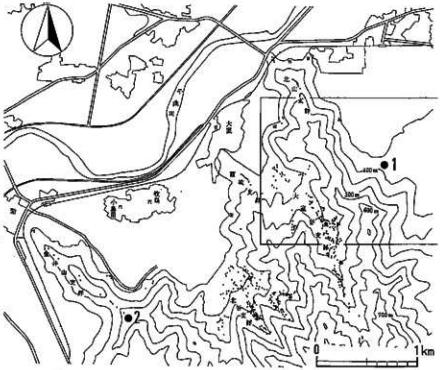
第１図　大星山古墳群の位置（1：4,000,000）

２　環境

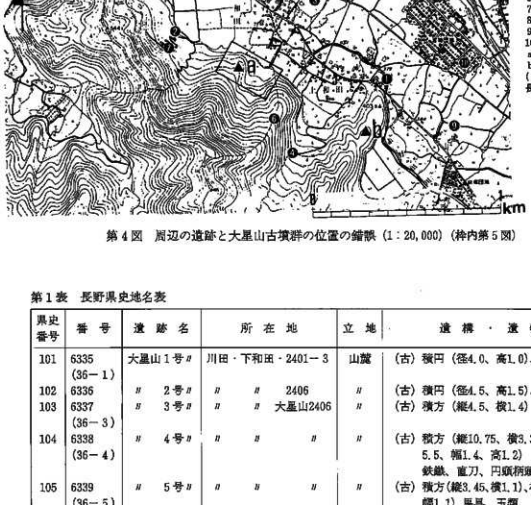
古墳群は著名な大室古墳群と尾根を挟んで反対側に突出した支脈上にある。この部分はやや緩傾斜となっているが、古墳より下方は急傾斜で沖積地に続く（第５図）。北方の尾根頂部には大室古墳群に含めて考えられる古墳が多いが、この付近にまでは分布しないとされる。この



第2図　善光寺平南部の遺跡（1：150,000）（枠内第3図）



第3図　大室古墳群と大星山古墳群（1：38,000）（枠内第4図）



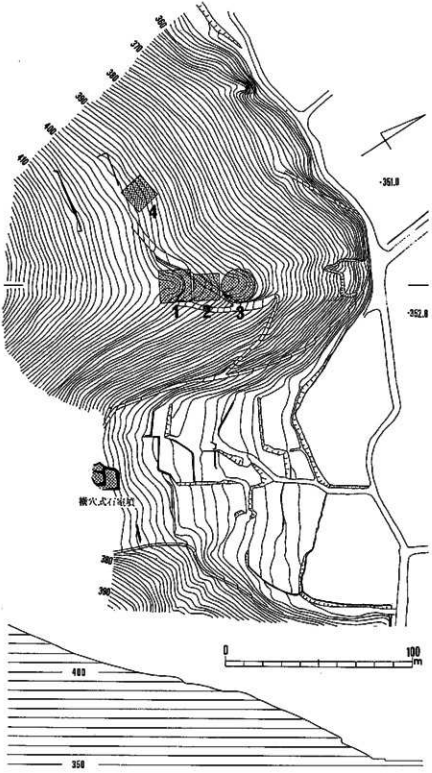
第4図　周辺の遺跡と大星山古墳群の位置の鍋隈（1：20,000）（枠内第5図）

第1表　長野県史地名表

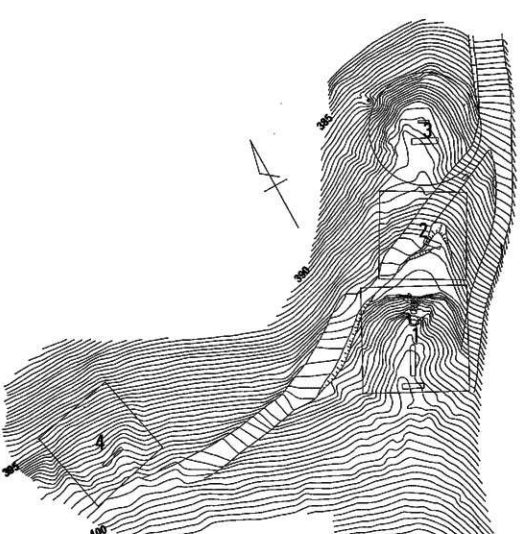
県史番号	番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
101	6335 (36－1)	大星山1号〃	川田・下和田・2401－3	山麓	(古) 積円（径4.0、高1.0）、横
102	6336	〃 2号〃	〃 〃 2406	〃	(古) 積円（径4.5、高1.5）、横
103	6337 (36－3)	〃 3号〃	〃 〃 大星山2406	〃	(古) 積方（縦4.5、横1.4）
104	6338 (36－4)	〃 4号〃	〃 〃 〃	〃	(古) 積方（縦10.75、横3.35）、横（長5.5、幅1.4、高1.2） 鉄鏃、直刀、円頭柄頭、鐔、馬具
105	6339 (36－5)	〃 5号〃	〃 〃 〃	〃	(古) 積方（縦3.45、横1.1）、横（長3.45、幅1.1）馬具、玉類
106	6340 (36－6)	〃 6号〃	〃 〃虎空瀧山2419	山頂	(古) 円（径13.5、高5.0）、横

支脈は、上信越道建設にともない水田跡の発掘調査が大規模に行われた川田条里遺跡に面している。条里の水田地帯は、千曲川の自然堤防と保科川・赤野田川の扇状地扇端との間に展開する低湿地である。古墳の所在する尾根の直下がその千曲川後背湿地と扇状地の境界となっており、湧水も多い。現状の水田は圃場整備されているが、以前は腰までつかるような湿田であったという。古墳直下にも条里およびそれ以前の水田跡が埋没していることがほぼ確実である。古墳は水田面からの比高35～45mほどで、条里遺構の範囲が一望できる。善光寺平（長野盆地）ではまれな前期前方後円墳の集中域として知られる和田東山古墳群は、小さな尾根ひとつを挟んで近在する。大星山・和田東山とも川田条里遺跡にしめされる水田経営が、その経済基盤として大きな位置を占めるものと思われるが、周辺ではまだ古墳時代集落のすがたは明確ではない。

周辺で前期古墳の可能性があるものは和田東山古墳群（前方後円墳3基・円墳2基など）・大室18号墳（大星山前方後円墳）*などが知られるが、間の別の尾根にさえぎられて、相互に望見できる位置関係にはない。そのうち和田東山3号墳は1993年の長野市教育委員会・明治大学の調査によってその内容がほぼ明らかとなった。また、明治大学による大室古墳群の調査も継続されている。横穴式石室を有する後期古墳



第５図　大星山古墳群の分布（1：2,000）



第6図　古墳群全体図（1：600）

群は周辺にいくつか知られ、なかでも長原古墳群は発掘調査が行われた積石塚古墳群としてよく知られている。また、北西側の谷に所在する十二山古墳群（6基）は横穴式石室の積石塚で大星山古墳群に距離的に最も近い古墳である。

この地は中・近世に村境として特別の意味を持っていたようである。墓地として使われた形跡があり、また、虚空藏山と呼ばれる通り、1号墳の墳丘に造られた祠には虚空藏尊の石仏2体が安置されており、その祭祀は現在も地元区民によって継続されている。その祠の前、2号墳墳丘上には数十年前まで拝殿があったという。

古墳の所在する位置の基盤層は風化の進んだ泥岩で、かなりもろく、表層はその風化した粘質土で覆われている。同様の基盤層は善光寺平南部の東縁に多く分布し、森将軍塚・北平1号墳・和田東山などが立地する場所でもある。これらは、いずれも近年の採土用地として適したために、周辺地形の変貌ばかりでなく、古墳そのものも破壊の危機にさらされることが多い。古墳所在位置のやや上方から頂部にかけては、岩盤の成因が異なり、安山岩の露頭が見られる。1号墳より上部では、そこからの崩落と思われる板

石や礫塊が、地表や泥岩の風化土層にかなり見られる。また、泥岩中には断層面がいくつかあり、断層粘土が形成された部分が墳丘の一部に帯状に現れている（第6図）。

大星山古墳群の墳丘・石槨に用いられた土砂・石材は、河床礫を除けば、これらの泥岩・粘質土・安山岩礫がすべてである。

＊大室18号墳は5世紀代と考えられているが、確たる根拠はない。

第2節　調査に至る経緯

1988年頃から、上信越自動車道の建設に伴う採土用地として若穂地区でいくつか候補地が具体的に検討されるようになった。和田東山から大星山にかけては高速道にも近く、風化した泥岩から成り、採土も容易で盛土用として適したものであった。そのうち和田東山は前方後円墳3基をはじめとする古墳群の存在が知られており、遺跡保護のために事業地として避けるべく長野県教育委員会（以下、県教委）・日本道路公団（以下、公団）・地元などの間で調整がはかられた。

その結果、決定をみたのが、目立った古墳が知られなかった字虚空蔵山とその東南の尾根であった（第7図）。

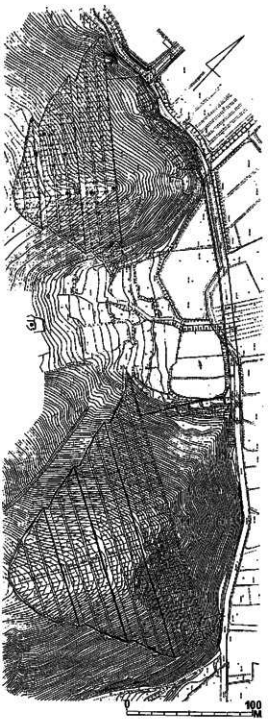
用地は地元下和田区の共有地であり、公団が借地して採土するというものである。従来より公団にかかわる事業地内の埋蔵文化財の保護措置は県教委が対応してきたため、県教委文化課によって埋蔵文化財の有無を確認するための現地踏査が行われた。南側の尾根は大星山古墳群の所在地として分布図などに示されていたが、古墳を認めず、北側の尾根には石祠があり、その周囲が墳丘状を呈していた。

その結果、字虚空蔵山に古墳が存在する可能性を認め、1989年6月23日*、指導主事児玉卓文・百瀬長秀により試掘調査が行われた。この試掘により鞍部の突端の平坦部において竪穴式石槨状の石積を認め、石祠の上の平坦面でも板石の集中を認めた。当初は後期古墳が予想されていたが、試掘の結果、中期以前の古墳である可能性が強くなった。このとき確認された遺構は、後日、それぞれ3号墳第2石槨と1号墳第1石槨と判明したものである。試掘時には遺物は出土しなかった。

なお、同時に採土予定地となった隣接尾根は、従来大星山古墳群の所在地とされていたが、用地内には古墳の存在を認めなかった。このことにより、分布図上における位置の錯誤として、以後、調査対象地の古墳を大星山古墳群と称することとなった。

この結果、採土事業に先立ち、平成2年度事業として、大星山古墳群（古墳2基、調査面積1,000㎡）の発掘調査を実施すべく、公団・県教委・（財）長野県埋蔵文化財センター（以下、センター）の調整がはかられた。発掘調査の委託契約は平成2年4月、公団と県教委との間で締結され、さらに県教委とセンターとの間で再委託の契約が締結された。

＊当時、大星山直下の川田条里遺跡A地区は、センターによる調査初年度であったため、この試掘にはセンター職員も立会っている。



第7図　採土工事計画（1：3,000）
（図上部の尾根が古墳所在地）

第3節　調査体制

1　調査体制

調査体制は次のとおりである。

発掘調査　(財)長野県埋蔵文化財センター

事務局長　塚原隆明

同総務部長（兼長野調査事務所庶務部長）　塚田次夫

同調査部長（兼長野調査事務所調査部長）　小林秀夫

長野調査事務所長　峯村忠司

同　調査第一課長　白田武正

同　調査研究員　土屋　積・中村　寛・鶴田典昭

整理作業　平成2年度　発掘調査体制と同

平成7年度　整理　土屋　積（中野調査事務所調査課長）

遺物写真撮影　西嶋　力（長野調査事務所調査研究員）

金属器保存処理　白沢勝彦（長野県立歴史館専門主事）

2　協力者

発掘調査・整理作業にあたり、下記のかたがたのご指導・ご協力を得た。お名前を記して感謝したい。

（敬称略・五十音順）

青木和明　赤塚次郎　石野博信　岩崎卓也　大塚初重　加納俊介　川西宏幸　小林三郎　滝沢　毅

田嶋明人　千野　浩　矢島宏雄　綿内茂郎　長野県考古学会古墳時代研究部会

3　作業分担

遺構・遺物実測、写真撮影（下記を除き）　土屋

整図・図版作成・執筆・編集　土屋

1号墳第1石槨・3号墳石槨実測　山本賢治

2号墳・石祠実測・撮影　鶴田

4号墳石槨実測　安藤道由

土器復元　福沢幸一

玉類・平安時代土器実測　吉野治雄

遺物写真撮影・遺物および遺構写真焼付　西嶋

発掘作業　河原正敬・倉鳴光子・小林秀子・佐藤玉江・佐藤保吉・関　琴子・樽井頼子・樽井善子・樽井志げ・高橋ひさ子・中沢文子・中牧巳喜子・中沢重子・檜本　修・中沢はま子・平林幸江・丸山あい・峯村けさみ・峯村浩明・峯村文則・山田宮子

整理作業は当センター長野・中野調査事務所で行われ、担当者以外の協力も得た。

第4節　調査日誌抄

発掘調査期間　平成2年4月5日～10月5日

3月20日　現地にて測量打ち合わせ、コクサイ航業（現、こうそく）

23日　現場事務所敷地造成

27日　周辺踏査・分布調査

30日　杭打ち

4月4日　機材搬入

5日　発掘調査開始、伐採樹木片付け

6日　降雪、遺景撮影

11日　表土剝ぎ開始、物置・水道など完成

18日　直前の重機による破壊箇所の崩落土中より土師器片出土

22日　下和田区により石仏の遷座法要

24日　墳丘実測（～26日、コクサイ航業）

25日　石祠内の木造祠撤出（駒津建設）

26日　石祠実測・清掃

5月2日　4号墳より刀子出土

7日　2・3号墳表土剝ぎと並行して墳丘トレンチ調査（この頃、作業員平均10名）

8日　3号墳第2石槨より鉄剣出土

9日　同第1石槨上面より器台出土

11日　4号墳の石槨、ほぼ全形を確認、上層に後世の埋葬がある

15日　1号墳石槨掘り下げ、直後に鉄剣出土

17日　1号墳上方尾根に遺構のないことを確認

18日　1号墳第1石槨の礫床検出、2号墳周溝中より土師器片多量に出土

23日　1号墳第1石槨より鉄鏃など出土

29日　1号墳周溝中より土師器出土、2号墳上より火葬墓検出、3号墳第1石槨サブトレンチより鉄鏃出土

30日　大塚初重教授来訪

6月4日　3号墳第1石槨床面遺物検出

7日　2号墳石棺検出、1号墳周溝より方墳と確認、この頃主体部の検出をほぼ終え、墓墳・墳丘調査に重点を移す

10日　現地説明会、見学者310名

11日　2号墳石棺、合掌形天井の可能性

12日　同副葬品検出開始、1号墳第2石槨検出

13日　1号墳周溝より土師器出土続く、同第2石槨より刀子出土

18日　1号墳中段にテラスを確認、作業員不足（本日9名）のため4号墳の調査を一時中断

20日　雨、3号第1石槨埋土の水洗、ガラス玉22個を見つけて終了

22日　縄内四郎氏・若穂有線放送来訪

7月3日　岩崎卓也教授来訪

4日　2・3号墳の間に小形石棺検出、（有）写真測図研究所・（株）コクサイ航業により3号墳葺石立面写真測量

5日　山本賢治氏（写真測図研究所）に石槨実測の応援を得る（1号第1、3号第1、第2）、樋口考古学研究所占部氏・他来訪

6日　長野市教委千野・前島両氏来訪、3号墳円墳であることを確認

8日　休日出勤、石槨実測、この頃より実測・撮影など平日午後6時過ぎ・休日など多くなる

11日　重機により墳丘周辺の確認、ほかの遺構は存在しなかった。保科小学校3～6年児童見学

13日　4号墳石槨で鉄剣出土

16日　2号墳石棺より鉄鏃6本出土

23日　川田条里A地区より作業員の応援を得て空撮前の清掃

25日　ヘリによる空撮実施（朝日航洋）、直前まで4号墳の墳丘礫検出

26日　4号墳墳丘の礫検出に重点、石槨よりヤリガンナ、古墳群最後の副葬品出土

8月1日　3号墳第1・第2石槨解体開始

17日　春山・春山B遺跡へ移動のため機材引越

20日　春山B調査開始（鳴田・中村）、土屋・作業員5名残留

21日　2・3号墳墳丘トレンチ、1号墳第1石槨解体

24日　1号墳第2石槨解体

26日　石祠解体搬出（駒津建設）

27日　安藤道由氏（明治大学）に4号墳石槨の実測を依頼（～31日）

28日　1・4号墳丘トレンチ

31日　4号墳石槨解体開始

9月3日　同墓壙検出終了

4日　同実測・解体開始

19日　同終了

21日　機材撤収・作業員春山へ移動、以後、墳丘トレンチ他の実測・補足

10月3日　空測図補正

5日　重機により墳丘切断、土層対比、岩石サンプリング、撤収

第5節　調査方法

遺　跡　名　大星山古墳群

遺跡記号　BOB（1～4号墳について、BOB－1～4と表記）

グリッド設定　亀根中心軸方向を基線に8m方眼で設定（第8図）。方眼交点の座標は以下に示した。

第Ⅷ系　　L 2　X＝65690.628　Y＝－23063.646

G 2　X＝65656.208　Y＝－23084.021

発掘手順　墳丘中心からの放射状ベルトを残し表土剥ぎを行い、墓壙・墳丘施設の検出を行う。墓壙確認後、埋葬施設の平面形状を把握する。埋葬施設検出後、その形状に応じベルトを残し副葬品の検出を行う。副葬品検出後の埋葬施設内の埋土はすべて水洗する。ベルトは土層観察後、除去。埋葬施設は構築手順と逆に解体し、最終的には墓壙全形を露出させる。墳丘は人力掘削による直交方向2本以上のトレンチで地山面まで土層観察後、重機により盛土すべての除去を行う。

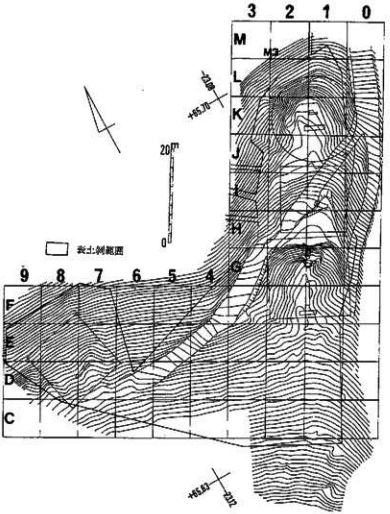
図面記録

調査前の地形測量　地上測量（委託）（株）こうそく

墳丘施設検出後の墳丘測量　ヘリコプターによる空中写真測量（委託）（株）朝日航洋

葺石側面　ステンオカメラによる地上写真測量（委託）（株）こうそく・（有）写真測図

埋葬施設および土層　調査研究員による簡易造り方測量　一部委託（有）写真測図



第8図　グリッド設定図（1：800）

写真記録　6×7カメラによるモノクロおよびカラーリバーサル

35ミリカメラによるモノクロおよびカラーリバーサル

遺物整理　土器・その他　調査研究員による復元・実測・写真撮影

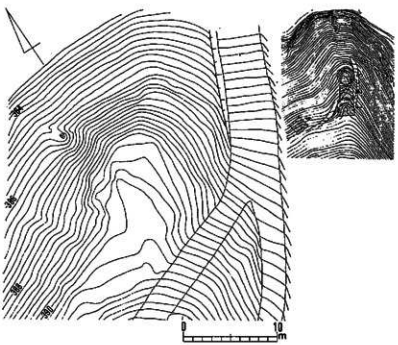
金属器　同上。保存処理。一部につきX線撮影

第2章　発掘調査

第1節　大星山3号墳の調査

1　発掘の経過

尾根筋鞍部の先端は平坦となり、角礫が散布していた（第9図）。この平坦面では前年の試掘調査により、竪穴式石槨の壁体と思われる石積が確認されていた。これは割石を小口積みしており、墳丘上の位置と善光寺平における類例から、尾根筋方向に長軸を持つかなり狭長な石槨の北短壁の一部ではないかと考えられた。これは後に、長軸が尾根筋に直交する第2石槨の東側壁にあたることが判明した。一方、調査開始直前、採土業者による樹木の伐採に伴って墳丘上を重機が通過し、墳頂部の盛土の一部が削平されていた。これによる墓壙上面の破壊と当初の石槨位置の想定が誤っていたことにより、以後の埋葬施設の調査は困難をきわめた。

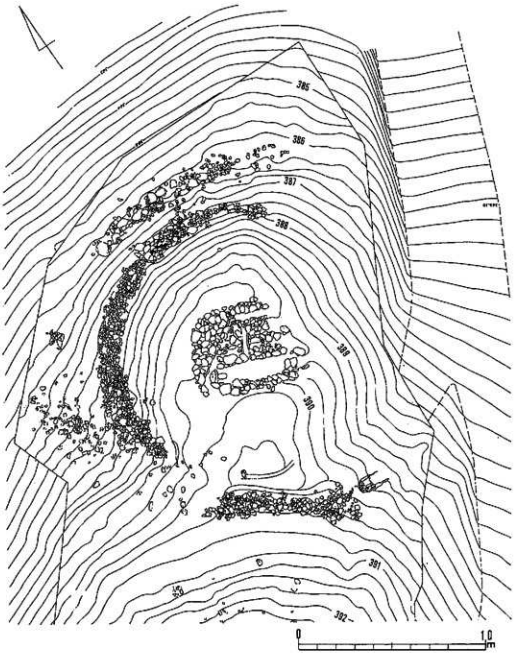


第9図　3号墳　墳丘（原地形）（1：400）

初めに、墳頂部に直交するトレンチを設け、試掘で確認されていた石槨の平面形を確認し、墓壙の輪郭を検出することに努めた。すでに石槨の上端が地表に露出しており、墳頂部の盛土はかなり流出あるいは削平されているものと思われた。石槨西側には人頭大以上の角礫が散乱し、板石も混じっていた。これは石槨および裏込がすでに破壊されている状況を示すように考えられた。このため、壁体の残存部を追求するとともに、副葬品残片が散乱している可能性を考えて調査を進めた。

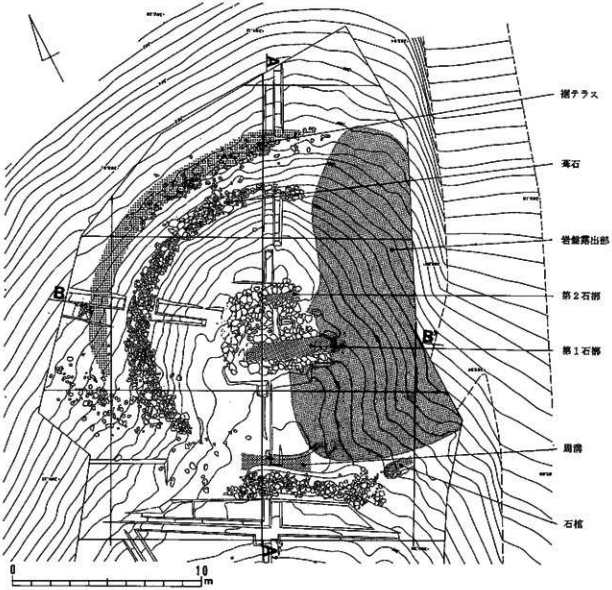
しかし、石槨主軸は試掘時の予想に反し、尾根筋に直交し、当初の石積を側壁とする小形の石槨であった。また、位置が墳頂部の東側に偏っていることが判明した。これにより墳頂中心部に、この石槨より大形の中心埋葬が並列して存在することが予想された。しかし、角礫の散乱状況から、この中心埋葬施設は良好に遺存しているとは考えられなかった。このため壁体基部の残存を確認することにより石槨の状況をあきらかにする他はないと思われた。以後、トレンチで土層堆積状況を確認しながら、ベルトおよび角礫を残して全面を掘り下げた（第10図）。

大角礫はさきの石槨を含めた墳頂部全体に広がっていた。その分布範囲の外郭で石の面をそろえる部分



第10図　3号墳　墳丘(表土除去後)(1：200)

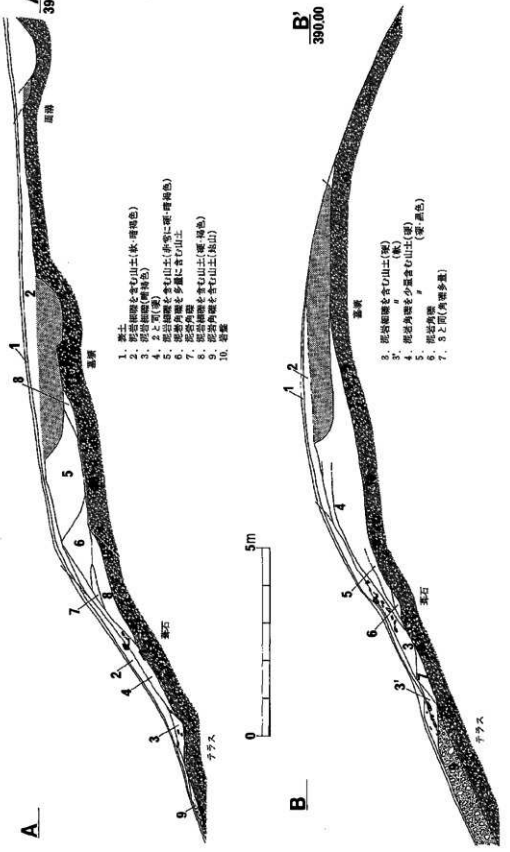
があり、墓壙あるいは裏込の範囲を示すように見られた。また、礫がほとんど存在しない部分が墳丘中央部に認められた。最初に発見された遺物は、この中央部で見つかった土器の小片である。これは攪乱にともない原位置を失っているものと考えられたが、しばらく後にその南側でほぼ完形の器台が見つかり、その脚部の小片であることが判明した。この器台の発見位置の周囲の角礫は、小口をそろえて南北に並び、その内側は周囲より礫が少なく、竪穴式石槨の上面の形状を示すに至った。この器台および石列の発見により、埋葬施設はそれほど破壊されておらず、また、蓋石を有する通常の竪穴式石槨ではない可能性も考えられた。一方、トレンチの掘り下げにより、石列は角礫を2・3段積んだ石積の上面であり、北西から南東に伸びる壁体の一部と考えられた。しかし、その基部に連続する床面は確認できず、より下方に掘り



第11図　3号墳　トレンチ・石槨・岩盤の位置（1：200）

下げたところ、鉄鏃を検出し、直下に床面と思われる固い粘質土面を確認した。壁体は大形の角礫を用い、その基部のレベルは床よりかなり高く、また、石槨の葺石らしいものは周囲にも存在しなかった。

ここに至って、石積および床面の状況・葺石の欠如・土器および鉄鏃の形式などから木棺を直葬する礫槨状の埋葬施設を推定することとなり、これを第1石槨、さきの小形石槨を第2石槨とした。また、器台・鉄鏃の出土状態から、墳頂部は削平されているが、その影響は現地表以下にはほとんど及んでいないと考えられた。以後、剛葬品の検出が続き、埋葬施設・墓壙の構造を調査した（第11図）。埋葬施設の調査にあわせ、墳丘にトレンチを設定し、盛土の状況を断面観察した。北斜面の地表には角礫が散布しており葺石の存在が予想されたので、その検出も並行して行い、良好に遺存することを確認した。最終的には盛土をすべて除去したが、墳丘表面および盛土内からは土器の小片を得たのみである。



第12図　3号墳　墳丘断面（1：100）

2　墳　丘

(1)　墳丘の築成

第12図に示される土層を墳丘構築のうえから分類しておく。

A　1～3層　墳丘盛土および表土が二次的に堆積したもの

　4～8層　墳丘盛土

　9・10層　地山

B　3層　墳丘盛土

　3'層　墳丘盛土が二次的に堆積したものと思われるが、一次的盛土の可能性もある

　他はAと同じ

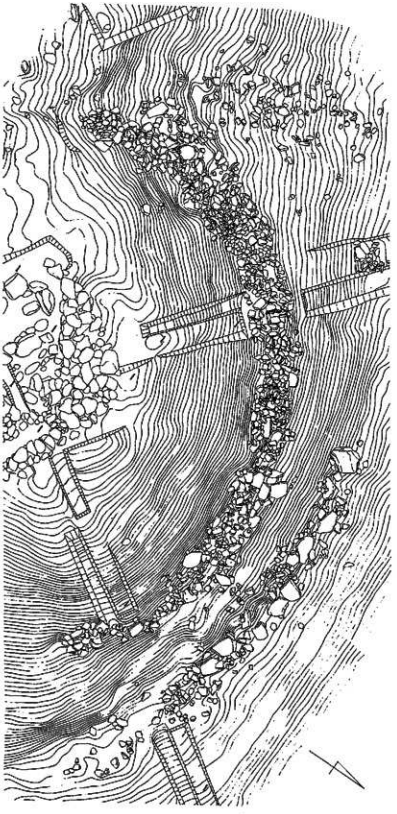
トレンチの断面観察によれば、盛土に版築状を呈する部分はない。地山面と同じ泥岩小角礫にその風化土が混じる土が、かなり大きな単位で不均一に盛土され、一部には葺石に用いられたと同様の安山岩の大角礫を含んでいる。盛土の分層された単位はその土量から見て、盛土工程の最小単位を示すものではない。盛土は泥岩角礫を多量に含み、最小工程を示すような微細単位での分層が不可能であった。この分層された単位は、最小工程単位を多数含む一工程段階を示すものと思われる。土層図から見て、全工程の途上ではいくつかの小マウンド状を呈した時点もあったと考えられる。しかし、一連の盛土以外に起因する腐植土などの間層は存在しない。これらの工程単位は、中断期間をはさむような性質のものではなかったと考えられる。

墳丘構築以前の原地形は、墳丘南西側を最高所とし、傾斜25度ほどの尾根筋が第1石槨中心を通り、それより南・北は現状の墳丘下方の南・北それぞれの斜面とほぼ同じ斜度であったものと思われる。この斜面は南東側が急傾斜で北西側は比較的傾斜が緩い。そのため、前者は地山を削り出し、後者は盛土することによって墳丘を築成している。墳丘外方のトレンチでは地形の整形痕跡は認められていないが、盛土下で旧表土をそのまま残す部分はなく、少なくとも墳丘下は岩盤まで削り出した後に盛土されている。盛土材には削り出し部の土砂が主にあてられたものであろう。地山削り出し部分は調査当初から岩盤が露出しており、盛土が流出した可能性もないわけではない。しかし、墳丘の全形から見て、盛土量は整形後の修飾程度のわずかなものであったと考えられる。むしろ、盛土部にある葺石が削り出し部には存在しないことからすれば、当初から岩盤を露出させることによって、葺石状の効果を果たした可能性もある。

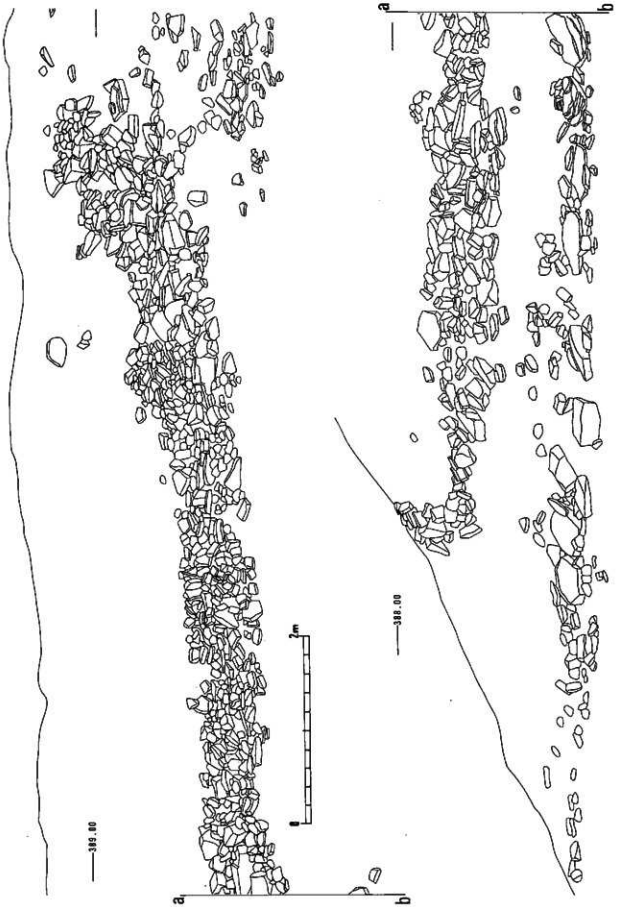
尾根筋上方のいわゆる丘尾切断部では、岩盤を掘り込んだ現状の深さ20cm、幅80cm以上の浅い周溝が確認され、これが墳丘の外郭を示すものと考えられる。葺石の外周に認められた幅80cmほどのテラス面も同様である。葺石を欠く部分にはテラスも存在しないが、現状の周溝・テラスの内縁を結ぶと裾レベルは地形に応じて高低があるが、平面形はほぼ正円となる。これにより、この古墳は造り出しなどを持たない円墳と判断した。墳丘は周溝・テラス内縁で直径16m、外縁で18mとなり、高さは斜面下方から測ると4m、葺石部中央のテラス面から4m、丘尾切断部とはほとんど高低差がない。ただ、墳頂部の盛土は流出している可能性があり、第2石槨上面のレベルが現地表とほぼ同じことから、本来はこれより0.5m程度は高かったものと思われる。

(2)　墳丘施設

葺石は盛土部分の幅1m、延長18mの範囲に存在した（第13図）。地山を削り出して墳丘を成形した部分には見られず、また、その下方にも崩落した痕跡はない。ただ、削り出し部の本来の墳丘面は流出しており、その直下が道路として開削されている。この開削時に、墳丘削り出し部から崩落した葺石が失われ



第13図　3号墳　葺石（1：100）



第14図　3号墳　葺石立面拡大（1：40）

た可能性がないわけではない。しかし、尾根筋下方側の盛土部から削り出し部に漸移する部分で、それに対応して葺石が徐々に消滅するような状況を呈すること、２号墳側の崩落が考えられない部分においても同様であることから、検出された葺石がほぼ本来の形状を示すものと考える方が妥当であろう。北西側の葺石の入念な構築状況からすれば、これを古墳の正面といえるかもしれない。

葺石は墳丘中段をめぐるが、その上下は同傾斜で墳丘面に続き、テラスなどは見られない。用いられた礫は、付近の表土および地山中に見られる掘削から人頭大の安山岩角礫がほとんであり、ごくわずかな河床礫を含む。河床礫は直下の赤野田川に豊富であるが、この山上には自然には存在しない。葺石の一部、とくに小形の礫は小口積みする部分があり、ほとんど崩落がなく良く原形を残している。大きな石は板石の長側面を表に出して平積みする場合が多く、前者と比べると崩壊がすすみ原位置を保たないものが多い。葺石の西側中央では小形礫をとくに選択して用いており、その両側、つまり北側および２号墳寄りは大形礫を主に用いている。一方、墳丘外周のテラスの一部には葺石状に大形の板石が存在する。これは、中段葺石に大形礫を積んだ２か所の直下に対応して存在し、小形礫を小口積みした部分の下方には見られない。構造的に脆弱な大形礫平積み部分の中段葺石が崩落したものと思われる。これらの大形礫はテラス面から墳丘裾に斜めに立てかけたようになっているものが多く、上方から滑り落ちたことを示しているように観察された。葺石は横方向で見ると６・７か所で用材の大きさや積み方が変化しており、明確ではないが、構築時の工程や作業単位を示すものと思われる（第14図）。

外周のテラス面は、幅80cmほどで、葺石を施した部分の直下にめぐる。地形の傾斜に沿って尾根上方に向かいレベルがやや高くなるが、墳丘北側ではほぼ水平である。テラス面は削り出した地山面であり、その面には崩落した葺石が一部に見られるほか施設・遺物はない。墳丘の整形はテラスの外側には及んでいないようである。葺石下のテラス外側に、集石状に平石を敷き詰めた部分が１か所見られたが、遺物などはなく、この古墳の施設であるかどうかも不明である。

岩盤を掘り込んだ周溝が丘尾切断部にわずかに残る。しかし、表土の流出や２号墳の周溝に削られたことによって遺存状況はよくない。周溝中から遺物は出土しなかった。

(3)　遺物の出土状態

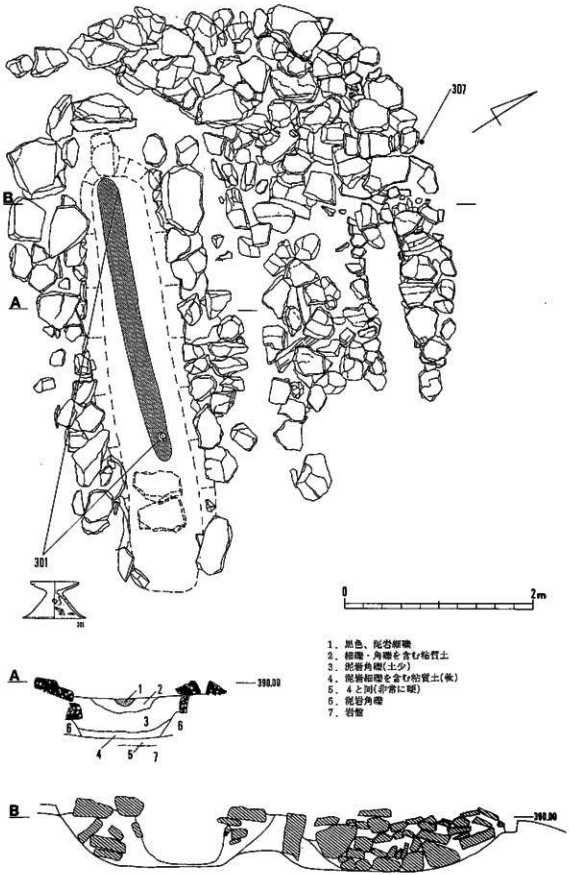
墳丘では、葺石の周辺および礫間から少量の土器片が、盛土内から土器片１点が出土している。前者の大半は２号墳からの崩落と考えられ、２号墳寄りの西側葺石外方から出土した。本古墳に伴う可能性があるのは葺石中から出土した大形壺の胴部片・小型精製壺の頸部片と、第１石槨北側の墓壙の外方、墳頂下１mの盛土中から出土した器種不明の小片のみである。墳丘面および盛土中には土器を用いた祭祀の痕跡はないといってよい。

第２石槨近辺の墓壙外縁から鉄器１点（307）が出土している。墓壙壁の精査中に発見されたものであり、原位置を保つものと考えられる。第１石槨の検出初期に出土した器台については後述する（第15図）。

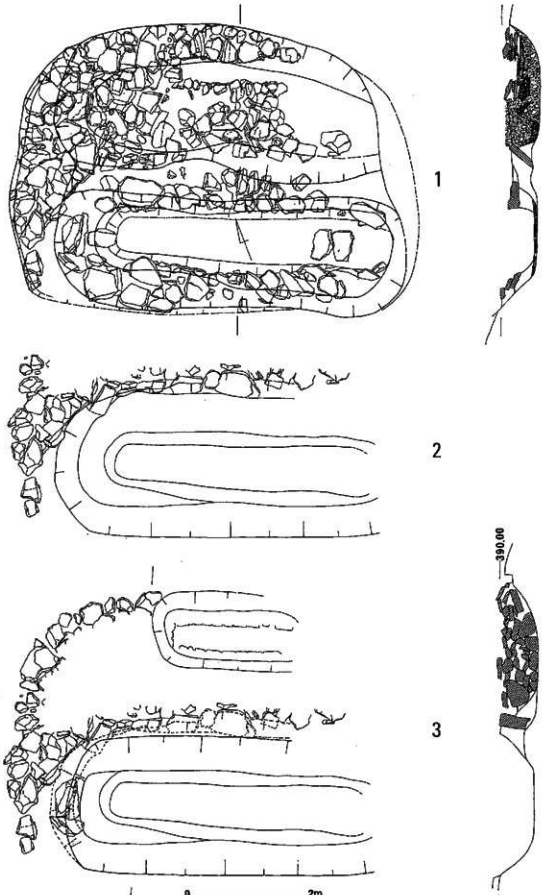
3　石槨

(1)　墓　　壙

墓壙内の二つの石槨は規模が大きく異なるが並列して長軸方向を一致させ、墓壙全体の中でほぼ均等に位置している（第15図）。墳頂部が削平されていたため、層位的に前後関係を確認することはできなかったが、墓壙は第１石槨のために全体が構築され、同じ墓壙内に位置する第２石槨は、そのための特別な造作が行われていない。つまり、墓壙の大きさは二つの掘削施設を予定しているが、第２石槨は第１石槨の余地に寄生的に構築された状態である。石槨の大きさからも第１・第２石槨の優劣関係は明らかである。



第15図　3号墳　墓壙上面（遺物出土位置）（1：40）



第16図　3号墳　墓壙構築過程（1：60）

二つの石槨は同時構築ではないが、第1石槨の構築時にすでに第2石槨は予定されており、予定に含まれていたかどうかはわからないが、第2石槨は当初の墓壙内を簡単に掘り込んだだけの掘方内に造られた。墓壙内における位置や長軸の一致から見て、構築時期に大きな差は考えられない。

墳丘トレンチでは、盛土層が墓壙によって掘り込まれたと断定できる部分がなく、墓壙内壁は盛土が固く叩き締められている。また、一部は岩盤を削り出して墓壙壁を成している。これらは、どちらかといえば、墳丘盛土完成後にあらためて掘り込まれたものでないことを示すと考えられる。また、盛土量と墓壙の大きさから見ても同様であり、いわゆる構築墓壙の範疇に含められるものであろう。その構築過程は以下のように復元できる（第16図）。

①盛土および削り出しによって墳丘が完成した段階で、墳頂部に南北4.6m、東西6.4mのくぼみが残される。このうち盛土部分の壁面および床面は地山と同じ粘質土であるが、叩き締められて墓壙壁を成す。削り出し部は岩盤が露出する。このくぼみの床面は平坦ではなく、二つの石槨の予定位置に合わせて中央が高まって2×5.6m前後の浅いくぼみ二つからなる。

②そのくぼみの第1石槨の予定位置に合わせた盛土部分に大角礫が立石状に置かれ、その背後は特に入念に突き固められ、墓壙壁との間が角礫や地山土・泥岩礫で充填される。岩盤露出部はそのままで手が加えられない。その結果、幅2.5m、長軸5.6mのいわば二重目の墓壙ができる。

③さらに、埋納される木棺にあわせて、北側を中心に地山粘質土と角礫を用いて墓壙壁の修正が行われる。第1石槨の北西短壁にあたる部分には大形の板石が立石状に立てられるが、粘質土に覆われて上端が露出するだけである。石槨の構築は棺設置後の作業であり、後述する。

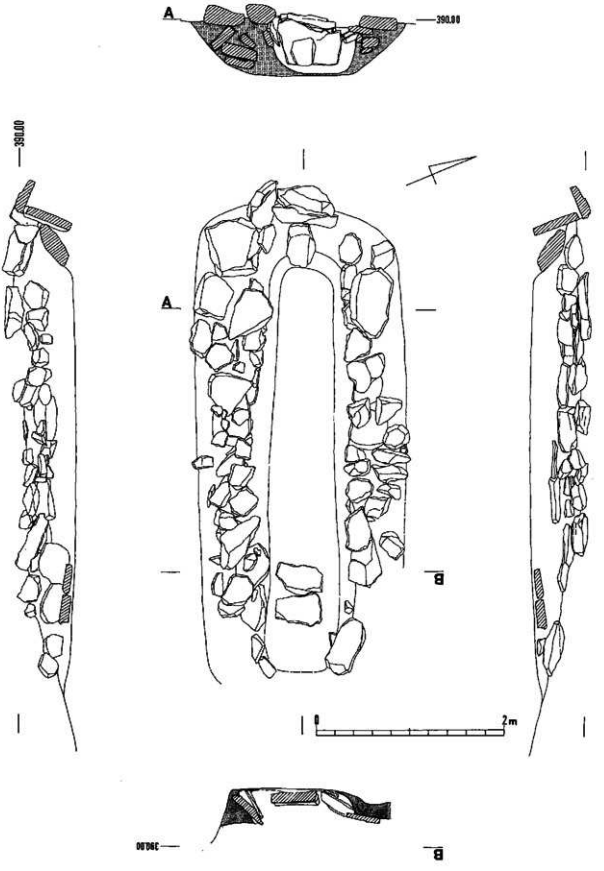
(2)　第1石槨

前項の墓壙に石槨が築かれる。床面の全形の把握後に、この石槨の南端は調査以前からすでに床面まで地表に露出していたことがわかった。そのため正確な全長は不明であるが、残存部では幅100cm、長さ450cm、壁体最高所から床最低部までの高さ75cmをはかる（第17図）。

石槨上面を検出した段階で石列に囲まれた中央部に幅20cm、長さ3mの黒色土のひろがりを認めており、その上面で器台を出土していた（第15図）。石槨内埋土全般に言えることであるが、地山泥岩角礫および地山粘質土の混じった土は空隙も多く、分層が非常に困難であった。泥岩の数mmの細礫が周囲のものは褐色ないし赤褐色であるなかで、この黒色帯は黒色の泥岩細礫の拡がりとして明瞭に認められ、断面観察によっても確認できた。これは木棺上部の腐朽による一次的陥没土と判断した。木棺の痕跡はまったく残存せず、土層・床面形状から推測できるのみである。

床面は地山の粘質土が叩き締められ非常に固く、断面U字状を示す。北西側小口部では墓壙中に先述した立石があり、さらにその前にも斜めに立てられた石がある。この石は背後の土が非常に固く叩き締められており、本来の位置・形状を示すものと考えられ、これが石槨の壁に当たるものであろう。南東側小口部は流出して不明である。床面は主軸方向にはほぼ水平ではとんど高低差がないが、両端で5cm程度高くなり、主軸方向においても断面U字状を呈する。

石槨上半部に、大形の角礫を2～3段平積みして壁体をなす。石積みより下方の石槨下半は、礫大以下の泥岩角礫により空隙を持って充填されており、石槨内の埋土と区別できない。石槨南東部には大形の板石を立てる部分があり、ほかの部分でも平積みされた石の内側に立石状を呈する板石がある。また、床面東端に2枚の板石があるが、これが北側から倒れ込んだものとすると、小口部は不明であるものの、南東側小口部周辺では棺両側に立石が存在した可能性がある。ただ、床面の板石は2枚ともほぼ水平であり、



第17図　３号墳　第１石槨（1：40）

立石が倒れたとするには無理があるようにも思われる。

壁体の裏込部分も泥岩小角礫を主体とし、控え積みにあたるような構造は見られない。墓壙の構築方法の入念さと比べると、壁体は構造的に非常に脆弱な築造方法である。

以上の点や、蓋石と考えられる石材が墳丘周囲にも存在しないことから、この石槨は木棺直葬や粘土槨に類似する棺埋納方法がとられたものと考えられる。つまり、北西小口部の立石を含め最終的に墓壙が完成した後に、断面U字状の床面が造られ、棺が設置される。その後、棺側面の一部に板石を立てかけ、棺の半分が埋まる程度まで泥岩小角礫を主に、一部に板石を用いて埋め戻す。次に、石槨の石積みと並行して、さきと同様の埋め戻しを行い、棺を完全に埋めた後、器台を置く。

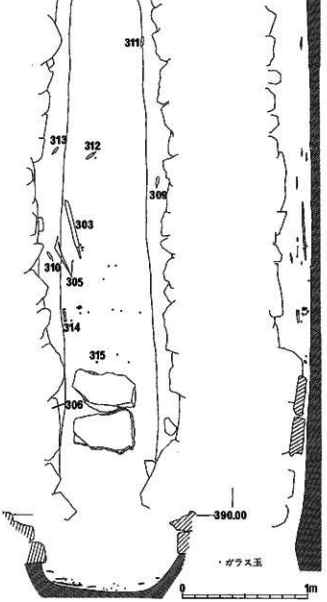
(3) 第1石槨の副葬品出土状態

副葬品はほぼ副葬時の品目・位置を保つものと考えられる（第18図）。ただし第1・第2石槨とも南東端が崩落により地表に露出しており、この部分に副葬品があったとすれば、失われている可能性がある。弓飾鋲1点が第1石槨の石槨壁と考えられる堅い粘質土面に密着して出土している。

第1石槨上面の器台1点は、棺設置後、その埋土上に置かれたものと考えられる。脚部の小片がやや離れて同一層位から出土した。いずれも原位置であろう。意図的に一部を割って、棺の両端の上に置かれたものと考えられる（第15図）。

石槨内の副葬品の出土位置は、床よりやや高く、石槨内中央部より壁際の方が高い傾向がある。出土層は床面上の泥岩細礫と地山粘質土の混じた軟らかい土である。その上層は土をほとんど混じない泥岩角礫層で、これが木棺の被覆土と考えられる。これらの埋土は細礫・角礫を主体とし、細かな分層が不可能であり、これ以上のことは判断が困難である。床の形状とあわせ、棺底が平らでなかったことを示すものであろう。

副葬品には、接合する同一個体がやや離れて出土したものがあり、埋葬時以後、なんらかの自然的営力により多少の位置の移動があったことは考えられる。このことを前提にすると、出土品の中で他と異なる副葬状態にあったと考えられるものは、さきの弓飾鋲だ



第18図　3号墳　第1石槨の副葬品出土位置（1：30）

けである。これは棺設置過程において他とは異なる段階で置かれた可能性がある。弓飾鋲以外は出土位置から、玉類と剣を棺内副葬品、他を棺側面に置かれたものと見ることができるかもしれない。この点で興味深いのは、ほかの鉄鏃が側壁寄りで出土したのに対し、中央部で唯一出土した鉄鏃が、他とは逆に先端を向けていることである。もし、これが棺上に置かれていたものであるとすれば、本来、同方向を向いていたものが転落にともなって逆転することは、考えられないことではない。

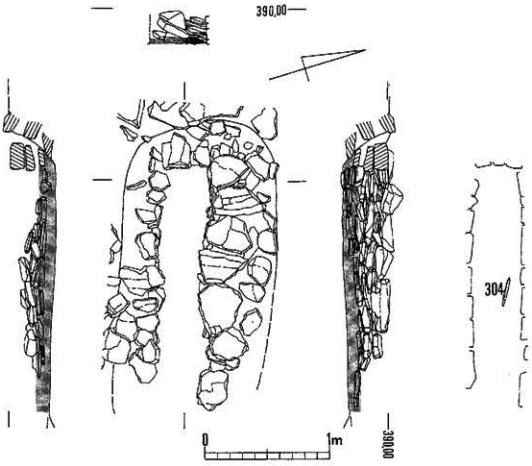
鉄器は壁寄りに多く、玉類は中央部に多い。後者は装身状況を反映するものであろう。つまり、勾玉周辺のものは首飾りに、鉄剣周辺のものは手玉あるいは剣柄飾と見ることができるかもしれない。ただ、全体としては散在しており、連として置かれたものではなく散布された結果であるかもしれない。

玉類の出土位置や剣の切先方向、さきの棺周囲の立石から、この棺の被葬者の頭部は勾玉の出土位置付近ではなかったかと推定する。

原位置で確認したもののほかに石槨内堪土を水洗して得られたガラス小玉8点がある。

(4)　第2石槨

この石槨は県教委文化課による試掘時に床と壁の一部が破壊され、南端は墳丘の流出により失われている。現状で幅40cm、長さ190cm、高さ40cm、小形の板石を5～6段小口積みする（第19図）。逆積みは上部



第19図　3号墳　第2石槨（副葬品出土位置）（1：30）

で石1枚分あるが下部では壁体の石が墓壙壁に接する。木棺・蓋石の有無については確証がない。

墓壙は第1石槨と共有するが、いったん完成した第1石槨の墓壙を必要分だけ掘り込んだもので、そのための特別な造作は行われていない。石槨の壁体は墓壙礫の上に接し、一部に、掘り込んだ結果露出した墓壙の礫をそのまま壁体として利用した部分がある。

床面は、壁体完成後、地山土を入れて整形するが、叩き締められてはいない。ほぼ水平である。その上には泥岩の細礫が敷き詰められたような状況で拡がり、その上層の埋土は泥岩角礫・地山土であった。この床面構築のため、壁体の最下部は床面下に埋め戻されている。

(5)　第2石槨の副葬品出土状態

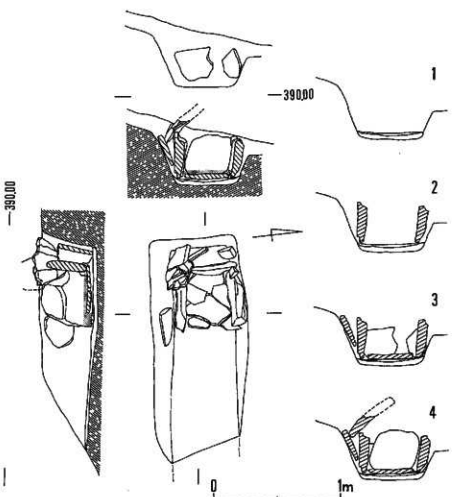
床面上の細礫中から鉄剣を出土した（第19図）。原位置と考えられる。この切先方向を重視すれば、埋葬頭位は第1石槨と共通することになる。他に石槨内埋土の水洗により管玉3点を出土したが、床面の細礫中からの出土である。

この細礫は2～3㎝の厚さで床面粘質土上にあり、石槨埋土が泥岩角礫を主とすることから、木棺あるいは木製の石槨蓋の腐朽にともなう一次的堆積土と見ることができるかもしれない。現状でも、露出した泥岩角礫は数日のうちに細礫となるほど壊れやすい。

(6)　組合式箱形石棺

墳丘の南裾で検出された。墳丘外にあたり、裾に棺主軸を平行させる位置と考えられる。一部は地表に露出し、調査前の採土業者の重機通過や崩落により大半が失われていたが、残存部の状況は良い（第20図）。内のりで、幅40㎝、高さ30㎝、残存長40㎝。残存する掘り方から全長160㎝以上あったものと考えられる。側石の上に斜めに置かれた石があり、その状況は2号墳の組合式石棺と類似する。合掌形の天井部をなしたものと考えられる。構築方法は以下のようである。

岩盤を棺の大きさにあわせて掘り込んだ後に、床面を地山土により整地



第20図　3号墳　組合式箱形石棺（構築過程）（1：30）

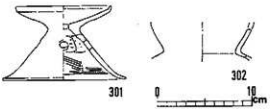
し、両側石を立てる。底石と妻側の裏石を置く。妻側に板石を立て、底石の上に粘質土をつき固めて床面を造る。天井石を合掌形に組み、側石と接する部分は粘質土でつき固める。上部の被覆状況は不明。遺物は出土しなかった。

この棺の位置は2号墳と3号墳の間である。墳丘裾との位置関係では3号墳とのかかわりを考えさせるが、合掌形の天井部を有したとすると、2号墳との共通性がある。また、妻側の立石状のありかたは、3号墳第1・1号墳第2・4号墳それぞれの石槨と類似するともいえる。

4　出土遺物

(1)　土器（第21図）

器形のうかがえるものは小型器台1点のみで、他に葺石中出土の小片がある。盛土中と墓壙内から同一個体と思われる器種不明〔おそらく壺〕の小片各1点が出土しているが、風化が著しく詳細は不明である。墳丘面から出土した土器はいずれも小片であるが、図示したもののほかに壺の破片数点がある。



第21図　3号墳　出土土器（1：4）　301：第1石槨上　302：葺石中

小型器台（301）

ほぼ完形で第1石槨直上から出土した。坏部径10.0cm、脚部径13.3cm、全高7.6cm。脚部内面以外は全面ヘラミガキで、赤彩されている。風化のためはっきりしないが、すべて横方向と思われるやや粗雑なミガキである。脚部内面の上部にはシボリ痕が見られ、下半は横ハケを施す。坏部との接合方法は不明である。坏端部はわずかにつまみ上げられ、脚端部は外反する。色調は赤褐色、焼成は良好、やや大きめの砂粒を含む。

壺（PL. 40－303）

葺石中から出土した底部破片である。胴部復元径30cm程度の大形品と考えられる。内面に巻上痕を明瞭に残し、粘土紐の幅は約2cmある。器壁は薄く5～6mm、外面はミガキ、内面はナデ。色調は黄褐色、焼成は良好、胎土は長石を主とする細砂を含み、外面に黒斑がある。同一個体と思われる破片の外面は赤彩される。

小型壺（302）

葺石中から出土した。頸部の一部を残すのみであるが、精製の埴形土器と思われる。口縁部は内外面とも横方向と思われるていねいなミガキ。頸部の屈曲は著しく、屈曲部の内面は明瞭な稜を成す。胴部は器厚3mmと薄く、外面はミガキ、内面はナデ。色調は明褐色、焼成は良好、胎土は精選され、細砂をわずかに含む。

(2)　鉄器（第22図）

307が墓壙から出土したほかはすべて石槨内から出土した。

①第1石槨（303・305～313）

剣（303）

全長41.8cm、剣身長30.1cm。剣身は幅2.4～2.6cm、厚3.5mm、断面形はやや菱形を呈するが、鎬は明瞭ではない。茎は長11.7cm、幅は関部で1.9cmあるが茎尻へ2cmほどで幅1.1cmになり茎尻に至る。茎尻は円みを帯び、関より5cmのところに径3mmの目釘穴を持つ。関部は左右とも直角に3.5mmほどで明瞭である。剣身・茎とも木質が付着し、後者の付着物の末端は関部に対応する直線を成し、柄の構造を示している。

鏃（309～313）

5点あるが、すべて柳葉形の同種の鉄鏃である。全長9.1～8.4cm、鏃身長6.0～6.9cm、幅1.8～1.3cm、厚2mm。断面形は一部にやや菱形になるものもあるが、すべて両丸造と思われる。鏃身最大幅は上半にあり、関部に至るまで幅をせばめるもの、途中でいったん最小幅を成した後わずかに外反して幅を広げるものとがある。関部から内湾するように茎部へ移行する。茎はすべて木質または布目が付着するが、その付着部分は長さ1.1～1.6cm、断面形は茎の半ばで幅・厚さ2～3mmの方形である。重量は保存処理後で次のようになる。309－9.31g、310－7.98g、311－6.71g、312－6.60g、313－6.36g。

鉾（305～307）

305は刃部と茎部が直接接合しないが欠損部はわずかと思われる。また、茎の末端も欠損する。現存長18cm、幅7～4mm、厚1.5～4mm。刃部は長2cm、鎬を持ち、裏透きの断面三日月形の形状である。刃部から茎への湾曲は本来の形状と考えられる。茎部には木質が付着するが、現状の末端から9.2cmより先には見られない。また、木質の下には布目が見られる（PL. 42）。柄に装着するために布を用いたものであろう。茎の断面形は厚1.5～2mmの長方形であるが、一部に台形状を呈する部分もある。

306は刃部と茎部の末端を欠損する。現存長14cm、幅5～7mm、厚1～2.5mm。現状の湾曲は本来の形状ではないと考えられる。茎部にはわずかに布目が付着する。茎の断面形は長方形である。

307は茎部の末端と考えられる。現存長6cm、幅7mm、厚1.5mm。欠損部の錆化状況は他と同様で、埋置時にすでに欠損していたものと思われる。木質などの付着はなく、断面形は長方形で、先端がより細く薄くなっている。

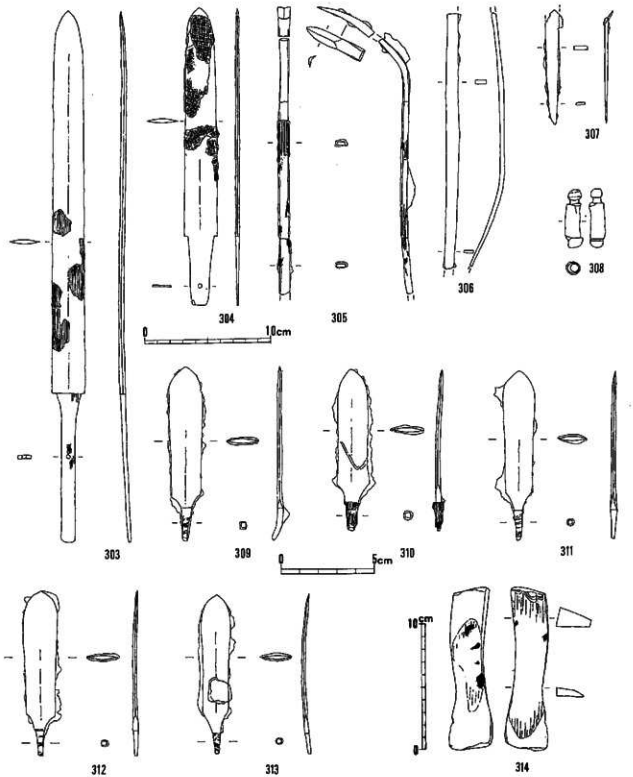
弓飾鋲（308）

形態上は弓飾鋲とされるものである。両頭の鉄芯を鉄板で巻いた構造を持つ。鉄芯は長31mm、両頭部で径6～7mm、中間部で径4mm、両頭間の長さは22mm。この鉄芯に厚さ0.5mm、幅18mmの鉄板を巻いて径7mmの円筒状を成す。芯と円筒は現状では錆着しているが、本来は両頭間で可動状態にあったものと思われる。

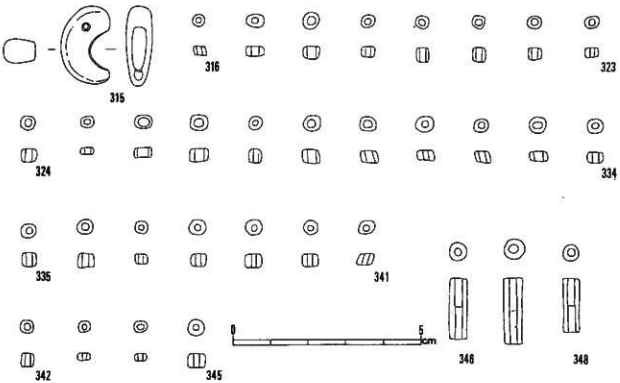
②第2石槨

剣（304）

残存長22.8cm、剣身長17.4cm。先端が欠損しており、本来は6mmほど長かったであろう。剣身は幅2.2～2.6cm、厚3mm、断面形はやや菱形を呈するが、鎬は明瞭ではない。茎は長5.5cm、幅は関部で2.1cmあるが茎尻へ向かい幅をせばめ、末端では1.7cmとなる。茎尻は平坦である。関より4cmのところに径3.5mmの目釘穴を持つ。関部は左右とも直角に3mmほどで、明瞭である。剣身の両面に布目が付着し、一部では方向の異なるものが重なって付着している（PL. 42）。木質は見られない。木製の鞘ではなく布に包まれていたものであろう。錆・その他の状況は、関部の上下で特に変化が見られない。



第22図　3号墳　出土鉄器（1：2）・砥石　303・304・314（1：3）　304：第2石槨　307：墓壙　他：第1石槨



第23図　3号墳　石槨内出土玉類(1：1)　315：ヒスイ　316～345：ガラス　346～348：グリーンタフ

(3)　玉類・石製品（第22・23図）

原位置で検出したものと埋土の水洗で検出したものがある。

①第1石槨

勾玉（315）

ヒスイ製。両側面はやや平面を成し、湾曲の内側との間は明瞭な稜を成す。片面穿孔。白色部分は少なく原石の質は良い。勾玉は大星山古墳群で本例が唯一である。

ガラス小玉（316～345）

30個。ほとんどがいわゆるスカイブルー（水色）系の色調である。特に小さなもの3個（316・325・343）、他とはやや形態が異なる2個（329・330）、計5個は淡緑色系で、透明度が低く、孔が斜めになる。純粋にスカイブルー系のものは表面に大きな気泡孔を持つものが多い。色の違いが形態の差と関連しているようである。内部の気泡はすべて孔方向に並ぶ。ガラス小玉は第2石槨からは出土していない。

砥石（314）

頁岩製。長さ12.3cm、幅2.9cm、厚さ1.7cm。端面の一方以外の5面が使用されている。片減りして長側の一方はかなり薄くなっている。3面に布目痕跡があり、副葬時には布に包まれていたものと思われる。

②第2石槨

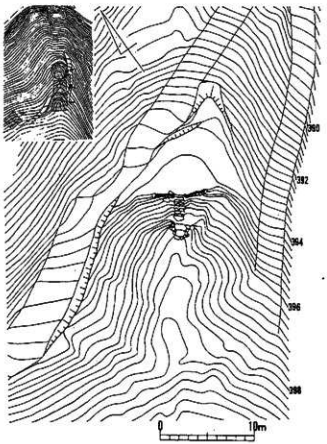
管玉（346～348）

3個。緑色凝灰岩（グリーンタフ）製と思われる。灰白色の明るい色調のもの2個、青灰色の暗い色調のもの1個（348）。すべて両面穿孔される。管玉は第1石槨からは出土していない。

第2節　大星山1号墳の調査

1　発掘の経過

石室の上方は平坦面を成し、前年の試掘調査により竪穴式石槨の壁体と思われる板石列が確認されていた（第24図）。また、同様の板石が墳頂平坦面のかなり広い範囲に露出しており、尾根筋方向に長軸を持つかなり狭長な石槨の存在が予測された。一方、この平坦面下方の斜面に存在する石室は横穴式石室状を呈していたが、構造や墳丘上の位置から古墳時代の構築物またはその再利用である可能性は低いと思われた。



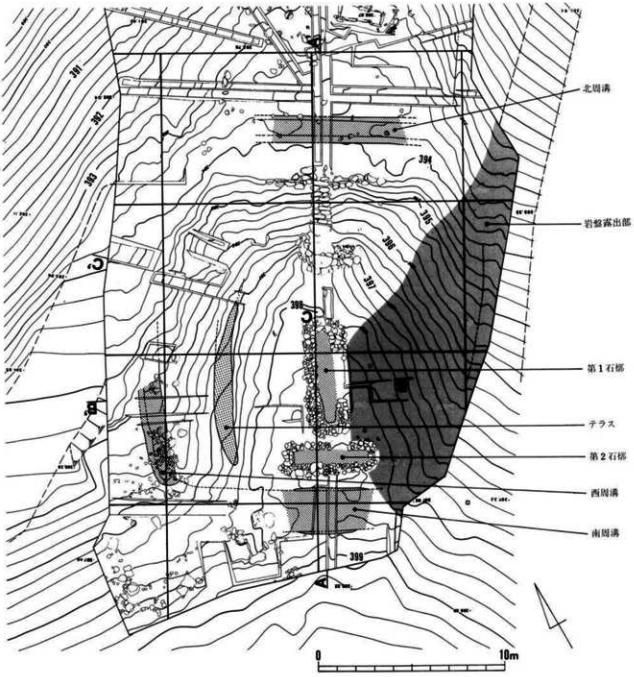
第24図　1号墳　墳丘（原地形）（1：400）

初めに、墳頂部の板石のひろがりを確認するために直交するベルトを残し、表土を除去したところ、直後に鉄剣を検出した。この剣は現地表下1～2cmの位置にあり、切先はほとんど地表に露出するような状況であった。そのため、盗掘により原位置を移動した結果ではないかと考えたが、結果的に、これが唯一の完形副葬品であった。板石列は、長軸を尾根筋方向に持つ幅80cm、長さ5mほどの竪穴式石槨の上端の輪郭を示すように並んでいることが確認された。蓋石はないものの、石槨そのものの保存状態は良いのではないかと思われた。石槨のおよその規模・構造が予測できたので、石槨内の埋土を掘り下げ、壁体の露出とともに盗掘後の残存副葬品の検出につとめた（第25図）。

まもなく、鉄器の残片が玉砂利に混じって出土しはじめ、石槨内の攪乱は相当激しいものと思われた。しかし、玉砂利は礫床状に敷きつめられたような様相を呈し、壁体の石積も3段ほどで終わっていた。玉砂利は割竹形棺の棺床のようにU字状を呈した。遺物はさきの剣以外は完形を保つものはなかったが、大半は玉砂利面から出土した。これによって、石槨の上部は墳頂部の盛土とともに削平されているが、棺床に近い部分の構造は原形をとどめているものと考えられた。このため、壁体の残存部と礫床の形状を追及するとともに、副葬品残片が散乱している可能性を考え、埋土はすべて水洗した。

さきの完形鉄剣の出土した位置では、礫床がその部分のみ周囲より高くなっていた。周辺の壁体の乱れなどからも、風倒木により礫床の一部がそのまま持ち上げられ、偶然その部分にあった鉄剣がかろうじて残されたものと考えられる。周囲の副葬品はその時点で地表に露出し、持ち去られたものと思われる（第26図）。

墓壙は最下部が残存するのみで、本来の形状は不明である。この石槨の失われた部分の石材は、隣接する石室に用いられた石材の形状や量から、それに転用されたものと思われる。つまり、この石槨の本格的

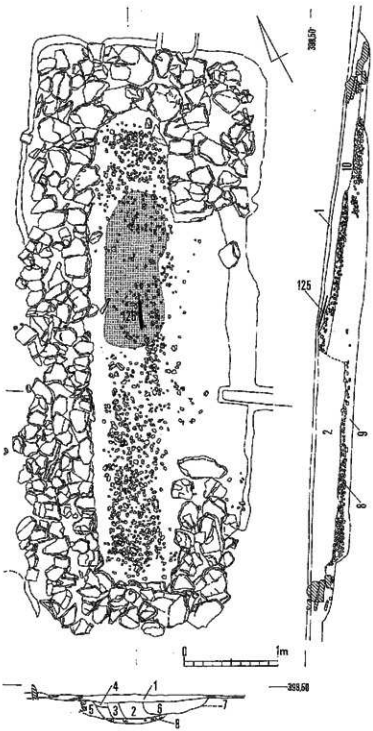


第25図　１号墳　トレンチ・石槨・岩盤の位置（1：200）

破壊は江戸時代以降ということになる。残存遺物の状況からすれば、祠への石材転用後も、副葬品の多くはそのまま残され、その後の風倒木による被害時およびそれ以後に失われたものと考えられる。

一方、この石槨の尾根上方に隣接して、尾根筋に直交する石列が認められた。当初、これは墓壙外郭などの施設とも考えられた。石列を追及したところ、さきの石槨と主軸を直交させる別の石槨の存在が確認され、前者を第１、これを第２石槨とした。第２石槨は保存が良かったにもかかわらず、床面近くから近代の遺物を出土し、副葬品は原位置で発見されたものはなく、数も少なかった。

埋葬施設の調査とともに、墳丘にトレンチを設定し、盛土の状況を観察した。盛土は全般に薄く、南東斜面は地山の岩盤が露出しており、北東側は祠の築造のためにかなり変形していることが予想された。また、隣接する２号墳上から本古墳の北側に向け、採土業者による木材搬出の重機が調査直前に通行し、北



第26図　1号墳　第1石槨礫床の状態（1：40）

側縁の一部が失われたことによってコーナーの把握ができなかった。しかし、崩落土を除去した結果、南東斜面以外の3面で周溝の残存部、北西側中段部でテラス面を確認し、その形状から方墳であることが確認された。また、これらの周溝・テラスから高坏・壺が出土した。

北西斜面の地表には角礫がわずかに散布しており、その付近の周溝中にも角礫が多く、葺石が存在した可能性も考えられたが、原位置に遺存するものはなかった。最終的には盛土をすべて除去したが、盛土中から遺物は出土しなかった。

2　墳　丘

(1)　墳丘の築成

第27図の土層を分類しておく。

A　1層　表土

2・3層　墳丘盛土

4～6層　墳丘盛土と思われるが、地山の可能性もある

7・8・13層　1号墳周溝埋土

9・10層　地山

11・12層　2号墳盛土

B　1層　表土

2・4・5・8層　墳丘盛土

3・7・9層　墳丘盛土の二次的堆積

6層　墳丘盛土と思われるが、地山の可能性もある

10層　1号墳周溝埋土

11層　地山

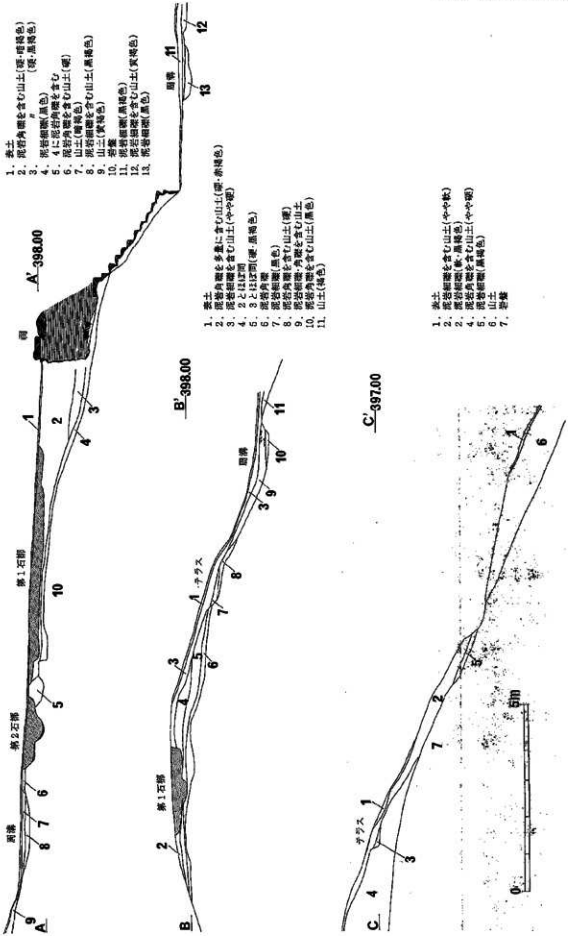
C　1層　表土

4層　墳丘盛土

2・3層　墳丘盛土の二次的堆積

5～7層　地山

後世の人為的改変と表土の流出によって、墳丘の変形が著しい。第1石槨の遺存状況からすれば、祠の築造あるいはそれ以前に、墳頂部は少なくとも1m程度は削平された



第27図　1号墳　墳丘断面（1：100）

ものと考えられ、その土砂は祠周辺および北側墳丘下方へ移動しているものと考えられる。また、祠前面の2号墳上に拝殿が造られ、それ以前にも墓地として利用されていることから、その造成によって1号墳北東側の裾が削り込まれ、2号墳と一続きの平坦面になっている。

トレンチの断面観察によれば、祠周辺において、地山と同じ泥岩小角礫を主体とする盛土が厚く見られる。礫が主体のため分層が困難であり、祠の築造にともなう盛土と古墳築造時の盛土を明確に区別できないが、周溝との間隔からしても、この部分に相当量の盛土が行われたものであろう。墳頂部周辺では現状で60cm程度の盛土が行われており、版築状ではないものの、全般に固く叩き締められている。南東側では岩盤が露出していたが、石槨の位置とその復元される形状からすれば、本来はこの部分にも盛土が存在した可能性が大きい。

周溝と墳丘裾が一体として確認されたのは西周溝の南側部分のみであり、他部分は崩落や後世の人為的削平により裾部が失われ、周溝によって墳丘範囲が示されるにすぎない。2号墳側の周溝は、中・近世の改変によってわずかに残されているだけであるが、この周溝が2号墳墳丘盛土に覆われるように土層断面で観察されること、周溝底出土土器が、1号墳のほかの周溝やテラスから出土するものに共通し、2号墳前面の葺石中の土器とはまったく異なることから、1号墳の周溝と判断する。また、南東側の岩盤露出部の道路として利用されていた地形は、周溝の痕跡を示すものとみることができるかもしれない。

墳丘構築以前の原地形は、尾根上方から傾斜20度ほどの尾根筋が第1石槨方向に通り、墳丘中心部付近からやや傾斜を急にして、3号墳に続いていたものと思われる。また、尾根筋の南東・北西は現状の墳丘下方のそれぞれの斜面とほぼ同じ斜度であったと思われる。この斜面は南東側が急傾斜で北西側は比較的傾斜が緩い。そのため、前者は盛土が薄く、後者は厚い。また、第1石槨より北東の急傾斜になる部分には、相当量の盛土が行われたであろう。

墳丘外方のトレンチでは地形の整形痕跡は認められず、2号墳の築造や中・近世の墓地・祠の影響を考えても、周囲の削り出しによる整形が大規模なものであったとは考えられない。

尾根筋上方と下方の周溝内縁間は18mとなり、外縁では22m、北側周溝と南側周溝の標高差は4.5mある。北西側周溝と第1石槨主軸線の距離は8.7mあって、南東側に周溝は検出されなかったが、同じ距離に裾・周溝を推定すると、周溝外縁間で20m、内縁で17.4mとなり、墳丘はほぼ正方形となる。墳丘の高さは斜面下方の周溝底から測ると4.6m、北西周溝中央から2.7m、尾根上部の丘尾切断部とはほとんど高低差がない。ただ、墳頂部の盛土は削平されており、第1石槨の床のレベルから考えれば、本来はこれより1m以上は高かったものと思われる。

(2)　墳丘施設

葺石は存在しなかったが、北西側周溝中とその周辺に角礫の散布が認められた。これ以外の部分および墳丘下方には崩落した形跡がない。ただし、墳丘面は後世の改変が著しく、崩落した葺石が失われた可能性は大きい。墳丘盛土中に含まれる礫はわずかであり、周溝中の礫は、北西側の中段テラスを中心に部分的な葺石が存在した可能性を示している。

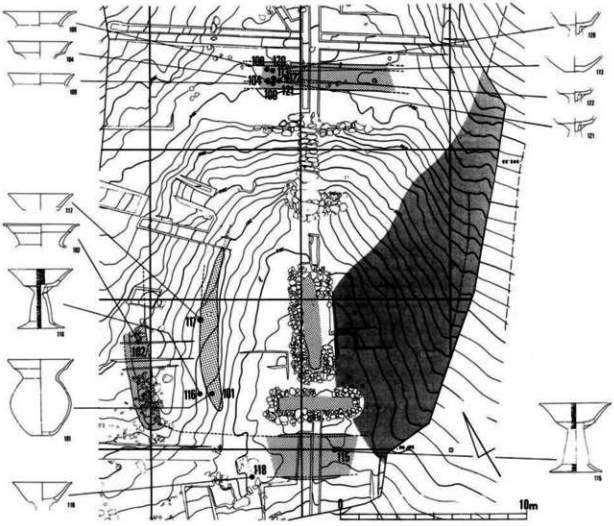
中段部分をめぐるテラスの残存部分はわずかである。北西側では最大幅1m、延長8.5mで、地形にそって尾根上方から下方にやや傾斜し、その高低差は90cmほどになる。テラス面は、岩盤を削り出して粘質土を敷いて叩き締めた部分と、盛土中に平坦部を造った部分がある。近世祠の周辺は盛土部分であり、本来は北東側にもめぐっていた可能性がつよい。テラスでは高坏・壺の破片を出土したが、テラス面上に密着して同一個体ごとにまとまるものが多い。

裾部の周溝は3か所で検出されたが、コーナー部分がすべて失われており、全周したものかコーナーで

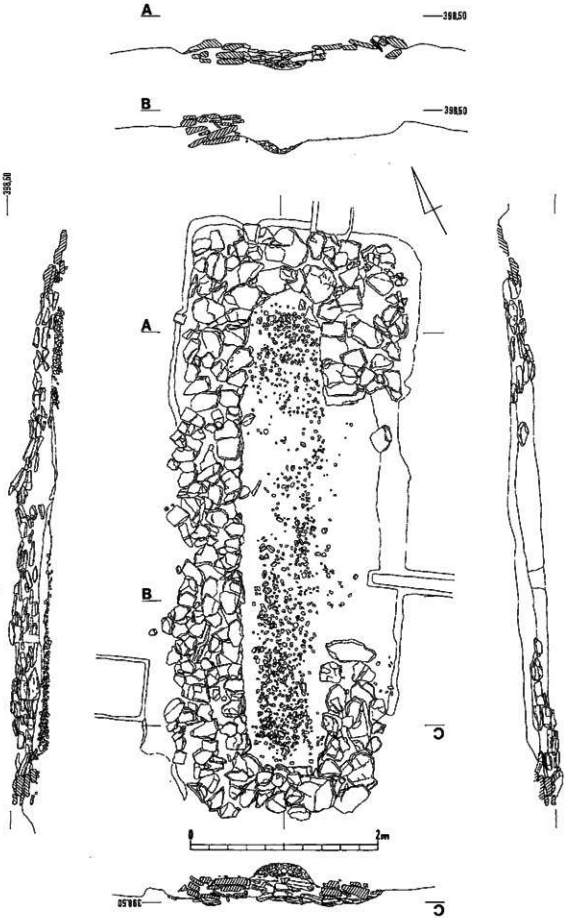
途切れるものかあきらかでない。西コーナーではつながらずに途切れていたような状況を示している。周溝は岩盤を削り出して作られ、周溝底は地形に沿って傾斜する。周溝底のレベルは丘尾切断部が最も高く、尾根下方が最も低い。溝幅は北東130cm、北西120cm、南西240cm、深さは10～20cm程であり、溝底は平坦である。３か所とも埋土中から高坏・壺の破片を出土した。その一部は墳丘上方からの崩落と考えられるが、大半は溝底に密着していた。

(3) 遺物の出土状態

墳丘では、周溝中およびテラス面から高坏・壺が相当量出土した（第28図）。テラス面出土土器の大半はテラス面直上にあり、ほぼ原位置に近いものと思われる。周溝のものは、周溝底よりかなり上層で出土し上方からの崩落と考えられるものもあるが、周溝底でまとまって出土し原位置からおおきく動いていないと考えられるものの方が多い。出土層位・位置による土器様相の差は認められない。出土状況から見て、壺と高坏がテラス・周溝に一定間隔で立て並べられ、北東周溝中には集中して置かれていた可能性がつよい。他に墳丘裾の西側で管玉１点を表採している。



第28図　１号墳　墳丘土器出土位置（1：200）



第29図　1号墳　第1石槨（1：40）

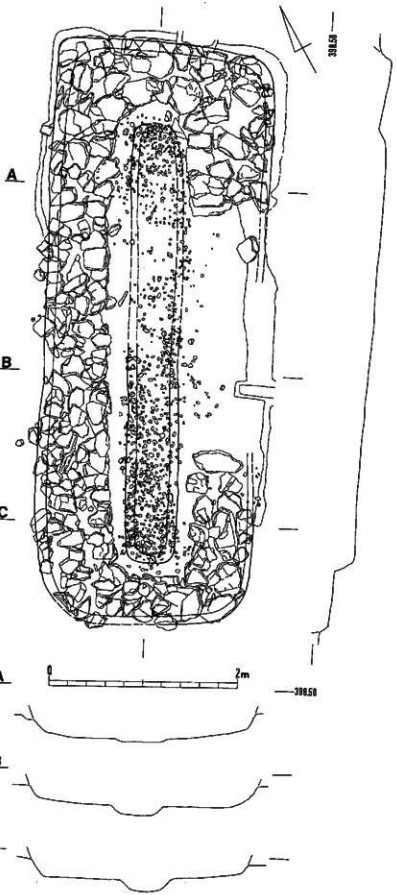
3　石　槨

(1)　第1石槨

上部の大半と東側壁が失われ、壁最下部の3段分程度を残すのみであるが、平面形はほぼ推測できる。中央部の幅90cm、全長5m、現状の壁高25cm。かなり厚めの安山岩平石を用い、小口積みする石もあるが長側面を壁面とする場合も多く、隙間も多い。南短壁は隅が角ばるが、北短壁は円く造られている。しかし、壁体上部の大半が失われているので、これらの形状の特徴は下部だけのものであるかもしれない。石積みは南隅から始め、時計回りに進んでいるように見えるが、初めから終わりまでそうであったとは言えない。南隅の短壁は側壁側に入って延びるようにも観察されたが、それも最下段のみである。また、この隅以外の3か所の隅はコーナーにも石を置いて、平面形が円みをおび、直角にはなっていない（第29図）。

控え積みは石2～3枚分の範囲に壁体と同様の板石を用いて行い、その範囲は墓壙の範囲と一致する。失われた上部ではより広い範囲に及んでいたものと思われる。控え積みの範囲は、壙底に岩盤が露出する南側が狭く、盛土上の北側がやや広くなっている。天井部には蓋石があったものと考えられる。隣接の近世石祠に用いられた石材は、それに適当な大きさと数がある。

床面は石槨内側の幅60cm、長



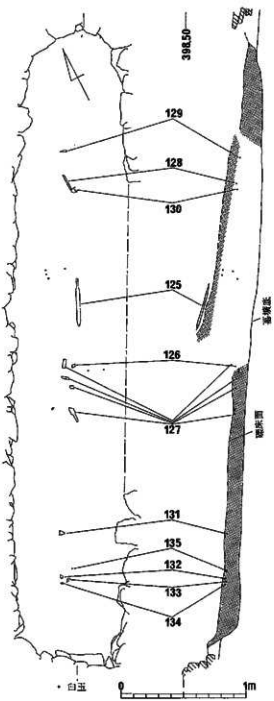
第30図　1号墳　第1石槨の墓壙（1：40）

さ4.8mの範囲に径1～5cm程度の円礫を厚さ10cmほどに敷いた礫床である。側壁との間は幅20cmほどの礫のない部分がめぐるが、この部分は、墳底から側壁1段分ほどの高さまで周堤状に埋め戻されることによって、玉砂利を敷くための最終的な窪みが造られたようである。その窪みも断面U字状を示すが、礫床もその形状に沿って断面U字状を呈している。断面形状は主軸方向においてもU字状を呈し、床面レベルは、尾根筋下方の北側から上方の南側に向けて18cmほど高くなっている。一方、側壁最下段の石の直下にも全体にわたってわずかに円礫が見られるので、円礫を敷く作業が行われた後に、側壁の石積みが行われたものと考えられる。

木棺の痕跡は確かめられなかったが、これらの床面の所見や遺物出土状態から、棺の幅65cm、長さ4.7m、高さ50cm程度の横断面・縦断面とも円みを持った木棺が用いられたものと推定する。

礫床構築後、石槨が構築されるが、側壁の上部が失われているために、側壁の石積みと棺の設置の時間的関係は不明である。

墓壙は、石槨の控え積みの範囲と一致している（第30図）。つまり、墓壙内は控え積みの板石で充填されている。長軸6.2m、短軸2.3mの隅円方形の土壙であり、中央部にさきの礫床に合わせた一段低い部分を掘りくぼめている。この墓壙の一部は岩盤を掘り込んでいるが、大部分は墳丘盛土上に存在する。現状で観察できる範囲では盛土を掘り込んだように観察される。しかし、盛土の大半は失われており、その掘り込みが盛土の最上部から行われたものか、あるいは盛土の中位から行われたものかはわからない。また、この古墳群全体に言えるが、地山表面の風化土・泥岩角礫と人為的盛土が非常に類似して判別が困難であることから、盛土と判断したものの中に自然層が存在する可能性もある。つまり、この墓壙はいわゆる掘り込み墓壙の範疇でとらえられる可能性があるものの、そうではないことも否定できない。また、掘り込みが墳丘盛土工程のいずれの段階に行われたものであるか明確にはできない。



第31図　1号墳　第1石槨の副葬品出土位置（1：30）

(2)　第1石槨の副葬品出土状態

副葬品の本来の組成・位置は失われていると考えられるが、内容・原位置を推定できる（第31図）。先述したように鉄剣周辺の床面は倒木により礫床面ごと、浮き上がったと考

えられるが、平面的には原位置からそれほど動いていないものと思われる。他の部分は、床近くまで攪乱を受けた部分が多いが、攪乱土中から遺物は出土しなかった。鉄器は礫床表面で、玉類は礫床中に多少入り込んで検出されたものが多く、盗掘時に見逃されほぼ原位置に取り残された結果と考えられる。

礫床の南に鉄鏃があつまり、北に鉇2本と鉄鏃、鉄剣は中央部に2本あって、玉類は剣の周辺に集中する。鉄鏃は北群には最大のもの1点があるだけであるが、南群では小形品5点が集中する。つまり、大きくは3群としてとらえられる。中央部の副葬品は被葬者の装身に、両端の鉄器は遺体の頭部側・足元それぞれの棺内副葬品収納部の状況を反映するのではなかろうか。

ところで、石槨の幅は、南群付近では80～85cm、北群付近では75～80cm、礫床面のレベルは前者の方が15cmほど高く、同位置の墓壙底も同じく20cmほど前者が高い。床レベルでは頭が低くなるが、剣の切先方向は南を向くことと、南北の遺物群の特徴から、被葬者の頭位は北側と考えたい。

(3)　第2石槨

蓋石を欠き、側壁の一部が盗掘時に破壊されたようであるが、石槨の大半は良く残されている（第32図）。中央部の幅70cm、全長3.9m、現状の床からの高さ60cm、石積みの高さ45cm。やや厚めの安山岩板石を墓壙底から小口積みし、壁はほぼ垂直である。第1石槨に比べると壁体の石材の選択・積み方がより均一である。控え積みは墓壙の範囲と一致するが、後述するように地山の形状に影響されている。現状の上面では四隅は円みを持ち、角を作らない。しかし、壁体最下段では、短壁と側壁をつなぐような形で置かれる石があるのは南隅だけで、ほかの3か所はある程度の角をつくる。

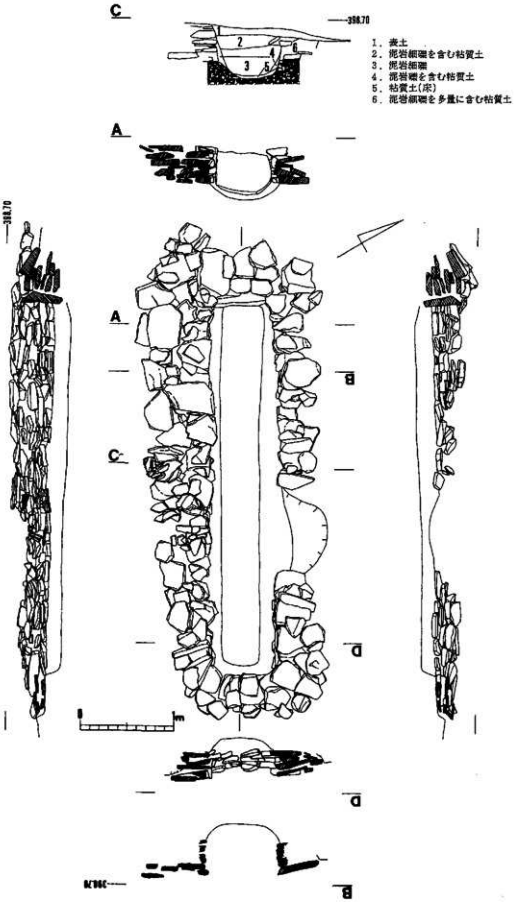
北西側の短壁には石槨と同じ幅・高さの立石があり、その背面の小口積み壁は両側壁が積まれて後に、その間に積まれた状況を示す。立石は側壁を破壊しなくとも抜き取ることができたので、おそらく側壁の構築途中または完成後に立てられたものと思われる。立石と背後の短壁との構築順の前後関係は明確ではないが、棺が壁体完成より先に据えられていたとすれば、立石・単壁の順の方が無理がないであろうが、逆が不可能なわけでもない。

4号墳石槨の例からは、立石の高さは石槨の高さとほぼ等しく、この石槨も現状の壁体最高所付近が本来の高さであったと考えられる。蓋石の存否は不明であるが、祠に転用された可能性はあろう。

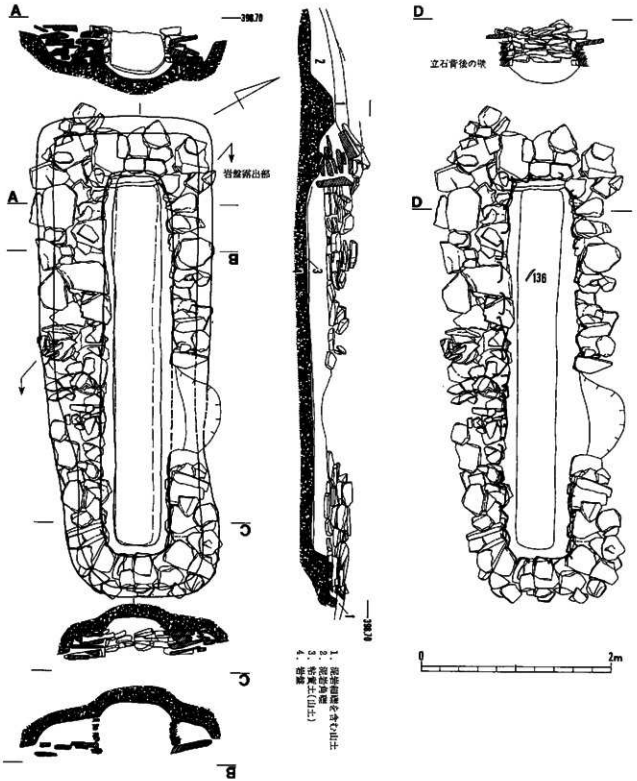
石槨内は徹底して攪乱を受けているが、床面の形状はほぼ原形を残すものと思われる。床は、岩盤の上に粘質土を叩き締め、壁体下端から内側に向け断面U字状を呈する。壁体最下部より床までの深さは約20cmほどである。また、縦断面でも両短壁側はゆるく立ち上がる。床面レベルは、立石のある北西側が9cmほど低い。

棺の痕跡はまったく残されていないが、棺床の形状から底に丸みを持つ木棺を想定する。また、床面の高低差と4号墳や3号墳で立石が被葬者の足元方向にあると考えられることから、遺骸頭位は南東方向と考える。

墓壙は、幅1.8m、長さ5.1m、現状の深さ60cm程で、中央に棺床となる幅75cm、長さ4.1m、深さ15cmの一段深い部分を掘り込む（第33図）。壁体および控え積みの範囲と一致し、壁体と同様の板石による控え積みで充填されている。東寄りほぼ2/3の墳底は岩盤となっており、岩盤上の壁体控え積みの範囲は、石槨上面で石1～0枚分、最下段では控え分がなく壁体が直接墳壁に接する。岩盤以外の部分（岩盤上の地山土であって、盛土ではない）では、上面で控え積みが1～2枚、最下段で1枚ある。このため、墓壙の平面形は底に岩盤が露出する部分では狭く、そうでない部分では広くなっている。盛土部分がほとんど失われ、墓壙底・壁のほとんどは地山面なので、盛土工程と墓壙の構築過程との関係は充分にはあきらかではない。周囲の岩盤の形状・盛土と控え積みとの関係は、第1石槨と同様ではないかと思われる。



第32図　１号墳　第２石槨（1：40）



第33図　１号墳　第２石槨の墓壙（遺物出土位置）（1：40）

ところで、第1石槨は古墳の中心部に尾根筋に主軸を一致させて構築されるのに対して、第2石槨は墳丘平面形のうえではかなり端に寄り、主軸方向を尾根筋に直交させている。この位置関係からは、比較的短期間のうちに第1・第2の順に構築されたと見るのが自然であろうが、ふたつが同時に構築された可能性も否定はできない。いずれにしても、位置・規模の点だけでも相互の優劣関係はあきらかであろう。

(4) 第2石槨の副葬品出土状態

近代の遺物が床面近くから出土するなど、盗掘・攪乱が著しく、副葬品はほとんど出土しなかった。石槨内からは唯一、刀子1点が床面上2.5cmの位置から出土したが（第33図右図）、原位置とは考えられない。漂土の水洗により鉄剣片・白玉などを検出したが、数は少ない。他に、石槨の西方10mほどの地点で管玉1点を表採している。

4　出土遺物

(1) 土器（第34図）

墳丘中段テラスおよび周溝から出土した土師器である。石槨内から土器は出土していない。壺はすべて赤彩され、高坏は赤彩されないものが少数ある。

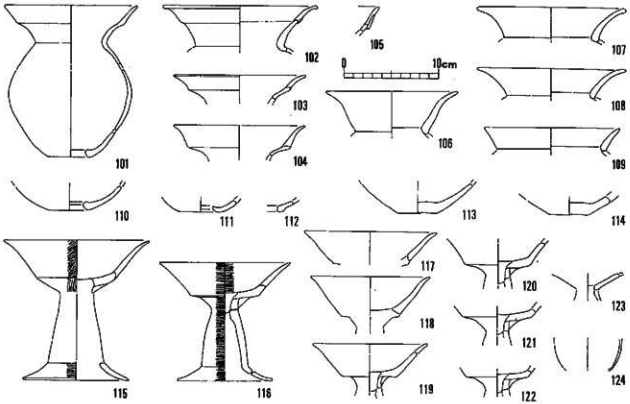
壺（101～114）

101は復元であるが、ほぼ全形をうかがうことができる。器高16cm、口径14cm、胴部径13cm、器厚3～5mm、有段口縁、焼成前の底部穿孔、外面と頸部以上の内面は横方向のヘラミガキ、頸部以下の内面はナデ、ミガキ部分はすべて赤彩される。小形の精製壺である。口縁は端部でわずかに外反し、頸部は鋭く屈曲するが、段部・頸部とも明瞭な稜は成さない。段部は外面から粘土を貼り付けて成形するもの（105）もあり、この技法を用いたものは外面に明瞭な段部を成す。穿孔部はヘラ切りあるいは整形のためのヘラ削りの後、ナデにより調整する。そのため、成形時から孔があいていたのかヘラ切りによって開けたのか不明であるが、2号墳の壺に見られるような、輪状の粘土紐で孔のあいた底部を作ったものではない。穿孔部（110～112）の調整法にはかなり個体差が認められる。色調は赤褐色、胎土は細砂を含み、焼成はやや軟質で風化するものが多い。

他に、口縁の形態には単純口縁（107～109）があり、内湾後、外反するようなもの（106）もある。これは坩形となるかもしれない。底部もわずかに上底状になる平底無穿孔（113・114）がある。しかし、形態のいかんにかかわらず、胎土・調整法・赤彩などは非常に類似している。口縁部と底部の数から見て、同種の壺は20個体弱あると思われる。底部穿孔・有段口縁の方が多く、平底無穿孔・単純口縁の方が少ないが、その差はわずかと思われる。ただ、口縁と底の形状がどのように結びつくかはあきらかでない。

高坏（115～122）

2種ある。ひとつは赤彩されるもの（116～122）で、10個体程度ある。口縁はほとんど外反せず、坏部が浅く、坏底・脚屈曲部の外面は明瞭な稜を成す。器高12～13cm、口径12.5～14cm、脚端部径10cm以上、器厚3～7mm。全体に小振りである。外面と坏部内面は横方向のヘラミガキ、脚部内面はナデ。ミガキ部分はすべて赤彩される。脚部と坏部は、ホゾを上から差し込むことにより接合される。脚内面上部には絞り痕があり、それより上部は円筒状に整えられている。この整形を終えた脚部に、坏部が載せられ円筒部にホゾが差し込まれたようである。ホゾの先端は押えられていないので、ホゾ差し込み後に、内側からの調整は行われなかったと思われる。その代わりか、接合部外面には粘土が補充され、全体として坏底部と脚柱の間が逆台形状に厚みのあるものとなる。この部分の形態がこの高坏の外観上の特徴のひとつとなっている。ホゾはすべて坏底部と一体であり、脱落するものはなく、2号墳例と対照的である。形態も円柱



第34図　1号墳　テラス・周溝出土土器（1：4）

状で先端が丸く、2号墳とは異なる。色調・胎土・焼成は赤彩壺とよく似ている。

もうひとつは赤彩されないもの（115）で、1・2個体しかない。口縁が外反し、坏部は深めで、坏部外面は明瞭な稜を成さず、前者とは形態が異なり、サイズもやや大きい。復元器高15cm以下、口径15～16cm、脚端部径11cm、器厚3～12mm。外面と坏部内面は斜め方向のヘラミガキ、脚柱部分は欠けて不明。脚部内面はナデ。脚部と坏部の接合方法は、接合部分を欠くため明確でないが、坏部を上から差し込んだ後に、接合部外面に粘土を補充する点は同様である。色調は明褐色、大きめの砂粒を含み、焼成は良好で、赤彩高坏とはすべて異なっている。

小型器台（123）

小片であるが、小型器台の可能性がある。孔径15mm程度、口縁部はやや外反傾向がある。内外面ともヘラミガキされ、外面には赤彩を残す。胎土は精選され、ごく細かな砂を含み、色調は明褐色。精製土器である。

小型丸底土器（124）

小片のため明確でないが、胴部復元径7cm、器厚2～3mm、内面ナデ、外面ヘラミガキのきわめて薄手で、精選された胎土の精製土器があり、小型丸底土器と考えられる。1個体と思われる。

(2)　鉄器（第35図）

すべて石槨内から出土した。

①第1石槨（125～135）

すべて礫床検出中に出土したものである。

剣（125～127）

125は、全長43.2cm、剣身長34.8cm。剣身は幅2.5～3.0cm、厚3.5mm、断面形はやや菱形を呈するが、鎬は明瞭ではない。茎は長8.4cm、幅は関部で2.6cmあるが茎尻へ2.7cmほどで幅1.2cmになり茎尻に至る。茎尻はやや斜めであるが平坦である。関より5.3cmのところに径2.5mmの目釘穴を持つ。関部は左右とも直角に2mmほどで、明瞭である。茎には木質が付着し、関部に対応する直線を成している。

127は上半を欠損し、現存長25.5cm、剣身は幅2.4～2.7cm、厚5mm、断面形はやや菱形を呈するが、鎬をなさない。茎は長8.5cm、幅は関部で1.8cmあるが茎尻では1.0cmほどである。茎尻近くは特に幅をせばめる。茎尻はわずかに円みを帯びる。関より5cmのところに径3mmの目釘穴を持つ。関部は左右とも直角に5mmほどで、明瞭である。剣身には、場所によって方向の異なる布目が相当量付着しており、幾重かの布に包まれていたようである。関部の上下で錆の状況が異なり、それは関部を結ぶ直線となる。木質は観察できない。

126は剣身の破片で、幅1.8～2.0cm、厚4mm、両丸造である。

鉾（128・129）

128は刃部先端を欠くが、欠損部はわずかと思われる。現存長13.3cm、幅5～9mm、厚3～4mm。刃部は片丸造である。刃部から茎への湾曲は本来の形状と考えられる。茎部下半には木質が付着するが、柄の末端は確認できない。茎の断面形は長方形であるが、基部は細くなっている。

129は茎基部の破片と考えられる。現存長7cm、幅10mm、厚5mm。上部には木質が付着するが、茎が細くなる部分には見られない。茎の断面形は長方形であるが、先端は円みを帯びる。

鏃（130～135）

6点あるが、薄手・大形品と小形品がある。茎はすべて先端が欠損するが、欠落した先端は検出されなかった。茎のうち失われた部分はわずかと考えられ、頸部・茎部の区別を持たないものであろう。茎部はすべて断面長方形である。133は2孔を持つ。134・135は一見刀子状にも見えるが、関部の形状は鏃と考えられる。明瞭ではないが片刃の可能性もある。

②第2石槨（136～139）

136が床面ちかくから出土した以外、ほかは盗掘による撹乱土中から水洗により検出したため出土位置はわからない。

刀子（136・137）

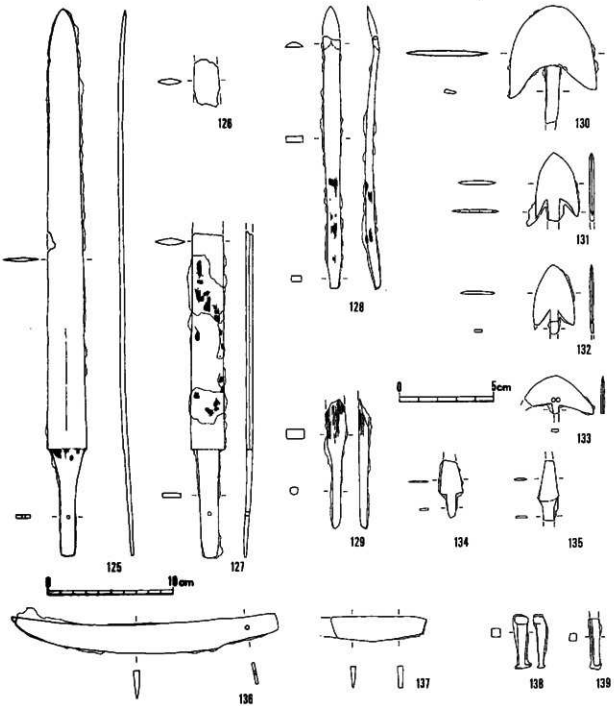
136は、全長13.5cm、刃部長11cm。関部は明瞭ではないが、茎は長3.5cm、厚1.5mm、茎尻はわずかに円みを帯びる。中央に径2mmの目釘穴を持つ。

137は刃部を欠損し、茎もその可能性がある。現存長5cm、幅1.3cm、厚2mm。関部は明瞭ではないが、ほぼ半分が茎部と思われる。

他（138・139）

139は鉄鏃の茎と思われる。現存長2.5cm、断面形は厚さ4mmの方形である。

138は角釘であるが、石槨内埋土中からは近世以降の遺物も出土しており、古墳時代のものではないか



第35図　1号墳　出土鉄器（1：2）125～127（1：3）125～135：第1石槨　136～139：第2石槨

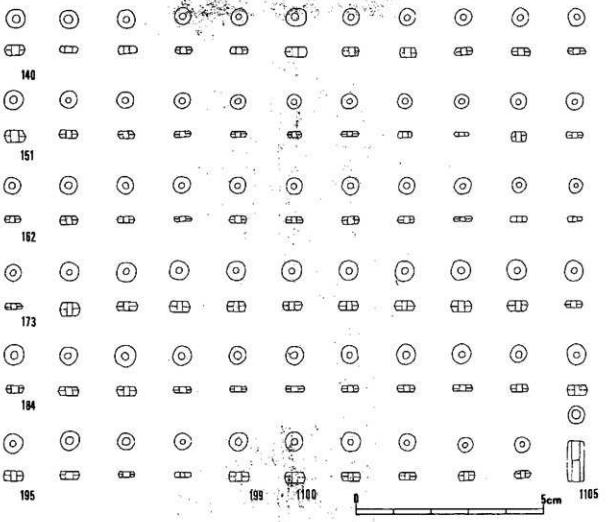
もしれない。

(3)　玉類（第36図）

原位置で検出したものと埋土の水洗で検出したもの・表採品がある。

白玉（140～）

すべて滑石製と思われる。第1石槨からは、図示した63個（140～1102）の他に破損したもの4個分が出土した。黒色・暗青灰色・灰白色などの色調を持つ。黒色の6個は特に大きく、中央部に明瞭な稜を持



第36図　1号墳　出土玉類（1：1）　1103・1104：第2石梆　1105：表採　他：第1石梆

つ。他も厚薄にかかわらず、ほとんどが凌を持つ。

第2石梆からは、図示した2個（1103・1104）の他に破片が4つある。暗青灰色。少数の資料であるが、第1石梆のものと比べると形態・色調に差が少ない。

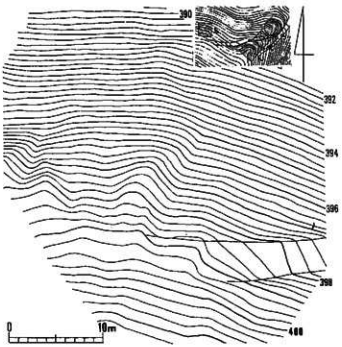
管玉（1105）

墳丘の西10mほどの位置で表採したものである。両面穿孔。暗青灰色でグリーンタフ製と思われる。

第3節　大星山4号墳の調査

1　発掘の経過

調査区の西端において、周辺とは異なって角礫が集中する一画があり、その一部はわずかに高まって、頂部が比較的広い平坦面をなしていた（第37図）。1～3号墳の調査に並行して周辺の伐採木・下草を除去して地形を把握し、微地形の変化が認められる部分について、トレンチなどにより遺構の存否を確認する作業を進めていたが、この部分は最も古墳の可能性のある場所であった。角礫の散布域の周辺は太平洋戦争前に桑畑として利用され、平坦面の上部には石垣があり、石垣の上方には畑の畝が残っていた。また平坦面の西側の調査区域外には、小石が積石塚状にマウンドをなしていたが、これは畑の耕作にともない集積されたものと判断された。



第37図　4号墳　墳丘（原地形）（1：400）

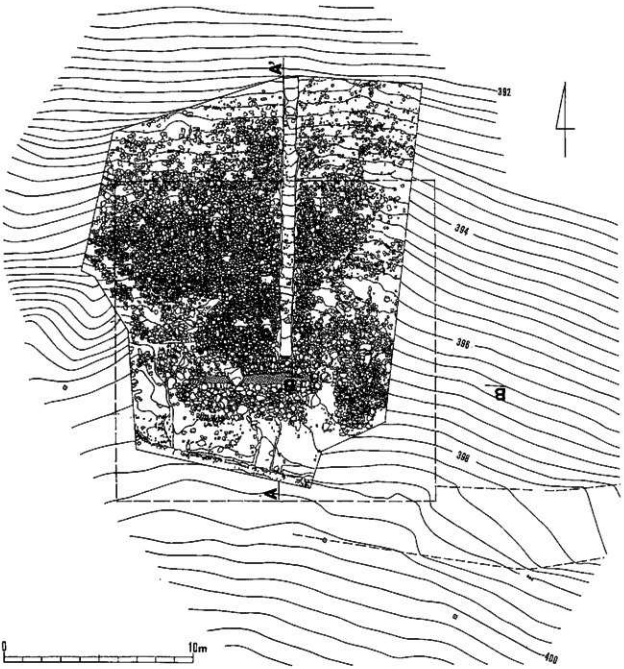
平坦部にトレンチを設定し、掘り下げたところ、石槨状に並列する石列を認めた。ベルトを残し、その内側を掘り下げたところ、上層の黒色土中で刀子、側壁の上面で宋銭を検出した。石槨の全形の露出とあわせ、槨内の埋土をさらに掘り下げたところ、内黒の高台坏など完形土器4点を出土した。この時点では、古墳の石槨を平安時代以降に埋葬施設として再利用した可能性とともに、この地点がほかの3古墳とやや立地を異にし、墳丘の状況も異なることから、古墳時代以降の埋葬施設であることも考えられた。

しかし、石槨の全形があきらかになるとともに古墳の埋葬施設であることが確実となり、さきの遺物は後世に埋葬施設として再利用されたことにともなう副葬品と考えられた。蓋石はその時点あるいはそれ以前に大半が除去されたと考えられる。埋土の掘り下げによって、床面上で鉄剣・やりがんなが出土し、また後日、埋土の水洗により玉類も検出された。

一方、埋葬施設の周辺に散布する礫群の露呈を石槨の周囲からすすめたが、周辺部では礫の密度が徐々に希薄となり、地山に自然状態で含まれる礫と区別ができず、人員・期間の問題もあって徹底した露出作業ができなかった。実測図中の周辺部には自然礫や墳丘部から崩落したものも含まれると思われる（第38図）。墳丘トレンチの観察によると、これらの礫群は、薄い盛土を行った後に表面に角礫を配置して葺石状をなすように見受けられた。調査過程において、葺石および盛土の全面的な除去はできなかった。

遺物は石槨内に残存したもののほか、墓壙周辺の墳丘上で高坏・壺などの土師器・石製紡錘車を検出した。

石槨・墓壙は、構築順と逆にすべての石材を除去し、構築方法を調査したが、この過程では遺物の検出はなかった。



第38図　4号墳　トレンチ・石郭・他の位置（1：200）

2　墳　　丘

(1)　墳丘の築成

第39図の土層を分類しておく。

1層　表土

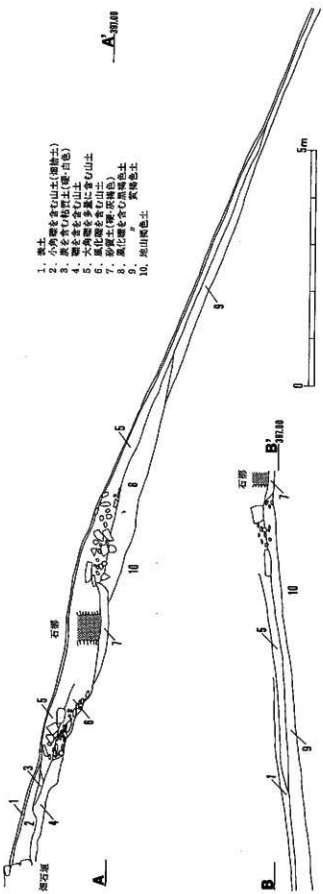
2層　近代の耕作に伴う捨土

3層　墳丘盛土あるいは後世の人為的埋土

4～8層　墳丘盛土（5層は二次的に移動した部分もある）

9・10層　地山

墳丘の全面に人頭大以上の安山岩角礫が散布し、当初からかなり地表に露出していた。一見したところ、



第39図　4号墳　墳丘断面（1：80）

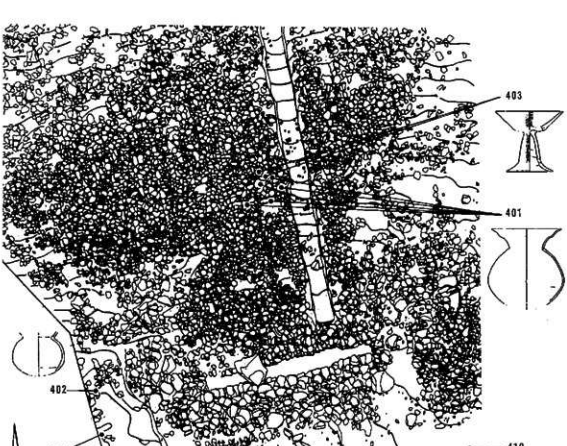
大室古墳群などに見られる積石塚状を呈する。しかし、礫は周辺部では密度が薄くなり、自然状態で地表に存在する礫と区別できなくなる。礫散布範囲内では、埋葬施設の周辺が周囲の地形よりわずかに高まっているが、ほかの部分は周囲の地形面と同傾斜でマウンド状の高まりをなさず、墳丘というより貼石帯といった方がよい。礫の密度は埋葬施設の斜面下方に多く、上方には拡がらない。上方はかつて畑に利用されていたとはいえ、最終的に重機で全面を表土剝ぎしたにもかかわらず、人為的な構造物は検出できなかった。また、自然状態で存在する以上の密度で礫が存在したようには見られなかった。礫の散布範囲を墳丘ととらえるならば、墓壙および周囲の構造上の特徴からも、埋葬施設は地形に制約されて墳丘の最も上部に造られたものと考えられる。

トレンチや墳丘表面の観察でも外周を区画する石垣・置石などの施設は確認できなかった。しかし、この貼石にともなう置土と考えられる土層（第39図第5層）が、旧地表土（同第9層）と判断される層を覆って存在していることがトレンチで確認されている。その範囲は、石槨中心から東へ9.5m、西へ7m以上、南（斜面上方）へ4m、北（斜面下方）へ10.5mで、東西16.5m以上、南北14.5mの範囲となる。なお、西は調査区域外へ延びるため末端は不明、南は畑の石垣造成時に削平された可能性がありもっと延びていたかもしれない。この置土の範囲は礫がとくに密集する範囲とも一致する。このことから置土の範囲を東西・南北それぞれ17～18m程度と推定し、それを墳丘範囲と考えるならば、後述する埋葬施設周辺の構築物との位置関係からも、直径約17mの円墳と考えるよりも、一辺17m程度の方墳を想定した方がよいかもしれない。

墓壙の構築にともなうものの他には墳丘上に構築物は存在しない。

(2)　遺物の出土状態

土師器高坏・壺が埋葬施設の周辺から出土している（第40図）。いずれも石槨中心から6mほど



第40図　4号墳　墳丘遺物出土位置（1：125）

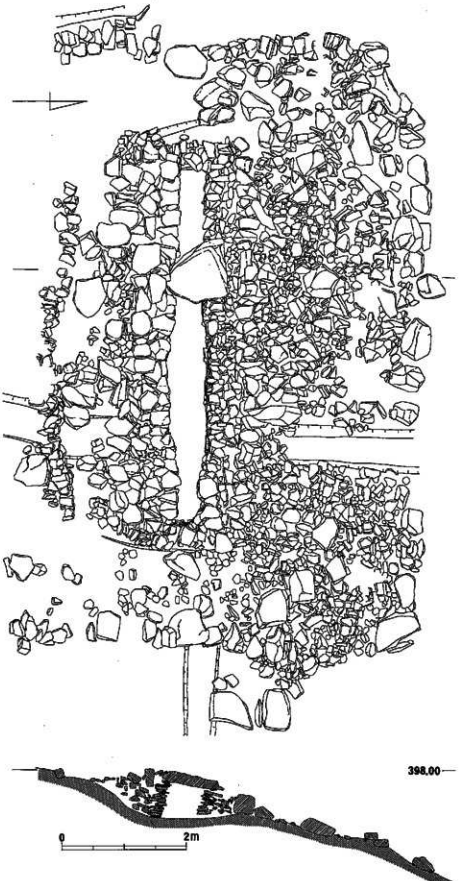
の位置で、石槨の西側と北側の2群がある。北群付近は墓壙外郭の2mほど外側の貼石中であり、散布する礫が比較的平坦な面をなしている部分の礫の間の盛土面から出土した。現状では確認できないが、この部分がテラス状になっていた可能性もあろう。西群付近は石が少なく墓壙外郭の石積みの前面がテラス状になった部分であり、地山面上から出土した。これらは原位置にちかいものと考えられる。

ほかに石槨の南東5mほどの表土中から石製紡錘車を出土した。盜掘にともなう移動の結果であろう。

3　石　槨

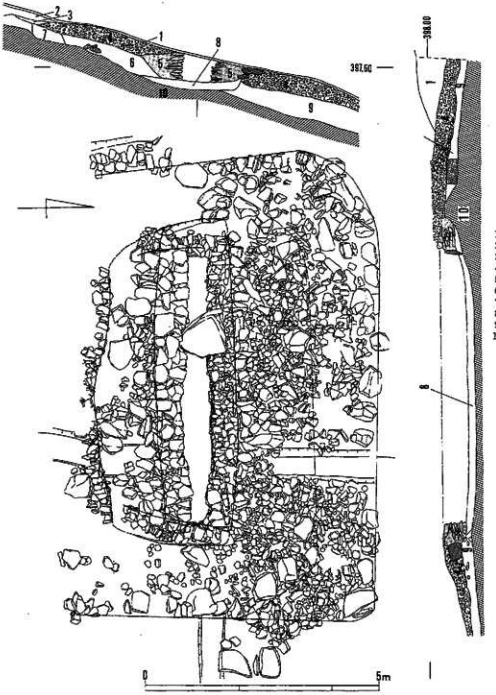
(1) 墓　壙

埋葬施設周辺は人頭大からひとかかえ以上もある角礫・板石が散乱し、周囲と比べ比較的平坦であった。墳丘の貼石は礫塊で比較的散漫なのに対して、この部分では礫中に板石を含み、土をほとんど混じないほど石が多い。石槨の検出と並行して、礫を残しながら掘り下げた結果、この礫群が墓壙の構築にかかわるものであることがあきらかとなった。石積みは表層が多少破壊されている可能性があるが、現状で把握できる構造が、ほぼ本来のすがたと考えられる（第41図）。石槨の主軸は地形の傾斜方向にほぼ直交しており、墓壙も同様に地形の傾斜に合わせて造られているため、原地形の標高の高い部分と低い部分では石の積み方・高さ・構築法などが異なっている。

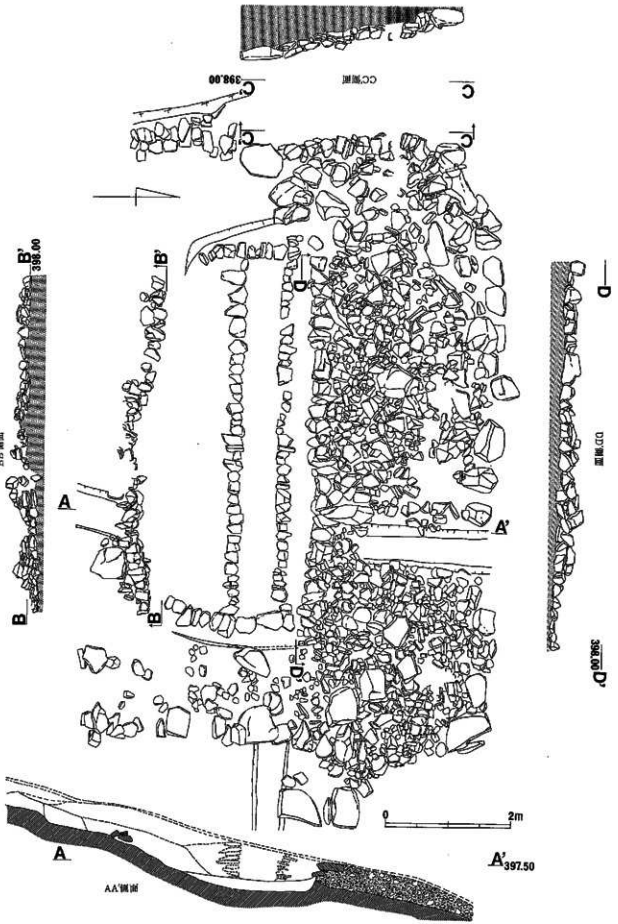


第41図　4号墳　石槨と墓壙（1：60）

外郭は9.6m×6.0mの隅円長方形を呈する範囲に大形の礫と平石を並べて造る。石槨中軸線より北側では、外側の墳丘面の方が低く、外郭石列に沿って墳丘面がテラス状になっていた可能性がある（第42・43図）。外郭の石列は北側、つまり標高の低くなる側のみに見られる。西側外郭では主軸線より南側は、北側の石列ライン延長線の外側に幅50cm、延長170cmの範囲に板石を敷き並べ、ラインの内側には石がない。石列の礫小口は、外側を向いてそろえられて石垣状となり、板石敷は内側に向かって小口がそろうが、双方の小口はひとつのラインをなしており、これが一体として墓壙外郭線を構成するものであろう。東側では、主軸よりやや南まで外向きの石積みがあるが、その外方には板石が集中して散乱しており、西側と同



第42図　4号墳　墓壙外郭・内郭ライン（1：80）



第43図　4号墳　墓壙と石槨最下段の石（1：60）

様の構造であった可能性がある。また、置かれた石はほとんどが1段であるが、石槨の短壁に対応する部分ではとくに入念に造られ、3・4段の石垣となっている。一方、南側は地形面の上方にり、内側に向けた石垣が延長5.5mほど造られているが、東西外郭線とは直接つながらず、石槨に平行する部分のみに築かれる。

地山の等高線は主軸方向と比べ東側ではやや南に寄っている。外郭が外向き石垣から内向き敷石に変わる東西の転換点を結ぶと、地山等高線ときわめて一致する。外郭基底のレベルは、西側の転換点で397.55m、東側の南端で397.65mで、ほぼ等しい。基底レベルは、北側396.5～396.7m、南側は397.85～398.0mで、それぞれほぼ水平であるが、南の方が1.5mほど高い。

墓壙を東西が対称的になるような構造にしようとすれば、石槨主軸線は、外郭石積が外向きから内向きになる転換点、397.6m前後の等高線ラインの方向となったはずである。石槨主軸ラインを優先して決定した結果、地形に影響されて、東西外郭の構築法が一方は主軸を境に転換するのに対し、一方はそうではないという違いをもたらしたと考えられる。

土層断面によれば、石槨中軸より5.5m南側、つまり推定テラスのやや外側まで旧表土の整形が行われ、墓壙礫が置かれる面は主軸下方（北側）では置土により、上方では地山削り出しにより造られている。これらにより、外郭の外側にテラス面が存在したとしても、それは外郭を全周するものではなく北側を中心とする部分的なものであったと思われる。

石槨北側では、外郭の石積みの内側に、大形の安山岩礫を1・2段積んで、高さ40cm、延長6.2m程度の墓壙壁をなす内郭の石積みが行われる。外郭との間は、大きなもので長さ80cm、小さなもので拳大の安山岩角礫で充填される。また、外郭と墓壙壁とのほぼ中間に明確ではないが、これらに平行するように見える石の並びがある。これは傾斜面に多量の礫を充填するための構造であったと思われる。

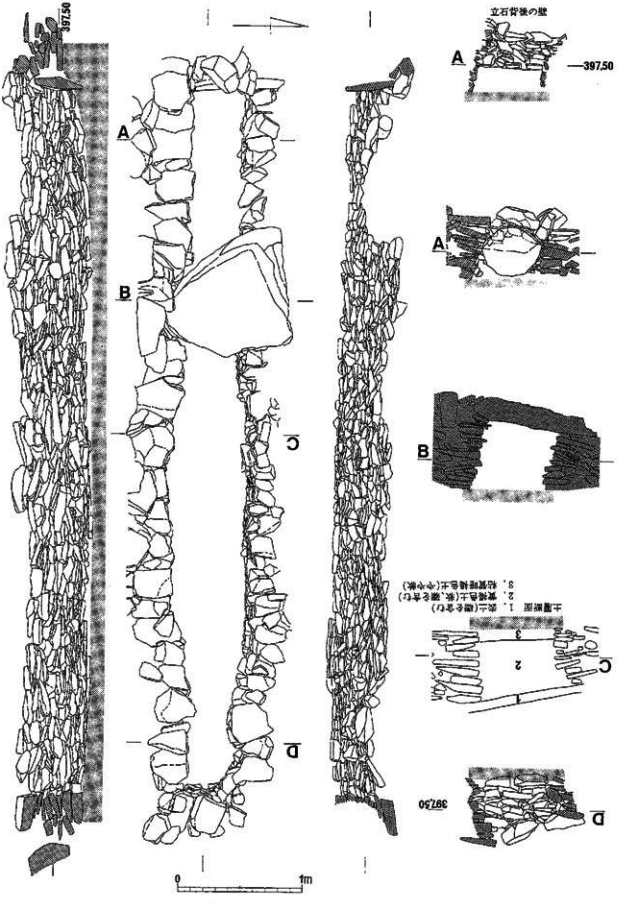
石槨南側では、外郭石積みの内側が地山の風化礫を含む地山土で埋め戻され、表面には少量の大角礫が置かれるが、北側と比べると充填される礫の量は少なく乱雑で、石列を成さない。そのため、調査途上では石槨壁体の控え積みの範囲のラインとして観察された。

これらにより形成されたものが墓壙であって、東西6.8m南北2.7m、深さ40cmの規模となる。これまで述べてきた外郭は、墳丘の最上段といった方がよいかもしれないが、墓壙構築のための石積みであるという点で、ここで述べた。

墓壙壁の構築と同時に、地山削り出し面上に15cmほど置土することによって石槨の基底面を造る作業も並行して行われる。土層の切り合い関係からは、置土・北壁・南壁の順に構築されている。南および東西は、石槨控え積みに対応する盛土および地山面上の掘り込みを持つだけで、石積みは存在しない。底のレベルは中央で397.2m、ほぼ水平であるが周辺部ほどやや高い。とくに東側では20cmほど高く、逆に西側は中央とほとんど同じレベルである。

後述の石槨短壁の延長部がこの墓壙壁と接続する部分があり、墓壙と槨との関係はとくに南幅において単純ではない。これは、標高が高く地形を利用することによって石積み工程が省略しやすかった南側と、標高が低く計画的に石積みを行わねば墓壙を構築できなかった北側との違いであろう。つまり、この墓壙の本来のすがたは北半分によく表れていると考えられる。

このように考えると、北側の外郭と内郭との中間で、外側より一段高く不明瞭ながら石垣状を呈する部分は、石槨中軸線からほぼ等距離にある南側外郭石積に対応するものである可能性がある。その場合は、本来の南外郭はさらに外側にあることになるが、地形上必要がない構造であるので省略されたと考えねばならない。



第44図　4号墳　石槨（1：30）

(2) 石　槨

先述の墓壙完成時に盛土によって形成された床面上に石槨が造られる。この面は礫を含まない精選されたやや砂質の粘質山土が用いられ、叩き締められてはいるが、通常の地山程度でそれほど固くはない。これがそのまま石槨床面を なす。床面レベルは、最も低いのが東から三分の一ほどのところで、最も高い西端は中央部より18cm高い。縦断面で中央の三分の一、横断面はほぼ水平である（第44図）。

石槨は最下段の礫で測ると、主軸長5.7m、中央部幅60cm、天井石を残す部分で高さ55cmである。幅に対して長さがきわめて長い。壁面は南側が内傾し、北側が外傾するが、地形の傾斜によって押し出された結果であり、本来は両側壁ともほとんど垂直に立ち上がっていたものと考えられる。

北側壁は幅10cm、長さ20cm、厚さ4cmほどの小形の板石を選択し、12段ほど小口積みする。南側壁は、やや大形の幅25cm、長さ30cm、厚さ6cmほどの礫を主に用い8段ほどの小口積みであるが、長さの短い礫も多く、かならずしも小口だけを壁面に出してはいない。東短壁は、南壁と同様に積まれているが、西壁はやや乱雑で、両側壁基底より20cmほど高い位置から積まれている。西壁の前面には、石槨幅に合わせた、幅45cm、高さ40cm、厚さ10cmほどの平石を立てるので、西壁はこの立石の背後となる。

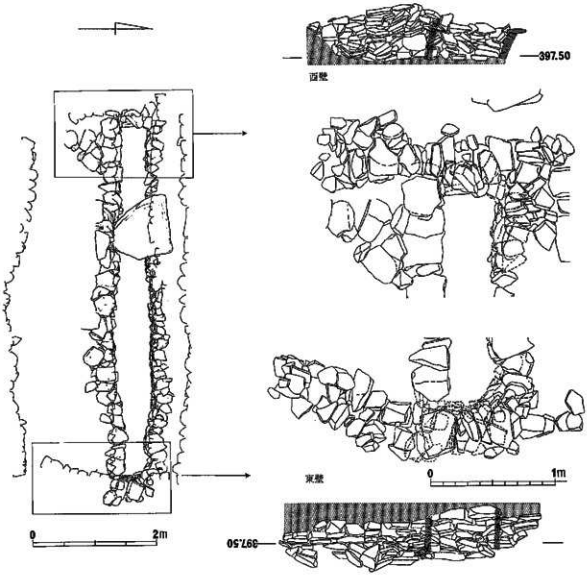
石槨の壁の4面は隅の接続部分において、一方の壁面より奥まで延びる部分がいくつか見られる。これは壁面の構築順を示している（第45図）。西壁では、南側壁の裏込部分よりさらに墓壙壁寄りにまで、壁体同様の石積みが行われているが、北側壁は、逆に西壁の壁体分だけ奥まで石積みが行われている。このため、いずれの隅も基底ではほぼ直角をなしている。しかし、北西隅では、壁体上部が両壁にまたがって石が置かれるため、全体としては隅円状を呈している。つまり、ここでは北・西・南の順で壁体が構築されているが、上部では北と西は一体である。

西壁の基底は南北の側壁より高く、墓壙の張り込み面上に造られる。また、西壁のラインより東は墓壙がさらに一段低く、これが南北壁の基底となっている。また、西壁はその前面に立石を持ち、内側から見ると立石が壁面をなす。これらの構造から、西壁は延長部を含めて、本来は墓壙壁にちかい意味があった可能性も考えられよう。壁体石積みとの関係から、立石は壁完成後に、差し入れられたものと考えられる。

東壁は、南北両壁より奥まで延びているが、北側の延長部は北壁の壁体裏込部分までであるのに対し、南へは西壁同様、墓壙壁近くまで延びる。また、北東隅の上部が北・東壁にまたがって石が置かれるため、隅円状となる。基底部では、東壁の構築後、南北壁が構築された状況を示すが、東と北は上部では一体化しているので、総体としては東・北・南という構築順序が考えられる。

北壁の観察では、石の積み方が全体としては、西から東方向に行われたような重なり方をした部分がある。さきの項に基底が造られて後、構築作業が部分的に並行して行われた可能性は否定できないが、いずれかの壁の構築作業を中断して、別の壁が構築されることはなかったものと思われる。それぞれの壁は用いられた礫の大きさに特徴があり、北が最も小さい。以上のことから、全体としては、東壁が最初に造られ、それと一体となって北壁が造られる。その後、西壁が造られ、最後に南壁が造られるという、逆時計回りの構築順序を復元できる。垂直方向には積み方が変化するようなことはなく、一気に積み上げられたものと考えられる。

壁体に用いられた石は場所により大小あることは先述した。一方、控え積みに用いられた石は、板石が少なく、礫塊を多く用いるが、それぞれの壁体に用いられたものとほぼ同じ大きさの石を用いている。そのため、控え積みの範囲はどの壁でも上面では、壁面から60cmほどの範囲であるが、石の数は、小形の石が用いられている北壁では石2～3枚分、他では石1枚分程度である。また、いずれの部分でも墓壙壁の形状に沿って基底部に近いほど控えの範囲が狭くなっている。石は乱雑に置かれ、風化礫を含む非常に軟らかな土を間にはさむ。



第45図　4号墳　石槨石積の延長部（左1：60，右1：30）

蓋石が1枚残っていた。長さ100cm、幅90cm、厚さ17cmほどで、ほぼ原位置を保つものと思われる。これは発掘開始時にすでに一部が地表に露呈していた。蓋石設置にともなう粘土その他の痕跡は確認できなかった。墳丘周囲にはこれに匹敵する大きさの石がいくつか見られるが、この石槨から搬出されたものと断言できるものはない。

棺の痕跡は確認できなかったが、床面はほぼ平坦である。

(3)　副葬品出土状態

平安時代以前の盗掘により、副葬品の大半が失われたものと考えられる。この古墳にともなうものとして、鉄剣とやりがんなを石槨内から出土した（第46図）。残された蓋石の下とその西側である。盗掘時に取り残され、ほぼ原位置を保つものであろう。いずれも石槨主軸方向に平行し、刃先を西に向けている。出土位置は床面に近いが、床面との間にわずかの間層を挟んでいた。石槨埋土が撹乱されているためか、遺物上下の土層に差は認められなかった。ほかに、後日の水洗で床面近くの埋土から白玉8・ガラス小玉1を検出した。墳丘から検出された石製紡錘車も、本来は石槨内にあったものであろう。

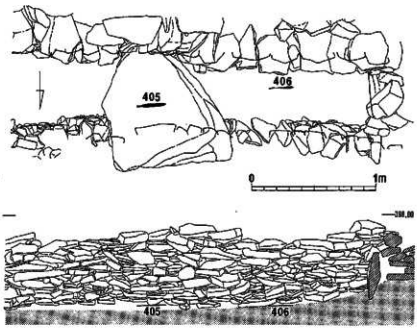
3号墳や1号墳の例では、石槨内の立石は被葬者の足元を示すように考えられ、本例も同様とすれば、

埋葬頭位は東となろう。これは剣の切先方向が足元を向くことになる。

4　出土遺物

(1)　土器（第47図）

土器はすべて墓壙周囲の墳丘上から出土した土師器である。いずれも胎土は細砂を含み、焼成は良好、色調は赤褐色ないし黄褐色で、全体によく似ている。図示したもののほか、高坏脚部の小破片が2～3個体分ある。



第46図　4号墳　石槨の副葬品出土位置（1：30）

有段口縁壺（401）

全体の7割ほどが失われ復元実測であるが、丸底である。内面の頸部以下は指頭痕を残すナデ、他は非常にていねいなミガキで方向はわからない。有段部は明瞭な稜をなさない。調部中位に焼成前に1孔を穿つ。底部ちかくの外面に黒斑がある。

直口縁壺（402）

口縁部を欠くが、甕形土器である。表面が剥落しており調整は明確でないが、一部に方向のわからないていねいなミガキが認められる。外面には指頭様の凹凸が見られるので、ミガキは器面全体を平滑にするようなものではなかったと思われる。内面はナデ、一部に明瞭な巻上痕を残す。

高坏（403・404）

403は口縁部がわずかに外反し坏部が浅い。坏底部と口縁部との間はわずかに段を成す。脚部は稜を成して明瞭に屈曲した後、外反する。脚部外面は縦方向のミガキ。他は明瞭でないが、縦・横を併用するようである。脚内面上部には絞り痕、それより下部は巻上痕を明瞭に残す。坏底を欠くが、絞られた脚部上面の状況は404と同様であり、成形方法も同様であろう。

404は口縁部がわずかに外反せず坏部が深い。坏底部と口縁部との間は凹線状に段を成し、成形上の接合部でもある。脚部は屈曲した後、外反する。外面は風化して方向はわからないが、全面ミガキ。坏部内面・脚端部は横方向に磨く。脚内面上部には絞り痕、それより下部は巻上痕を明瞭に残す。坏部と脚部の接合はホゾではなく、絞られた脚の上から粘土板を押しつけたようになっている。

(2)　鉄器（第48図）

剣・鉾が床面原位置、他はこの古墳にともなうものかどうかはっきりしない。

剣（405）

全長23.8cm、剣身長19.6cm。剣身は幅1.8～2.5cm、厚3～4mm、両丸造である。茎は長4.1cm、幅は関部で1.8cmあるが茎尻へ向かい幅をせばめ、茎尻では1cmとなる。茎尻は斜めで平坦であると思われたが、保存処理時に目釘穴の一部と思われる部分を見つけた。欠損しているとすれば、出土状況や錆の状態からは、副葬時以前のことと考えられる。関部はほぼ直角に片側4mm、もう一方は2mmほどで明瞭である。木質などの付着は観察されない。剣身の平面形がやや蛇行するようにも見えるが、本来の形状かどうかわからない。

鉾（406）

全長19.8cm、幅10mm、厚2.5mm。刃部は長2cm、鎬は成さず、片丸となる。刃部から茎への湾曲は本来の形状と考えられる。茎部は断面長方形で、末端は鉤状となる。木質などは付着しない。出土時は良く形状を残していたが、保存処理までにかなり劣化して一部を失っている。

刀子（407）

石棺内埋土上層から出土し、平安時代墓と同一層位である。本古墳にともなわず、平安時代のものである可能性もある。刃部を欠損し、現存長8.5cm、関部幅2.3cm、厚1.5mm。茎部は長6cm、幅は関部で1.2cm。刃部はかなり研ぎ込まれている。

他

408は鉾の、409は刀子または鉄鏃の可能性がある。しかし、いずれも墳丘上の表採品であり、鉄質・錆の状態が石棺内出土のものとやや異なり、時代が降るようにも見える。

401

402

403

404

0　10cm

第47図　4号墳　墳丘出土土器（1：4）

(3)　玉類・石製品

玉類は石棺内埋土の水洗で検出した。（第49図）

白玉（411～416）

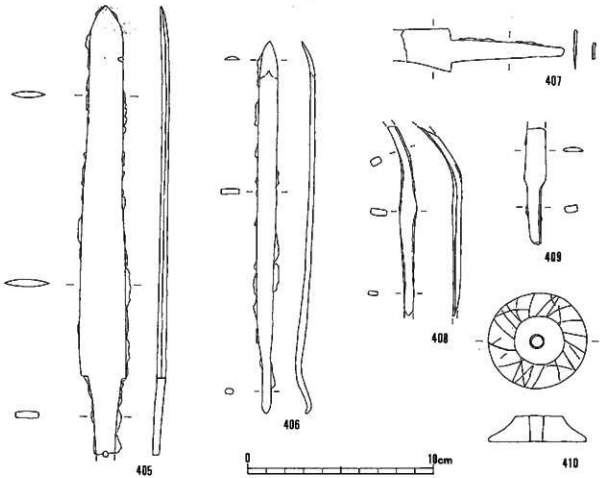
図示した6個の他に2個分の破片がある。すべて滑石製で、灰白色を呈する。直径がほぼ同じで厚みのあるものが多く、1号墳のものと比べ色調および形態差が少ない。穿孔はあるが、あまり明瞭ではなく、この点も1号墳例とは異なる。

ガラス小玉（417）

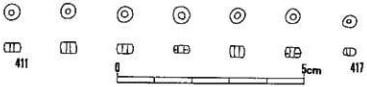
1個のみ。小形で、色はコバルトブルーである。この色調のガラス玉は大星山古墳群では唯一である。

紡錘車（410）

墳丘上からの出土品である（第48図）。滑石製。乱雑な鋸歯文状の細い線刻がある。孔は片面穿孔。線刻面は良く磨かれているが、裏面は粗雑な仕上げである。



第48図　4号墳　出土鉄器・石製紡錘車（1：2）
405・406：石槨床　407：石槨埋土上層　408・409：墳丘表採　410：墳丘

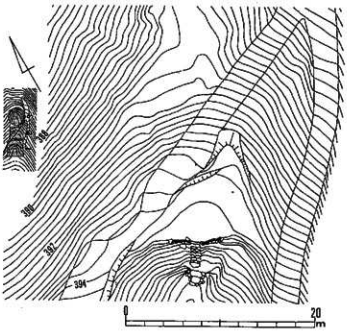


第49図　4号墳　石槨内出土玉類（1：1）417：ガラス　他：滑石

第4節　大星山2号墳の調査

1　発掘の経過

1号墳の墳丘に造られた江戸時代の石祠の前面は、広い平坦面となっていた（第50図）。地元の下和田の人の話では、そこには石祠に付属する拝殿がかつて存在したという。また、伝承には伝えられておらず、調査過程であきらかになったことであるが、より古くは墓地として利用されていた。この中・近世の地形改変により、1・2号墳の墳丘の原形は大きく損なわれている。



第50図　2号墳　墳丘（原地形）（1：400）

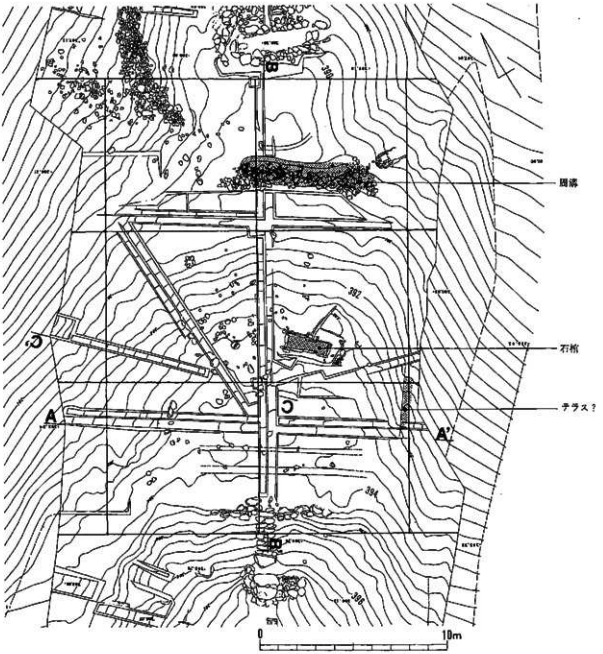
当初、この平坦部と1号墳は一体として前方後円墳または前方後方墳であり、前者が前方部をなすようにも見えた。そのため、調査の重点は、中・近世の地形改変状況を把握し、隣接の1・3号墳の墳端を確認することであり、それらと異なる古墳の存在を調査当初から明確に予期していたわけではない。しかし、平坦部の中央には山道があって、そこを調査直前に木材搬出の重機が通行したことによって平坦面の北側が一部削られていた。そのえぐられた部分に石棺状の石組みの一部が露呈していた。また、この削平により、表土がほとんど存在しなかったため、周辺には骨粉の散布も認められた。

これらは祠と関連するものとも思われたが、宋銭・中世陶器が出土したことにより、江戸時代以前の中世火葬墓と考えた。そのため、さきの石組みは1号墳前方部上の埋葬施設である可能性とともに、これらの墓地にかかわる施設の可能性も考えられた。拝殿などの建物跡の痕跡はあきらかにはならなかったが、平坦面の周囲には地表に露出した石垣などが残存し、拝殿にかかわるものと判断した。

火葬墓の調査とあわせ、トレンチ調査によって、3号墳寄りの尾根筋下方に角礫が帯状に集中する部分を認めた。礫に混じって底部穿孔の壺形土器片が相当量出土し、礫の分布する範囲は周溝状を呈した。また、祠前面の整地面の下層に周溝を確認し、溝埋土中から高坏などの土器を検出した。これらの埋土の状況や出土土器を1・3号墳と比較すると、3号墳寄り周溝は1・3号墳とは異なり、祠前面の周溝は1号墳に共通すると考えられた。また、角礫集中部分は、周溝中に上方から葺石が崩落したように観察され、3号墳にかかわるものではないと判断した。これらのことから角礫の集中と底部穿孔壺に示される2号墳が1号墳と3号墳の間に存在し、石棺状の石組みがその主体部である可能性が考えられるに至った。

石組みの位置は地表に近く、付近には板石が多く散布していた。石組の一部は重機によって削られながら奇跡的に残存する状況であった。また、上層に火葬墓が造られたことによる破壊も相当ではないかと思われた。そのため副葬品などの残片が散布することも予想された。

この石組みが埋葬施設であるとしても、現状の地形やさきの周溝との位置関係から見て、その位置は墳丘の中心とは思われなかった。そのため、他にも埋葬施設が存在する可能性を考えて、その検出につとめ



第51図　2号墳　トレンチ・石槨・岩盤の位置（1：200）

たが、ほかに同時期の遺構は存在しなかった。石組みは石槨であることがあきらかとなり、屋根形の天井部の一部も原形で残存した。副葬品も埋葬時の状況をそのまま残すものと判断された。

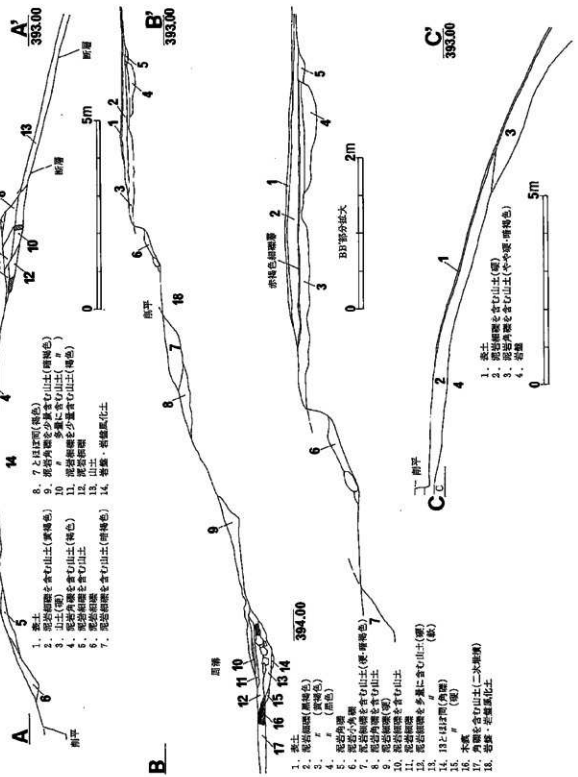
墳丘部は何本かのトレンチによって裾の確認を試みたが、後世の地形改変の影響が大きく、明確に確認できた部分は少ない。裾部が確認できないので、埋葬施設の墳丘上の位置も明確ではない。

さきの周溝を除けば、埋葬施設周辺の撹乱土中にわずかな土師器片が存在した以外、墳丘および盛土中から遺物は出土しなかった。

2　墳　丘

(1)　墳丘の築成

中世以降の地形改変の影響により、とくに墳頂部および北西側は原形を大きく損なっているものと考えられる。本来の墳丘面が確認できた部分はないが、裾部が3号墳側の周溝で確認され、また、その可能性



第52図　2号墳　墳丘断面 (1：100, 1：50)

のある部分が南東側に存在する（第51図）。

第52図の土層を分類しておく。

A　1層　表土

2～4層　墳丘盛土

5・6層　墳丘盛土あるいは地山

7～10層　中世以降の盛土

11・12層　墳丘盛土または中世以降の盛土

13層　盛土および地山の二次的堆積

B　1層　表土

2・3層　墳丘盛土

4層　1号墳周溝埋土

5・7・8層　墳丘盛土あるいは地山

6・9層　盛土および地山の二次的堆積

10～14層　周溝埋土

15層　3号墳周溝埋土

16・17層　3号墳盛土および攪乱

C　1層　表土

2層　墳丘盛土または地山

3・4層　地山

墳丘トレンチの所見では、この古墳の盛土と断定できる部分は少なく、ほとんどが地山あるいは中世以降の整地面である。土層図で盛土とした部分も、地山の表層近くの土層とよく似ており、盛土ではない可能性もある。本来の墳丘の高さは不明であるが、運搬施設のレベルとの位置関係からすれば、現状の最高所とそれほど変わらないのではないかと思われる。ただ、盛土下の岩盤面の状況が人為的に整形されたように見受けられる部分もあり、地山に土を補っただけではなく、自然地形の整形を行って後に盛土が行われた可能性も指摘できる。構築時に1号墳が存在しており、後述の周溝との位置関係から、尾根筋方向で約17mの方墳と考えられる。

(2)　墳丘施設

周溝は北東裾にあり、墳丘の原形を残す唯一の遺構と考えられる（第53図）。幅約2m、長さ6m、深さ0.4mで、底は鍋底状となる。周溝両端の状況では、他辺の周溝にはつながらず、3号墳側だけの部分的なもののようである。ほかの部分は本来の地形が残されていないので、同様の周溝が存在したかどうか不明である。周溝中には上方の墳丘面から崩落したと思われる人頭大あるいはそれ以上の大きさの礫が堆積していた。礫は比較的平らなものが多い。また、一部周溝外にもひろがる。礫は周溝底には接しておらず、周溝中に土砂がある程度堆積して後に、一気に崩れ落ちた状況を示している。この礫に混じって底部穿孔壺の破片がかなり出土した。

南東斜面の一部は、調査当初から岩盤が露出していた。その岩盤がテラス状となる部分を、石槍から4mほど南方の斜面で検出した。幅0.4m、延長5mほどの犬走り状の平坦面で、尾根筋の地形に沿って傾斜し、上下両端では1mちかい比高差がある。この延長方向は、北東周溝とほぼ直交し、この古墳のテラス面あるいは裾の可能性もある。遺物はまったく検出されなかった。ただ、このテラスの方向は周辺の地山面上に見られる断層面の方向とも一致しており、高低差が大きいことから、岩盤の自然地形である可能

性も大きい。

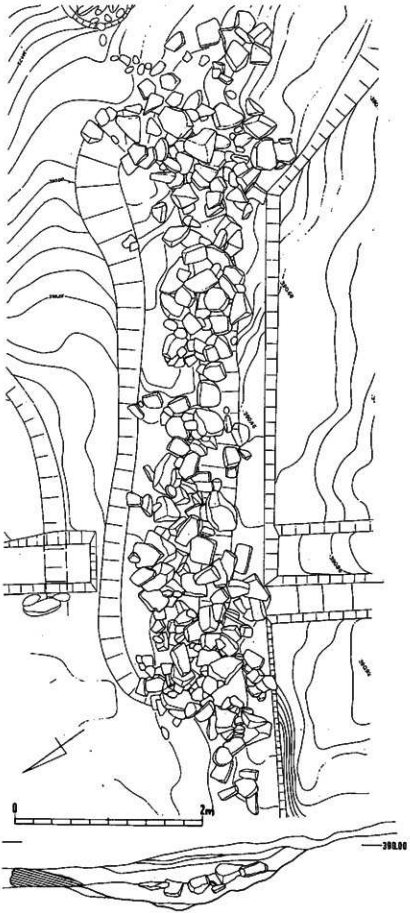
葺石は原形で残っているわけではないが、少なくとも北東側には存在したことが、周溝の礫の状況から推測できる。3号墳のような葺石であったとすると、残された礫の量から考えて、幅1～2m、延長9m程度で3号墳同様、墳丘の一部を帯状に葺いたものであろうか。墳丘のほかの部分が原形をとどめないとはいえ、周囲には同様の礫が少ないことも、その傍証となろう。

(3) 遺物の出土状態

周溝中の土師器壺は、礫に混じって破片が散乱しており、原位置をうかがわせるような出土状態ではなかった。礫が葺石の崩落であるとすれば、それと共に崩落した状況である。土器は大形の破片が少なく、同一個体の破片がまとまって出土するわけでもないが、底部は器形のうかがえるものが多い。葺石の上部など墳頂外郭の表面に置かれていたものが、葺石の崩落とともに転落し、破片となったものではなかろうか。

これ以外に墳丘上で出土した遺物として、石棺周辺の土師器高坏などの破片があるが、攪乱土中であり、細片が多く断片的資料である。

盛土中からは遺物が出土しなかった。



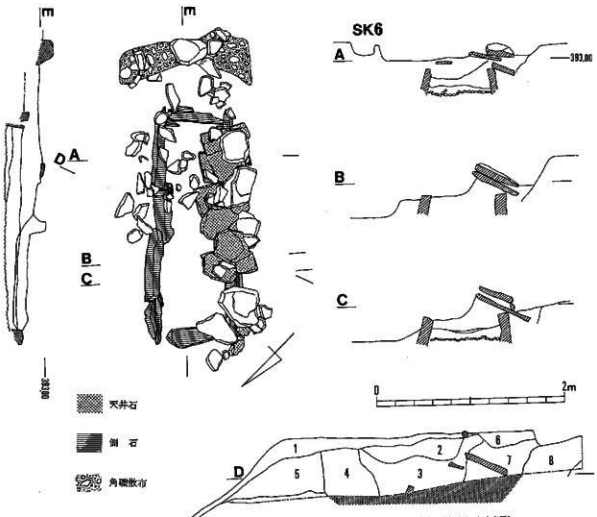
第53図　2号墳　周溝中の崩落葺石（1：40）（土層は第52図参照）

3　石　棺

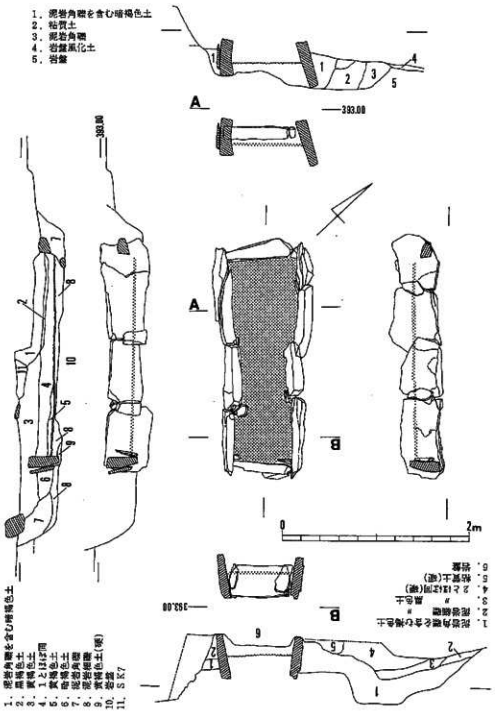
(1) 石　棺

一部が調査直前に破壊され、地表に露出した部分もあった。また、直上に中世火葬墓があり、中世以降の整地によって破壊された部分もある。火葬墓の調査終了後に、付近に散乱する板石の露出に努めたところ、人為的に積み重ねられた状況を呈するとともに、石棺の側石の一部があらわれ、その形状をほぼ把握できた（第54図）。

石棺上の板石は、ほぼ半分が中世以降に破壊され残存していなかったが、西半はよく残っていた。西側の標高が高く、埋土がより深かったためもあろう。残存部では、板石を棺側石に斜めに立てかけ、根元を粘質土で固く叩き締めて押さえ、その上に持ち送り状に板石を重ねた状況が観察された。この板石の最下部（棺側石上端）の根固め土は非常に緻密で固く、上方の石も規則的に並ぶので、ほぼ原形を保っていると判断できる。つまり、板石を斜めに積み重ねることによって、天井部の被覆をしたものである。しかし、



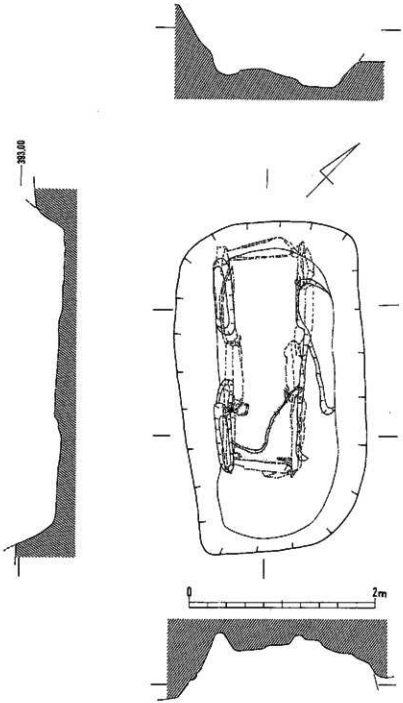
第54図　2号墳　石棺上面の被覆（1：40）



第55図　2号墳　石棺（1：40）

用いられた石は単独で屋根形に組むにはやや小さめである。何枚かの石で、隙間をふさぎながら徐々にせり出させるような構造であったと思われる。西半は残っていないが、残存部と同様であったとすれば、いわゆる合掌形の天井部をなすものと考える。

石棺（第55図）は内のりで、幅が北端で80cm、中央で60cm、南端で65cm、主軸長215cm、床面から側石上端までの高さ35～25cm。大形の平石を組み合わせ立てることによって棺をなしている。西側は3枚、東側は4枚、南は1枚を用い、そのつなぎ目には小形の板石を内側から当てて隙間をふさいでいる。隙間をふさぐ作業は床面の構築と並行して行われ、側石の外側にはひとつもないことから、その時点で棺外はす



第56図　2号墳　石棺の掘り方（1：40）

でに埋め戻されていたと考えられる。当然、この作業は天井部架構以前でなければできない。東西両壁の北端の石は、直前に重機が通行したことにより割れたもので、本来1枚であったものと考えられる。また、側石はいずれもやや内傾しているが、本来は垂直であったものが、土圧により傾いたものであろう。

東・南・西の側石は、石の大きさに合わせて床面より下まで埋め込まれて、上端がほぼ水平となるように立てられている。これに対して、北側は幅20cm、厚さ12cm、長さ70cmの角柱状の石を埋め込まずに横置きしており、その上端はほかの側石より10cmほど低い。この角柱の東端と東側石の間に置かれた石は、角柱の西端を割り取ったものであり、接合して一本の自然石に復元できる。先述のような合掌形の被覆が行われたとすれば、この角柱は天井部構築後に置くこともできたであろう。ただ、土層の観察では、床面の構築以前に置かれているようにも見える。そうであれば、天井架構以前に置かれていたことになろう。しかし、内側から隙間をふさぐ石がほかの三壁にあって北壁にないことは、天井の有無にかかわらず、床面完成後に置かれた可能性をつよく示す。いずれにしても、北壁は四壁のうちで最後に置かれたものであり、その構造は他の三壁と異なり、横穴式石室の玄門部を思わせるような構造である。

床面は、径1～3cmの円礫を礫1個分ほどの厚さに敷いた礫床である。礫床面は多少の凹凸はあるが、ほとんど水平である。円礫は1号墳第1石槨に用いられたものと同様で、周辺の河床で採取できるが、1号墳と異なり大きさが比較的そろっている。

石棺はその形に合わせた長さ3.5m、幅2mの掘り方を持つ。上層の撹乱が著しく、墳丘盛土と掘り方との関係ははっきりしない点が多い（第56図）。トレンチの所見では、旧地表に掘り込み面が見られ、そ

の上層の盛土は掘り方の内外が一体となっている。つまり、盛土以前に旧地表に掘り込まれ、棺構築後に、盛土工程と一体として埋め戻されたように見られる。掘り方の底は岩盤を削り込んでおり、側石の大きさに合わせて深さを調節し、側石上端が水平になるようにしている。棺北側の他辺との構造の違いに対応するような差異は、掘り方の壁には見られない。

掘り方南端の埋土中に泥岩角礫のみが集中する部分があり、棺検出時には棺南壁から50cmほどの位置に帯状に見出され、棺周囲のなんらかの区画施設とも見られた。

掘り方に石を立てて棺の外形を構築した後の内部は、凹凸のある岩盤が台状になる。そこに地山土を入れ平らにした後に、円礫を薄く敷いて礫床としている。

(2) 副葬品出土状態

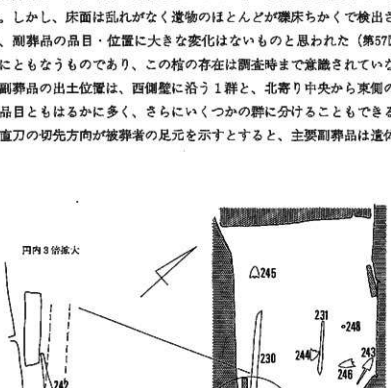
天井部分のほぼ半分が遺存しなかったことから、盗掘を受けている可能性も考えて棺内埋土を掘り下げた。しかし、床面は乱れがなく遺物のほとんどが礫床ちかくで検出されたため、棺内は埋葬時の状態を保ち、副葬品の品目・位置に大きな変化はないものと思われた（第57図）。上層の破壊は中世以後の遺構構築にともなうものであり、この棺の存在は調査時まで意識されていなかったようである。

副葬品の出土位置は、西側壁に沿う1群と、北寄り中央から東側の1群に大きく分けられる。前者が数・品目ともはるかに多く、さらにいくつかの群に分けることもできるが、詳細は後述する。

直刀の切先方向が被葬者の足元を示すとすると、主要副葬品は遺体左側に置かれたことになる。また、棺幅は足元の方が広いことになるが、先述の北壁の構造と頭位の方向は、横穴式石室に見られる入口部と頭位の関係と矛盾しない。この想定では、頭位はS45°Eとなるが、反対向きに考えることも可能である。いずれにしても、この付近の地形と棺の大きさからして、棺の方向が旧地形に制約される要素はほとんどないので、この棺の向きには頭位方向を優先した結果が示されていると考えられる。

遺物は礫床の円礫の直上あるいは礫中にあり、床との間に間層は見られない。ほとんどが床上に直接置かれたと考えられる。唯一、248が床より10cmほど上層から出土しているが、棺内埋土の一部にも撹乱が及んでいるので、その影響かもしれない。

棺内に土器は副葬されていないが、天井石より上層および棺内埋土中から高坏を主とする土師器片



第57図　2号墳　石棺の副葬品出土位置（1：20）

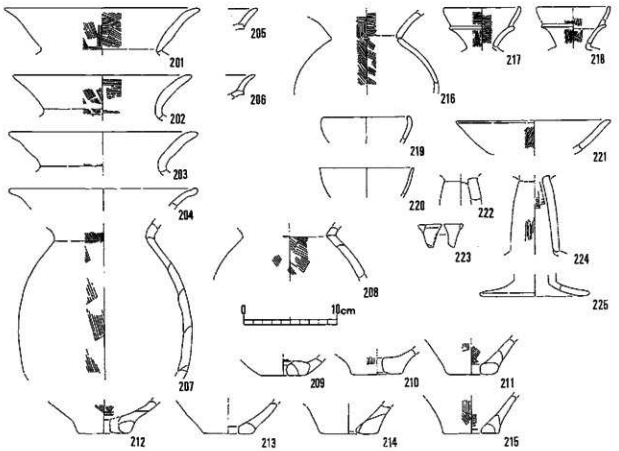
を出土した。撹乱土中であり、小片が多く、1個体分がまとまるようなことはない。土器は周辺にほとんど散布せず、棺の位置に限られることから、これらの土師器は、棺上の埋土中に存在していた可能性がある。もし埋土中でなく棺上の墳丘表面にあったとすれば、中世以降の撹乱により広範囲に散布したはずと思われる。

4　出土遺物

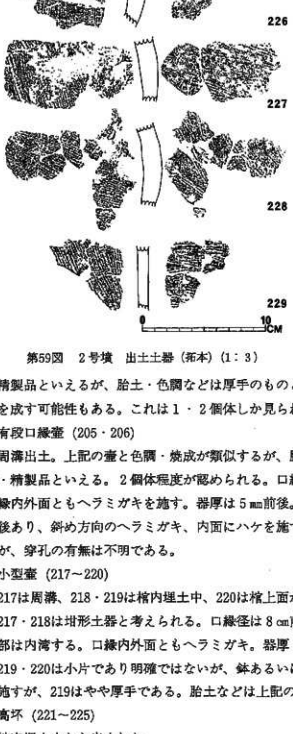
(1)　土器（第58・59図）

周溝中の崩落した葺石の間から出土した土器は、土師器壺がほとんどである。器形の全容を知り得るものはないが、口縁部・底部の数からおそらく壺10個体分程度と思われる。多くは内外面をハケで仕上げ、焼成前の底部穿孔を施すことからも供献用の仮器である。外面ハケ、内面ナデの埴輪様の仕上げを施した器壁の厚いものも多く、なかにはほとんど埴輪同様に見えるものがある。ただ、透孔や凸帯はまったく見られない。これらよりやや小形で、器壁が薄く調整もややていねいなものが少数含まれる。一方、有段口縁壺など精製土器の一群も数個体分見られる。

棺内埋土中から出土した土師器は、図示したもの以外に高坏3個体以下、壺2個体以上の小片などがある。いずれも器形をうかがえるほどにはまとまらないが、高坏は図示したものに、壺は周溝出土のものに胎土・焼成・調整方法などがよく似ている。



第58図　2号墳　出土土器（1：4）



第59図　2号墳　出土土器（拓本）（1：3）

壺（201～216、226～229）

すべて周溝出土である。

口縁径は20cm弱、端部が外反する。頸部は鋭く屈曲するが、明瞭な稜は成さない。推定で、器高は25cm前後、胴部最大径20cm弱。やや長めの球形胴である。底部の孔は切って穿孔するのではなく、粘土紐を輪状にして孔を作った後に胴部を積み上げる。底部の粘土紐の成形法に個体差が見られる。底径は5～6cm、孔径1～2cm。器厚は5mm前後（216）、8～10mm程度（207・208）、15mm以上のもの（226～228）とあるが、部分によって器厚の変化が著しい。後二者は、器壁の厚薄によらず土器の大きさはほぼ一定と思われる。口縁上半部は横ナデ、以下の外面はすべて斜めないし縦方向のハケ、内面は指頭による凹凸を残すナデであるが、一部に斜めハケを施すものがある。器厚の厚いものは2～3mmの比較的大きな砂粒を含むのに対し、薄いものはより細かな砂粒である。色調はすべて赤褐色。一部の外面には黒斑が見られる。

216はやや薄手で、外面をみがき、他とは異なり精製品といえるが、胎土・色調などは厚手のものと異ならない。底部・口縁部を欠くが無穿孔・有段口縁を成す可能性もある。これは1・2個体しか見られない。

有段口縁壺（205・206）

周溝出土。上記の壺と色調・焼成が類似するが、胎土にはごく細かな砂粒しか含まず、調整の点でも小形・精製品といえる。2個体程度が認められる。口縁径は12～15cm、二重口縁技法により明瞭な段を成す。口縁内外面ともヘラミガキを施す。器厚は5mm前後。接合しないが同一個体の可能性のある胴部は径15cm前後あり、斜め方向のヘラミガキ、内面にハケを施す。平底部分が認められないので、丸底の可能性があるが、穿孔の有無は不明である。

小型壺（217～220）

217は周溝、218・219は棺内埋土中、220は棺上面から出土した。小形精製品である。

217・218は埴形土器と考えられる。口縁径は8cm前後、二重口縁技法により凸帯状の明瞭な段を成し、端部は内湾する。口縁内外面ともヘラミガキ。器厚4mm前後。口縁部以外は不明。

219・220は小片であり明確ではないが、鉢あるいは小型丸底土器の可能性がある。両面ともヘラミガキを施すが、219はやや厚手である。胎土などは上記の壺に類似する。

高坏（221～225）

棺内埋土中から出土した。

口縁部・脚柱部・脚端部・接合ホゾがあるがそれぞれ接合はしない。数個体分であろうが、いずれも色調は赤褐色・胎土は2mm程度の砂粒を含み、焼成は良好、器厚は6～9mmで、全体としてよく似ている。口縁径は16cm強、内外面ともヘラミガキを施し、外面は斜め方向である。立ち上がりはゆるく端部がわずかに外反する。浅い坏部である。脚部は外面縦ミガキ、内面上部はヘラケズリ痕を残すが、下部は指頭に

よる凹凸のあるナデである。脚端部外面は放射状のミガキ、内面はナデ。ホゾと脚部の状況から、ほぼ完成した脚柱部へ穴あきの坏部を載せ、上からほぞを差して坏底部を成形したものと思われる。ホゾ(223)は1号墳例とは異なり円錐状で、先端は押えられた痕跡がなく、上面は坏底部を成した可能性がある。

(2)　鉄器（第60・61図）

すべて石棺内からほぼ原位置で出土した。

直刀（230）

全長83.7cm、刀身長69.4cm。刀身は幅2.9～3.0cm、厚さは峯部で5mm、平造で断面形は二等辺三角形を成す。茎は長14.3cm、幅は関部で2.3cm、茎尻で1.6cmほどで、茎尻より1.8cmと8cmのところに径2.5mmの目釘穴2孔を持つ。関部は直角に6mmほどである。刀身・茎とも木質が付着するが、茎では関から1.8cm以下の部分のみに見られ、柄が関部には達せず、なんらかの刀装のために空いていたことを示している。刀身の木質は鞘であろう。写真では内反となっているが、実測時には反りは観察されなかった。

鏃（231）

全長28cm、幅16～10mm、厚5～2mm。刃部は長5.5cm、鏃を持ち、裏透きの断面三日月形の形状である。側面観での、刃部から茎へのわずかなS字状の湾曲は本来の形状と考えられる。茎部には木質が付着するが、先端から10cmより先は明瞭ではない。茎の断面形は長方形であり、末端から10cmほどは薄くなり、茎尻では厚2mmほどである。

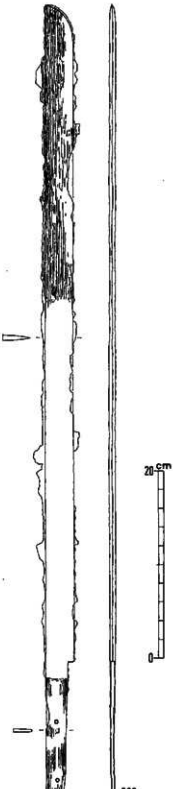
鑿（232）

全長9.9cm、幅・厚3～5mm。刃部は幅3mm、片刃状である。断面形は刃部近くは長方形、下部は方形であるが、いずれも円みを持っている。下部に木質が付着するが、下端から2cmほどの範囲のみに見られる。重量8.96g。

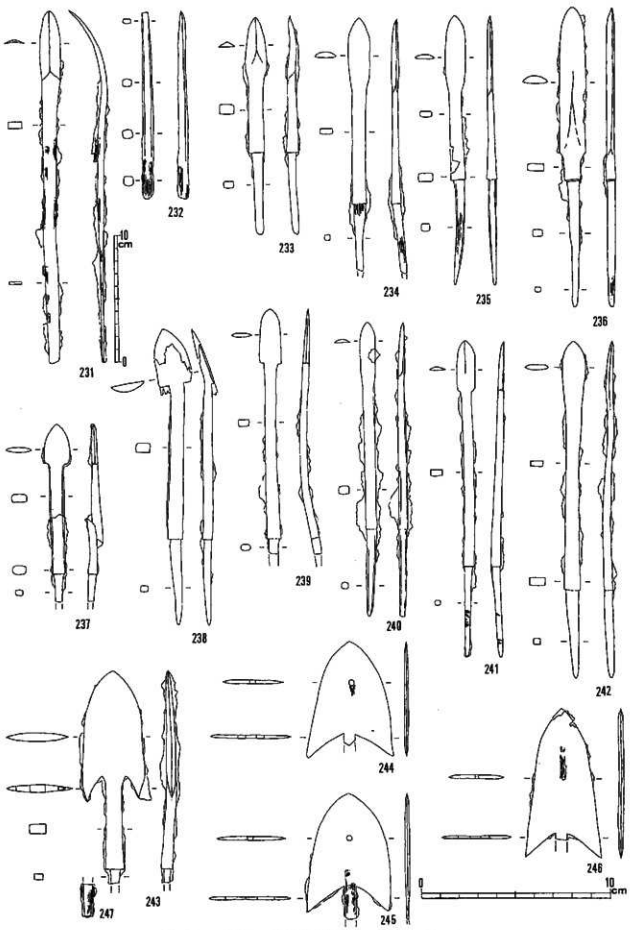
鉄鏃（233～247）

14点あり、うち10点が長頸鏃、3点が無頸、柳葉形の短頸が1点と形態は多様である。他にいずれに接合するか不明な茎1点がある。

長頸鏃は細分形式としては多様であるが、頸部の断面形は厚みのある長方形で、刃部は片丸造が多い。全長16cm、鏃身長3cm、幅1.2cm、茎長4.5cm程度のものが多く、茎は断面方形で円みを持つものもあり、木質が付着するものがいくつかある。233の刃部の片鎬・湾曲はやりがんなによく似ているが、側面観での湾曲は本来の形状ではないかもしれない。237は折れて銹着したように見え、全長が図よりやや長い可能性がある。243は全長11.4cm、鏃身長7.0cm、幅3.2cm、両丸造で最も重い。239・



第60図　2号墳　石棺内出土直刀（1：4）



第61図　2号墳　石棺内出土鉄器（1：2）　231（1：3）

242は平造。

無頸の3点は薄く短い茎を持ち、鎌身に1孔があって、茎から孔にかけて木質が付着している。茎はすべて先端が尖われ全長はわからない。

柳葉形で短い頸部を持つ236は全長15.8cm、鎌身長7.6cm、茎長6.6cm、片丸造。

重量は保存処理後で次のようになる。233－14.52g、234－16.20g、235－10.58g、236－10.87g、237－9.06g、238－16.46g、239－13.10g、240－9.05g、241－9.51g、242－12.45g、243－17.10g、244－10.56g、245－11.12g、246－9.47g。

(3)　飾金具・玉類（第62図）

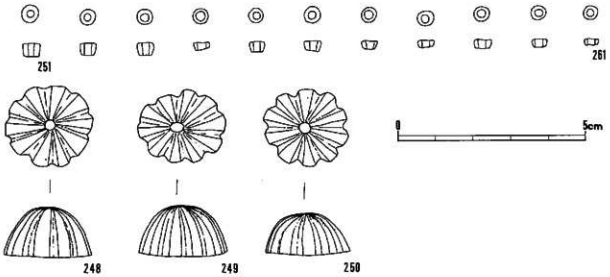
飾金具（248～250）

3点ある。金銅張りである。直径2.2cm前後、高さ1.3cm前後の半球形で、中央に小孔があり、10本の稜部と溝部を打ち出す。ゆがみは土圧によるものと思われ、ほぼ同形同大であるが、248は厚さ1mm前後で4.00g、249・250は0.5～1mmと薄く、それぞれ1.83g・2.47gとかなり差がある。249・250は近接して出土しており、組み合うものかもしれない。先述したが、248は埋葬施設内の遺物としては唯一、床面より上層で出土しており、撹乱土中と考えられた。そのため、これとセットとなるものが失われた可能性もある。

この種の金銅あるいは銀製品は、玉・馬具・飾金具などに見られるが、本例は他に装身具・馬具類を伴わない。ふたつは近接して出土したが、合わせて玉としたという状況でもなく、端部にも接合されていた痕跡は認められない。また、小孔に挿入されたと思われる部品もない。

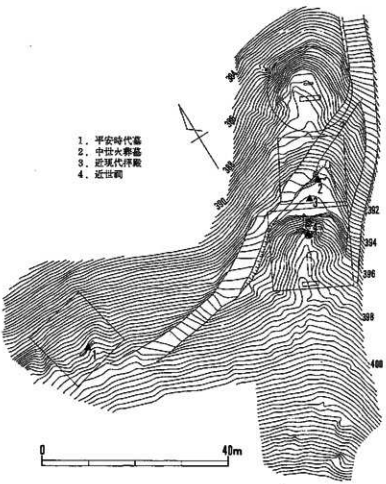
白玉（251～261）

図示した11個がすべてである。滑石製で、灰白色の明るい色調である。材質はかなり軟質で風化が進んだものが多く、光沢を失っている。孔の両端の摩耗が特に著しく、糸ずれ状に見えるものもある。側面・縁に稜は観察されず、全体に丸みを帯び、色・大きさは比較的均質である。



第62図　2号墳　石棺内出土白玉・金銅製品（1：1）

第５節　古墳時代以外の遺構と遺物



第63図　古代～近世遺構の位置（1：800）

調査区域内では、古墳時代以外の遺構・遺物が存在したが、主なものは２号墳の周辺に集中する。この地点は地形的に最も傾斜が緩く、また眺望が良く、旧来の山道が通過していた（第63図）。

１　石祠と石仏

(1)　石祠（第64・65・66図）

１号墳の尾根筋下方に墳丘を利用して石祠が造られ、その前面の２号墳の墳丘上には拝殿があったといい、平坦面をなしている。拝殿敷地の周囲には土留めの石垣が積まれていたようで、その一部が残る。また、拝殿跡地から祠へ向かって石段が積まれている。これらの石材のほとんどは１号墳、とくに第１石郭から採られたものと考えられる。

この石祠の石積みおよび石仏は土採り跡地に復元するため、地元である下和田区によって解体移転された。現在は同地に復元されている。復元の資料を得るため、解体前に現状を記録し、あわせて内部床面を精査した。

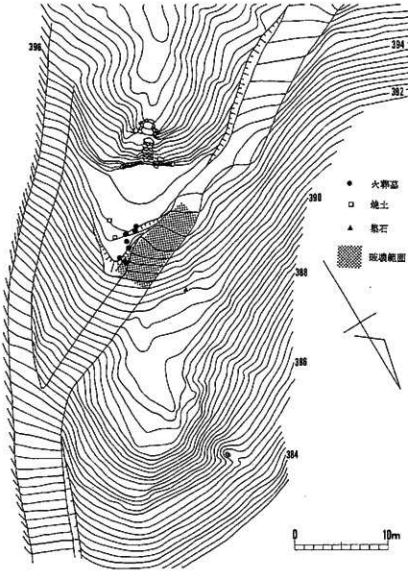
祠は板石積みの横穴をなす。床面で奥行き100cm、幅90cm、高さ110cm程である。天井には大形の石を置いているが地表に露出していた。石積みには裏込などの構造はなく、壁体を天井石で押えているだけである。内部奥に木造の祠があり、その扉を開けると中の石室床面に石仏２体が置かれていた。台座と像の下半は土砂に埋もれ、扉の奥に石仏の上半身のみ見える状態であった。木造祠はかなり腐朽していたが、実際の建造物の様式をよく表現した精巧なものである（ＰＬ．33）。

祠内部の堰土中および周辺から古銭が出土している。

(2)　遺物（第69図）

石仏（505・507）

像高67.5cm、台座高16cm。向かって左側に置かれていた。背面左に除刻『安永四未三月十三日』（1775年）。台座は４弁の蓮華紋で、像底と同形の浅いくぼみが彫り込まれ、像と密着するようになっている。像・台座とも造作は鋭く彫り込まれている。



第64図　石祠・火葬墓の位置（1：400）

石仏（506・508）

頭部欠、残存像高55cm、台座高15cm。左側面に陰刻『元禄三年　五月十三日』（1690年）。台座は5弁の蓮華紋で、稚拙の感がある。その中央には径10cm弱の小孔が穿たれるが、像底には対応する突起はない。さきの像と比べ、彫り込みは鋭くない。また、衣文の表現が異なる。

古銭

寛永通宝10、種別不明鉄銭2。現行硬貨として、百円1・十円1・五円2・一円5（昭和37年～50年）。ほとんどが石仏を埋めていた土砂中から出土した。

2　中世火葬墓

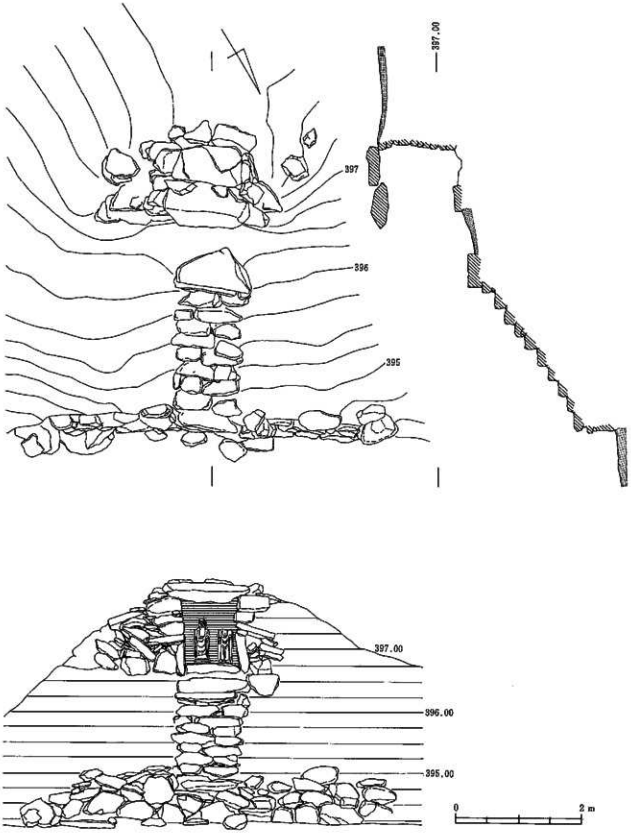
(1)　遺構（第64・67図）

前述の拝殿跡地周辺に火葬墓・その他が検出された。火葬墓は2号墳石棺上およびその周辺に集中し、直径20cm、深さ10cm前後のピット中に火葬骨を埋納するものである。木櫃あるいは布などに納められ埋納されたものであろうが、藏骨具の痕跡はなかった。ピットの掘り込みを残すもの4基、ピット底面のみ検出されたもの3基、同規模の焼土面2基、集石1基が遺構群の構成である。火葬墓であるが、供養塔の類は周辺にもまったく存在しない。骨は小片が多いが、なかには成人の下顎も認められた。

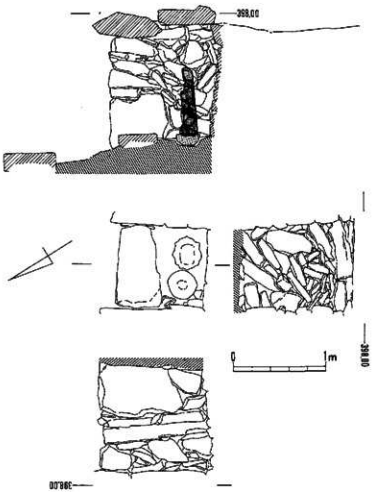
火葬墓の位置する2号墳上の石祠寄りは、拝殿造成時に削平され平坦面が造成されたものと思われる。そのためか、ピットの一部は最下部の骨片のみが観察され、斜面下方に存在するものは掘り込みが比較的良く残されていた。保存の良好な1基はピットを覆うように薄石状の平石が検出された。また、平坦面の北西側が重機によって破壊されているが、この部分にも骨片が散布していた。やや離れて認められた集石も層位的にこれらの火葬墓群に含めて考えられることから、拝殿造成時以前には2号墳上の全面に火葬墓群が広がっていた可能性がある。

焼土面は小さく、通常の火葬用の土坑とは異なる。その用途は明確でなく、この場所で火葬が行われたかどうかはわからない。

遺構にともなう遺物は火葬骨以外にないが、検出中に「祥符元宝」1点・かわらけ数点（509・510）を出土した。遺構の時期について明確な根拠はないが、これらの遺物が同時期のものである可能性がつよい。



第65図　石祠・石殷・石垣（1：60）



第66図　石祠（1：40）

ここが墓地であったことに結びついて石祠が作られたものであるとしても、造成時に墓地が破壊されていることなど、祠と墓地は機能的に一体のものではなかったと考えられる。出土遺物から見ても、この墓地の造営終了は、少なくとも石仏の紀年である元禄年間よりさかのぼるものと考えるのが妥当であろう。

(2)　遺物（第69図）

祥符元宝

かわらけ（509・510）

口径、10.0、11.4cm。底部に糸切り痕を残す。胎土は精選され、砂粒をほとんど含まない。明るい灰褐色で、焼成は軟質である。他に縦片が数個体分ある。

火葬骨

細片が多く、詳細は不明である。

3　4号墳石槨内の埋葬

(1)　土壙墓（第68図）

4号墳の石槨検出中に土師器・刀子・古銭が出土した。平安時代の埋葬に伴うものと考えられる。当該期の埋葬の立地として希少例であろう。骨などは認められなかったが、火葬墓とは考えにくい。土器群の周辺を頭とすると、刀子は腰あたりになり、西頭位の仲屈葬ではなかったかと考えられる。葬法は土壙墓であるが、竪穴式石槨をそのまま利用しており、形態的には石槨墓にちかい。

この埋葬以降に盗掘された形跡はないので、4号墳石槨の墨石は、この埋葬時あるいはそれ以前にはずされたものと考えられ、古墳時代の副葬品もその時に失われたのであろう。埋土は石槨内の他と同様非常に軟らかい黒色土で、この土壙墓と他を区別できなかった。

(2)　遺物（第69図）

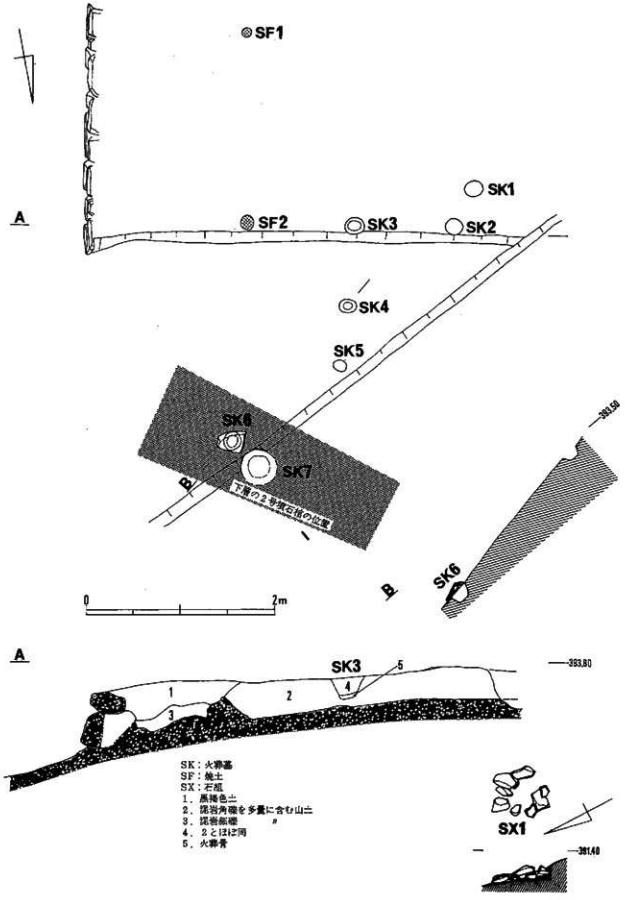
内黒高台坏（504）

口径14.8cm、高6.8cm。貼りつけによる高台。内面黒色、ヘラミガキ、風化のためはっきりしないが中心付近では放射状の暗文のようにも見える。外面も口縁に近い部分は黒色、ヨコナデ。

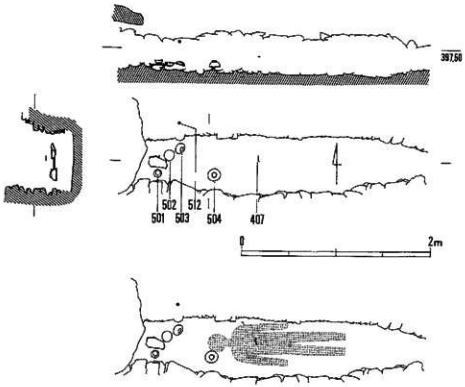
坏（501～503）

径9.5～12.0cm。風化しているが、502・503は糸切り、501はヘラ切りと思われる。501は暗褐色、砂粒を多く含み、他とやや異なるが、これ以外は上記の高台坏も含め、赤褐色、砂粒が少なく良く似る。焼成は全体としてやや軟質である。

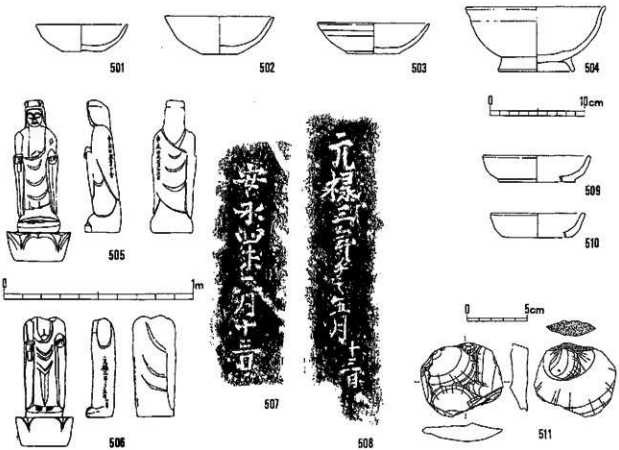
古銭（512）



第67図　火葬墓の分布・石組（1：40）



第68図　4号墳　石槨内の遺（遺物出土状態）（1：40）



第69図　古墳時代以外の遺物（1：4）　505・506（1：20）　511（1：3）

種別不明

4　縄文時代以前の遺物

調査区内の1号墳上方の尾根を中心に、縄文土器および石器がいくつか出土している。第69図の511は頁岩製、片面は礫面を打点として1回の剥離で形成される。刃部の調整はとくに認められない。旧石器時代の可能性があるが、他に伴出資料はない。他に縄文時代と考えられる打製石斧・黒曜石剥片がある。土器は詳細不明である。

5　小　考

以上のように、大星山古墳群の所在する尾根は古墳時代以前では縄文時代に、以後では平安時代・中世・近世・現代に利用されている。

縄文時代はわずかな生活痕跡を残すのみであるが、善光寺平の山頂立地の古墳で調査の行われたものでは、他の古墳でも同様の例は知られている。直下の宮崎遺跡は後期の大遺跡として知られており、当然ながら、周辺の山も縄文人の生活の舞台であったことを示している。

古墳時代以後は墓地として利用されることが多く、現代に至るまで祭祀の対象である石祠が造られたことも、墓域であったことと深く結びついていたのではないかと思われる。ただ、墓地としての利用は古墳時代と平安時代、平安期と中・近世には断絶があり、その間に地域社会にとって大星山がどのような存在であったかは不明である。

平安時代墓は単独で検出された。調査区内に同時期の遺物は他にほとんど見られないので、遺構も他にはないと思われる。この時期の埋葬地としては希少な例に属するであろう。古墳時代との時間的間隔からすれば、古墳との何らかの脈絡で見ることはできないであろうが、山上に単独で埋葬された人物はいかなる人物であったろうか。この点で、同時期に類例の多い土壙墓との副葬品組成などの共通性は、この墓をことさら特別なものと考える必要のないことを示しているように思われる。

中世墓地と石祠との関係は、墓地としての機能・意識が失われて後に祠が造られたのか、墓地という意識が失われない時期に祠が造られたか、祠が造られて後にも埋葬が行われていたのか、断定できるだけの根拠がなかった。状況的には2番目の可能性がつよいことを指摘できる。

これらのことは、今回は行い得なかった周辺の文献・民俗調査、虚空蔵尊の石仏2体の紀年銘、十三仏信仰＊とのかかわりにおいてあきらかにできる点もあるのではないかと思われる。いずれにしても、近世初期の埋葬あるいは信仰遺跡の一例として、貴重な資料を提供できたと思う。

4号墳の上方には調査区外にまで石垣や畝跡が拡がり、そこから集められた小石は小山をなしている。これが桑畑の跡であることを自身の記憶としておられる方が、今はまだ健在である。しかし、里山とはいえ、今は立ち入る人も少なく、これらの先人の努力の意味はいずれ忘れ去られることであろう。この山上にも、まだ貧しかったころの近代日本の一農村・一農民の足跡が記されていることを記録しておきたい。

＊十三仏のうち虚空蔵尊は、結縁日を「十三日」とし、また、十三才の年祝に虚空蔵尊に参詣するのは「三月十三日」という例が多い（中村1986）。ちなみに安永銘の石仏当日であり、「十三参り」や「十三塚」との関係も考慮されねばならない。

第３章　調査の成果と課題

第１節　遺物組成と編年

１　土　　器

大星山古墳群の発掘により出土した土器類はすべて土師器である。前章でその出土状態や個別資料の事実記載をしたが、本項では編年的位置および組成について検討する。得られた土器の資料的性格は次のようなものであった。

①３号墳の小型器台は埋葬時に置かれたもの。他は葺石が露出していた間に、そこに残された。

②１号墳の土器は周溝・テラスに墳丘構築直後に置かれたもの。

③４号墳は墳丘構築時あるいは構築直後に置かれたもの。

④２号墳は埋葬施設上および葺石上に置かれたもの。

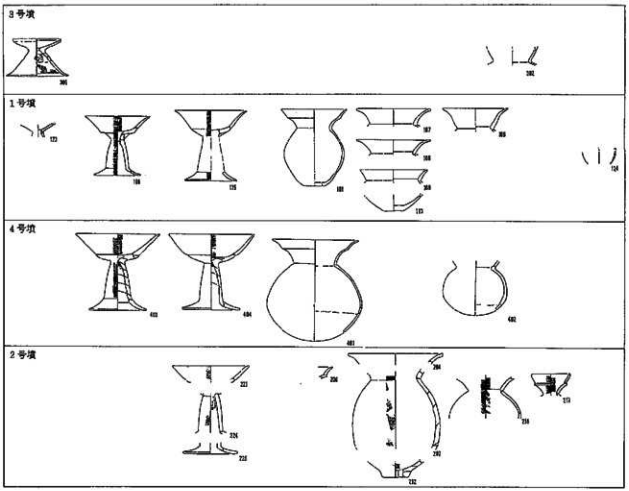
いずれも一括性をとくに疑わしめる出土状態ではなく、②・③などは積極的に一括性を主張できる。①・④の特定器種については、埋葬時との同時性は確実としても、現状の組成が本来のものであるかどうかという点では問題が残るかもしれない。しかし、造営時以後の土器祭祀が行われたという確実な形跡が認められなかったことと、それぞれの古墳で土器様相が明確に異なることから、上記①～④をそれぞれ一時点の土器様相の一端を示すものとして扱っても問題はないと考える。

１・４・２号墳からは、壺・高坏が出土しており相互に比較できる（第70図）。

土口将軍塚古墳の高坏について検討された青木和明氏は、篠ノ井遺跡群出土品を祖形とする型式的変遷を示し、伴出須恵器から年代論にも言及された（青木1987）。それと大星山古墳群を比較すると、土口将軍塚の高坏Ｂ型の形態・内面ケズリやホゾなどの成形手法、厚手の壺の形態などは、２号墳に最も類似する。２号墳の小型壺217・218は初期須恵器の模倣形態と考える。同様の壺は、青木氏が土口に先行する様相を認めた駒沢新町遺跡にも見られ、また、駒沢新町にあって土口にない小型丸底土器が、確実ではないが、２号墳には存在した可能性がある。青木氏は、土口将軍塚の土器様相にTK73式併行期の可能性を指摘されたが、２号墳の土器様相は、それとほぼ同時期あるいはややさかのぼる可能性を示しているのではなかろうか。

土口将軍塚には叩き目を有することで知られる埴輪があり（山根1987）、２号墳には埴輪がない。壺の形態は類似するが、土口のものはハケ調整の技法を持たないのに対し、２号墳はハケ調整が目立ち、その一部は埴輪的であり、同様の壺はすべて焼成前の底部穿孔である。２号墳の壺は埴輪の欠落を補うものであり、機能・形態からも埴輪とよんだほうがよいかもしれない。

１・４号墳の土器は、壺・高坏の形態・調整法・組成の点で２号墳よりさかのぼり、千野浩氏の１・２段階（千野1993）に相当するものであろう。高坏の形態・横方向のヘラミガキ調整・大半が赤彩される点などから、なかでも１号墳がより古い様相を示すといえよう。１号墳の高坏のうち４・２号墳に直接系譜をたどりうるのは115であろうが、これは無赤彩で１個体しかない。他はすべて116に示される赤彩・小型・横ヘラミガキの高坏である。この赤彩高坏は、この地域では類例が知られず、伴出した小型壺（すべて



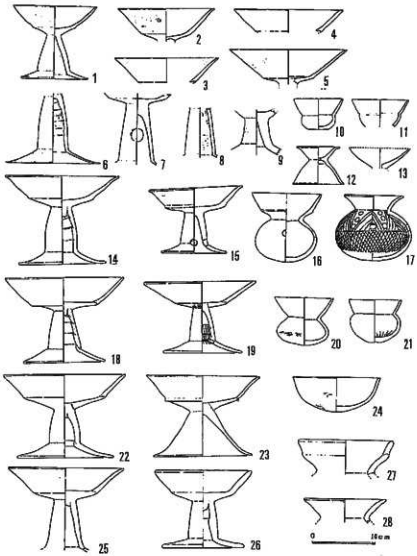
第70図　土器編年図（1：8）

赤彩され、底部穿孔と平底がある）とともに古墳造営のために特別に作られた土器と考えられる。また、形態的には系譜のたどりうる115の祖型と見ることもできる。115は坏部が斜めないし縦のヘラミガキ、脚部が横ヘラミガキである。

115と同様の形態で、脚部に粗い横ヘラミガキを多用する高坏は石川条里遺跡（飯島・矢口1992、他）などに類例がある。しかし、それらは形態や技法が粗形化しているように思われ、この赤彩高坏より後出的である。1号墳の高坏は、この地域の屈折脚高坏または畿内系高坏と呼ばれるもののなかでは最古段階のものと考える*。これまで、この種の高坏の当地域における初源は、千野氏の1段階である篠ノ井遺跡群聖川堤防地点SB118出土品（青木・他1992）などに求められており（第71図）、1号墳の土器組成はそれと同時期あるいはよりさかのぼるものである。小片であるが、小型器台・精製薄手の小型丸底土器と考えられる存在も注意しなければならない。

4号墳の高坏・壺は2号墳と1号墳の間に置くことができるであろうが、赤彩されたものがまったく見られない。高坏の形態・技法は1号墳の115に類似し、壺の口縁形態もよく似ている。1・4号墳が年代的にも近いことをうかがわせる。

3号墳出土の小型器台は布留式併行期に特徴的に見られるものであるが、1号墳の土器群よりさかのぼるであろう。この器台は赤彩されているが、ミガキはやや粗雑で胎土もあまり精選されておらず、低脚化・口縁部の拡大傾向が著しい。この種のものとしては新しい様相であろう。確実ではないが、3号墳には胎土・整形とも精製の小型丸底あるいは鉢形土器、脚径に比べて薄手の大型壺の破片がある。3号墳出土



第71図　周辺地域の土器比較資料（1：6）
1～13藤ノ井遺跡群盤川堤防地点ＳＢ118　14～17駒沢新町
18～24本村東沖55号住居址　25～28土口荷軍寮

の土器はこれがすべてであり、他地域との型式的対比を行うには僅少な資料であるが、越後Ⅳ期（坂井・川村1993）、漆町９群（田嶋1986）、廻間Ⅲ式４段階（赤塚1990）と近似するものと言えよう。

坂城町東平古墳群（若林1994）は小形の円墳・方墳からなり、大星山古墳群の様相に似ている。東平２号墳の土器・玉類の組成は大星山４号墳と類似し、高坏は大星山２号墳の整形技法に似る。ちなみに、東平２号墳は方墳で割竹形木棺を直葬し両小口に立石を持ち、大星山４号墳も石槨であるが立石を持つ。これらの状況は、大星山４・２号と東平２号との間に時間的接点が存在することをうかがわせる。東平の調査者はこれを５世紀中葉としている。

以上の土器による検討は、大星山古墳群が３・１・４・２号墳の順に形成され、いわゆる畿内系屈折脚高坏の導入期直前を上限とし、須恵器出現期を下限とする年代幅に納まることを示す。４基の古墳は、ほぼ一世代ごとに築造されたものと考えるに無理はない。しかし、土器や古墳群形成の様相は１・４号墳の時間的間隔が他より狭い可能性を示している。古墳群の形成期間は通常の３世代スパンより短い可能性がつよく、実年代では50ないし70年程度ではなかろうか。初期須恵器の実年代次第で上限の実年代は変化し得るが、かりにTK73型式を５世紀第２四半期に置いたとすれば、３号墳はさかのぼって４世紀第３四半期、降っても４世紀第４四半期ということになる。

＊小型精製土器群における横ヘラミガキの卓越は、庄内式にもっとも特徴的である。布留式に見られる同種の技法も、より古相を示すものと考えられている（安達・木下1975）。濃尾平野の廻間Ⅲ式から松河戸Ⅰ式にかけての屈折脚高坏は、出現時から、このようなミガキ手法を持たないようである（赤塚1994・1990）。この技法と形態上の特徴が、後継の高坏の源流であるとすれば、それらを従来、「畿内系」屈折脚高坏と呼んできたことに根拠を与えるものである。また、この高坏の出現をもって編年上の画期とする見方（宇賀神1990、1988）は定着している。

2　金属器

鉄器は5基の埋葬施設から出土し、とくに3・2号墳は埋葬時の組成が完存する。これらを前項の編年と郷内の出土位置により配列すると第72図のようになる。なかでも鉄鏃は相互比較が容易である。4号墳では鉄鏃が出土していないが、他の3基の鉄鏃組成は、時期をおって3・1・2号墳の順になることはあきらかであろう。

2号墳とさきの土口将軍塚の鉄鏃を比較すると（第73図）、2号墳の233～236はほぼ同じものがあるが、長頸化の著しいものや大形無頸のものは土口には見られない。長頸化の程度から見て、2号墳がより後出的といえよう。しかし、2号墳の鉄鏃は型式的にきわめて多様な一群である。土口が比較的単純な型式的組成であることを考えると、同一時期における組成のちがいと見ることもできないわけではない。また、こういった組成の差は大形前方後円墳としての土口将軍塚と小方墳としての2号墳の武器保有の質・意義の差を示しているものであろう。土口の鉄鏃について千野捨氏は、大阪府野中古墳例よりやや古相、5世紀第1四半期後半から第2四半期前半の可能性を指摘されている（千野1987）。

1号墳の鉄鏃は、すべて無頸・短茎で様相は単純である。三角形・長三角形鏃の類例は大阪府和泉黄金塚古墳例などに見られる（杉山1988）。きわめて小形の134・135は岡山県金蔵山古墳（西谷・鎌木1959）などにも見られるが、これはやや古相といえようか。いずれも4世紀末から5世紀初頭とされる様相である*。

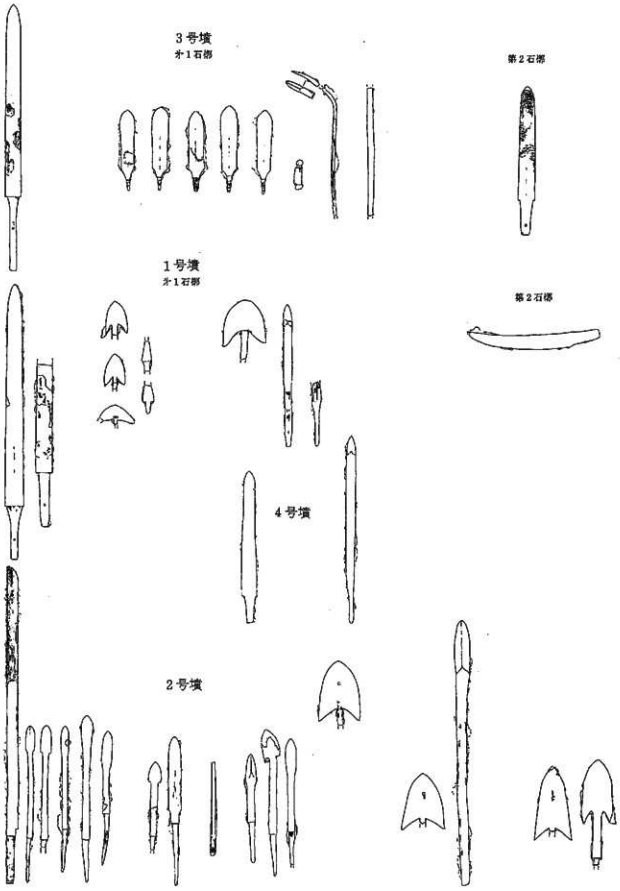
3号墳の鉄鏃は単一型式が5本出土しただけである。この型式の鏃は静岡県三池平古墳（大塚・他1961）などに類例があり、古墳時代前期後半に特徴的なものである。和田東山古墳例（東山古墳群調査団1994）と比べればやや新相といえよう。大きさのわりに軽量であり、5本という数も意味を持つものであろう。

3号墳の弓飾鋲としたものの形態は従来、弓飾鋲とされてきたものと形状・サイズともきわめて類似しているが、鉄板の円筒の端部が折返されないことが異なる。また、本例は出土状況から見て弓に装着されていた可能性は低いと思われる。田中新史氏によれば、弓飾鋲の類例は後期古墳を中心に知られ、前期古墳にはない（田中1979）。ただ、それらの例は東国に多く、1古墳における出土数・出土位置などには本例と共通点が見られる。一方、時期的に近いものとしては金蔵山古墳の一例があり（中央石室主室）、これは形状がほとんど同じで、弓飾鋲として装着された時に付着するのと同様な木質が付着している。ただ、断面形が円形ではなく方形である。田中氏も指摘されているように、同頭の鋲はメスリ山古墳の鉄製弓に付属した飾金具に例がある（末永1977）。弓飾鋲に類似した金具が弓などの木製品に装着されることが、前期から行われたものであることを、3号墳例は示している。今、類例を集成する余裕がないが、類品として最古の一例となろう。

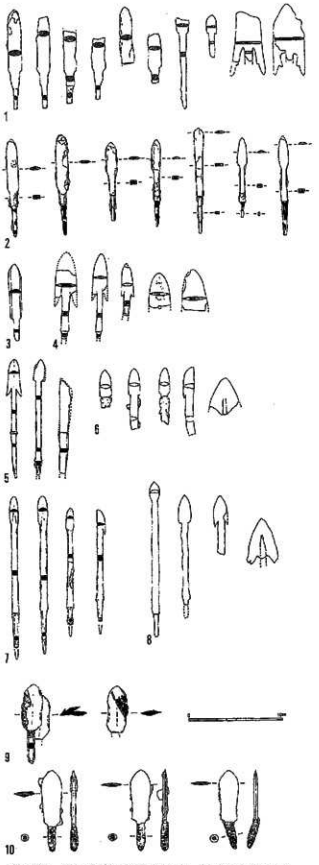
農工具では、鉋と鑿がある。3号墳の鉋の細身・断面三日月形の刃部は弥生時代からの系譜を持つものである（岡村1985）。1号墳以後、先端部の湾曲の少ない、刃部が裏逃のない断面片丸の形態となり、1・4・2号墳と大形化する。しかし、2号墳は刃部を拡張した結果か、断面三日月形となっている。この変化は模式的でさえある。各古墳ごとでは、古瀬清秀氏によるやりがんなの年代観（古瀬1991）と上記の鉄鏃による年代観とに矛盾はないと思われる。鑿は2号墳の単品であるが、この種のものは岡山県金蔵山古墳など前期後半から中期初頭に例が多い。

刀剣は3・1・4号墳で剣、2号墳で直刀に替わる。3号墳では石棺の規模に応じて長短があるが、それぞれ単品である。1号墳では複数あって、やや長さを増す。4号墳は槍先の可能性がある。

金銅製飾金具が、2号墳に3個ある。うち2個（249・250）は近接して出土し、組み合わせを考えることができる。もうひとつ（248）は出土位置が床よりかなり高く、上層の中世墓の撹乱も及ぶ部分であり、



第72図　金属器の組成と編年（1：4、刀剣は縮尺不同）



第73図　周辺古墳の鉄鏃（1：4）（本文中文献より）
1 鑵塚1号墳　2 土口将軍塚　3 長礼山2号墳
4 森9号墳　5 森5号墳　6 金鐙山　7 森13号墳
8 田麦2号墳　9 森将軍塚　10和田東山3号墳

片方が失われたものと考えておきたい。ただ、組み合うとしても、いわゆる梶玉のように二つを合わせて玉状にしたことの確証はない。また、玉であるとしても、これらの出土状態はほかの武器類と同様であり、ただちに装身されたものとは言えない。従来知られる類例は後期古墳からの出土品が多く（平野1971）、同形態で鈴鏃や歩揺の一部とされるものもあるが、その場合はこれと組み合う他の部品をともなうことが多い。朝鮮半島に出土例が多いという（伊藤1985）。いずれの場合も、多くは八稜であって、本例のように十稜のものは少ない。

以上、鉄鏃を主とする金属器の従来の編年観に従えば、大里山古墳群における組成は、3号墳を4世紀後半、1号墳を4世紀末から5世紀初頭、4号墳を5世紀前半、2号墳を5世紀第2四半期頃と考えてよいことを示すであろう。

＊鉄鏃の型式分類・編年観については、杉山1988によるところが大きい。

3　玉

3号墳ではヒスイ製勾玉とガラス小玉（スカイブルー系色のみ）を出土した。4号墳ではコバルトブルー系色のガラス小玉がある（第3表）。

滑石製白玉は1・4・2号墳から出土しているが、相互に比較してみると次のような特徴が見られる。1号墳のものは、厚みがあって明瞭な稜を持ち算盤玉状を呈するものが多い。4号墳は形態が揃い厚みがあるが、稜が不明瞭なものが多い。2号墳は石材が軟質であるせいもあろうが、側面は丸みを持って稜がなく、全体が摩耗したように見えるものがほとんどである。1号墳の例は滑石製白玉としては初期のものであろうし、算盤玉状から丸みを帯びたものへ、材の軟質化へという形式的変化をたどり得る。

第2表　玉類計測表　①

番号	種類	長さ(cm)	直径(cm)	重さ(g)	
315	勾玉	2.055	0.805×0.61	3.31	3号墳第1石棺
316	ガラス小玉	0.225	0.31	0.04	〃
317	〃	0.27	0.37×0.46	0.08	〃
318	〃	0.32	0.425	0.08	〃
319	〃	0.27	0.36×0.33	0.06	〃
320	〃	0.37	0.33×0.31	0.08	〃
321	〃	0.34	0.375×0.33	0.07	〃
322	〃	0.325	0.375	0.07	〃
323	〃	0.27	0.35	0.05	〃
324	〃	3.3	0.42	0.09	〃
325	〃	0.155	0.35	0.03	〃
326	〃	0.235	0.425×0.375	0.07	〃
327	〃	0.33	0.425×0.465	0.10	〃
328	〃	0.35	0.385	0.09	〃
329	〃	0.335	0.465	0.11	〃
330	〃	0.321	0.42	0.07	〃
331	〃	0.275	0.455	0.11	〃
332	〃	0.3	0.38	0.09	〃
333	〃	0.238	0.455	0.08	〃
334	〃	0.273	0.4	0.07	〃
335	〃	0.33	0.405	0.09	〃
336	〃	0.4	0.43	0.09	〃
337	〃	0.25	0.365	0.06	〃
338	〃	0.32	0.43	0.13	〃
339	〃	0.365	0.445	0.10	〃
340	〃	0.332	0.42	0.09	〃
341	〃	0.3	0.39	0.09	〃
342	〃	0.34	0.36	0.09	〃
343	〃	0.2	0.35	0.04	〃
344	〃	0.195	0.36	0.03	〃
345	〃	0.378	0.45	0.14	〃
346	管玉	1.58	0.45	0.64	3号墳第2石棺
347	〃	1.68	0.495	0.82	〃
348	〃	1.36	0.41	0.49	〃
140	滑石製白玉	0.285	0.5	0.12	1号墳第1石棺
141	〃	0.175	0.49	0.11	〃
143	〃	0.2	0.44	0.08	〃
144	〃	0.145	0.445	0.06	〃
145	〃	0.24	0.54×0.465	0.10	〃
146	〃	0.23	0.455	0.09	〃
147	〃	0.23	0.47	0.11	〃
148	〃	0.198	0.445	0.07	〃
149	〃	0.2	0.442	0.09	〃
150	〃	0.143	0.46	0.06	〃
151	〃	0.312	0.55	0.16	〃
152	〃	0.2	0.468	0.09	〃
153	〃	0.205	0.43	0.07	〃

番号	種類	長さ(cm)	直径(cm)	重さ(g)	
154	滑石製白玉	0.165	0.445	0.07	1号墳第1石棺
155	〃	0.16	0.435	0.05	〃
156	〃	0.14	0.4	0.05	〃
157	〃	0.123	0.44	0.04	〃
158	〃	0.175	0.4	0.06	〃
159	〃	0.1	0.42	0.09	〃
160	〃	0.265	0.42	0.09	〃
161	〃	0.158	0.455	0.08	〃
162	〃	0.16	0.45	0.07	〃
163	〃	0.22	0.465	0.10	〃
164	〃	0.165	0.465	0.07	〃
165	〃	0.12	0.47	0.07	〃
166	〃	0.195	0.45	0.08	〃
167	〃	0.16	0.44	0.07	〃
168	〃	0.21	0.445	0.08	〃
169	〃	0.15	0.44	0.05	〃
170	〃	0.11	0.47	0.06	〃
171	〃	0.135	0.408	0.05	〃
172	〃	0.153	0.39	0.04	〃
173	〃	0.143	0.45	0.07	〃
174	〃	0.323	0.482	0.12	〃
175	〃	0.215	0.53	0.11	〃
176	〃	0.29	0.52	0.15	〃
177	〃	0.28	0.50	0.16	〃
178	〃	0.26	0.529	0.12	〃
179	〃	0.265	0.53	0.13	〃
180	〃	0.242	0.535	0.13	〃
181	〃	0.285	0.525	0.12	〃
182	〃	0.24	0.525	0.12	〃
183	〃	0.20	0.49	0.10	〃
184	〃	0.21	0.49	0.11	〃
185	〃	0.23	0.492	0.10	〃
186	〃	0.222	0.532	0.10	〃
187	〃	0.175	0.49	0.09	〃
188	〃	0.14	0.475	0.08	〃
189	〃	0.144	0.50	0.08	〃
190	〃	0.175	0.45	0.07	〃
191	〃	0.177	0.50	0.09	〃
192	〃	0.16	0.53	0.09	〃
193	〃	0.19	0.472	0.10	〃
194	〃	0.275	0.53	0.13	〃
195	〃	0.273	0.529	0.19	〃
196	〃	0.217	0.518	0.11	〃
197	〃	0.135	0.475	0.06	〃
198	〃	0.145	0.435	0.08	〃
199	〃	0.145	0.435	0.08	〃
1100	〃	0.292	0.512	0.13	〃

第2表　②

番号	種類	長さ(cm)	直径(cm)	重さ(g)	
1101	滑石製白玉	0.24	0.492	0.14	1号墳第1石槨
1102	〃	0.196	0.425	0.08	〃
1103	〃	0.235	0.42	0.09	1号墳第2石槨
1104	〃	0.183	0.422	0.09	〃
1105	管玉	1.08	0.45	0.41	1号墳表採
411	滑石製白玉	0.25	0.405	0.09	4号墳石槨
412	〃	0.318	0.405	0.11	〃
413	〃	0.25	0.428	0.09	〃
414	〃	0.19	0.42	0.07	〃
415	〃	0.3	0.40	0.08	〃
416	〃	0.275	0.406	0.09	〃
417	ガラス小玉	0.18	0.345	0.09	〃
251	滑石製白玉	0.33	0.425	0.09	2号墳石棺
252	〃	0.32	0.41	0.10	〃
253	〃	0.34	0.42	0.10	〃
254	〃	0.23	0.42	0.05	〃
255	〃	0.285	0.395	0.07	〃
256	〃	0.29	0.415	0.07	〃
257	〃	0.22	0.41	0.05	〃
258	〃	0.18	0.418	0.04	〃
259	〃	0.225	0.41	0.07	〃
260	〃	0.21	0.4	0.04	〃
261	〃	0.165	0.395	0.04	〃

4　小　結

以上の検討から、大星山古墳群の年代については、3号墳を4世紀第3四半期、1号墳を4世紀第4四半期、4号墳を5世紀初頭、2号墳を5世紀第2四半期と考える。ただし、初期須恵器の年代(白石1985)・比較対象の古墳の年代いかんではよりさかのぼる可能性がある。しかし、これよりも年代が降る可能性はほとんどないであろう*。

*たとえば廻間Ⅲ式と松河戸式の境は、この様式の設定者により、AD．350年頃に考えられている（赤塚1995)。併行関係を示す根拠は少ないが、土器の類似点のみをあてはめれば、さらに四半世紀はさかのぼることになろう。

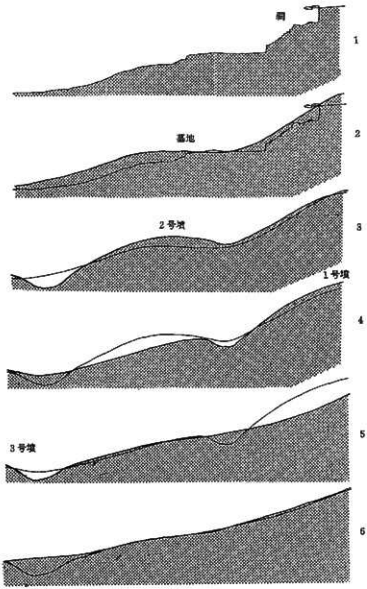
第2節　遺構の構造と遺物の出土状態

1　墳　丘

大星山古墳群で調査した4基の古墳の墳形は周溝・裾テラス・葺石などの形状から、3号墳が円墳で、1・2号墳は方墳であると考えられた。4号墳は墳丘の範囲がはっきりしないが、方墳の可能性を指摘した。いずれも後世の破壊や流出の影響が大きいが、そのことを除外しても、平地に存在する古墳のように完全な形態を取っていたとは考えられない。墳丘施設はいずれも北西側から北東側が整っている。とくに、4号墳は尾根筋より低い位置にあるため北側しか遠望することができない。また、時期的に置なる可能性のある和田東山古墳群・大室18号墳などの前方後円墳は、同一山系に近在するにもかかわらず、間の尾根に遮られて直接目視できない。

この古墳群は3・1・4・2号墳の順に築造されている。4号墳はやや離れているが、他の3基は裾を接しており、3号墳の周溝は2号墳の周溝に切られ、1号墳の周溝は2号墳の盛土に覆われている（第74図）。しかし、3・1・4号墳は一定の距離を保って占地し、先立つ古墳を侵さない。今、この古墳群を見ると、4号墳のみが他の3基と違う立地をとるように見えるが、3・1・4号墳は北方からの望見を意識しつつ、相互に一定の距離をとろうとした場合、移動土量の最も少ない位置を順次選んだ結果と見ることができるのではなかろうか。むしろ、3号墳と1号墳の間の狭い余地にあえて造られた2号墳こそが、異例の位置であったと見ることができる。2号墳がこの古墳群の最後のものであることもこの見方を補強する。

4号墳墳丘の礫石の状況は他の3基とあきらかに異なり、積石塚としてよい。



第74図　原地形の復元（1：300）

積石塚の善光寺平周辺における初源は、安坂将軍塚1号墳（大場・他1964）や鎧塚1号墳（永峯・亀井1959）と考えられている。4号墳の石槨は後述のように安坂将軍塚によく似ている。鎧塚1号は、皮綴短甲かと思われる鉄片があり、これらの積石塚はほぼ同時期に地域の初源の古墳として造られたものと考えられる。それに対し、大星山4号墳は、前後に系譜をたどり得る古墳群中にあり、唯一の積石塚である。積石塚の系譜を考えるに重要な資料となろう。

墳形は円墳に始まり、方墳3基が後続する。墳形の変化はさきの年代観にしたがえば、4世紀後半の現象である。

2　石槨

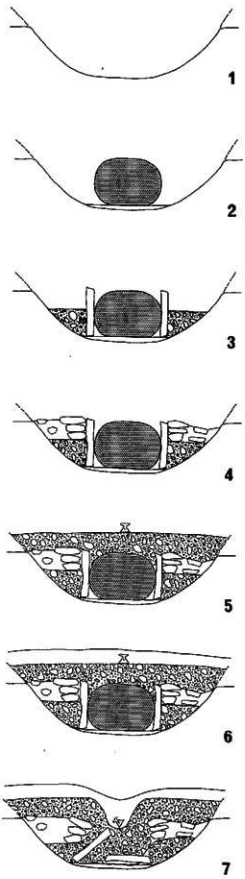
竪穴式石槨・石棺は合計7基存在した。その諸要素をまとめると第3表のようになる。壁石積の高さと石室高の比は、1以下は床面が整えられて後に石積みが行われたと考えられるものであり、その数値は壁面に対する石積部分の割合である。これは石槨構築過程と棺設置時期との関係にかかわろう。

例えば3号墳第1石槨は、次のように構築されたと考えられる（第75図）。①最終的墓壙の整形。②粘質土床面の整形・木棺設置、棺蓋はこの段階または次の段階。③部分的に側石、棺身部分までの礫による埋め戻し。④壁体石積み。⑤礫による全面被覆、器台設置。⑥粘質土による盛り土。⑦木棺の腐朽による陥没。

一次的埋め戻しは棺身の高さに、壁体は棺蓋部分に対応すると思われる。つまり、棺身のみが埋め戻され、蓋がされていなかった段階があったことが考えられる。また、側石は一部にしか見られないので、その部分が遺体の頭部にあたるなど特別な部分であったか、場合によっては蓋の構造が他の部分と異なっていた可能性もあろう。

4号墳では、①地山面の整形。②墓壙外郭に礫設置・粘質土床面の整形。③墓壙構築。④壁体石積み。⑤天井石設置。⑥礫による全面被覆。という手順であり、墓壙完成時以降は一連の過程と考えられる。この石槨は幅・高さがきわめて狭く、もし木棺を用いたとすれば、石槨の内部全体を満たしていたと考えられる（第76図）。その場合、壁体石積みが開始される前に棺が設置されていた可能性が大きい。1号墳の2基もおおよそ同工程と考えられるが、棺設置時期は異なる可能性もある。

長幅比は狭長化する過程が認められよう。周辺の前・中期



第75図　3号墳第1石槨の構築過程

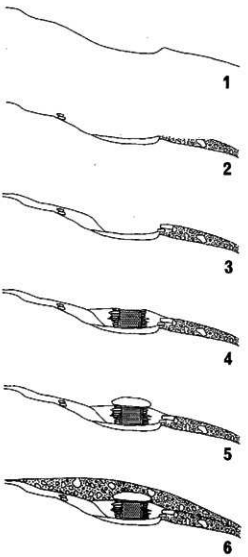
第3表　大星山古墳群の埋葬施設

	長	幅	幅／長	全高	壁積高	壁積／全高	U字床	平床	礫床	立石
3号墳第1石槨	450	100	0.22	75	50	0.67	○			△
第2石槨	190	40	0.21	40	50	1.25		○		
組合式箱形石棺		40	(0.21)	30	40	1.33		○		△
1号墳第1石槨	500	90	0.18		−8	(0.9)	○		○	
第2石槨	390	70	0.18	60	45	0.75	○			○
4号墳　石槨	570	60	0.11	55	55	1.00		○		○
2号墳　石棺	215	65	0.30	30	50	1.67		○	○	?

古墳を見ると、これらと類似するものが善光寺平周辺にいくつか見られる。1号墳第1石槨・4号墳石槨は、舞鶴山1・2号墳（若崎1982）・安坂将軍塚1号墳1号および2号・同2号墳（大場・他1964）の石槨と規模・長幅比が類似する。これらは5世紀前半を中心とし、最も新しく見ても6世紀には降らないと考えられる古墳である。とくに、4号墳の石槨は、同じく積石塚方墳と考えられている安坂将軍塚古墳1号墳の2基の石槨にきわめて類似する。3号墳第1石槨は類例がないが、平面形・断面形は和田東山3号墳に似た点があり、槨はともかく木棺が類似していたことを示すのではなかろうか。また、舞鶴山1号墳の珠文鏡を出土した石槨北側の埋葬施設も、床面や部分的な石積みのありかたに似たところがある。

短壁側の立石は、山の神古墳（横山1953）・京塚古墳・東平1・2号墳に見られる。これらはいずれも5世紀中葉の割竹形木棺直葬の小型円墳・方墳であり、時期や被葬者の階層に共通性がうかがえる。例えば、京塚古墳は、ほぼ同時期の前方後円墳七瀬双子塚古墳（土屋1982）の南方約4kmの丘陵頂部に立地し、隣接して小形の円墳の可能性のある墳丘が存在した。また、山の神古墳は七瀬双子塚の北方2kmほどにあって、山の神と双子塚の間にある田麦1号墳（林幸1号墳・田麦南古墳と同じ。横山1953）は、合掌構造の組合式石棺が推定されている。山の神古墳は年代推定の根拠に乏しいが、鉄器の組成は古墳時代中期初頭といえるものであろう。

このような棺小口側の立石は、これまで中野市域にしか知られなかったが、この大星山および坂城町東平古墳群（若林1994）の調査により、千曲川流域に特徴的に分布するものであることがあきらかとなった。大星山が竪穴式石槨であるのに対し、他はすべて木棺直葬である。大星山において3号墳第1・1号墳第2・4号墳と系譜がたどれることからすれば、後者はその簡略型であることを示すものと思われる。3



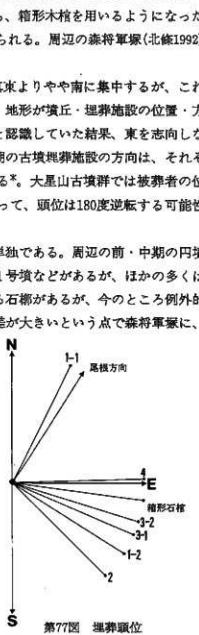
第76図　4号墳石槨の構築過程

号墳では棺設置以前に置かれており、先述したようにこの石槨では小口板を持つ木棺は考え難い。また、1号墳第2石槨の壁面は四壁とも同レベルから積み上げられるのに対し、4号墳では立石背後の壁だけが、他より高い位置を基底としていることが注意される。前者は床面が壁体基底より低く、後者は床面と他の三壁の基底が同レベルなので、立石と背後の壁面の関係は同じである。前者の床面は断面U字状、後者が平床なので、木棺形式も異なっていたはずであるが、立石と棺の関係は同様である。これらのことから、この立石は閉塞などの実用的目的に起源を求めるべきではなく、石障などにも通ずる埋葬観念や儀礼にかかわるものとすべきであろう。

木棺の形態は、石槨の形状から推測できるのみである。3・1号墳では、規模の極端に小さい3号墳第2石槨を除けば、すべて底面断面形が、ある程度の円みを持ったものと考えられる。一方、4・2号墳の床面は平らである。ただ、2号墳は木棺を用いていない可能性が大きく、4号墳も石槨幅の狭小さから木棺を納める余地がなかった可能性もある。また、3号墳褐の石棺の床も平らである。これらの事実から、大星山古墳群では、4世紀代においては床面が平坦なものは規模や墳丘上の位置の点で劣位にあり、場合によっては木棺が用いられなかったことも考えられる。中心的な埋葬は横断面形に円みを持つ木棺が用いられた。5世紀代の4号墳以降、中心埋葬の床面が平らになることから、箱形木棺を用いるようになったと考えられ、場合によっては木棺が用いられなくなった可能性も考えられる。周辺の森将軍塚(北條1992)など、あきらかとなっている古墳の木棺とも共通する変化であろう。

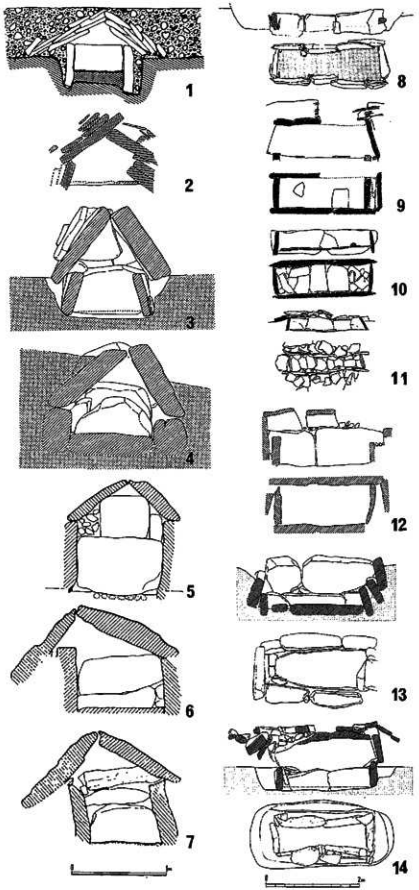
石槨主軸方向は東西方向を示す傾向にあるものが多い（第77図）。真東よりやや南に集中するが、これは尾根筋に直交するということでもある。古墳の所在する尾根は狭く、地形が墳丘・埋葬施設の位置・方向を規制している面もあろう。反面、当時の意識として尾根方向を北と認識していた結果、東を志向しながらも、南東方向にずれたと見ることもできる。善光寺平南部の同時期の古墳埋葬施設の方向は、それぞれ地形に影響されながらも、東西を志向するものが多いように思われる*。大星山古墳群では被葬者の位置は不明確なものが多く、図に示したものは埋葬施設の主軸方向であって、頭位は180度逆転する可能性もある。

3・1号墳の埋葬施設は2基の竪穴式石槨を持つが、4・2号墳は単独である。周辺の前・中期の円墳・方墳のうち、複数の埋葬施設を持つものとして、京塚古墳・舞鶴山1号墳などがあるが、ほかの多くは単独である。一方、前方後円墳では土口将軍塚のほぼ同規模の並列する石槨があるが、今のところ例外的存在である。森将軍塚では前方部にも竪穴式石槨を持つ。3号墳は格差が大きいという点で森将軍塚に、1号墳は土口将軍塚に類似するといえよう。4世紀後半から5世紀初頭にかけて、墳頂部複数埋葬の規模格差の変化・複数埋葬の終焉という状況を見ると、大星山古墳群の変化は先進的であったといえるのではなかろうか。



第77図　埋葬頭位

＊越後・会津では東西が多いというが（甘粕1989）、それと共通することになろう。



3　合掌形天井と組合式石棺

合掌形天井は、中期以降の古墳迴葬施設に見られる善光寺平に特徴的な形状である。これには、箱型石棺と横穴式石室とがあって、初源は前者のうちに求められる。系統論や積石塚とのかかわりについてさまざまに論議されてきたが、これまで合掌形の埋葬施設として最もさかのぼるものと考えられてきたのは、善光寺平北部の金鎧山古墳（森本1926）・田麦1号墳、大室古墳群（大塚1982）中のいくつかの積石塚などである。金鎧山古墳はTK73～216および208型式の須恵器の出土で知られ（木下1992）、他も須恵器導入期以降である。大星山2号墳の年代的位置がさきに検討した内容であるとすれば、鎧塚古墳や森将軍塚（岩崎1992）周囲の石棺群など構造や時期が確実でないものを除けば、これら石棺系の合掌形としては最古の一例とも言えよう。また、小形の板石を持送状に用いるものは唯一であり、片側の短辺の特殊な構造も類例がない。合掌形天井の系譜が石棺型式に基づいて検討されたことはあるが、天井部と側石のみが注目され、側石相互の関係や墓道の有無など構造の細部についての検討は十分ではなかったように思われる。そのため、そ

第78図　2号墳石棺の構造と類例（左　天井部の架構　1：40、右　側石の形状　1：80）（本文中文献より）
1・8大星山2号墳　2・9金鎧山古墳　3・14上池ノ平1号墳1号石室　4・13上池ノ平5号墳　5・12大室168号墳
6大室356号墳　7大室357号墳　10長札山古墳　11森将軍塚56号石棺

れらが検討可能な資料も少ない。

大室168号墳は、短壁の一方が他の3壁より低く、もう一方を奥壁に見立てることができるような構造を持つ（第78図）。天井部の構造がもっとも類似する金鑽山古墳も、同様の構造を持っていた形跡がある。また、上池ノ平1号墳1号石室（青木・他1988）は、側石の状況も類似している*。こういった形態は横口式石棺あるいは初期横穴式石室などのありかたに類似する点も感じられる。合掌形天井部を持つ石棺は単壁に三角形の石を用いるものがあるが、これは天井架構と同時に棺がほぼ完全に密閉されたものと考えられる。それに対して、合掌形石室・石棺の多くは構築手順から見ても、天井が構築されて後も単壁の一方、場合によれば両側が開いていたと思われる。この点が平らな薹石の石棺と構造的におおきく異なる。その多くは、間隙が狭く、人の出入りには相当の困難をともなうであろうが、上記の例などは出入口部を意識した結果とみることが不可能ではない。

2号墳の石棺の類例として、平らな薹石を持つものであるが、長礼山2号墳（矢口1982）と森将軍塚56号組合式石棺（青木1992）をあげることができる。長礼山の埴輪は土口将軍塚と共通性があり、森56号は時期が不明確であったが、長礼山との共通性から2号墳・土口将軍塚にちかい時期を想定してよいだろう。これらは、単壁の一方が特別な構造を示すようなことはない。天井部が合掌形の石棺は、薹石の平らな箱形石棺とほぼ同時に出現し、それぞれ異なる系譜のもとで発展したものである可能性があろう。

合掌構造の起源と積石塚の系譜に関しては次節で再論する。

＊これらの類似例については、5世紀後半代とする年代観が多いが、よりさかのぼらせるべきであろう。

4　土器の出土状態

墳丘あるいは埋葬施設上で検出された土器の組成は次のようになる。大星山古墳群では一貫して、埋葬施設内に土器が置かれることはなかった。ただし、1・4号墳の埋葬施設埋土中からは土器がまったく検出されなかったが、ともに埋葬施設の遺存状態が良くなく、その周辺にわずかな量の土器が存在していたことまでは否定できない。

①3号墳　墳丘――壺・小型精製土器（各1個体）、埋葬施設上――小型器台（1個体）
②1号墳　墳丘―――壺（底部穿孔・無穿孔）・高坏・小型精製土器（壺・高坏多数、他1個体）
③4号墳　墳丘――壺（頸部穿孔）・坩・高坏（各1・2個体）
④2号墳　墳丘――壺（底部穿孔）・高坏・他（壺多数、他1・2個体）、埋葬施設上――高坏・他（1・2個体）

3号墳では墳丘樹立の形跡は少なく、埋葬施設上に供献形態の土器が少数ある。1・2号墳は墳丘樹立を主体とし、周溝中など特定の場所に高坏・小型壺などが置かれる。4号墳は1・2号墳のような樹立とは異なるが、土器が墳丘の数カ所に集中して置かれていた。

大星山古墳群では埴輪が見られない。しかし、2号墳の底部穿孔壺形土器は、墳丘上に立て並べられていたと考えられることや整形技法・形態の点で、壺形埴輪の一種としてよいかもしれない。また、1号墳の赤彩の壺・高坏も小型精製品であるが、焼成前穿孔や墳丘上への樹立など、埴輪樹立と同じ意味を持つものであろう。埴輪祭祀と同様の行為が行われながら埴輪が採用されなかったことに、同時期の前方後円墳など他の古墳との差が示されている。

第3節　大星山古墳群の歴史的位置

1　大星山古墳群の形成

大星山古墳群の形成以前、周辺地域には、勘介山・蟹沢・姫塚などの前方後方墳、森将軍塚・和田東山3号墳などの前方後円墳がすでに築造されあるいは築造されようとしていた。これらはいずれも単独で立地し、一地域集団を代表する首長墓である。これに対し、大星山3号墳以前の円墳・方墳は今のところ知られていない。

和田東山3号墳（小林1994）は隣接して前方後円墳が3基あり、同一集団による首長墓系列がたどりうる。善光寺平の他の前方後円墳・前方後方墳は、単独で前後の系譜がたどれないか、複数集団間にまたがる首長系列が想定されており、和田東山古墳群の様相は唯一の例である。大星山古墳群の形成期間は、和田東山古墳群の円墳も含めた形成期間のなかに含まれるものと考えられ、同一集団による4代の系譜を想定するに無理はない。そして、大星山古墳群形成の契機は東山古墳群の展開の中に求められるであろう。

この二つの古墳群はともに川田条里遺跡に面する保科川・赤野田川扇状地に突出する尾根上に所在する。大星山古墳群の造営基盤はこの小地域内にとどまるものであろうが、前方後円墳の造営基盤は、より広域の可能性がある。大室18号墳を除けば、周辺には前方後円墳が存在しないのである。大星山の集団は和田東山の集団の一部をなし、その相互関係は数世代継続したと考えられる。基礎的基盤をほぼ同じくし、墳形と墳丘規模において隔絶するありかたには、いわば、地域首長とその直属官僚層といった関係を見ることができるのではなかろうか。

2　中期以降の積石塚と合掌構造について

北部九州に見られる竪穴系横口式石室のなかには、板石の持ち送り積みで穹窿状の天井部をなすものや、玄室部から羨道部に至る構造が2号墳の石棺と類似するように思われるものがある。例えば、福岡県老司古墳の石室は、5世紀初頭から中頃の間に4基が順次構築された横穴式石室導入期の石室の一例であり、朝鮮半島に系譜が求められている（佐田1989）。その石室は、竪穴式石室に小さな羨道と墓道を付設するが、半島に直接系譜がたどれず、横穴式石室導入期における構築技術の未消化の結果ではないかという考えも示されている。これ以後、北部九州では、墓道・羨道・天井部の形態、壁体の構築法に伽耶・百済などからさまざまな要素を取り入れ、試行錯誤の期間を経た後に、横穴式石室の確立に至る。その過程は、外部から新要素を取り入れながら、それを定着させていくという、基本的には自立的発展過程として理解されているようである（藤井1992、小田1986、柳沢1991・1975）。そして、肥後型石室のように、以後も同形態の石室が一定地域で造り続けられ、地域性を示す例もある。北部九州では、5世紀前半以前はこのような初期横穴式石室は首長墓の埋葬施設であった。それに対し中小古墳では、5世紀中葉以降、竪穴系横口式石室が盛行するという。また、5世紀の首長墓には横口式家形石棺も現れる。5世紀代の西日本各地で九州系横穴式石室の類例とされるものが認められることからも（土生田1992）、そういった動きが善光寺平にも間接的にせよ影響を及ぼしたことは考えられないことではない。

鐙塚の帯金具が積石塚と渡来系文物の結びつきを示すものとするなら、2号墳の飾金具は合掌構造とそれとの結びつきを示すことになるのであろうか。5世紀前半代は須恵器をはじめ、さまざまな大陸系文物が急激に波及している。2号墳の構造は、西日本にそれほど遅れることなく、合掌形天井や横口構造に関する知識が、畿内あるいはその他の地域を媒介として、少なくとも伝聞程度にはこの地に到達していたこ

とを示すものではなかろうか。善光寺平においては、2号墳以後、横穴式石室の導入までにしばらくの時間が必要であった。その間、この地域で中小古墳の埋葬施設として自立的に展開したのが石棺系の合掌構造ではなかったのか。

善光寺平における合掌形石室および積石塚は、古くから渡来系氏族と結びつけて語られることが多かった（桐原1989）。これらの新しい要素を持つ古墳が小地域内では初源期の古墳であることが多いことから、それがもたらされた直接的契機が、渡来人など外来系の人々の定着にあった可能性は十分考えなければならない。しかし、大星山古墳群では、前代からの要素を強く引き継いだ古墳群のなかに、新しい一要素として積石塚や合掌構造が、群形成の途中で現れる。これは、新しい古墳造営集団の定着というより、在地集団が新来の墓制の一要素を取り入れたことを示している。もちろん、それが新たな集団の定着が影響した結果であったということはあり得ることである。しかし、「影響」と「渡来人の墓」では、この地域の古墳時代社会の展開を考える場合にまったく意味が異なる。まして、程度の差こそあれ、半島・大陸起源の文物を持たない古墳は日本にはないことからすれば、埋葬施設の特定の要素を過大に評価すべきではないかもしれない。例えば、さきの九州に見られる初期横穴式石室の導入は、在地豪族層の対百済外交への関与のなかでもたらされたと考えられ、それが地域性を示しながら継続することも、地域首長層の政治的結合体の反映と見られているのである。同様の視点で善光寺平を見ることは十分可能であろう。

積石塚と合掌構造が必ずしも結びつかないことは、ここでも実証された。それは1世代程度前後して大星山にもたらされている。5世紀前半のことである。この事態を、その後のこの地域における積石塚・合掌構造の展開に直接結びつけるのは、まだ早尚であろう。大星山に見られる様相は、積石塚と合掌形が重要な位置を占め古墳時代末まで継続する大室古墳群などとは異なっている。すくなくとも、この種の古墳について、すべてを同列に見ることはできないことを示している*。

＊本項の記述にあたって西山1995・小林1978に教えられた点が多い。しかし、論旨はかならずしも一致しない。

3　4・5世紀の善光寺平

組合式石棺は5世紀以降ほかの埋葬施設と並んで用いられているが、竪穴式石室・石棺・木棺直葬の三者は5世紀代にはかなり明確な階層性を示している。つまり、5世紀前半以前では、前方後円墳は竪穴、中小古墳は竪穴または石棺を用いる。5世紀中頃以降は、前方後円墳が竪穴または直葬、中小古墳は石棺または直葬で、善光寺平周辺部では直葬、これ以前から首長墓の系譜を持つ善光寺平中心部では、竪穴・石棺が用いられる傾向がある。首長層にも埋葬施設の形式で階層性が認められるといえよう。石棺は一貫して中小規模円墳・方墳の埋葬施設であった。

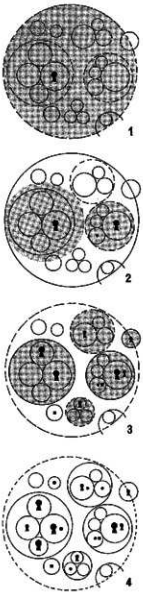
善光寺平の5世紀は古墳分布の拡大期である。前方後円墳の地域的拡大が、首長層の政治的再編成を示すものであるとするなら、これら中小古墳は、その政治的再編成過程で新たに古墳造営主体となった、前方後円墳被葬者層に直属する階層と考えられる。大星山の場合、副葬品の中で一貫して武器類が卓越する点を重視すれば、首長権の軍事的部門を担った一族であったかもしれない（甘粕1993）。この階層は、前方後円墳築造基盤を構成するいくつかの小集団の中の有力な集団の長でもあっただろう。

歴代地域における土口将軍塚・森2号墳といった、前方後円墳・円墳の関係が5世紀前半代に現れたことに比べれば、大星山古墳群・和田東山古墳群では、同様の事態が他地域に先んじて現れたことになる。そして、和田東山古墳群に見られる安定した首長系譜と大星山古墳群との関係は、5世紀なかばには崩壊するのである。しかし、このことに周辺地域より早い政治的社会の発展・安定と没落を見ることができる

かどうか。はたして、和田東山古墳群の終焉は大星山と同時期であろうか。

和田東山の前方後円墳の規模のみを見ても、同時期の善光寺平において卓越した存在ではない。4・5世紀のこの地域における古墳造営は、地域社会の政治的発展段階を示すというより、対外的要因につよく規定されている（土屋1994）。むしろ、ふたつの古墳群の空間的近接は、土口将軍塚古墳と森2号墳の位置関係と比べ、直接的な首長基盤の狭さを示すものと見ることもできるのではないか。また、時期的な点でも、川柳将軍塚古墳・森将軍塚古墳の周辺では今後、前期にさかのぼる円墳・方墳が見出される可能性は大きい。

この地域の古墳については数多くの研究の蓄積がある。筆者の非力ゆえに本書では触れ得なかった課題も多いが、大星山古墳群が今後の研究に貴重な資料を残したことだけは確かである。今は先学に敬意と感謝を表しつつ、これ以上紙片を費やすことを避けたい。最後に、本項での検討を概念図（第79図）に示して結びとする。



第79図　集団関係と古墳築造の概念図

文献目録（五十音順）

青木和明1987 「土口将軍塚古墳出土土師器の編年的位置」『土口将軍塚古墳』長野市・更埴市教育委員会
青木和明・矢口忠良・樋口かよ子1988 『地附山古墳群』長野市教育委員会
青木和明・寺島孝典・他1992 『篠ノ井遺跡群(4)』長野市教育委員会
青木一男1992 「56号石棺」『森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
青木一男1990 「土器に見る森将軍塚古墳出現の前後」『長野県埋蔵文化財センター紀要』3
赤塚次郎1996 「初期前方後円（方）墳出土の土器」『季刊考古学』第52号
赤塚次郎1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎1990 『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
安達厚三・木下正史1975 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60巻2号
甘粕　健1989 「三王山古墳群の歴史的評価」『保内三王山古墳群』三条市教育委員会
甘粕　健1993 「山谷古墳の歴史的意義」『鉞後山谷古墳』巻町教委・新潟大学
飯島哲也・矢口栄子1992 「居住域遺構の調査」『石川条里遺跡(6)』長野市教育委員会

伊藤勇輔1985 『沼山古墳・益田池堤』橿原考古学研究所
宇賀神誠司1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』 2
宇賀神誠司1990 青木一男「土器様相変化の素描」の土器編年表『長野県考古学会誌』69・70
岡村秀典1985 「鉄製工具」『弥生文化の研究』 5　雄山閣
岩崎卓也1992 『森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
岩崎卓也1982 「舞鶴山1・2号古墳」『長野県史考古資料編』1巻(2)
大塚初重1982 「大室古墳群」『長野県史考古資料編』1巻(2)
大塚初重・他1961 『三池平古墳』庵原村教育委員会
大場磐雄・石井昌国・一志茂樹1964 「長野県東筑摩郡坂井村安坂横石塚の調査」『信濃』16巻4・6号
小田富士雄1986『古墳時代』『発掘が語る日本史』 6　新人物往来社
木下　亘1992 『長野県下出土の古式須恵器概観』『森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
桐原　健1989 『積石塚と渡来人』東京大学出版会
小林三郎1994 「東山古墳群調査の意義」『長野県考古学会誌』71・72
小林秀夫1978 「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』長野県考古学会
坂井秀弥・川村浩司1993 「古墳出現前後における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
佐田　茂1989 「石室の構造」『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書209集
白石太一郎1985 「年代決定論」『日本考古学』 1　岩波書店
末永雅雄・他1977 『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十五冊
杉山秀宏1988 「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八
田嶋明人1986 『除町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
田中新史1979 「古墳出土の飾り弓一鈴飾りの弓の出現と展開」『伊知波良』 1　伊知波良刊行会
千野　浩1993 「本村東神遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について」『本村東神遺跡』長野市教育委員会
千野　浩1987 「土口将軍塚古墳出土の鉄鏃と甲冑について」『土口将軍塚古墳』長野市・更埴市教育委員会
土屋　積1994 「森将軍塚古墳の周辺」『岩崎卓也先生退官記念論文集』雄山閣
土屋　積1982 「七瀬及子塚古墳」『長野県史考古資料編』1巻(2)
寺沢　薫・徳田誠志1995 「東海・中部地域の前方後円墳」『前期前方後円墳の再検討』埋蔵文化財研究集会資料
長野県史刊行会1981 『長野県史　考古資料編　遺跡地名表』
永峯光一・亀井正道1959 「長野県須坂市鎧塚古墳の調査」『考古学雑誌』第45巻第1号
中村雅俊1986 「虚空蔵信仰と十三参り」『仏教民俗学大系』 6　名著出版
西谷真治・樂木義昌1959 『金蔵山古墳』倉敷考古館
西山克己1995 「信濃の横石塚と合掌形石室」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
土生田純之1992『横穴系の埋葬施設』『古墳時代の研究』 7　雄山閣
東山古墳群調査団1994『長野県和田東山3号墳の調査』『明治大学考古学博物館館報』No.9
平野　　1971 「玉類について」『掛川市字潤ケ谷横穴墳発掘調査報告』静岡県文化財調査報告書第10集
藤井和夫1992 「東アジアの横穴式墓室」『新版古代の日本』 2　角川書店
古瀬清秀1991 「農耕具」『古墳時代の研究』 8　雄山閣
北條芳隆1992 「後円部中心埋葬の系譜」『森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
森本六爾1926 『金蔵山古墳の研究』
矢口忠良1982 「長礼山2号古墳」『長野県史考古資料編』1巻(2)
柳沢一男1991 「横穴式石室の形成と波及」『新版古代の日本』 3　角川書店
柳沢一男1975 「北部九州における初期横穴式石室の展開」『九州考古学の諸問題』
山根洋子1987 「叩きの道具」『土口将軍塚古墳』長野市・更埴市教育委員会
横山浩一1953 「長丘村古墳調査」『下高井』長野県教育委員会
若林　卓1994 「東平古墳群」『長野県埋蔵文化財センター年報』10

第二部　北平塚・北平１号墳

第１章　発掘調査に至るまで

第１節　北平塚・北平１号墳の環境

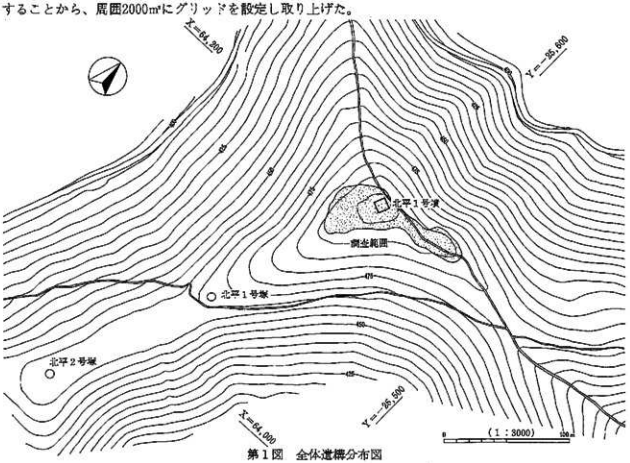
１　名称、位置、概要

北平１号墳は長野県長野市松代町東寺尾寺尾山字「北平」（以下北平と称す）北緯36°34′東経138°13′に、北平１・２号塚は同字「扇平」（以下扇平と称す）に所在する遺跡である（第１・３図、PL. 47）。

北平１号墳は、比高差150ｍの峰頂上に占地し、その墳形は前方部が未発達な前方後方形墳丘墓である。中部高地型櫛描文系土器群の最末様式である御屋敷期の土器を出土した墳丘墓で、その土器様式から３世紀後半の年代を与えた。

北平１・２号塚は、北平の峰から稜線上150ｍ南方の復尾根上に位置する。220㎡を調査した。両者の間隔は150ｍほどで、塚の構造から同時期に機能していたものと考えられる。２号塚から出土した銭貨から15世紀以降の構築と考える。他の時代の遺物は確認されていない。なお、１号塚と２号塚の間は平坦な尾根であったが、調査は実施していない。

北平１号墳墳丘ならびに周辺からは石器、剥片類、須恵器、土師器、灰釉陶器、中世かわらけが散布することから、周囲2000㎡にグリッドを設定し取り上げた。

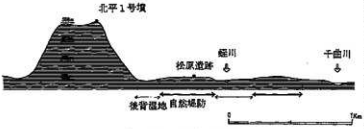


第１図　全体遺構分布図

２ 環　境

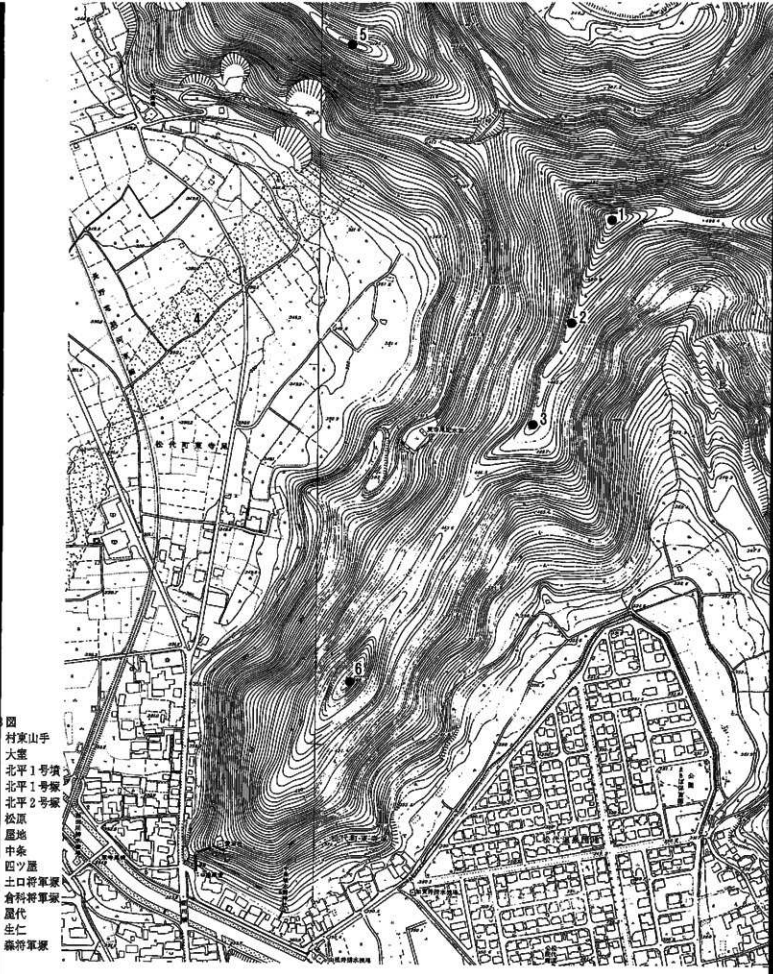
北平塚、北平１号墳が所在する長野盆地南部（第３図）は、千曲川（A）の形成した自然堤防（B）、後背湿地（C）が盆地内に広がり、その背後は急峻な山系（D）となる（第２図）。当地域の山系は千曲川左岸の西山山地と右岸の河東山地（D）に分かれる。河東山地は山稜部が枝状に延び、壮年期の侵食地形をなし、沖積面に山稜がゾウの鼻のようにのびるリアス式海岸風の形状をなす（PL. 47）。その尾根上には前・中期古墳、中世山城が築かれることが多い。

北平塚、北平１号墳は河東山地の尼巌山山系から沖積地にはり出す枝状の山稜部の峰および尾根上に位置し、沖積地との比高差は110～150mを計る。眼下の沖積面、自然堤防上には縄文時代から、弥生、古墳、古代、中世のムラが調査された松原遺跡（６）が展開する（第２・４図、PL. 47）。松原遺跡は蛭川（E）が形成した河東山地山麓部の扇状地末端と自然堤防付近に位置するが、北平１号墳からは蛭川流域の扇状地（F）を望むことができる。墳丘から視界のきく３世紀のムラとして、蛭川水系の屋地・中条遺跡（７・８）、千曲川自然堤防上の四ツ屋（９）、大室遺跡（２）がある。同時期の鉄剣を出土した墓が明らかとなった村東山手遺跡（１）も眼下となる。



第２図　立地概念図

第３図　周辺遺跡分布図（１：50,000　国土地理院地形図「長野」より）

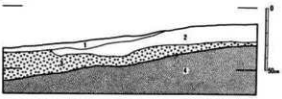


第４図　北平の尾根と松原遺跡周辺図（１：5,000）
１．北平１号墳　２．北平１号塚　３．北平２号塚　４．松原　５．金井山城　６．寺尾城

3　層序と調査範囲

(1)　層序（第５図）

北平１・２号塚、北平１号墳の所在する寺尾山字北平、扇平の基盤層は、大星山古墳の環境でもふれられている通り、風化の進んだ泥岩層である。尾根上の表土は黄褐色泥岩基盤層の風化粘質土および細砂土で、その厚さは20～30cmときわめて薄い。土壌化した黒褐色系の堆積土はきわめて限られた範囲にみられるのみである。同様な基盤層は森将軍塚古墳一帯にもみられる。



第５図　基本土層図

〈基本土層〉

１層・暗黄褐色土……　２～15mmの泥岩細礫をベースとする泥岩風化細砂土。土壌化しつつある堆積土である。黒褐色をなす範囲が部分的に尾根の頂上付近にみられる。古代～近世の遺物を含む。

２層・黄褐色土……　２～５mmの細礫をベースとする粘質土で、１層に比べ粘性がある。泥岩岩盤の風化土。３層に比べて泥岩の風化が進んだ層である。弥生時代以前の石器群を含む。

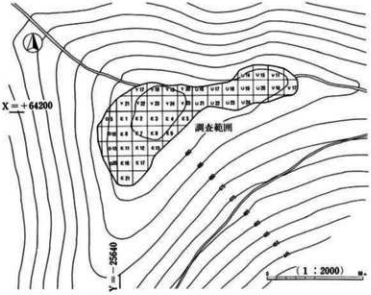
３層・黄褐色砂礫土……　基本的には２層と同一層であるが、基盤層直上にのる風化層で２～５cm大の泥岩礫を含む。遺物の出土はない。

４層・黄褐色泥岩基盤層……　北平峰・尾根の基盤層である。風化が進みもろい泥岩層部分と風化が進まず、硬い基盤層の部分とがある。

(2)　調査範囲（第６図、PL. 47）

北平塚および北平１号墳周囲2220m²に調査区を設定した。調査方眼であるグリッドは当センターの調査原則に基づき、国土座標のメッシュに従い、８×８mのマスを設定しアルファベットと数字で呼称した。（『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12』「第１章　第２節　調査の方法」を参照されたい。）

北平の峰（D・Eグリッド付近）



第６図　調査グリッド設定図

第2節　調査に至る経緯

1　調査の経緯

上信越自動車道建設事業は、善光寺平を通過するが、沖積地帯を通過するために特殊な工法を用い地盤沈下の対策を講じる。ほとんどの区間を盛土で通過するため大量の土砂を必要とする。事業者はルートに近く、集落内を通過することなく、安全に土運搬が可能な採土場を探っていた。ところがルート周辺の採土可能地では、古墳・山城等が広く分布し、協議は不成立のまま年月だけが経過した。

平成元年冬、奇妙山系の尾根支脈一帯が周知の埋蔵文化財の分布が少なく、運搬ルートの条件も比較的容易であることから候補地となり県教育委員会と協議がなされた。

県教育委員会では日本道路公団長野工事事業所、長野市教育委員会と予定地を踏査し包蔵地の把握を行った。

その結果、予定地内には金井山城と寺尾城の外郭の一部がかかっていた。また、中央部の狭長な尾根には人工的と思われるマウンドが3地点確認され、事業化決定後県教育委員会の責任のもとで試掘調査を実施し再協議することとなった。

平成元年4月、試掘調査を実施したところ尾根の突端部の1基（北平1号墳）は、盛土が硬く、叩きしめられた状況で土器片が出土し、弥生時代終末の墳墓であろうと推定した。尾根中央部の2基は盛土が軟らかく、古銭が出土し中世の塚であろうと想定された。

試掘調査の結果により再協議の結果、周知の金井山城跡、寺尾城跡以外の北平1号墳、北平1号・2号塚は記録保存とし平成2年度に発掘調査することとなり、遺跡発見届等の手続きは長野市教育委員会、発掘調査等の契約は県教育委員会と日本道路公団との間で結ばれた。

北平1号墳は、数基の墳墓の存在も予想されること、また中世の城郭遺構の残存も想定されたため、尾根一帯を包蔵地とした。

尚、平成3年3月北平1号墳の予備調査を実施し、弥生時代終末期の重要な遺構であることが判明したため、土取り予定地からの除外を含めて保存措置を要望したが、工事工程上や新しい土取り用地の策定上やむを得ないと判断し、記録保存とした。

土取り工事が進む北平尾根

北平1号墳の調査

第３節　調査体制

平成２年度ならびに平成３年度の発掘調査、および平成７年度の整理作業は以下の体制で行われた。

発掘調査　㈶長野県埋蔵文化財センター

事務局長　　塚原隆明

同総務部長（兼長野調査事務所庶務部長）　塚田次夫

同調査部長（　〃　　調査部長）　小林秀夫

長野調査事務所所長　　峯村忠司

同調査第一課長　　白田武正

同調査研究員　　青木一男　小林清人　甲田圭吾　下島浩伸　中沢道彦

整理作業　事務局長　　峯村忠司

同総務部長　　西尾紀雄

同調査部長（兼長野調査事務所所長）　小林秀夫

同総務部長補佐　　外谷功

長野事務所調査課長　　百瀬長秀

同調査研究員　　青木一男　町田勝則　徳永哲秀　西嶋力

同庶務課　　磯野道子　堀川正子　篠原敏雄　下平正彦　原田和男

柳町しづ江　新井晴美

第２部「北平塚・北平１号墳」の編集は小林秀夫、百瀬長秀、上田典男の指導の下、青木が行った。執筆・作業分担は下記の通りである。

小林秀夫　　第１章２節

町田勝則　　第２章第３節１

パリノ・サーヴェイ株式会社　　第３章２節

青木一男　　第１章１、３～４節、第２章１～２節、３節２、第３章１節

徳永哲秀　　土器復元

西嶋　力　　写真撮影

発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸氏・諸機関よりご教示・御協力をいただいた。記して御礼申し上げたい。

青木和明　赤塚次郎　飯島哲也　岩崎卓也　尾見智志　風間栄一　片岡正人
加納俊介　川村浩司　小林高雄　小林正春　小山岳夫　坂井秀弥　坂本　彰
佐藤信之　品田高志　島田哲男　効川朋広　田口一郎　田嶋明人　千野　浩
寺島孝典　栃木英道　直井雅尚　中司照世　藤沢高広　前島　卓　森嶋　稔
矢口忠良　矢島宏雄　山下誠一　若狭　徹　更埴市教育委員会

長野市埋蔵文化財センター　長野県考古学会古墳時代研究部会　長野県立歴史館　（敬称略）

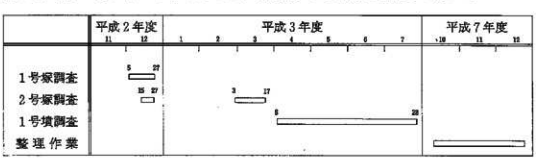
整理作業・実測図の作成・トレースについては篠ノ井遺跡群、松原遺跡の整理作業スタッフおよび写真室、復元室、保存処理室の御協力を得た。

第４節　調査経過と方法

１　調査経過

北平塚の調査は、工事工程との調整で平成２年12月に実施することとなった。松原遺跡発掘現場から比高差110mの山頂部での調査は、降雪や凍結のため調査は年内に完了できず、３月に補助調査を行った。北平１号墳の調査は、墳丘直下の土採り作業と併行して平成３年４月から実施したため、調査現場の安全管理には特に注意を払った。調査の進行に従い墳丘周囲に原始および古代の遺物が散布していることが明らかとなり、調査終了予定６月末日が若干延期されることとなった。

整理作業は、平成７年度10月から松原遺跡弥生時代中期の整理作業と併行して行った。



第７図　調査・整理進行図

２　調査方法

遺跡名　北平塚・北平１号墳

遺跡記号　北平塚　（ＢＫＩ）

北平１号墳（ＢＫＡ）

発掘手順　調査以前の墳丘測量を実施後、墳丘中心軸および中心軸に対して直交するベルトを残し表土剝ぎを行い、墓壙・墳丘施設の確認を行った。埋葬施設検出後は、墓壙内を精査し、副葬品の検出を行う。埋葬施設内の埋土はすべて土のう袋に収納し、ふるいにかけたが水洗は行っていない。埋葬施設および墳丘構築面は構築手順と逆に解体し、石槨を露出させ盛土すべても除去した。

図面記録　調査前の地形測量　セスナ機による空中写真測量（委託）

㈲写真測図研究所

墳丘施設検出後の墳丘測量　バルーンによる写真測量（委託）

㈲写真測図研究所

埋葬施設および土層　調査研究員による簡易遣り方測量

遺物整理　土器、その他　調査研究員および調査補助員

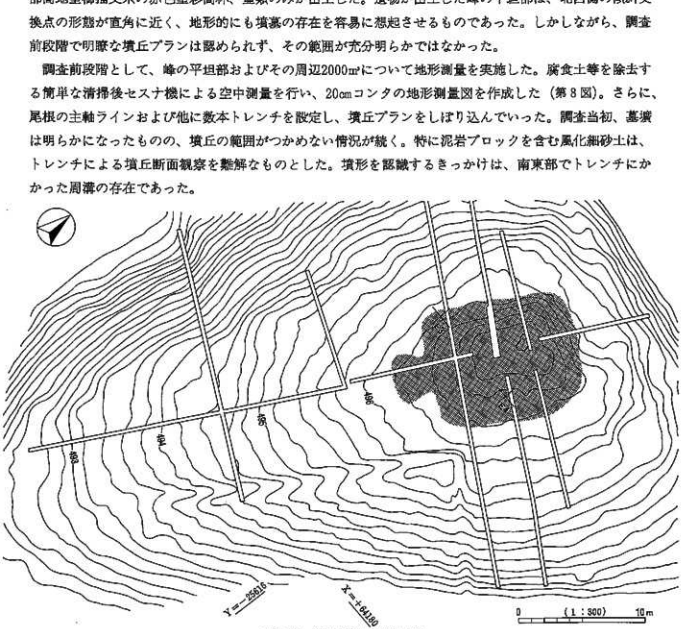
第２章　発掘調査

第１節　北平１号墳の調査

１　発掘の経過

北平の峰および尾根は、調査開始までに樹木は伐採され、地形の起伏が明瞭に観察できた。前年度、長野県教育委員会文化課による踏査によって赤色塗彩土器破片が採集され、試掘によって峰の平坦部から中部高地型櫛描文系の赤色塗彩高杯、壺類のみが出土した。遺物が出土した峰の平坦部は、北西側の傾斜交換点の形態が直角に近く、地形的にも墳裾の存在を容易に想起させるものであった。しかしながら、調査前段階で明瞭な墳丘プランは認められず、その範囲が充分明らかではなかった。

調査前段階として、峰の平坦部およびその周辺2000㎡について地形測量を実施した。腐食土等を除去する簡単な清掃後セスナ機による空中測量を行い、20cmコンタの地形測量図を作成した（第８図）。さらに、尾根の主軸ラインおよび他に数本トレンチを設定し、墳丘プランをしぼり込んでいった。調査当初、墓壙は明らかになったものの、墳丘の範囲がつかめない情況が続く。特に混岩ブロックを含む風化細砂土は、トレンチによる墳丘断面観察を難解なものとした。墳形を認識するきっかけは、南東部でトレンチにかかった周溝の存在であった。



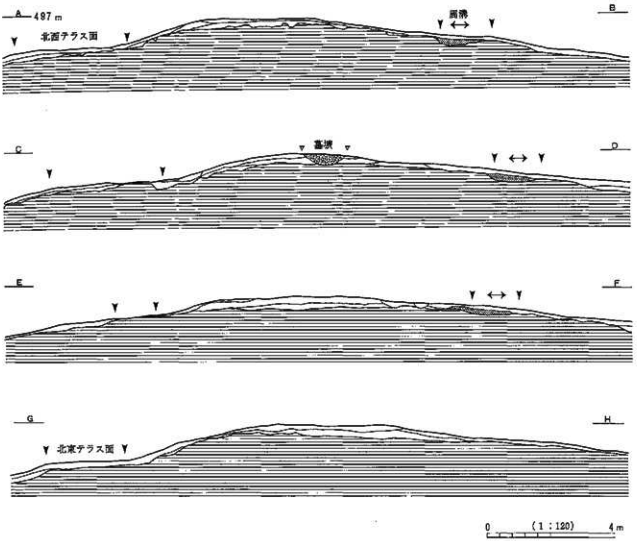
第８図　北平尾根地形測量図

2　墳丘

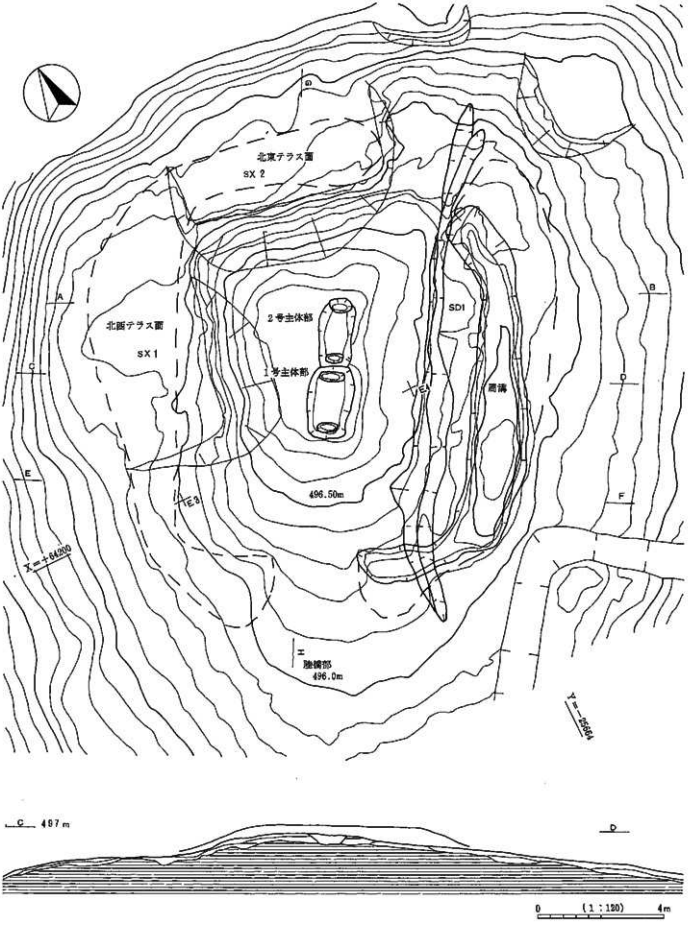
(1)　墳丘の形（第10・12図、PL. 48）

北平1号墳は前方後方形をなす墳丘墓である。その規模は、埋葬主体部が張り込まれる長方形墳丘部で長軸11.5m、短軸9.5mを計る。周囲の平坦テラス面および陸橋部にあたる範囲を含めるならば、その墓域は長軸17m、短軸15mの不整形を示すこととなる（第10・12図）。

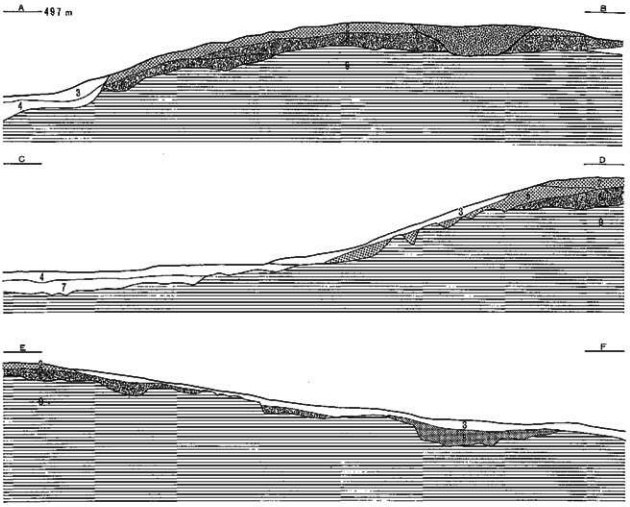
周溝は墳丘の南東側長辺を区画し、南西側短辺の一部で立ちあがる（PL. 50）。その幅は0.7～2.0mと一定しないものの、おおむね1.0m以上の幅をもつ。周溝の基底部496.0m前後のレベルが北西側の傾斜変換ンベルとほぼ一致し、テラス面の高さとなることから北西側の墳丘堀を想定したが、傾斜変換点で明確な墳丘堀を検出できたわけではない。傾斜変換点と周溝立ちあがりを結んだライン上中央部に墓壙が掘り込まれている。北西および北東側の傾斜変換点およびテラス面は調査以前から明瞭で、その墳丘裾を496.0m付近に求めたが、いずれも後世の深削テラス面ＳＸ１、ＳＸ２（第10図）によって若干削られている。しかし、大きく墳丘を改変することはない。南西側に周溝が立ちあがる496.3m付近で傾斜変換を認めることもできるが、496.0～496.3m付近の中央に陸橋部を想定した。同陸橋部については不明瞭な観はいな



第9図　北平1号墳墳丘断面図（1：120）



第10図　北平１号墳墳丘測量図（１：120）



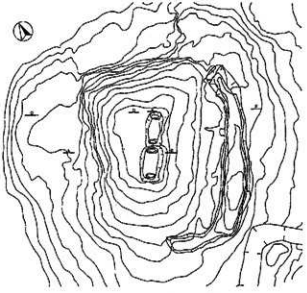
土層説明
1．褐色泥岩質細砂土(墓横内盛土)
2．暗褐色泥岩質細砂土(墳丘盛土)
3．暗黄褐色粘質土
4．暗黄褐色泥岩質細砂土　泥岩ブロック含む
5．暗褐色泥岩質細砂土(墳丘盛土)
6．黒褐色泥岩質細砂土(基本土層1層)
7．黒褐色泥岩質土　泥岩ブロック含む
8．黒褐色泥岩質細砂土
9．黄褐色泥岩質岩盤(基本土層4層)

めないが、方形墳丘部より外方にはり出す陸橋部をもち、前方後方形を呈している。その前面に区画の溝、テラス等を設定することなく、自然地形に変換していくものと考えられ、前方後方形墳丘墓の初期の形に類似するものがある。

(2)　削り出しと盛土（第9・10・11図、PL. 48）

墳丘の高さは、周溝最下部および北西テラス面から計測しても1.1m余りと低いことが特徴となる。これは後世の改変および墳丘の流出も考慮しなくてはならないが、本来さほど高い墳丘があったとは考え難い（第10、11図）。

墳丘盛土は現状では15cmほどできわめて薄い盛土となる。第11図A・Bラインは北西テラス面、

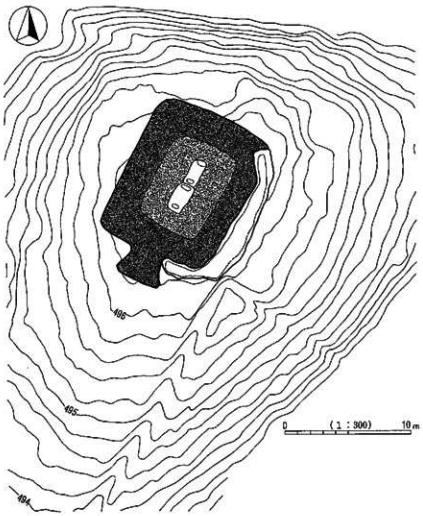


第11図　北平1号墳墳丘土層図

墳丘、墓壙の断面図である。9層の黄褐色泥岩質岩盤上に6層の黒褐色泥岩質細砂土が乗る。当初、同層は墳丘の盛土ではないかと考えたが、北平の峰付近の泥岩質岩盤上には黒褐色土が薄く堆積する地点も確認できることから自然堆積土と考えた。ただし、同層のように15～20㎝堆積するのは北平1号墳墳頂部のみである。3層は墳丘の流出土で、2層暗褐色泥岩質細砂土上に泥岩細砂土の黄褐色土が版築状に重ねられていたことを示唆する。第11図C・Dラインは北西テラス面と墳丘の断面図である。テラス面7層黒褐色泥岩質土は自然堆積層で、4層黄褐色泥岩質細砂土は墳丘の流出土ならびに後世の削平テラス面SX1との関連が考えられる。第11図E・Fラインは南西墳丘面と周溝部の断面図である。墳丘斜面はその傾斜がゆるく、岩盤の上に流出土の3層がすぐに乗り、しかもその厚さが薄いことも考慮すれば、後世の改変が想定できる。同3層中から黒色土器片が出土する。周溝は岩盤層を削り出していた。また、自然堆積土の6層がCDラインの墳丘斜面ではみられず、岩盤上に盛土層5層がのることを考えると、墳墓構築の際、その周囲は岩盤を削り出し墳形をととのえていることが指摘できる。

(3)　占　　地（第12図、PL、47）

北平の峰からは3方向に尾根の支脈が分かれ、その北東斜面は最も急傾斜となる。北平1号墳は北東斜面および北西斜面のピーク部分をカットする形でその北西側長辺が設定され、南東側長辺は周溝により区画される。つまり、ややなだらかな峰の平坦部でも傾斜のきつい北東・北西斜面側に墓域を設定し、北東・北西側の泥岩質岩盤を削り出すことによって墳丘を形づくり、周囲に幅2～3mほどのテラス面を形成する。北東テラス面からの墳頂との比高差は1.4m、北西テラス面からの墳頂との比高差は1.1mを計る。北東・北西側ラインは岩盤を削り出し、テラス面を形成することによって墳丘が明確となっており、北西側の松原遺跡側沖積地から見上げることを意識している。なお、陸橋部を尾根下方側に向けるその占地のあり方は、飯田市孤塚古墳、松本市弘法山古墳、長野市姨塚古墳等の前方後方墳に共通する点であり、注意する必要があろう。



第12図　北平1号墳の占地

3　槨と棺

(1)　埋葬主体部の調査

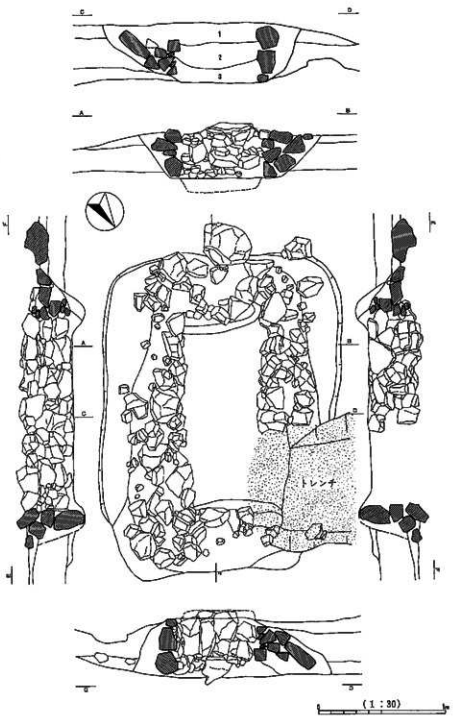
墳頂部の調査においては、墳丘を5～7㎝ほど掘り下げ

たところ赤色塗彩された高杯、壺類が集中して姿を現し始めた。墓壙の範囲では、土器群が一定空間の中に列状に分布していることが明らかとなり、棺上に堆積された土器群が棺内に落ち込んだ様子が窺えた。この時点で第1号埋葬主体部墓壙範囲に集石が確認され、礫槨状施設が明らかとなった。

(2)　第1号埋葬主体部（第11・13図、PL. 49）

①　墓壙・礫槨状施設

長軸2.5×短軸1.6mの隅丸長方形をなす。墳頂平坦面の南側に片寄った形で検出されたが、墳丘南側が後世に削り込まれたための見かけ状の現象としてとらえられる。本来は墳頂平坦部中央に、墳丘の主軸とほぼ一致するN－59°－Eに掘り込みまれた墓壙の一つである。墳丘盛土の2層を切る（第11図、PL. 49）ことから、墳丘構築中あるいは構築後に掘り込まれたいわゆる「掘り込み墓壙」である。床面は9層泥岩質岩盤層まで達する（第11図）。墓壙内には10～20cm大の凝灰岩系泥岩角礫が槨状をなし、棺の構造を推定するに至った。この礫群が棺を納めていた槨であるという認識で、同礫群を礫槨状施設と呼ぶ。第13図断面図を検討すると、墓壙中央の棺が収められていたと考えられる部分に2～3層があり、その両側に礫群がみられる。礫は小口部分をそろえることなく積まれており、礫槨を作ってから棺を納めたとは言い難い状況にある。礫槨状施設とする礫群は礫のみによって構成されるわけでなく、暗褐色泥岩細砂土も混入する。



第13図　第1号埋葬主体部

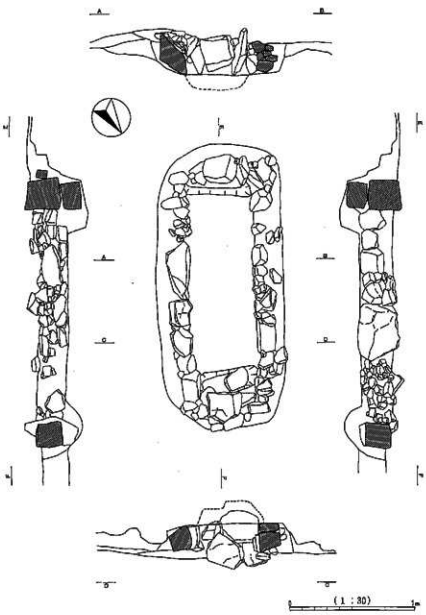
② 棺

棺は、礫郷状施設の状況から、長軸1.7×短軸0.6m高さ0.4m以上の木棺が想定される。棺材は検出されていない。頭位は、棺床遺物の出土状況からN－59°－E方位をとる。棺床は平坦面をなし、小口部で墓壙底面をさらに幅20×50cm深さ10cmほど小口穴を掘り込んでいる。西側小口穴では大形礫が縦に2つ立てられており、同底部にまで達する（PL. 49）。小口穴に材を設定する際、背後に礫をかませている。棺は墓壙内において、背後に礫をかませながら組み立てられたと考えたい。結果として礫郷状施設が残ることとなった。棺の形態は、平坦な墓壙底面および小口穴の所在等を考慮するならば、当地域において伝統的な弥生系組合式箱形木棺を想定して良いものと考える。

(3) 第2号埋葬主体部（第14図、PL. 49）

① 墓壙

長軸2.3×短軸1.0mの隅丸長方形をなす。第1号埋主体部同様、墳頂平坦部中央に、墳丘の主軸とほぼ一致するN－58°－E方向で、墳丘盛土2層から岩盤層にまで達する掘り込をもつ。第1号埋葬主体部との切り合い関係は不明瞭であったが、第1号埋葬主体部礫郷状施設北側に礫が認められないことから第1号埋葬主体部を切っているものと想定される。しかしながら、墓壙内出土土器から両者の時間差を認めることはできない。



第14図　第2号埋葬主体部

② 礫郷状施設と棺

墓壙内には第1号埋葬主体部と同様に泥岩角礫が郷状をなすが、第1号埋葬主体部に比べ墓壙内に礫を充填せずに高さもない。棺の周囲を礫でおさえた状況であった。棺は礫郷状施設の状況から長軸1.6×短軸0.5m、高さ0.3m以上の木棺が想定されるが棺材の検出はない。棺床は平坦面をなし、小口部に幅0.4×長さ0.5mほどの小口穴を削り込んでいる。棺は第1号埋葬主体部と同様に小口板が棺床以下に埋め込まれる組合式箱形木棺であったものと想定される。

4　出土遺物

北平1号墳に伴う遺物には土器と玉類がある。いずれも墓壙内および棺内で出土したものが主体となるが、周溝内からも若干出土している。土器と玉類に分けて詳述する。

(1)　土器（第15・16図、PL. 52～54）

①　第1号主体部（第15・16図、PL. 52・53）

第1号主体部から出土した土器で図示し得たものは第15図1～11、第16図12～16の16個体である。1～9、12～16が在来系の中部高地型櫛描文系土器群（以下、中部高地型と称す）であり、10～11が他地域に系譜を引く土器群である。

1は体部下半にゆるやかな稜をもつ壺で、頸部はゆるやかに立ち上がり、その内面に段はない。口縁部は意図的に打ち欠かれたようで接合資料はない。底部、体部の打ち欠きは観察できない。外面調整はタテヘラミガキ、赤色塗彩（以下、赤彩と称す）を施す。頸部文様帯はいわゆる櫛描「T字文」系で、横線文、垂下文、円弧文が組み合わされる。横線文帯は上から下方向に4段重ねる。垂下文は直線文と同一原体で2本1単位で、その下半を原体を器面から離すことなく互いに反対方向へ円弧文を描く。この垂下文を仮に「J字文」と呼ぶこととする。同部分は、破片部で1箇所観察できるだけであるが、横線文帯を3～4ケ所区画しているものと想定している。内面調整は体部下半は左上りハケ、体部上半はナデ調整を施す。口縁部内面はヨコヘラミガキ赤彩を施す。

2は頸部内面に段を持ち、口縁部が短い広口壺である。細片からの復元実測で不明瞭ながらも体部は球胴傾向を示すと考えられ、中部高地型の末期的様相を示す。調整は、外面に赤彩、ヘラミガキ、口縁部内面に赤彩、ヘラミガキを、体部内面にヨコヘラナデを施す。砂粒の動き、原体のスジは観察できない。文様帯は4段の直線文を上から下方向に施し、2本1単位のJ字文で区画する。J字文の単位は2箇所確認できるがその幅から4単位の区画であったものと考えられる。

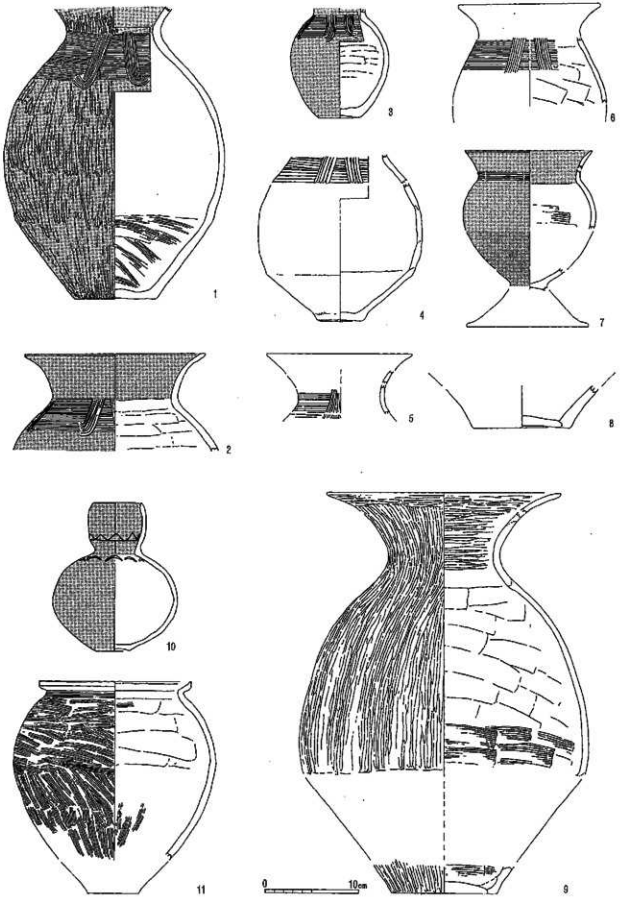
3は体部に稜を持たない小型壺で、体部中位に最大径をもち、頸部内面に明瞭な稜をもつ。調整は、外面に赤彩、ヘラミガキ、体部内面にヨコヘラナデ、口縁部内面に赤彩、ヘラミガキを施す。文様帯は3段の直線文を上から下へ施し、2本1単位のJ字文は2箇所確認できる。4単位の区画であったものと考えられる。

4は体部下半に明瞭な稜もつ壺で、体部中位に最大径をもち、球胴化傾向を示す。口縁部の接合資料がみられず、意図的に打ち欠かれているものと考えられる。底部、体部の打ち欠きは観察できない。調整は外面体部下半にタテヘラミガキ、上半にヨコヘラミガキを行い、赤彩を施さない。内面はナデ調整である。文様帯は確認できる範囲で2段の直線文を上から下へ施し、2本1単位のT字文を施す。

5、6は細片から図化した。調整は体部外面にヘラミガキを行い赤彩を施さない。6は内面をヘラナデ調整を施すが若干砂粒が動く。文様帯は5で直線文、2本1単位の垂下文が確認できるが、下半が不明で直線文の単位、T字文かJ字文いなるか否かは不明である。6ではやはり上半が不明であるが直線文は上から下方向に施す3段が確認でき、T字文も見られる。2対1単位になるのではないかと考えている。

7は細片から図化したが、脚部がつく広口壺で、頸部内外面が明瞭に折曲し、末期的傾向を示す。調整は外面に赤彩、ヘラミガキ、口縁部内面に赤彩、ヘラミガキ、体部内面にヨコハケを施す。広口壺は内面にヘラミガキを施す例が多いが、7はハケ調整のままである。頸部外面にいい籠状文を施す。脚と体部の接合は充塡技法で、充塡で内面に抜けた粘土をなでている。高杯15と同様の技法である。

8は、壺の下半部で、外面にタテヘラミガキ、内面に粗いヨコハケを施す。底部は円板を形成し、その



第15図　第1号堰葬主体部出土土器実測図

横から粘土紐をあてて積みあげている。1、4、9も同技法で形成されている。

9は体部下半に稜をもつと思われる壷で、同部に最大径をもつ。頸部は稜を持たずに口縁部が外反する。調整は口縁部をのぞき外面タテヘラミガキを行い、赤彩を施さない。内面は体部下半ヨコハケ、上半を左上がりヘラナデを行い、口縁部はヨコヘラミガキを施す。

10は赤彩、ヨコヘラミガキを施した東海系ひさご壷である。体部は胴部中位に最大径をもつ球胴をなし、くびれはない。底部は上げ底状にくぼませる。口縁部は、体部に比べて小さく、内彎して立ち上がり、端部を内そぎする。肩部および口縁部にヘラ描き沈線による連弧文を施文する。赤彩、胎土は他の土器と変りがない。

11は外来系の受口状口縁甕である。底部は平底になるものと考えられる。口縁部は強いヨコナデを施し、ツマミあげ状に立ち上がる。体部外面調整は、最大径より下半が下から上にハケを、上半は円弧状にヨコハケを施す。ハケメは非常に細かくち密で、砂粒が器面に表われない。同一原体によって肩部に直線文を施す。内面調整は下半をタテハケ、上半をヨコヘラナデを施す。器壁が厚い厚甕であるがヘラミガキ手法は用いていない。赤塚次郎氏より三河系ではないかという御教授を得た。

12～16は棺内に有段高杯の破片がないことから椀形の杯部をもつ高杯と考えられる。12～15が赤色塗彩を施し、16は施さない。12は外面に赤彩、ヘラミガキ、内面にヨコナデ後端部のみヨコヘラミガキを施す。4か所に透し孔があくものと考えられる。13は外面赤彩にヘラミガキ手法、内面はヨコハケ調整後端部のみヨコナデを施す。14は外面に赤彩、ヘラミガキ、内面にナデ調整を施す。4か所に透し孔があくものと考えられる。15は杯部端部に強いヨコナデが施され、端部がつまみあげ状に立ち上がる椀形の高杯である。外面調整に赤彩、ヘラミガキ、内面には接合部付近ユビナデ、端部にヨコ方向のヘラ削りを施す。円板充塡によって脚内面に飛び出た粘土をユビナデし、ひろげている。16は杯部が直線的に広がり端部にヨコナデを施さない高杯で、脚部内面を除きヘラミガキを施す。脚部内面はナデ調整を施す。

② 第2号主体部（第16図、PL. 54）

第2号主体部から出土した土器で図示し得たものは第16図17～23の7個体である。

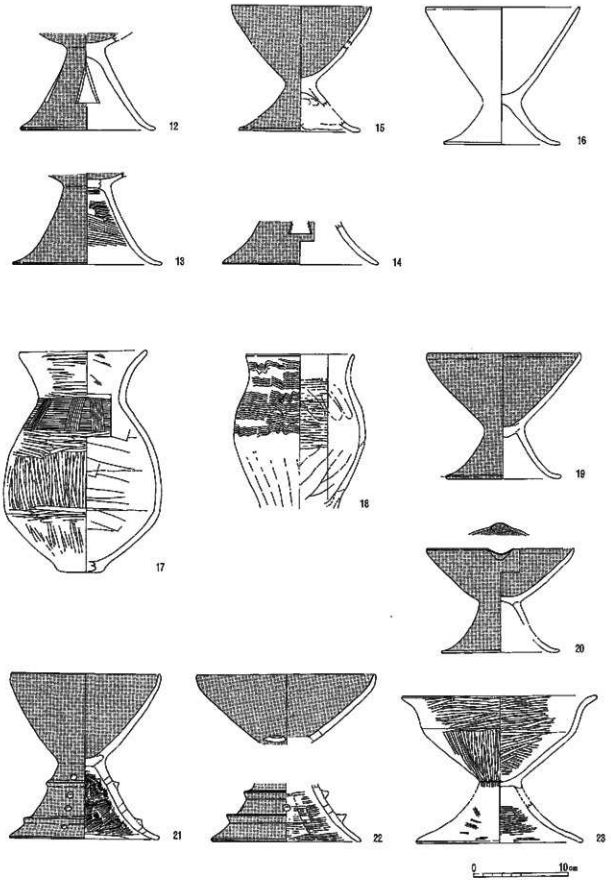
17は体部下半に稜をもつ壷で、体部中位に最大径をもち、球胴化傾向を示す。頸部は胴部最大径に比べ大きく、広口化傾向となる。口縁部は短く外反し、その端部外面を面取りする。調整は外面下半にタテヘラミガキ、上半にヨコヘラミガキを行い、赤彩を施さない。内面はヨコヘラナデ調整であるが、砂粒が動く。文様帯は3段の直線文を上から下へ施し4単位の垂下文で区画する。2本1単位が3カ所、1本1単位が1カ所となっている。

18は中部高地型櫛描文を施文する平底の甕で、胴部中位に最大径をもち口縁部は短く立ち上がる。胴中位より、上から下方向に6～7段の波状文を施す。胴下半の調整は、下から上方向のヘラナデを施し若干砂粒が動く。ヘラミガキ手法は用いられない。内面は下半にタテヘラナデ、上半にタテユビナデ調整を行った後ヨコヘラミガキを荒く施すが、胴下半にミガキは施されない。

19は口縁部にヨコナデを施しつまみあげる椀型の高杯で内外面に赤彩、ヘラミガキを施す。脚部内面はナデ調整、その端部にヨコナデを施す。

20は口縁端部にヨコナデを施し、つまみあげ状に立ち上がる椀形の高杯で片口がつく。調整は内外面にヘラミガキを施すが赤色塗彩されない。脚部内面はナデ調整、その端部にヨコナデを施す。

21・22は椀形の高杯であるが、脚部に貼りつけ凸帯がつき、丸い透し孔があけられるという特徴がある。凸帯・円孔は中部高地型の系譜からはおえないもので、在来と外来が折衷した要素をもつ。内外面に赤彩、ヘラミガキを施し、脚部内面はヨコハケを施す。円孔は4カ所にあるものと考えられるが、21では縦に3～4つ、22では2つ穿孔する。22の杯部下半に楕円形の焼成後穿孔が見られる。



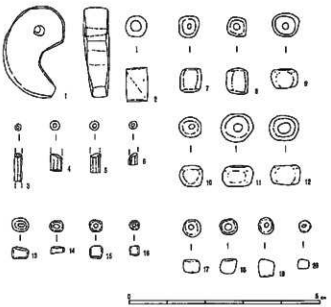
第16図　第１、２号堰葬主体部出土土器実測図（12～16・第１号堰葬主体部　17～23・第２号堰葬主体部）

23は杯部に段を持つ有稜高杯であるが脚部は裾広がりの形態をなし、脚部に限っては中部高地型の系譜ではおえない。21・22同様在来と外来が折衷した要素をもつ。調整は杯部外面上半をヨコヘラミガキ、下半にタテヘラミガキ、内面にヨコヘラミガキを行い赤彩を施さない。脚部外面はタテヘラミガキ、内面をヨコヘラミガキを行い赤色塗彩を施さない。

(2)　玉類（第17図、第1表、PL. 55）

墓壙内および周溝から出土した玉類にはガラス小玉・石製勾玉・管玉がある。ガラス小玉はスカイブルー系とコバルトブルー系が見られコバルトブルー系がやや大きめである。石製玉類の素材としては硬玉、碧玉、鉄石英、緑色凝灰岩と個体数は少数ながらもバラエティーに富む。

勾玉1は硬玉製で角をもつ。穿孔は片面穿孔である。2は緑色凝灰岩製で研磨痕のスジは見られない。3～6の碧玉・鉄石英製の細型管玉は研磨痕のスジが観察される。いずれも欠損部をもち、3が両端を、4～6が片面を欠損する。4～6は別個体と考えている。ガラス小玉は厚さが一定でなく断面が台形状をなし、管と並行したスジが認められることから、管切り技法で製作されたものと考えられる。



第17図　玉類実測図（原寸）

No.	材質	色調	短径	長径	厚さ	重量
1	勾玉　硬玉	緑白色	13.7	23.8	7.05	4.223
2	管玉　緑色凝灰岩	灰白色	5.9	5.9	9.1	0.441
3	〃　碧玉	緑色	2.2	2.2	7.6	0.047
4	〃　鉄石英	赤褐色	3.1	3.1	4.7	0.067
5	〃　〃	〃	2.75	2.75	5.2	0.067
6	〃　〃	〃	2.55	2.62	3.2	0.024
7	ガラス小玉　ガラス	コバルトブルー	6.1	6.3	6.9	0.376
8	〃	〃	5.5	6.3	5.6	0.351
9	〃	〃	6.7	7.4	5.3	0.373
10	〃	〃	5.6	6.3	5.3	0.496
11	〃	〃	7.6	8.6	5.6	0.496
12	〃	〃	6.9	8.1	5.2	0.399
13	〃	スカイブルー	4.3	5.0	2.8	0.074
14	〃	〃	3.4	3.9	1.8	0.026
15	〃	〃	3.7	3.9	3.3	0.061
16	〃	〃	3.0	3.0	2.65	0.033
17	〃	〃	4.8	4.9	3.8	0.121
18	〃	〃	4.8	5.05	3.7	0.095
19	〃	〃	4.6	4.6	5.1	0.149
20	〃	〃	3.4	3.5	2.8	0.034

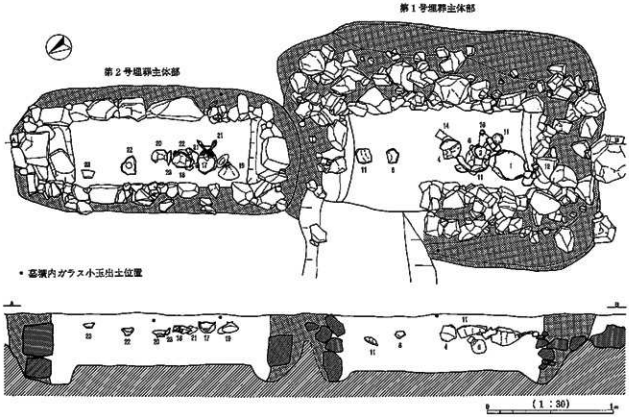
第1表　玉類観察表

(3)　遺物出土状況（第18・19・20図、PL. 50）

①　棺上に埋置された土器群（第18・19図、PL. 50）

墳丘および周囲の調査では出土遺物を全点ドット方式で取り上げた。そのうち、北平1号墳にともなう土器は、墳丘およびその周囲からの出土はほぼないと言って良い。墳丘上平坦部でも墓壙以外から出土しないことから墓壙内に埋置されたものと考えられる。

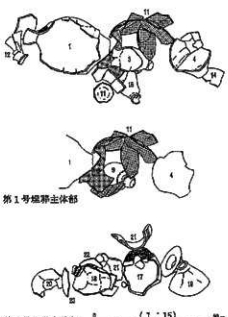
第1号埋葬主体部では16個体の土器群が墳丘地表下5cmのレベルで姿を現し、棺上層の範囲のみにまとまっていた（第18図、PL. 50）。礫郷状施設にあたる礫群中からの出土はない。いずれも墓壙内1～2層中（第13図）にあり、棺床より20～30cm上層の範囲に位置する。棺の上層に一定レベルの範囲でまとまるあり方は、埋葬儀礼で用いた器を墓壙内の棺上に片づけ、それが陥没した状況を物語る。土器群は棺に沿うかのような形で出土している。土器集中部の出土状況が興味深い（第19図、PL. 50）。1は横位に、4は正位の状態で出土したが、いずれも口縁部を打ち欠いている。3、9、11の一群は1と4の間にあって、最下層に東海系ひさご壷9が正位の状態、完形で出土した。その回りに打ち欠いた壷11の大型破片（スクリーントーン部）が囲むような形となっていた。さらにその上部からは壷3が横位で出土した。高杯は壷



第18図　堀葬主体部土器出土状況図

群の周囲を囲む。高杯は脚部と杯部の接合例はない。細片化しているが杯部も認められることから、脚部と杯部を打ち欠いて埋めているものと考える。

第２号堀葬主体部では土器群は地表直下で姿を現し、棺の範囲にまとまって出土した。横位の状態で出土した最上部の甕18、壺17が上部を欠損した状態であった他は不自然な欠損はない。土器の出土レベルを考えると削平による欠落はなく、出土７個体がほぼ埋置された数であったことが窺える。土器群は棺の南西側に片寄る形で集中し、横位ないしは正位の状態で検出されたが高杯の出土状況に特徴がある（第18・19図）。高杯22の杯部は正位の状況で検出されたが、杯部と脚部の出土位置が不自然であり、打ち欠いて埋置した様子が窺える（第18図）。同様な例は他の高杯についてもみられ、高杯21の杯部は、甕18の下層で正位の状況で出土したが、脚部はその上に乗る壺17にかかるような形で正位で出土した。また、有稜高杯の23も杯部破片が20の脇に、脚部が小口付近に散らばっていた。このことから、１号埋葬主体部で指摘した通り、高杯は杯部と脚部を打ち欠いて埋置された可能性が高い。



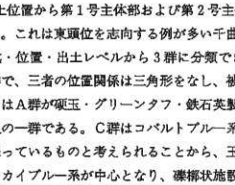
第19図　棺上土器集中部平面図

葬送の儀礼で用いられたであろう器が墓壙内の棺上に埋置されたことを想定した。壺は口縁部の欠損傾向が指摘できるが焼成前穿孔は見られず、焼成後穿孔あるいは底部の打ち欠きは、遺物観察あるいは出土

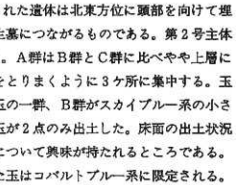
状況からも指摘できない。高杯は杯部と脚部を打ち欠く傾向が指摘できる。儀礼での器の用いられ方、片付けのあり方を示していると考えられるが、使用後打ち欠きという行為があって埋置されたことは窺い知ることができる。ただし、東海系ひさご壺に限っては打ち欠き行為を行っていない。北平1号墳から出土した土器群は、在来要素を保持する一群、外来要素が特徴的な一群、在来と外来の要素が折衷する一群で構成されている。土器の出土状況も、棺上に埋置されたことが想定でき、御屋敷式期の代表的な墳墓である松本市弘法山古墳と同様な状況を示している。土器の模相、出土状況から、北平1号墳の時間的位置付けについて、御屋敷式期と捉えておくこととする。なお、この点に関しては、後章で考察する。

② 身につけた玉・まかれた玉（第18・20図）

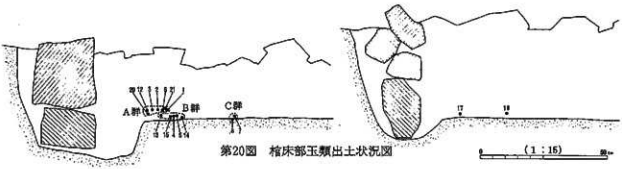
玉類の出土は少数ながら、その出土位置は棺床および礫椁状施設上層に2大別される。陸橋部南東側周溝内埋土中からも1点出土している。礫椁状施設上層の玉としては、第1号埋葬主体部から1点、第2号埋葬主体部から2点のガラス小玉が出土した（第18図）。いずれも棺の範囲以外の出土で、棺を礫等で被覆したレベル面にあたる。棺を埋設した後、墓壙内礫椁状施設に玉がまかれたのであろう。いずれもコバルトブルー色のやや大きめなガラス小玉であった。棺床の玉としては、第1号埋葬主体部棺床から3点、第2号埋葬主体部棺床から14点の玉類が出土した。1号・2号ともに北東側小口付近に集中する（第20図）。玉の出土位置から第1号主体部および第2号主体部に埋葬された遺体は北東方位に頭部を向けて埋葬されている。これは東頭位を志向する例が多い千曲川流域の弥生墓につながるものである。第2号主体部では、組成・位置・出土レベルから3群に分類できる（第20図）。A群はB群とC群に比べやや上層に位置する1群で、三者の位置関係は三角形をなし、被葬者の頭部をとりまくように3ケ所に集中する。玉の組成としてはA群が碧玉・グリーンタフ・鉄石英製の勾玉・管玉の一群、B群がスカイブルー系の小さなガラス小玉の一群である。C群はコバルトブルー系のガラス小玉が2点のみ出土した。床面の出土状況は原位置を保っているものと考えられることから、玉の装着方法について興味が持たれるところである。棺床の玉はスカイブルー系が中心となり、礫椁状施設内にまかれた玉はコバルトブルー系に限定される。また、両者の玉の機能が異なっていたことを示すものかもしれない。



第2号埋葬主体部



第1号埋葬主体部



第20図　棺床部玉類出土状況図

5　まとめ

(1)　北平1号墳の時間的位置づけ（第21・22図、第2表）

北平1号墳の時期を明らかにする手がかりとなるものには、同墳墓出土の在来系土器群である中部高地型櫛描文系土器群[1]（以下、中部高地型と称す。）と外来系土器群とがある。その主体を占める在来系土器群は壺、甕、高杯、鉢と一定の組成と量をもち、集落出土土器群による時期設定との対応が可能である。ここでは長野盆地南部[2]の弥生時代後期から古墳時代前期を6期に時期区分[3]し、北平1号墳の土器を時間的に位置づける。

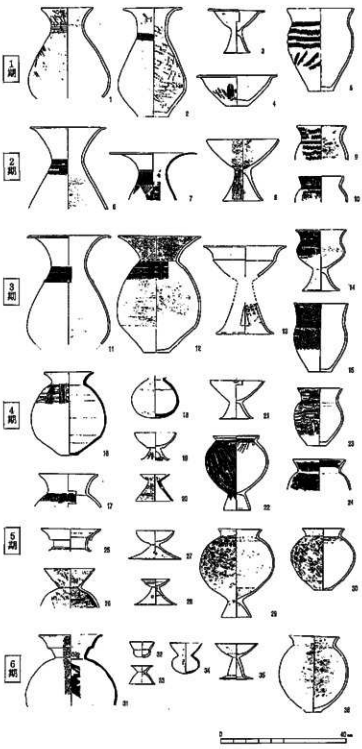
①時間軸の概要（第21図、第2表）

6期中の小画期として、3期と4期の間、5期と6期の間におく。1期から3期を中部高地型盛行の時代、4期・5期をその崩壊の時代、6期をその終焉の時代ととらえる。1期を吉田期、2・3期を箱清水期、4・5期を御屋敷期に対応させて考えている。

1期は中期後半の栗林式の系譜を引く土器群で、器形、文様構成に中期の伝統が残り、その組み合わせの多様性が特色となる。ヘラ描き沈線文（第21図－1）が若干残る。高杯は脚が低いもの（3）がある。長野市吉田高校グランド遺跡出土資料（千野、青木　1987年）を標式とする。

2期は資料が最も不足しているが、今日増加傾向にある。中期の伝統が消え、3期につながる器形、文様構成が形づくられるものと考える。高杯の脚がのび、大型高杯が出現する。有稜高杯、高杯脚部の三角透し孔もこの時期に出現している可能性が高い。塩崎遺跡群出土資料（矢口、青木　1991年）が標式となる。

3期は器形・文様構成の定形化と同一形式における法量の分化が進む。いわゆる脹もが箱清水式土器として認める一群である。長脚の高杯（13）が盛行し、高杯の占める割合も高くなるも



第21図　長野盆地南部の土器変遷図（1／12）

時期区分	新潟シンポ編年（1993年）	赤塩七瀬編年（1993年）	千野（1992年）	宇賀神（1993年）	基準遺跡および外来系の特徴
1期以前			Ⅳ－3		・松原遺跡SD100最下層
1期	1		Ⅴ－1		吉田高校グランド遺跡 ・松原遺跡SD100最下層
2期		1段階	Ⅴ－2		塩崎遺跡群市道篠ノ井南線地点
3期	2 3 4	2段階	Ⅴ－3 Ⅴ－4		本村東沖遺跡・法仏系高杯、甕 ・松原遺跡SD100下層 篠ノ井遺跡群堀川堤防地点　SDZ 6
4期	5 6	3段階	Ⅴ－5	Ⅰ期	御屋敷遺跡・S字甕B類 四ツ屋遺跡・中島式系土器
5期	7 8			Ⅱ期	・松原遺跡SD100中層 灰塚遺跡
6期	9			Ⅲ期	篠ノ井遺跡群自転車道地点 石川条里遺跡・屈折脚高杯
6期以降					石川条里遺跡栃下地点 TK73併行須恵器

第2表　土器編年対応表

のと考えられる。古相と新相に区分できそうで、後者に有稜高杯（13）が盛行する。古相の標式資料として長野市本村東沖出土資料（千野、飯島　1993年）が、新相の標式資料として長野市篠ノ井遺跡群堀川堤防地点（青木　1992年）があげられる。前者は北陸地域の長脚有稜高杯、法仏系甕を伴なう。

4期は外来系土器群の増加と中部高地型の変容が進み、在来の壺、高杯の変質が著しい。外来系としては東海系の占める割合が増加する。高杯の器種全体に占める割合も減少するものと思われるが、3期に盛行した有稜高杯は影をひそめ、小型の椀型高杯（21）が残る。高杯の小型化と共に小型器台（20）、小型高杯（19）等が出現する。外来のハケ調整平底甕（以下、ハケ甕と称す。）および台付甕（24）が、在来の櫛描文を施文した中部高地型甕（23）に共伴するようになる。上山田町御屋敷遺跡1・2・4号住居址出土資料（森嶋　1982年）が標式となる。

5期は4期に成立した小型供献土器が定着し、多様な小型器台・鉢がみられるが、高杯の占める割合が少ない。中部高地型の供献土器は姿を消す。壺は中部高地型に系譜を求められない広口壺、二重口縁壺（25）が定着する。甕においては、4期に参入したハケ甕が在来化（30）し、櫛描波状文を施文する甕が消える。ハケ甕が主体となり、台付甕は客体である。ハケ甕の内外面に中部高地型のヘラミガキ手法を施すものもあり、保守性を残い知ることができる。更埴市灰塚遺跡1号住居址資料（岩崎　1971年）が標式となる。

6期は小型の供献土器の定型化が進み、屈折脚高杯（35）が出現する。器種全体の中で供献土器の占める割合が高くなる。精製直口壺（34）が盛行傾向にある。ハケ甕のほかにナデを施す甕が出現し、丸底を

呈する底部も出現する。その系譜には多系統を考慮しなくてはならないが、布留甕はほとんど受け入れない。中部高地型甕の系譜は消える。篠ノ井道跡群自転車道地点出土資料（矢口　1980年）が標式となる。

②北平１号墳出土土器群の位置（第22図）

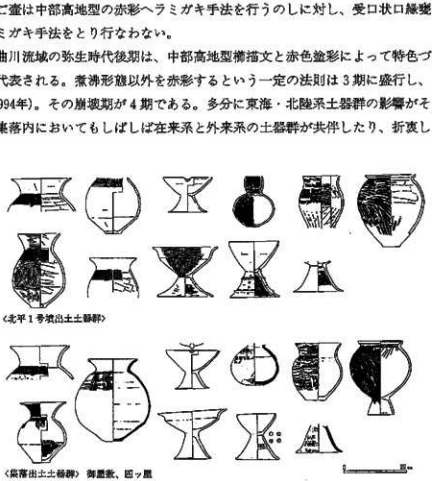
〈北平１号墳の土器〉　北平１号墳出土の中部高地型はその型式において末葉の様相を示すが、在来の伝統も強く意識している。壺と高杯について特徴をまとめてみよう。

壺は最大径を肩中位にもつ球胴形で、従来の指摘通り４期・御屋敷期の特徴を示す。頸部のしまりが弱く、口縁部も短く外反する傾向にあり、広口壺の様相をなす。これは外来壺の影響があるものと考えたい。文様帯は、３期後半に定着盛行した２本１単位のＴ字文で、横線文帯を４～５か所区画する。Ｊ字文も特徴となる。Ｊ字文は、中南信地方に散見される文様パターン[4]であるが、長野盆地においてＪ字文が定着するのは４期[5]である。この時期、横線文の最下位に½・¼円弧文をならべる文様帯がみられる[6]ことから、Ｔ字文と円弧文が結びついたものと考えられる。円弧文の系譜は南信地域にあり、ここに長野盆地南部と中南信地域との交流の増大を読み取ることができる。北平１号墳出土の東海系ひさご壺、受け口甕も当地との交流の中からもたらされたものと考えたい。

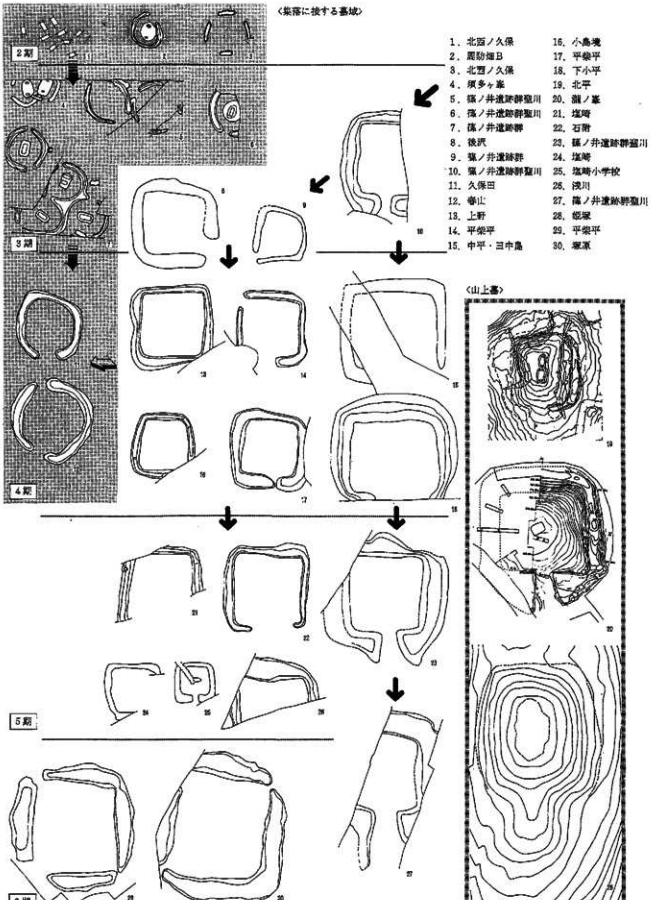
高杯は小型の椀型高杯が主体となり、有稜の高杯は他型式と折衷した１例のみである。いずれも３期の高杯に比べ口径部が小さく脚部も小さく広がる傾向にある。有稜高杯は小型化し赤色塗彩を施さない。脚部には中部高地型の三角透孔も見られるが、円孔および貼りつけ凸帯は中部高地型の中から成立しないもので、外来要素との折衷高杯[7]である。

在来系土器群に伝統性の保持と外来の影響を指摘したが、中部高地型の系譜ではおえない器種にひさご壺と受口状口縁甕がある。ひさご壺は中部高地型の赤彩ヘラミガキ手法を行うのしに対し、受口状口縁甕は中部高地型甕にみられるヘラミガキ手法をとり行なわない。

〈集落出土土器との比較〉　千曲川流域の弥生時代後期は、中部高地型櫛描文と赤色塗彩によって特色づけられる箱清水式土器によって代表される。煮沸形甕以外を赤彩するという一定の法則は３期に盛行し、独自の様式を形成する（小林　1994年）。その崩壊期が４期である。多分に東海・北陸系土器群の影響がその背後にあるものと考えられ、集落内においてもしばしば在来系と外来系の土器群が共伴したり、折衷した土器が見られることが従来から指摘されてきた（宇賀神　1998年、赤塩、土屋　1993年）。北平１号墳出土土器群もその４期の特色を示すものと考えられ、在来系、外来系ともに４期の標式資料である御屋敷１・２・４号住居址資料、四ツ屋９号住・13号溝（矢口　1980年）の組成と同様であることが指摘できる。



第22図　北平１号墳出土土器群と集落出土土器（１／12）



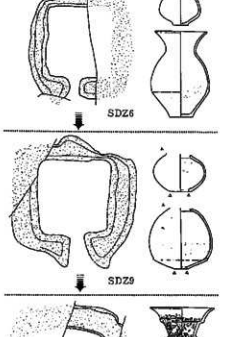
第23図　千曲川流域の墳墓の変遷（1／600）

(2)　千曲川流域の墳墓の変遷（第23図）

①墳丘の形態とその変遷（第23図）

〈円形周溝墓〉　1期以前、弥生時代中期後半栗林式の墓域は、飯山市小泉遺跡に見るごとく起合式箱形木棺墓（以下木棺と称す）の集団墓域を形成する（望月　1994年）。弥生時代後期、1期の様相は明らかではないが、中期の伝統をひく墓域を形成するのではないかと考えている。2期の墓域は、佐久市北西ノ久保遺跡に1基の方形周溝墓（第23図－3）と礫床木棺墓群（1）（林　1984年）が、佐久市周防畑B遺跡に円形周溝墓（2）がみられる（林　1982年）。いずれも千曲川流域の周溝墓の初源として位置づけられる。北西ノ久保遺跡に見られるような周溝の四隅が切れるタイプ（3）は以後千曲川流域においては確認できない。

2～3期が一つの画期で、長野市篠ノ井遺跡聖川堤防地点（青木　1992年）・飯山市須多ケ峯遺跡（高橋　1982年）に見られるような不整円形をなす円形周溝墓（4～7）が盛行する。その径は4～6mと小形で、墓壙が確認できることが特徴となる。これは、墓壙に棺を収めた後、溝の掘削土で墳丘を盛りあげることによる。棺の周囲を円形区画することに意義があり、その規模は小さいことが特徴となり、墳丘も低いものであった。1～2ケ所の陸橋部をもつ。中核となる時期は3期の古相段階であり、以後4期まで形態を変化させながら続く（11・12）[8]。千曲川流域において円形周溝墓が散見できるころ、有稜高杯が盛行し、高杯脚部に二等辺三角形の透し孔がみられるようになることを考慮するならば、円形周溝墓は中部高地型の縄清水式土器を携えた人々の在来の墳墓形態であったと言えよう[9]。



第24図　篠ノ井タイプ墳丘墓の変遷

〈方形墳丘墓〉　4期にはさらに大きな画期が見られる。北平1号墳が出現する御屋敷期の4期は、土器様式の上では外来系土器群に影響された中部高地型の崩壊過程であったが、墓の形態にも変化を見出すことができる。墓壙が明らかでない方形周溝墓が検出される傾向にある（13～18）。墳丘の大きさが10mを越える規模を持ち、一定の墳丘構築があったものと思われるが、中には15mを越える規模の墳墓も現われる。これらは中部高地の社会にあって、広義の墳丘墓と呼べるものであり、ここでは4期の方形周溝墓について方形墳丘墓という用語を用いることにする。方形墳丘墓の萌芽は3期新相段階にみられる。長野市篠ノ井遺跡群聖川堤防地点では、3期古相段階の円形周溝墓SDZ7（6）を3期最新相段階の方形墳丘墓SDZ6（10）が切っている。

方形墳丘墓は陸橋部の有無、その位置から、周溝のコーナーに陸橋をもつ後沢タイプ（8）（林　1982年）、周溝の一辺中央に一か所陸橋をもつ篠ノ井タイプ（10）、陸橋部をもたない上野タイプ（13）（望月　1990年）に細別される。一方、在来の円形周溝墓の系譜を引くものは小諸市久保田2号周溝墓（11）（花岡　1984年）に見られるように不整方形をなし、規模も一辺8～10mと大きくなる。これは在来墓が方形墳丘墓に影響されたためであろう。

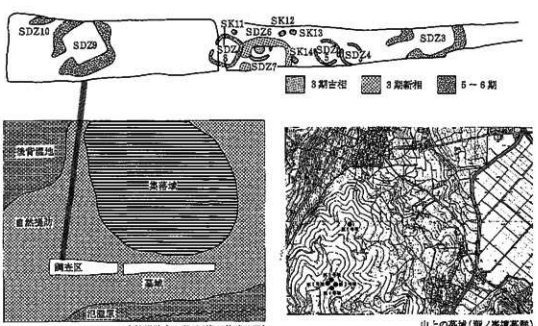
〈前方後方型墳丘墓の出現〉　3期新相段階に出現して円形周溝墓に代わる墓の形態となる方形墳丘墓において、4期の長野盆地における篠ノ井タイプは重要である[10]。篠ノ井遺跡群聖川堤防地点においては3期から5期の墓域が明らかとなり、篠ノ井タイプの墳丘墓の変遷がおえる（第24図）。周溝内出土土器群からSD

Z6→SDZ9→SDZ3という変遷をとらえることができ、SDZ6（10）を3期最新相段階、SDZ9（23）を5期古相段階、SDZ3（27）を5期新相段階と位置づけることができる。SDZ6にみられる周溝の一辺中央部に掘り残された陸橋部が、SDZ9においては、方形墳丘外方に周溝が広がることによって、陸橋部が拡張される現象を指摘することができる。これは墳丘の高まりが増大することによって陸橋部を長く外方に確保してきた現象としてとらえられる。陸橋部前面に区画部はもたないものの、その形は前方後方墳に近いものがあり、陸橋部が外方に広がる篠ノ井タイプの墳丘墓をここでは前方後方型墳丘墓と呼ぶこととする。北平1号墳（19）は陸橋部の広がりから、SDZ6とSDZ9の中間の形態を示し、佐久市瀧の峯前方後方型墳丘墓（20）と同様な形態を示している。陸橋部が未発達なその形態は、瀧の峯前方後方型墳丘墓よりも古相としてとらえることができる。4～5期に見られる篠ノ井タイプの前方後方型墳丘墓の出現、その盛行は、前段階から周溝の一辺中央部に掘り残された陸橋部を持つタイプの墳丘墓が出現している南信地方からの影響が考えられ、その背後に東海系の影響を読みとることができうる。4～5期には前方後方墳の長野市姫塚古墳（28）が出現するものと想定される。

②墓域のあり方（第25図）

2期の北西ノ久保遺跡の木棺墓群は台地上の集落の脇に位置した。3期の篠ノ井遺跡群新幹線地点の円形周溝墓群（小林　1994年）はやはり集落に接する自然堤防上に集団墓を形成していた。中部高地型・箱清水期の集落構成に均質なる世界を垣間見ることができる。3～5期の篠ノ井遺跡群堀川地点の円形周溝墓から前方後方型墳丘墓もやはり自然堤防上の集落に接する型となる（第25図）。同墓域において、3期古相の円形周溝墓および木棺墓群は北西ノ久保例のように集中する傾向にある。これは、集落内の最小単位の墓域を示すと考えられるが、5期の前方後方型墳丘墓にあっても集落に接する形となることには変わりがない。ここで注意したいのは、前方後方型墳丘墓が他の墳丘墓とともに集団墓を形成すると言う点である。

一方、4期には集落脇の集団墓から離れた前方後方型墳丘墓も出現する（第25図）。北平1号墳、瀧の



第25図　自然堤防および山上の墓域のあり方

遺跡・遺構名	時期	墳形	出土位置	出土器種とその数				
				壺	高杯	甕	鉢	器台
周防畑B・1号円形周溝墓	2期（古）	円	周溝	3		2		
周防畑B・2号円形周溝墓	2期	円	周溝・墓壙	6	6	5	2	
坂多ケ峯・1号円形周溝墓	3期（古）	円	周溝	1	1	3		
篠ノ井遺跡群（聖川）SDZ7	3期（古）	円	周溝・墓壙		3	1		
篠ノ井遺跡群（聖川）SDZ4	3期（古）	円	周溝	1				
篠ノ井遺跡群（聖川）SDZ6	3期（新）	方	周溝	8	1	3	4	
久保田・HM1・2号	4期	円	周溝	4	2	1	1	
大フケ・方形周溝墓	4期	円	周溝	7	2	1		
下小平・HM1号	4期	円	周溝	4				
下小平・HM2号	4期	○方	周溝	4	4	3		
北平1号墳・第1号主体部	4期	○方	墓壙	10	5	1		
北平1号墳・第2号主体部	4期	○方	墓壙	1	5	1		
中平・田中島　1号	4期	方	周溝	2	4	1	1	
瀧の峯1号墳	4期	○方	周溝				1	
瀧の峯2号墳	4期	○方	周溝	7	4	2	1	4
上野・2号方形周溝墓	4期	方	周溝	1				
上野・4号方形周溝墓	4期	方	周溝	1		1		
篠ノ井遺跡群（聖川）SDZ1	5期	○方	周溝	4		1	1	
篠ノ井遺跡群（聖川）SDZ9	5期	○方	周溝	6		1		
篠ノ井遺跡群（聖川）SDZ3	5期	○方	周溝	1				
篠ノ井遺跡群（聖川）SDZ10	6期	○方	周溝	1	1	3		
塩崎・5号溝	5期	方	周溝	2		1		
塩崎・2号溝	6期	方	周溝	5				

第3表　墳墓出土土器組成　　○前方後方型墳丘墓

峯前方後方型墳丘墓があたる。いずれも集落面との比高差は150mあまりで、千曲川流域の前期古墳に共通する占地形態となる。しかしながら瀧の峯前方後方型墳丘墓は尾根上で4基の集団墓を形成している。また、両墳墓に見られる墳丘の形、規模、槨の形態、副葬品のあり方等は、集落に接する前方後方型墳丘墓と大きく隔たることはなく、その相違は占地以外にないと言って良い。

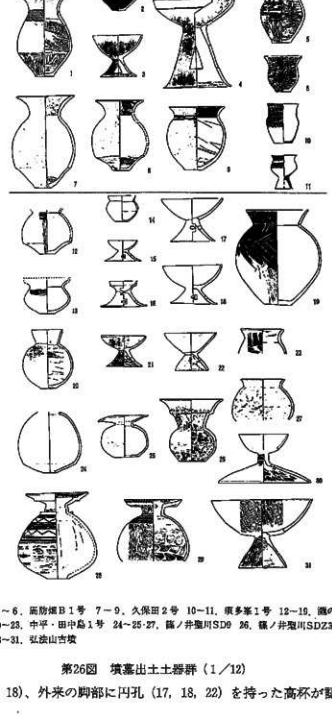
(3)　儀礼と器（第26図、第3表）

墓から出土する土器には、①棺として用いられたもの、②容器として副葬されたもの、③埋葬の儀礼に用いられ、片づけあるいは廃棄されたもの等がある。弥生時代後期から古墳時代前期の墓域にあっては、合せ口の土器棺墓が①の要素として認識できるものの、①～③の要素を区別することには難しいものがある。しかしながら、①の要素には器高40cm以上の大型土器が用いられることが多く、他の要素とは区別することが可能であると考えられ、②・③の要素も埋葬の儀礼と深くかかわることが想定できうる。

〈円形周溝墓に用いられた器〉　中期後半の墓域にともなう土器は限られ、しばしば木棺内に壺がみられる他はその数は少ない。墳墓に土器類が散見できるようになるのは2期以降であり、円形周溝墓の出現と一致する。円形周溝墓には、2期の佐久市周防畑B遺跡1・2号周溝墓例のように、周溝内から土器がまとまって出土する例（第26図－1～6）がある。その出土状況から周溝内にまとめて埋められたもの、周溝のくぼみに廃棄されたもの、墳丘上から周溝内に転落したと考えられるもの等があり、これらは墳墓での儀礼を想定できうるものである。

2～3期の周溝内から出土する器種組成には、壺・高杯・甕・鉢等があり、集落内で用いられる組成と変化がないといって良い。しかし、器種によって大きさの違いが見られる。壺は、器高25～30cm大の中サイズの壺（1）が多く、高杯は有稜高杯の場合、器高25cm以上の大型（4）のものが見られ、椀型高杯の場合、器高15cm以下の小型（3）のものとなる。中型の赤い壺に添えられて置かれたであろう赤い高杯は長脚で大きな有稜高杯と小型の椀型高杯であった。一方、甕には器高20cm前後の中サイズ（5）と10cm前後の小サイズの平底甕（6，10）、あるいは台付甕（11）が見られるが、小サイズのものが多いようだ。中部高地型最盛期の縄溝水期においては墳墓で用いられる器種のサイズには一定の約束があったらしい。また、その割合は壺が最も多く、高杯・甕・鉢も一定の量をもつ。台付甕も重要な器であった。

〈4～5期の変化〉　方形墳丘墓が盛行する4期には、久保田・佐久市大ふけ遺跡（高村1991年）例のように円形周溝墓系統の在来色の濃い墳墓では中部高地型の中サイズ壺（7，8，9）中心の出土を見るが、北平1号墳、瀧の峯1・2号墳（12～19）、中平・田中島1号墳（20～23）（長野県埋文センター1994年）といった方形墳丘墓では、壺・高杯の小形化現象とともに外来系の供献土器を採用する。3期に盛行した三角透孔をもった有稜高杯は小型化（21）しその量を減少させ、一方、外来の小型器台（16）、小型椀型高杯（17，18）、外来の脚部に円孔（17，18，22）を持った高杯が認められる。



1～6．両防畑B1号　7～9．久保田2号　10～11．横多峯1号　12～19．瀧の峯2号
20～23．中平・田中島1号　24～25・27．篠ノ井聖川SD9　26．篠ノ井聖川SDZ3
28～31．弘法山古墳

第26図　墳墓出土土器群（1／12）

供献土器の高杯にみられる在来要素の減少と外来要素の増大、および壺類の小形化傾向から墓での儀礼に何らかの変化が起きたことが想定できる。北平1号墳、中平・田中島1号墳の球胴をなすひさご壺(20)および、中平・田中島1号の脚部に円孔をもつ高杯（22）の系譜は、東海系の高杯を借用した下伊那地方中島式の高杯に求めることができる。しかしながら、下伊那地方の方形墳丘墓に土器がほとんど見られないこと、千曲川流域の外来系高杯に赤彩が施される（22）ことを考慮するならば、儀礼における在来要素も残している。

4期の葬送儀礼に用いられる器は在来要素と外来要素が組み合わされる複雑な様相を示すが、北平1号墳、中平・田中島1号、瀧の峯前方後方型墳丘墓にみられる葬送儀礼に用いられた器の主体となるものは

伝統的な中部高地型であった。一方、4～5期に想定される松本市弘法山古墳では、壺、高坏、鉢類のすべてが外来系（28~31）で占められており、その多くが東海系の器であった（直井　1993年）。そこに墳墓を造営する集団における葬送儀礼の差を逆間見ることができる。長大な墳丘に副葬品を多量にもつ弘法山古墳での葬送儀礼が、中部高地各地の中小墳墓における埋葬儀礼に与えた影響は大きかったものと考えられる。弘法山古墳の壺には焼成前の穿孔が見られた（28）。篠ノ井遺跡群聖川堤防地点の前方後方型墳丘墓SDZ３、９にも焼成前穿孔の壺が出現する（24~26）。いずれもやや小形の壺である。穿孔が施されない大形の広口壺、二重口縁壺を含め、墳墓から出土する壺の割合が５期には増大する傾向にある。葬送儀礼における壺の重視とその仮器化が一層進んだものと考えられ、森将軍塚古墳に見られるような二重口縁を持つ埴輪壺も登場する。なお、この段階に甕（27）の占める割合が再び増加する傾向にある。

(4)　山上墓のあり方

４期にみられる墓の形、葬送儀礼に用いられた器の変化は中部高地型を盛行させた千曲川流域の社会に埋葬観念までも変化させうるインパクトが働いたものと考えられる。その発信源は東海地方であり、千曲川流域においては、それまで閉鎖的であった松本・諏訪盆地の文化圏[11]、伊那谷の文化圏との交流が活発化するといった背景があったものと考えられる。

さらに、４期には、北平１号墳、瀧の峯前方後方型墳丘墓といった集落からかけ離れた比高差のある山の上に占地する墳丘が出現した。集落から離れた山の上に占地する要素を重視してここでは山上墓と呼ぶこととしよう。この現象は、以前から想定されていたように弘法山古墳の出現と連動するものと考えられる。赤塚次郎氏は、弘法山古墳出土土器群（第26図－28~31）を「土器の特徴は廻間Ⅱ式３段階を下降させる要因はない」とし、弘法山古墳を廻間Ⅱ式前半期に位置付ける（赤塚　1995年）。千曲川流域の４期標式資料の御屋敷４号住居址出土のＳ字状口縁台付甕（第21図－22）が廻間Ⅱ式前半期に併行するであろうから、北平１号墳および、さらに後出するであろう瀧の峯前方後方型墳丘墓の造墓は、弘法山古墳造営と密接にかかわる時期が想定できうる。

一方、長野盆地北部、中野市七瀬遺跡における弥期の北陸・東海系土器群の流入を分析した赤塩仁氏は、七瀬遺跡に見られるＳ字状口縁台付甕Ａ類に伴なう東海系土器群の流入を「東海系の流入は突如かつ単発的という感が強い」とし、氏の段階設定の七瀬３段階に位置づける（赤塩　1993年）。土屋積氏は同地域におけるＳ字状口縁台付甕Ａ類に伴なう土器群の流入の画期と同地域にみられる前方後方墳の出現が密接にかかわるであろうことを推察する（土屋　1993年）。七瀬３段階はほぼ４期に併行するものと考えられるから４期御屋敷期のインパクトは北平１号墳の所在する長野盆地南部に限らず、長野盆地一円に及んでいたらしい。この動向は、佐久盆地中平・田中島の墳墓に見られる赤彩された高杯も物語っている（第26図－22）。この高杯が廻間Ⅱ式前半期に併行するであろう下伊那地域の山下編年６段階（山下　1993年）の高杯に類似することを考慮するならば、千曲川流域の上流部の佐久盆地にもそのインパクトは及んでいたものと考えられる[12]。

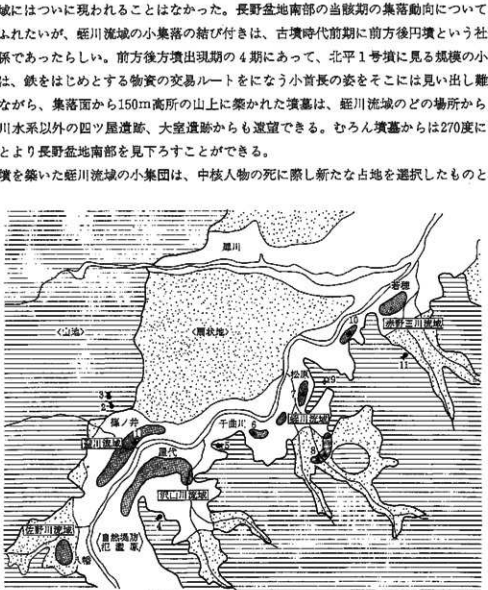
しかしながら弘法山古墳と北平１号墳・瀧の峯前方後方型墳丘墓を比較した場合、墳丘の規模、埋葬主体部の様相、副葬品のあり方は隔絶の観がある。集落に接した墓域から離れ、山の上に占地しても、墳丘の形・規模・副葬品において集落に接する墓域とほとんど変化を見出すことができない。北平１号墳・瀧の峯前方後方型墳丘墓と弘法山古墳の被葬者とではその社会的基盤は大きく異なると考えられる。前者は３期以前の中部高地型を主体とした器を葬送儀礼に用い、後者は在来の器を用いず、しかもその器に焼成前穿孔という仮器化現象が見られた。葬送儀礼に用いられた器ひとつとってみても弘法山古墳を造営した集団に広域的なつながりを想定し、その基盤から生み出される階層性を見出さざるを得ない。４期における山上墓の造営は、千曲川流域に前方後方墳を出現させる社会的背景が萌芽しつつあったことを示す。

(5)　長野盆地南部における蛭川流域の集団のあり方〔第27図〕

長野盆地の南部地域（第27図）は、盆地内中央を北流する千曲川が形成した自然堤防と後背湿地とその背後の山麓という土地景観をなす。後背湿地には山地からの中小河川が入り組み、その水利の管理を通じて小空間の村々が結び付いていたものと考えられる。古代においては千曲川の左岸が更級・水内郡、右岸が埴科・高井郡となる。長野県埋蔵文化財センターは聖川流域の塩崎・篠ノ井地籍（更級）、沢山川流域の屋代地籍（埴科）、蛭川流域の松代地籍（埴科）、赤野田川流域の若穂地籍（高井）において大規模な調査を行ない、稲作農耕定着期の居住域・生産域について多くのデータを得た[13]。

北平1号墳の位置する蛭川流域では、弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）の中核集落であろう松原遺跡が明らかとなった。松原遺跡では以後1、3、5期の集落が確認されているが、いずれも居住域の規模は小さく弥生時代中期のそれとは格段の差がみられる。他の蛭川流域においても中条・墨地遺跡で1～4期の居住域が確認されているが規模は小さく、5～6期は明らかでない。聖川、沢山川、赤野田川流域には川柳将軍塚古墳、森将軍塚古墳、和田東山古墳群といった古墳時代前期の前方後円墳が造営されるが、蛭川流域にはついに現われることはなかった。長野盆地南部の当該期の集落動向については松原遺跡の報告書でふれたいが、蛭川流域の小集落の結び付きは、古墳時代前期に前方後円墳という社会産物を生じ得ない関係であったらしい。前方後方墳出現期の4期にあって、北平1号墳に見る規模の小ささ、副葬品の貧弱さは、鉄をはじめとする物資の交易ルートをになう小首長の姿をそこには見い出し難いものがある。しかしながら、集落面から150m高所の山上に築かれた墳墓は、蛭川流域のどの場所からも見ることができ、蛭川水系以外の四ツ屋遺跡、大室遺跡からも遠望できる。むろん墳墓からは270度にわたって蛭川流域はもとより長野盆地南部を見下ろすことができる。

北平1号墳を築いた蛭川流域の小集団は、中核人物の死に際し新たな占地を選択したものと考えたい。



第27図　長野盆地南部の集落概念図

墳墓の形、東海系の器、その片ずけ状況を考慮するならば、北平1号墳が造墓された4期の長野盆地南部には、松本盆地の弘法山古墳を造営した集団と密接な関連をもった集団があってもよい。姫川水系の小集団は政治的にはそういった集団の下位集団であったのであろう。その上位集団を糸魚川流域の村々に求めてもあながち不当ではあるまい。

［注］

1）長野県は東日本の山岳地帯に属し、標高700mの諏訪盆地を分水嶺に、水系が日本海側と太平洋側に分かれる。弥生時代中期に中部高地地域は文様施文に櫛描文を採用するが、後期では太平洋側では施文に回転台を用い、日本海側では回転台を用いることがない。ここでは櫛描文施文に回転台を用いることがない施文方法をもつ系譜上にある土器群を中部高地型櫛描文系土器群と呼ぶ。

2）ここでいう長野盆地南部とは古代更級郡、埴科郡を中核とする空間であり、今日の長野市、更埴市、戸倉町、上山田町、坂城町周辺をさす。長野市北部の浅川扇状地遺跡群の位置づけは微妙であるが、本項では含めることとする。なお、赤塩仁氏が編年を組む中野市七瀬遺跡は長野盆地北部となる。

3）本項の時期区分は北平1号墳を長野盆地南部の時間軸に位置づけるための区分である。概念的なもので充分ではないが、今後刊行予定の『松原遺跡』の報告書で詳細する予定である。

4）茅野市一本堰、岡谷市橋原、松本市三の宮、大町市古城遺跡等にみられる。

5）更埴市郷戸、上山田町御屋敷遺跡等にみられる。

6）長野盆地北部にこの時期散見できる。長野盆地北部に流入する東海系土器群の流入期と重なり、注意が必要である。

7）中部高地型の高杯には三角形の透し孔が穿たれるが、4期には円孔を穿ったものが出現し、三角透し孔に代わる。両者が共存するのが4期で、中平・田中島遺跡では共存する例がみられる。

8）中部高地にみられる円形周溝墓については以前整理したことがある。（　青木一男　1993年「科野の区画墓・墳丘墓における円と方（メモ）」『長野市考古学会誌69．70』長野県考古学会、　青木一男　1994年「Ⅳ赤い土器のクニの墓」『赤い土器のクニ』長野県埋蔵文化財センター　）

9）前述したように中部高地にあって円形周溝墓は弥生時代後期に出現する。外来墓制として流入し、後期に定着したものであろう。その系譜は瀬戸内方面に求めることができるのではと考えている。須多ケ峯2号円形周溝墓に北陸系の有稜高杯が見られることを考慮するならば、そのルートを日本海側に求めたい。同時期の千曲川流域の集落には北陸系土器がわずかであるものの散見できるが東海系土器はみられない。

10）同タイプの方形周溝墓および墳丘墓は東海地方の高杯を借用する伊那谷の座光寺原・中島土器様式の墳墓として主体的にみられる。

11）弥生後期の松本・諏訪盆地の土器分布圏の様相については宇賀神誠司氏の論考に詳しい。（　宇賀神誠司　1987年「在来系土器群の構造」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2・上木戸遺跡』長野県埋蔵文化財センター　）なお、白居直之氏は同文化圏に甲府盆地の一地域を含めている。（白居直之　1994年「Ⅳ周辺の文化」『赤い土器のクニ』長野県埋蔵文化財センター）

12）千曲川流域において古相のS字状口縁台付甕は主体的に流入しない。散見できるS字状口縁台付甕A・B類の出土例が最も多いのは下流域の長野盆地北部である。東海系土器の流入を北陸方面からととらえる研究者もあるが、この動向から峰者はその逆を考え、4期における南からの大きなインパクトを考えたい。

13）現在長野県埋蔵文化財センター長野調査事務所において整理作業が進められており、数年先には報告書が刊行される。

引用参考文献

青木和明　1992年　『篠ノ井遺跡群(4)　―聖川堤防地点―』長野市教育委員会

青木一男　1991年　「千曲川流域の周溝墓覚書」『長野県考古学会誌』63号　長野県考古学会

青木一男　1992年　「土器に垣間見る料野の古墳出現期」「古墳出現期の文化－古代の料野を中心にして－」上田市立信濃国分寺資料館

青木一男　1993年　「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70号　長野県考古学会

赤塩　仁、土屋　積　1993年　「栗林・七瀬遺跡」㈶長野県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1995年　「初期前方後円（方）墳出土の土器」『季刊考古学』第52号　雄山閣

甘粕健ほか　1993年　日本考古学協会新潟大会『東日本における古墳出現期過程の再度検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会

岩崎卓也　1971年　『下条・灰塚』更埴市教育委員会

岩崎卓也　1982年　「川柳将軍塚古墳・姥塚古墳」『長野県史考古資料編』全1巻(2)　主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会

宇賀神誠司　1988年　「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2　㈶長野県埋蔵文化財センター

宇賀神誠司　1993年　「4世紀を中心とした土器編年表」『長野県考古学会誌』69・70号　長野県考古学会

小林秀夫　編　1994年　長野県立歴史館開館記念企画展『赤い土器のクニ』長野県埋蔵文化財センター

高橋　桂　1982年　「須多ケ峯遺跡」『長野県史考古資料編』全1巻(2)　主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会

高村博文　1991年　『大ふけ』佐久市教育委員会

千野　浩、青木和明　1987年　「長野吉田高校グランド」長野市教育委員会

千野　浩　1992年　「善光寺平南部（長野市域）における弥生集落研究の現状」長野県考古学会30周年記念大会資料集『中部高地における弥生集落の現状』長野県考古学会

千野　浩、飯島哲也　1993年　「浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡」長野市教育委員会

直井雅尚　1993年　「弘法山古墳出土遺物の再整理」松本市教育委員会

長野県埋文センター　1994年　「中平・田中島遺跡」「長野県埋蔵文化財センター年報」11

長野県埋文センター　1994年　『砂原遺跡E地区、中平・田中島遺跡現地説明会資料』

花岡　弘　1984年　『久保田』小諸市教育委員会

林　幸彦　1984年　「北西ノ久保―長野県佐久市岩村田北西ノ久保遺跡第1次発掘調査報告書―」佐久市教育委員会

林　幸彦　1982年　「周防畑B遺跡」『長野県史考古資料編』全1巻(2)　主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会

林　幸彦　1982年　「後沢遺跡」『長野県史考古資料編』全1巻(2)　主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会

林　幸彦　1986年　『瀧の峯古墳群』佐久市教育委員会

望月静夫　1994年　『小泉遺跡』飯山市教育委員会

望月静夫　1990年　「小沼湯掩パイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ　上野遺跡・大倉崎遺跡」飯山市教育委員会

森嶋　稔　1982年　「御屋敷遺跡」『長野県史考古資料編』全1巻(2)　主要遺跡（北・東信）長野県史刊行会

矢口忠良、青木和明　1991年　「塩崎遺跡群(6)　―塩崎遺跡群市道拡ノ井南253号線地点―」長野市教育委員会

矢口忠良　1980年　『篠ノ井遺跡―大規模自転車道地点―』長野市教育委員会

矢口忠良　1980年　「四ツ屋遺跡・御開遺跡・塩崎遺跡群」長野市教育委員会

山下誠一　1991年　「伊那谷の後期弥生土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』東海埋蔵文化財研究会

第2節　北平塚の調査

1　調査の概要

2基の塚は、県教委文化課による試掘によって、版築構造をもち、内部施設を持たない構造であることが推定されていた。標高465mの平坦な稜線上に位置し、汁積面のムラとの比高差を110mほど測る。調査は表土をとり除き、バルーンによる空撮（第29・30図、PL. 51）を実施した後、十字に土層ベルトを残しながらマウンドをカットした（PL. 51）。後にマウンド測量図において1号塚は基壇状施設をもつであろうことを読みとったが、両塚の調査においてマウンド構築時の姿を想定するための面的な基礎データを得たとは言い難い。なお、1号塚と2号塚の間は平坦な尾根であったが調査は実施していない。

2　北平1号塚

緩斜面に構築された塚（第29図）で、方形の基壇状整地面中央にマウンドを築いている。基壇状整地面は斜面上方の地山を削平し、下方に盛りあげており、その平坦面は一辺11mほどを測る。マウンドは径6.0～7.0mの不整円形をなし、高さは1.2～1.4mを測る。マウンド中央部には径2.0～3.5m、深さ1.6mの掘り込みが確認されたが、暗黄褐色粘質土のしまりの弱い埋土の状態から後世の掘削穴と判断した。

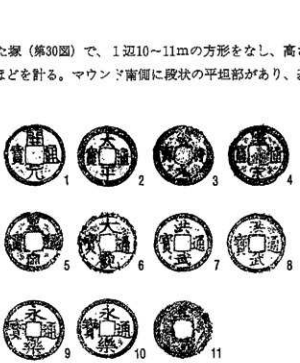
塚は地山と同質の泥岩細礫を含む黄褐色土を10～30cmづつタタキしめながら版築しており、泥岩細礫の含有量によって硬くしまる層とそうでない層がある。後世の掘削により、構造は充分に明らかにしたとは言い難いが、2号塚の状況も考慮するならば、内部施設はなく、水平に版築した上部はフラットな平坦面であったことが想定される。1号塚からの出土遺物はない。

3　北平2号塚

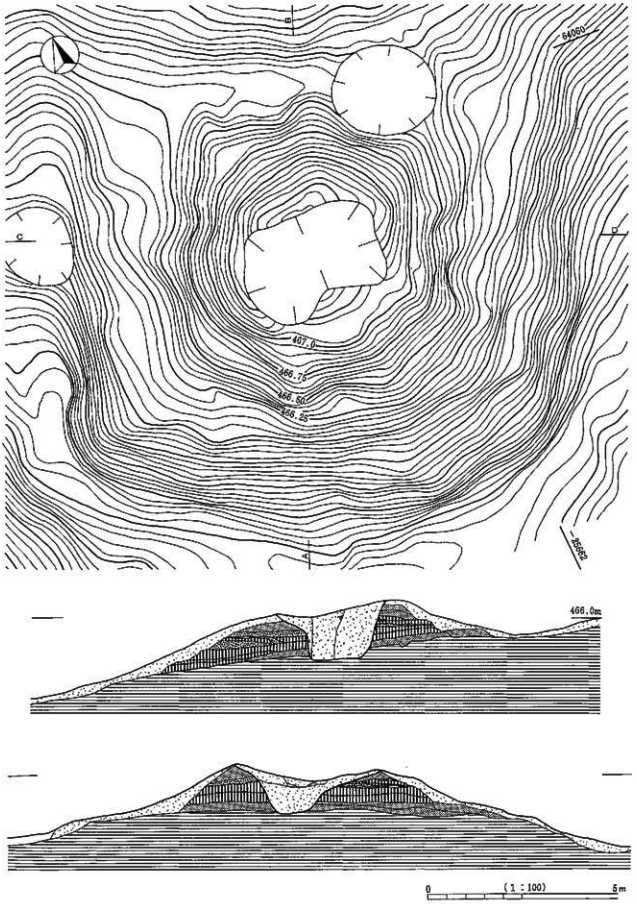
なだらかな尾根が傾斜変換する端部に構築された塚（第30図）で、1辺10～11mの方形をなし、高さは盛土中央部で0.8m、下方から見上げた場合1.5mほどを計る。マウンド南側に段状の平坦部があり、基壇状整地面中央にマウンドを築いた可能性もあるが調査では明らかにできなかった。

塚は1号塚同様に版築を行っているが、内部施設はもたず、土をタタキしめながら表象物としての塚を構築していることが理解できる。

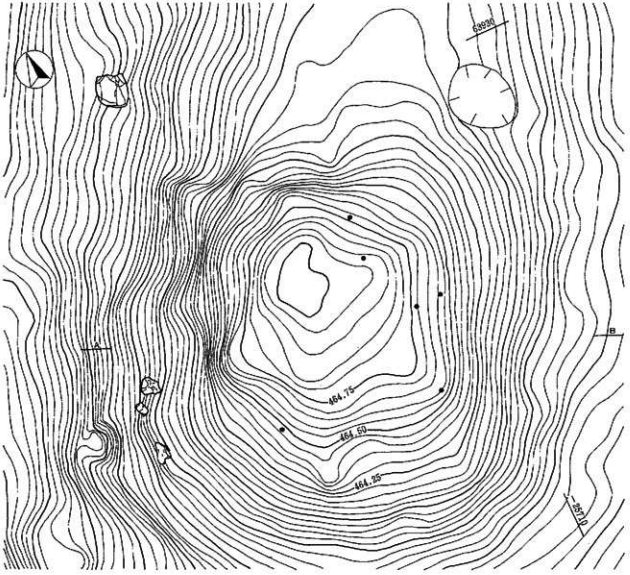
遺物は塚構築面の整地基盤層から13枚の銭貨とかわらけ小片が検出された（第28図、第4表）。銭貨はほぼ同レベルから集中することなく散在していた（第30図）。その出土状況から塚構築の際にまかれたものと推察される。銭貨は北宋銭と明銭がみられ最新の銭貨に永楽通宝があることから塚の構築年代を15世紀以降ととらえることができ17世紀までは下らないものと考える。



第28図　北平2号塚出土銭貨（2／3）



第29図　北平1号墳平面図および断面図



第4表　北平2号塚出土銭貨

No.	銭貨名	初鋳国	初鋳年	背文	残存率	書体	その他
1	開元通寶	唐	621	背上「月文」	完	隷書	
2	太平通寶	北　宋	976		完	隷書	
3	祥符通寶	北　宋	1008		完	真書	
4	皇宋通寶	北　宋	1039		完	真書	
5	皇宋通寶	北　宋	1039		完	篆書	
6	大観通寶	北　宋	1107		完	真書	
7	洪武通寶	明	1368		完	真書	
8	洪武通寶	明	1368		完	真書	
9	永樂通寶	明	1408		完	真書	
10	永樂通寶	明	1408		完	真書	
11	不明1			背上「五」	完		不明2と付着
12	不明2				完		不明1と付着
	不明3				1／3	篆書	□□元□

暗黄褐色粘質土　泥岩細砂粒土主体　絞り痕
塚の盛出土を主体とする層である

暗黄褐色粘質土　泥岩細砂土主体　粘性強　絞り強
塚の腰張層で砂質が多い層である

暗黄白色粘質土　粘性土　粘性強　絞め硬められる
塚の腰張層で砂質が少なくない層である

黄褐色粘質土　泥岩粒多く含み粘性弱　絞り弱
塚の基盤盛地層である

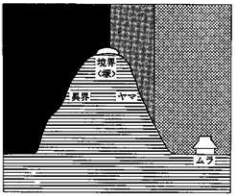
岩盤　　●銭貨出土位置

第30図　北平2号塚平面図および断面図

4　まとめ

(1)　境界稜線上の塚群

人々の生活空間であるムラを望めるサトヤマは、村境となることが多い。このサトヤマの主稜線上には塚が散見され、旧埴科郡土口村（現更埴市）と岩野村（現長野市）の境界、旧高井郡大室村と川田村（現長野市）の境界をなす稜線上には塚が数基づつ築かれている。同様な例は旧埴科郡森村（現更埴市）有明山稜線上に見られるものの、地元で語られる「旗塚」という伝承のほかは記録もなく、正式な調査も行われていないため、その性格は不明と言わざるを得ない。



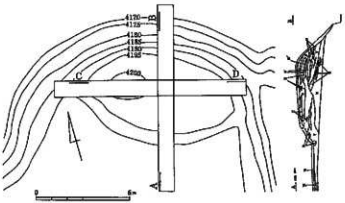
第31図　サト・ヤマ・異界の概念図

(2)　境界守護としての塚（第31・32図）

境界稜線上の塚群と北平塚を比較すると、立地に共通性がみられ、規模と数に違いがみられる。前述の塚群は北平塚に比べ規模が小さく、等間隔に数十基並ぶという特徴がある。一方、発掘調査が行われた旧更級郡八幡村（現更埴市）の「丸山古墳」（第32図）は北平塚と類似する点が多い塚である。

「丸山古墳」は、更級と筑摩を結ぶルートである一本松峠沿いに位置し、眼下に更級のサトが一望できる位置に築かれている。残存部で15×8m程、高さ1.7m程を測る楕円形をなし、緩斜面に対してドーナツ状に土を盛り上げ、版築状に塚を構築していることがわかる。内部に施設はなく、上部もフラット面をなし、規模・構造ともに北平塚と類似する。出土遺物はない。調査者の佐藤信之氏は「街道に対しての防備、占有であり、威嚇であり、果たす役割は多かった。」とその性格を推察する。（佐藤1975年）

品田高志氏は新潟県柏崎平野の主稜線上に分布する塚群の分析の中から、サトヤマの主稜線上の塚群を「塚は、境界守護のために築かれたといって良いのではないだろうか。」と考察する。（品田1988年）生活空間であるムラの周囲には生産の場があり、資源確保の場、交通の要衝としてのヤマがあった。そこは異界と接する場所であり、異界を通じて外に出る時も、そこから入って来ることに対しても、人々は畏れを感じたに違いなく、その境界に塚を構築することで異界との境界を画したのではなかろうか（第31図）。品田氏の表現を借りるならば「境界守護」のための構築物と考えておきたい。北平塚は2号塚の基底面出土銭の組成から、その構築は中世末に想定できる。



第32図　丸山古墳平面および断面図

引用文献

佐藤信之　1975年「3『丸山古墳』と呼ばれたもの」『横沢遺跡群III』　更埴市教育委員会

品田高志　1988年「柏崎平野における塚（群）の分布と立地について」『柏崎の民俗』第2号　柏崎民俗の会

第3節　北平尾根の調査

1　古墳以前の遺物

(1) 概観

北平1号墳の構築以前と考えられる遺物に石器資料53点がある。器種の詳しい内訳は表5に示すが、石鏃に代表される狩猟具、石錐や刃器などの工作具、採集具としての打製土掘具である。具体的な所属時期は伴出土器がないため決定できないが、2層・黄褐色土層内に集中してあるいは単独の状況で出土した。

集中箇所はE8グリッド周辺にあり、同一母岩と考えられる黒曜石の石核と剥片・砕片が半径10m範囲に集中、剥片剥離作業の実施された製作ブロックである可能性が高い。材質から小形の剥片石器を製作したものと判断できるが、製作の際に出現する微小な調整砕片の収集はない。石鏃未完成品1点の出土を積極的に評価すれば、石鏃製作に関わるブロックであることが予想できる。

単独出土品には石鏃・石錐・打製石斧がある。石鏃・石錐は各1点でほぼ完形、共にチャート材。打製石斧は3点あり、完形もしくは基部破片の頁岩製（≒粘板岩製）である。

(2) 石器

① 石核（第34図1～4、PL. 56）

1は拳大のチャート(A)転石を素材とする。原礫面に直接打撃を加えて剥片剥離を行った後、この剥離面を打面とし2回以上にわたる剥片剥離を実施している。2～4は一旦原石を分割した後、分割面を打面とし剥片剥離を実施した例である。2は大形の剥片核から2回以上の剥離を行い、かつ分割面（打面）端部を利用した掻器的機能を合わせ持つ。3は石核作業面部が核本体から遊離し、やや大形の剥片核に転じた例で1回の剥片剥離が認められる。作業面の端部に掻器的機能を合わせ持つ。4はチャート(D)の残核であり、剥片剥離の最終形態である。5の剥片と接合する。

② 剥片・砕片（第34図5～7・18・19、PL. 56）

5は4から直接剥離された剥片であるが、端部を欠損するため加工の有無は不明。6は平面形が三角形状を呈する横長の剥片である。長辺端部に微細な剥離痕を確認するが使用痕と認定できるものではない。7は打面部を欠損する縦長の剥片である。6・7共に黒曜石。18・19は安山岩の縦長状剥片。表皮・剥離面共に風化が著しい。

③ 刃器（微細な剥離痕を留める石屑）（第34図8～13、PL. 56）

8・9は縦長状剥片の長辺に微細な剥離痕が認められる。8は黒曜石、9はチャート(A)。10は微細な剥離痕を持つ辺と刃部形成と思われる連続的で深度のある剥離の施された辺を持つ。同様な刃部形成は13にも認められ、共に黒曜石。11・12は剥片の全辺に微細な剥離痕が認められる。剥離痕は互いに連続した、いずれも急斜度な例である。

④ 石鏃（第34図14・15、PL. 56）

14は石鏃の未成品、黒曜石製。横長の剥片を素材とし、表面側からの剥離により打面が除去されている。成形加工は粗雑で、1側辺部に加工の集中がある。製作の過程で掻器としての使用に転じた可能性もあるが、使用痕は認められない。15はチャート(A)製。脚端部を僅かに欠損するが、ほぼ完形。抉りの度合いが深い凹基無茎鏃で、鏃身は長い。

⑤　石錐（第34図16・17、PL. 56）

16は石核等の稜部破片（砕片）を利用した断面三角形の錐である。鋭利な両端に裏面側から加工を施して錐部を作出する。基端部の錐部付近には微細な連続した剥離痕が認められ、掻器としての併用も予想できる。17は紡錘形で先端部を欠損する。先端は断面円形状であり、剥離の粗雑さを加味し石錐と判断しておく。ただし基部裏面が平坦な剥離で、端部の尖る形状は尖基鏃としては十分な要素であるから、その可能性を考えておく必要はあろう。黒曜石製。

⑥　打製石斧（第34図20、PL. 56）

頁岩の横長剥片を素材とし、1側辺部は自然面（節理面）を無加工な状態で残す。基部を欠損するが、全体形は撥形に類する。刃部形態は円刃を呈し、再生と考えられる剥離が認められる。使用による摩滅・線状痕が明瞭に発達する。

(3)　まとめ

山裾の尾根部から石器の出土する例は、森将軍塚古墳[1]や塩崎城見山砦遺跡[2]などにある。出土状態には2種類あって、石器や石屑が一定の範囲に集中する例と石器のみが単独で出土する例である。北平古墳は前者に相当し、石器以外に石核5点・剥片12点・砕片10点の剥片剥離資料がある。チャート材は原礫面の残る礫核素材であるのに対し、黒曜石の資料は原礫面の認められない核素材である。いずれも剥片剥離が実施されているが残存する器種に同一母岩を確定できない。剥片1点のみで、砕片の出土がないチャート材は剥片状態で刃器として、あるいは素材剥片として持ち出された可能性を指摘できる。一方黒曜石材は石鏃未成品1点があり、剥片・砕片の80%に連続した微細剥離痕が認められる。石鏃製作以外に刃器製作あるいは工作用剥片の剥取を目的とした剥離作業も予想できるが、残核の大きさから推定すると、素材剥片としての持ち出しの可能性は低いと考えられる。すなわち北平での剥片剥離には（素材）剥片の剥取を主目的とした固体群と石鏃製作及び何らかの工作を目的とした固体群が想定できそうである。2点のみ出土している安山岩の剥片などは、おそらく前者の結果として、逆に北平の他に持ち込まれた例であると考えられる。

北平の遺物集中には、石鏃製作を介して《狩猟に関わる工作》が濃厚である一方、《採集に関わる工作》を暗示する打製石斧の出土がある。2点は基部破片であり、1点が基部端の欠損例である。刃部破片ではないため、使用場所を特定することはできないが、立地条件から推定すると付近での使用が充分考えられる。

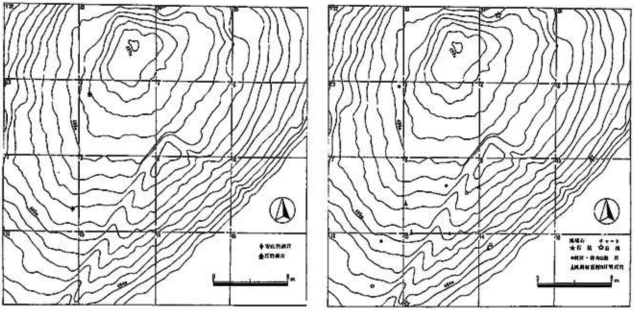
このように北平尾根出土の石器資料は、狩猟・採集活動に伴う集落外における労働作業の一端を示しており、その内容から判断してキャンプ地としての性格が強い。ただし焼土址のように長期滞在を裏づける状況は確認できなかったので、非常に短期的なキャンプ地であったと判断できる。遺跡における「文化遺物の分散」[3]概念で括られるところの、生産域でのひとつの石器出土状況「尾根型」を示している。

［注］

1）贄田　明；1992「第6章第2節1古墳時代以前の遺物」『史跡　森将軍塚古墳』更埴市教育委員会

2）大竹憲昭；1994「第7章第4節1旧石器・縄文時代の遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13－更埴市内・長野市内その1－塩崎城見山砦遺跡　ほか6遺跡』長野県埋蔵文化財センター

3）町田勝則；1994「第4章第1節縄文時代晩期終末の石器群について」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書13－長野市内その2－鶴前遺跡』長野県埋蔵文化財センター



第33図　北平尾根石器出土分布図

	総数	石屑			狩猟具	採集具	調理・加工具	
名称		石核	小剥片・砕片	大剥片	石　鏃	打製石斧	石　器	石錐
数量	53	5	22	5	2	3	14	2

第5表　北平尾根出土の石器組成

石核

番号	法量（最大値）				打面							作業面										自然面	素材	石材	備考	
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	有無	形状	調整 有	調整 種	転移 有	転移 度	数	形状	調整 有	調整 種	転移 有	転移 度	数	角度	長さ(cm)	幅(cm)	型				図版番号	出土地点
1	2.1	2.2	1.8	7.4	○	自然	—	—	○	90	2	ハク	—	—	○	90	2	78	1.6	1.4	タテ	○	剥	チャートA		Y24−37
②	3.9	9.7	6.5	193.7	○	ハク	—	—	—	—	—	自・剥	—	—	—	—	—	72	2.7	3.8	ヨコ	○	剥	チャートB	2	E5−28　採集
③	(5.3)	(4.5)	1.6	(41.2)	○	ハク	—	—	—	—	—	ハク	—	—	—	—	—	64	1.2	1.4	ヨコ	○	剥	チャートD	4	E13−4
④	7.9	7.3	4.2	279.2	○	自・剥	○	剥	△	180	2?	自・剥	—	—	△	180	2?	52	3.8	3.2	タテ	○	原	チャートA	1	E3　No.38
⑤	3.7	3.4	2.1	18.4	○	ハク	—	—	○	90	2	ハク	—	—	○	180	2	68	1.6	1.8	ヨコ	—	剥	黒曜石	3	表採　採集

○付は図使用

小形剥片

番号	法量（最大値）				打面			作業面						剥離技術	自然面	石材	分類	備考		
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	有無	形状	数	形状	剥離面 有	剥離面 数	角度	長さ(cm)	幅(cm)	型				図版番号	出土地点	
1	(1.9)	3.5	1.0	(3.1)	—	—	—	ハク	○	1	—	—	—	—	○	黒曜石	剥核		E2	
2	(3.2)	1.8	1.7	(7.0)	—	—	—	ハク	○	1	—	—	—	—	○	黒曜石	剥核		U21	
3	2.0	3.3	0.9	4.0	○	自然	1	ハク	○	1	—	—	—	ヨコ	○	黒曜石	剥核		E4	
4	3.1	2.6	1.1	7.3	○	ハク	—	ハク	○	1	—	—	—	タテ	—	チャートA	剥核		E17	作調
5	3.3	(2.1)	0.9	(5.0)	○	ハク	—	ハク	○	1	—	—	—	—	—	チャートA?	剥核		E12−2	
6	1.6	2.4	0.8	5.2	○	ハク	—	ハク	○	1	—	—	—	ヨコ	—	チャートE	剥核		J2	作調
7	(3.0)	5.5	1.4	(18.1)	—	—	—	自・剥	○	1	—	—	—	—	○	チャートE	剥核		表採	作調
8	2.4	3.7	1.0	7.8	○	ハク	—	ハク	○	1	—	—	—	ヨコ	○	珪質頁岩	剥核		E14−7	作調
9	1.6	1.8	0.2	0.6	—	—	—	ハク	○	1	—	—	—	ヨコ	○	黒曜石	剥片B		E8−57	
⑩	3.2	5.0	1.0	13.0	○	ハク	—	ハク	○	1	—	—	—	ヨコ	○	黒曜石	剥片B	6	E3　No.75	
⑪	(4.3)	2.3	0.6	(4.2)	—	—	—	ハク	○	—	—	—	—	タテ	○	黒曜石	剥片B	7	E17　No.1	
⑫	(4.7)	4.7	1.2	(22.9)	○	ハク	—	ハク	○	1	—	—	—	—	○	チャートD	剥片B	5	E12　No.1	

第6表　石器観察表

砕片

番号	法量（最大値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	打面 有無	形状	数	作業面 形状	剥離面 有	数	角度	長さ(cm)	幅(cm)	型	剥離技術 型		自然面	石材	分類	備考 図版番号	出土地点
1	1.4	2.9	1.0	2.6	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黒曜石	–		Y23
2	(1.6)	1.4	0.6	(0.9)	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黒曜石	–		E8−63
3	1.4	1.6	0.5	0.8	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黒曜石	–		E8−100
4	1.5	1.2	0.5	0.7	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黒曜石	–		E8
5	1.1	2.7	0.7	1.3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黒曜石	–		E12−8
6	(0.8)	2.1	0.3	(0.5)	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黒曜石	–		E2−27
7	2.0	1.8	0.8	2.2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	チャートA	–		D13
8	1.7	1.3	0.5	1.3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	チャートC	–		Y24
9	0.9	1.2	0.2	0.2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	チャートC	–		E8−74
10	1.2	2.0	0.2	0.4	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黒曜石	–		E4

大形剝片

番号	法量（最大値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	打面 有無	形状	数	作業面 形状	剥離面 有	数	角度	長さ(cm)	幅(cm)	型	自然面	石材	備考 図版番号	出土地点
①	4.2	2.4	0.7	6.9	○	自然	1	ハク	○	2	–	–	–	タテ	○	安山岩	18	E8−90
②	4.8	4.0	0.7	8.7	○	自然	1	自然	–	–	–	–	–	タテ	○	安山岩	19	E12−11
3	3.0	5.0	1.0	15.7	○	自然	1	自然	–	–	–	–	–	ヨコ	○	安山岩		E8
4	3.1	3.3	1.0	11.2	○	ハク	1	ハク	○	1	–	–	–	ヨコ	○	頁岩（粘）		E8−5
5	(5.3)	(2.7)	0.5	(7.4)	–	–	–	ハク	○	2	–	–	–	タテ	○	頁岩（粘）		E12 №7

石鏃

番号	法量（最大値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	機能部 長さ(cm)	幅(cm)	先端角(度)	抉り長(cm)	抉り幅(cm)	茎長(cm)	使用痕跡 痕跡	状況	再生	装着痕跡 痕跡	付着	基部形態 茎	形	側辺部形態	欠損 部位	状況	素材剥片	自然面	石材	備考 図版番号	出土地点
①	3.1	1.5	0.4	1.2	1.7	0.8	26	1.6	0.4	–	–	–	–	–	○	–	凹	直線	–	–	–	–	チャートA	15	U−21
②	3.0	2.1	0.7	3.2	1.6	1.1	36	–	–	–	–	–	–	–	–	–	平	外湾	–	–	ヨコ	–	黒曜石	14	E−8 №25 未製品

打製石斧

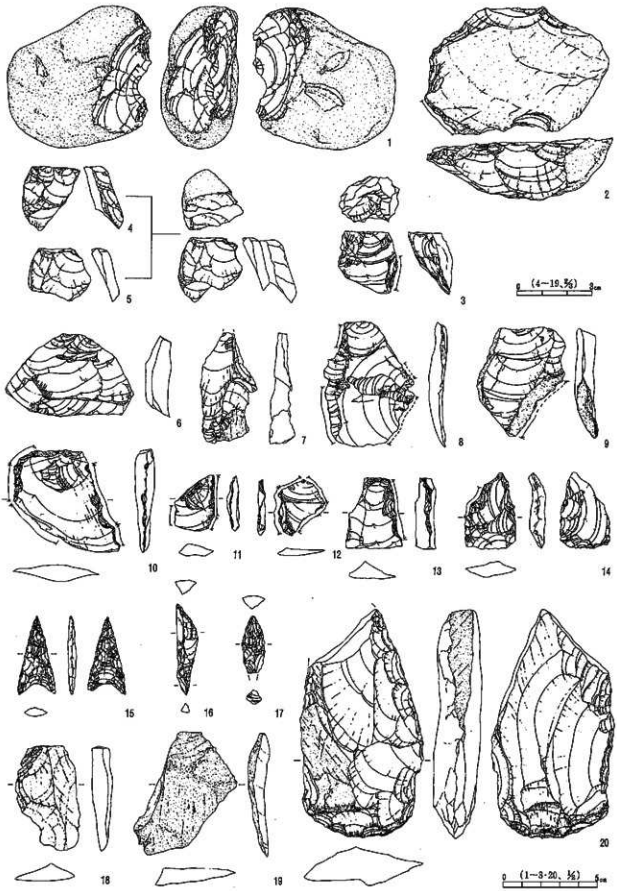
番号	法量（最大値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	刃部 数	刃幅(cm)	刃部角(度)	平面形	断面形	使用痕跡 長さ(cm)	幅(cm)	刃角(度)	型	再生加工	装着痕跡	敲打痕跡	欠損 部位	状況	素材	自然面	石材	備考 図版番号	出土地点
1	(5.0)	3.1	1.3	(22.0)	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	刃部	折	–	○	頁岩（粘）		Y24
2	(6.1)	(3.9)	(1.9)	(47.8)	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	刃部	折	ヨコ	○	頁岩（粘）		墳丘A区1層中
③	(12.1)	6.8	2.2	(189.5)	1	5.8	8	円	両	2.1	3.6	63	線	△	–	–	基部	折	ヨコ	○	頁岩（粘）	20	ⅢE17

刃器

番号	法量（最大値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	刃部 数	刃角主角	刃長(cm)	刃幅(cm)	平面形	断面形	使用痕跡 有無	型	加工	自然面（素材） 自然面	素材	石材	備考 図版番号	出土地点
①	4.9	3.6	0.6	8.2	3	58°	0.8	0.2	直	片	–	微剥	–	–	タテ	黒曜石	8	E−2
②	3.7	4.5	0.8	9.8	2	50°	1.4	0.2	内	片	–	微剥	–	○	ヨコ	黒曜石	10	E−4
3	2.0	2.9	1.1	4.4	1	46°	1.3	0.2	直	片	–	微剥	○	○	ヨコ	黒曜石		E−8−30
④	1.6	2.4	0.5	1.6	2	54°	0.7	0.2	波	片	○	横	○	○	ヨコ	黒曜石	11	E−14−9
⑤	1.8	2.1	0.3	0.9	3	58°	0.9	0.1	内	片	○	横	○	○	ヨコ	黒曜石	12	E−8 №101
6	1.3	1.6	0.7	1.3	1	98°	0.7	0.2	直	片	–	微剥	○	○	ヨコ	黒曜石		E−8−78
7	1.0	2.3	0.4	0.8	1	74°	1.1	0.2	直	片	○	横	–	○	ヨコ	黒曜石		E−9−[illegible]
8	1.2	1.8	0.4	0.6	1	76°	0.7	0.2	内	片	○	横	○	○	ヨコ	黒曜石		E−8−46
9	1.3	1.4	0.3	0.4	1	70°	0.7	0.1	直	片	–	微剥	○	○	ヨコ	黒曜石		E−4
⑩	4.2	3.5	0.9	11.0	1	50°	1.2	0.2	直	片	–	微剥	–	○	タテ	チャートA	9	表採
11	1.7	1.6	0.3	0.8	2	32°	1.3	0.2	直	片	–	微剥	–	–	タテ	チャートA		E−8
12	1.8	1.8	0.9	2.1	2?	50°	0.7	0.1	直	片	–	微剥	○	–	–	チャートF		Y−23
⑬	(2.8)	(2.4)	0.8	(4.6)	1	40°	(2.6)	0.2	直	片	–	微剥	○	–	タテ	黒曜石	13	トレンチ
14	2.7	(2.0)	0.8	(3.3)	1	56°	2.2	0.2	直	片	–	微剥	○	–	ヨコ	黒曜石		E−12 №2

石錐

番号	法量（最大値） 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	打面 有無	形状	機能部 調整 側	剥	数	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	円周(cm)	使用痕跡	断面形態	欠損 部位	状況	自然面	全体形	素材剥片	石材	備考 図版番号	出土地点
①	(2.3)	0.9	0.6	(1.0)	–	–	○	○	1	–	–	–	–	–	菱形	先端	折	–	棒状	–	黒曜石	17	Y23
②	3.7	0.8	0.5	1.3	–	–	○	○	2	–	–	–	–	△	三角	–	–	○	棒状	ヨコ	チャートA	16	E2



第34図　北平尾根出土石器

2　古代・中世の遺構と遺物

標高497mの北平の峰は標高780mの尼厳山山系の一支派であるが、独立的な高まりがあり、270°あまりの視界で眼下沖積地を見下ろせる（第3・4図）。

峰の平坦部を面的に掘り下げると、地表下5cmで中部高地型櫛描文系土器群が姿を現したが、その中に若干の古代黒色土器片、中世かわらけ片が注意された。さらに峰の南東斜面に古代黒色土器片、須恵器片、灰釉陶器片が散布することが明らかとなった（第35図）。

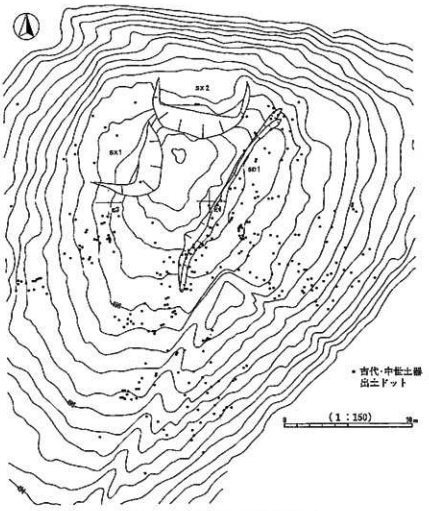
(1)　遺構（第35図）

SD 1

E 3・4．Y24グリッドに位置する。幅20～80cm、深さ10cmほどの細い溝で、U字状の断面をなし、長さ16m、N－60°－E方向に直線的にのびる。両端部がやや傾斜方向に曲がる。北平1号墳の墳丘を掘り込み、その底部は岩盤層にまで達する。その南東側も斜面を削り平坦面をなす。埋土は黒褐色土で、古代黒色土器細片を含む。同溝埋土およびその付近に古代の遺物が集中することから、平安時代の遺構ととらえられる。

SX 1

Y22．Y23グリッドに位置する。北平1号墳の墳丘を若干削り、3×5mほどの平坦面をなし、松原遺跡側を見下ろせる方向（N－80°－W）に面している。同部分は、本来北平1号墳のテラス面であったため、同部を利用したものと考える。出土遺物はないが付近から出土した銭貨から、中世から近世の遺構と考えたい。



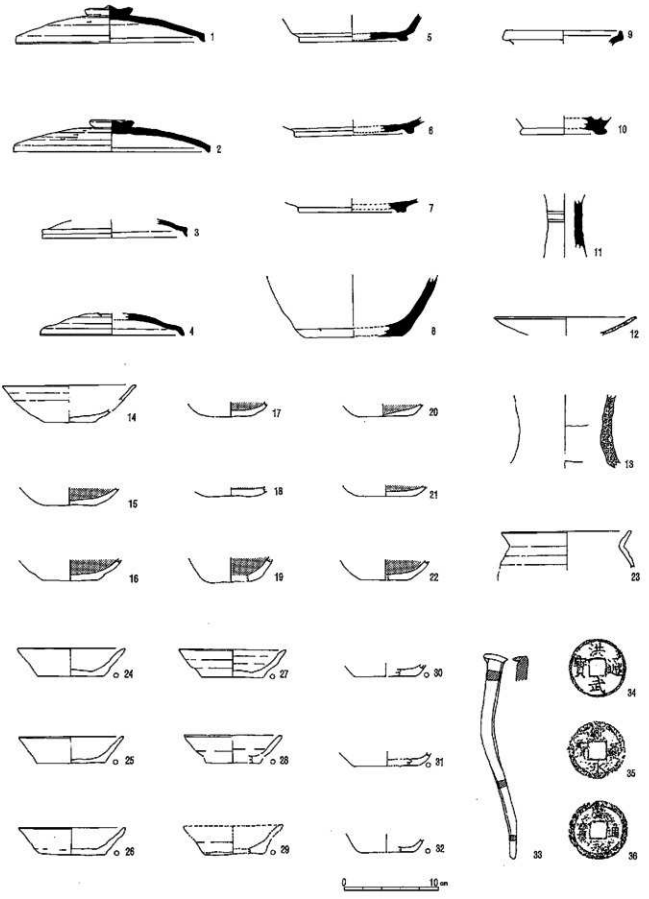
第35図　古代・中世の遺構および土器分布図

SX 2

Y23．Y24グリッドに位置する。SX 1同様墳丘を若干削り、2.5×6mほどの平坦面をなし、大窪集落側を見下ろせる方向（N－10°－E）に面している。北平1号墳のテラス面を若干掘り込んでいる。中世から近世の遺構と考えたい。

(2)　遺物（第36図）

古代の遺物として須恵器・土師器・灰釉陶器が、中世から近世の遺物としてかわらけ、銭貨、鉄釘が出土した。最も多いのは古代の土器類である。



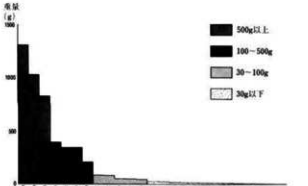
第36図　北平尾根出土土器、鉄器、銭貨　土器(1／4) 鉄器(1／2) 銭貨(2／3)

① 出土状況

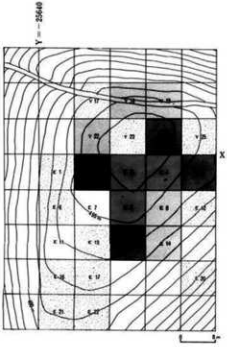
古代の土器類は（第36図）いずれも細片で完形に復元できるものはない。２～３cm大の細片が最も多く、総破片数1120片、4860ｇである。土師器・須恵器・灰釉陶器の破片数の割合は土師器88%、須恵器９%、灰釉陶器３%となる。土師器の器種組成の主体は黒色土器の杯であり、総破片数の52%を占める。杯類が90%以上をなし、煮炊具としては小型甕が若干みられる程度であり、その少なさが特徴となる。須恵器・灰釉陶器もその主体となるのは杯類であり、壺類が若干ともなう。

出土位置は北平の峰およびその周囲に広がりを見せる（第35図）。最も大型破片が集中するのは、北平１号墳南東側傾斜部SD１付近のＥ３．４．８グリッドとなる（第37・38図）。周囲下方斜面に沿って破片が細片化し、流れ出した状況になることから、北平１号墳の墳丘および南東側平坦面を古代に利用した様子が窺える。

中世の遺物は、かわらけ片・銭貨が北平１号墳の墳丘上から、完形のかわらけ３個体と鉄釘が、峰から東側にのびる痩せ尾根南側斜面から検出された（第36図）。かわらけはU14．21．25グリッドから、鉄釘はU20グリッド（第６図）からの出土である。



第37図　グリット別古代・中世土器重量



第38図　北平古代・中世土器分布図

番号		器種	出土グリッド	技法・その他		
1	須恵器	蓋	E３．４．８	回転ナデ、回転ヘラ削り		
2	〃	〃	E２．４	〃		
3	〃	〃	E８	回転ナデ		
4	〃	〃	E８	〃		
5	〃	高台杯	E４	底部回転ヘラ削り		
6	〃	〃	E４	〃		
7	〃	〃	E13	〃		
8	〃	壺	E８	底部回転糸切り、体部回転ナデ		
9	〃	長頸壺	E３	回転ナデ		
10	〃	〃	E８	回転ナデ		
11	〃	〃	E８	回転ナデ、２本沈線		
12	灰釉陶器	瓶	E４	外面下半回転ヘラ削り、内外面浸示部分施釉		
13	〃	壺	E４	外面回転ナデ、全面施釉		
14	土師器	杯	E３．４	回転ナデ、底部回転糸切り		
15	〃	〃	E３．４	内面黒色処理、回転ナデ		
16	〃	〃	E４．５	〃	〃	底部回転糸切り
17	〃	〃	E４．５	〃	〃	〃
18	〃	〃	E３(SD１)	〃	〃	〃
19	〃	〃	E４．５	〃	〃	
20	〃	〃	E３	〃	〃	
21	〃	〃	E４	〃	〃	底部回転糸切り
22	〃	〃	E４．	〃	〃	〃
23	〃	小型甕	E２．３	外面回転ナデ、内面ナデ		
24	かわらけ	杯	U25	回転ナデ、底部回転糸切り、色調黄橙色		
25	〃	〃	U25	〃	〃	〃
26	〃	〃	U14	〃	〃	〃
27	〃	〃	U21	〃	〃	〃
28	〃	〃	U25	〃	〃	〃
29	〃	〃	U24．25	〃	〃	〃
30	〃	〃	Y24	回転ナデ、底部回転糸切り、色調灰白色		
31	〃	〃	Y24	〃		〃
32	〃	〃	(金井山城)	〃	〃	色調橙色
33	鉄　釘		U20			
34	銭　貨		Y23	洪武通寶		
35	〃		E３	寛永通寶		
36	〃		Y23	〃		

第７表　北平尾根出土遺物観察表

第3章　胎土分析

第1節　北平1号墳出土土器の重鉱物胎土分析にあたって

北平1号墳は長野市松代町東寺尾字北平に所在した3世紀後半の墳丘墓である。高速道土取り用地内の山頂に位置し、記録保存後消滅した。土取り用地眼下の自然堤防上には松原遺跡があり、墳墓との比高差150mを計る。

墳丘には2基の埋葬主体部があり、木棺による埋葬が想定されている。棺上には祭祀土器群が埋置されたものと考えられ、図示できたもので1号埋葬主体部に16個体、2号埋葬主体部に7個体の土器が棺内に落ち込んで検出された。

壺、高杯、甕の主体は在来の中部高地型櫛描文系土器であったが、2個体のみ外来系土器が見られた。東海系ひさご壺、三河系受口甕であった。しかし、胎土は在来系土器と同様なものではないかと考えた。

1　今回明らかにしたい点

① 北平1号墳出土土器群の重鉱物組成を明らかにする。

② 北平1号墳出土土器群と松原遺跡出土土器群および河川砂との重鉱物組成を比較する。

③ 長野盆地南部松代地域（千曲川右岸）での重鉱物組成の基準を作成する。（今後、他遺跡の分析を進める中で考えていきたい）

④ 在来系と東海・三河系とでは重鉱物組成に差が出るか明らかにする。

⑤ 北平の土器を肉眼で観察していると、0.5～1㎜の砂粒を多量に含むものと、そうでないものが見られる。これらの違いが粘土の違いなのか、混和材の違いなのか、製作者の違いなのか、供給の違いなのかを考える材料を得たい。

2　胎土肉眼観察分類

〈砂　粒〉

A　径0.5～1㎜の砂粒を多量に含むもの。肉眼で白色砂粒がボソボソとめだつ。

B　径0.5～1㎜の砂粒を含むがAよりは少なくないもの。部分的に多く含むところと粗のところがある。肉眼で白色砂粒がめだつ。

C　0.1～0.2㎜以下の砂粒を含むがち密。0.5～1㎜砂粒はほとんど含まない。

〈色　調〉

a　茶褐色　　褐色傾向にあるもの。

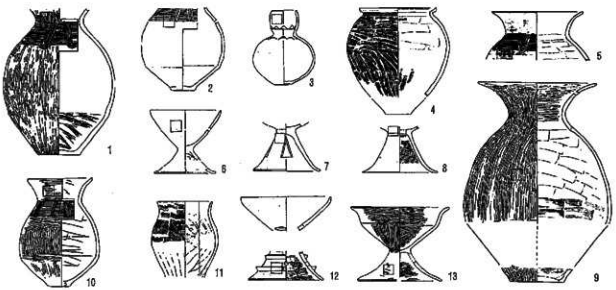
b　茶褐色　　黄褐色傾向にあるもの。

c　茶褐色　　灰褐色傾向にあるもの。

第8表　北平1号墳重鉱物胎土分析サンプル

サンプルNo.	図版番号	遺跡・遺構名	器種	胎土肉眼観察	
1	1	北平・1号主体部	壺	Aa	在来系
2	4	〃	〃	Ab	〃
3	10	〃	ひさご壺	Ba	東海西部系
4	11	〃	受口甕	Bb	三河系
5	2	〃	壺	Cc	在来系
6	15	〃	高杯	Ca	〃
7	12	〃	〃	Cc	〃
8	13	〃	〃	Ca	〃
9	9	〃	壺	Ca	〃
10	17	北平・2号主体部	〃	Bb	〃
11	18	〃	甕	Cb	〃
12	22	〃	高杯	Aa	〃
13	23	〃	〃	Bb	〃
14		松原ⅠBグリッド	〃		〃
15		〃	壺		〃
16		〃	〃		〃（北平の胎土に最も近い）
17		松原SB71	甕		〃
18		〃	〃		〃
19		〃	〃		〃
20		〃	〃		〃
21		〃	壺		〃
22		〃	〃		〃
23		〃	〃		〃
24		千曲川左岸の川砂			長野市篠ノ井東福寺地籍
25		蛭川上流の川砂			〃　松代赤柴地籍
26		〃　下流の川砂			〃　〃　屋地地籍

※1～13は3世紀後葉の御屋敷式土器である。
14～23は3世紀前半の稲荷水式土器である。
河川砂サンプリングに関しては、24が限川の砂の混入がありうる地点を、25については千曲川の影響を受けない地点を、26については千曲川の影響も受ける遺跡密集地点を選定した。



□ サンプル採取位置（ナンバーは重鉱物胎土分析サンプルナンバー）

第39図　重鉱物胎土分析サンプルナンバーおよび採取位置

第2節　北平1号墳より出土した土器の胎土の特徴

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回は北平1号墳から出土した土器の胎土について、分析によりその特徴を捉える。一般に土器の研究は、文様や形態などの外見的な特徴を基準とした型式学的な研究が進められており、縄文土器などにおいて非常に精細な解析が行われている。しかし、最近の考古学では、土器の製作や流通についてより実証的な研究が重視されていることから、型式学とは別な側面からの検証が必要とされている。土器を材質の面から捉えようとする胎土分析は、そのような土器研究の状況の中で有効な方法の一つとされている。胎土は型式と同様に土器の性格を表すから、ある程度まとまった個体数の中で胎土の状況（例えば類似した胎土が多いとか異質な胎土があるとかというような状況）を把握し、胎土と出土遺跡、時代、型式、器種等とを比較することで、土器の製作や流通を考える手がかりを得ることができる。また、胎土を構成する粘土や砂などは、採取された地域の地質学的な背景が反映されているため、その特徴を捉え、既存の地質学的な情報と比較することにより、土器の地域性について客観的な情報を得ることができる。

本分析においては、まず北平1号墳出土土器の胎土の重鉱物組成を明らかにする。次にこれと北平1号墳の立地する山地下の沖積低地上に位置する松原遺跡出土の土器胎土との比較を行い、両者の関係を考える。また、この沖積低地を形成している千曲川および蛭川の河川砂とも比較し、土器の材料および製作地について考察する。さらに、北平1号墳出土の土器に認められた考古学的特徴から東海系および三河系とされた土器について、胎土においても他の土器との間に差が認められるかを検証する。以上の考察を進めることにより、本分析結果を長野盆地南部松代地域（千曲川右岸）における弥生土器胎土の地域性に関する基礎資料としたい。

1　試料

試料は、北平1号墳より出土した土器13点（試料番号1～13）と松原遺跡から出土した弥生土器10点（試料番号14～23）および千曲川と蛭川の河川砂3点（試料24～26）である。北平1号墳より出土した土器のうち、試料番号1～9は1号主体部より出土し、試料番号10～13は2号主体部より出土した。これら13点の土器は3世紀後葉の御屋敷式とされている。一方、松原遺跡出土の土器のうち、試料番号14～16はIBグリッドより出土し、試料番号17～23はSB71より出土した。これら10点の土器は3世紀前半の箱清水式とされている。また、河川砂のうち、試料番号24は千曲川左岸より採取され、試料番号25は蛭川上流のおそらく千曲川の氾濫の影響を受けない地点から採取され、試料番号26は蛭川下流の千曲川の影響を受けたであろう地点から採取された。

各試料の出土遺跡・遺構名、器種、採取地などを重鉱物組成を示した図1、3に併記する。

2　分析方法

試料とした弥生土器は、その外見とこれまでの分析例から胎土中に含まれる砂分の重鉱物組成を胎土の特徴として代表されることが適当である。また、当社では、重鉱物分析による土器の胎土分析結果が比較的多く保有されているため、同一の分析手法であれば、これらの分析例を有効に活用することができる。以下に分析処理手順を示す。

試料は、適量をアルミナ製乳鉢を用いて粉砕、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1／16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1／4mm－1／8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

3　分析結果

(1)　胎土の分類（第40・42図、第9表、PL. 57）

分析結果を第9表に示し、それを棒グラフにして第40図に示す。これらの図表より、どの試料も斜方輝石と単斜輝石および角閃石（酸化角閃石を含む）の3つの鉱物を主体としていることがわかる。各試料におけるこれら3鉱物の量比の違いをみるために三角ダイアグラムを作成し、第41図に示す。さらに、これら3鉱物以外に、試料によっては黒雲母や緑レン石が含まれる組成も認められる。以上の三角ダイアグラムと他の重鉱物の種類の組み合わせとその量比に基づき、本分析試料の胎土は以下のような分類をすることができる。なお、以下に述べる分類順に試料を並べ直した図を第42図に示す。

1）Ⅰ類

斜方輝石が最も多く、次に単斜輝石または角閃石が多い。これら3鉱物以外には不透明鉱物が少量また微量含まれる程度であり、それ以外の鉱物は微量かほとんど含まれない。主要3鉱物の量比により、Ⅰ1～Ⅰ5類に細分される。

・Ⅰ1類　斜方輝石の次に角閃石が多い。角閃石は斜方輝石に近い量比を示し、単斜輝石はこれに比べると少量である。試料番号1、12、14がこれに相当する。

・Ⅰ2類　単斜輝石と角閃石がほぼ同量含まれる。試料番号9がこれに相当する。

・Ⅰ3類　斜方輝石の次に単斜輝石が多く、角閃石は少量である。試料番号2、10、11、13、19、21がこれに相当する。

・Ⅰ4類　単斜輝石が斜方輝石とほぼ同量程度含まれ、角閃石は少量である。ただし、下記のⅠ5類よりも角閃石の量比よりもやや多い。試料番号6がこれに相当する。

・Ⅰ5類　単斜輝石が斜方輝石とほぼ同量程度含まれ、角

第9表　重鉱物分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計
1	2	95	38	70	0	0	1	0	1	22	21	250
2	2	100	64	8	23	0	0	0	2	2	49	250
3	2	127	58	5	0	0	0	0	15	19	24	250
4	0	93	75	1	13	0	0	0	5	7	56	250
5	1	108	90	12	0	0	0	0	4	3	32	250
6	4	75	68	30	8	0	0	0	0	12	53	250
7	0	48	29	37	4	0	0	0	21	14	97	250
8	0	59	47	5	13	0	0	0	28	3	95	250
9	0	84	43	43	3	3	1	0	5	5	62	250
10	2	91	59	21	17	3	1	0	0	7	49	250
11	3	97	63	25	2	0	0	0	2	18	40	250
12	1	87	39	68	5	0	1	0	3	11	35	250
13	3	99	61	33	2	0	0	0	5	6	41	250
14	0	92	26	53	3	0	0	0	1	28	47	250
15	0	118	11	14	17	0	0	0	2	0	88	250
16	0	79	7	3	46	0	0	0	0	2	113	250
17	0	129	5	3	51	0	0	0	0	3	59	250
18	0	81	16	5	44	0	0	0	0	4	100	250
19	1	105	52	4	23	0	0	0	0	3	62	250
20	0	45	2	20	7	0	0	0	0	9	167	250
21	2	107	41	17	11	0	0	0	0	3	69	250
22	0	102	9	0	39	0	0	0	0	0	100	250
23	0	56	10	25	14	10	2	1	4	12	117	250
24	1	86	64	12	5	0	0	0	4	32	46	250
25	0	62	54	5	2	1	0	0	50	6	71	250
26	0	28	52	14	2	0	0	0	44	19	91	250

閃石は少量である。角閃石の少なさから、上記のⅠ4類とは区別した。試料番号4、5、24がこれに相当する。

2）Ⅱ類

Ⅰ二位に比べて単斜輝石が非常に少ないことから、Ⅱ類とした。また、角閃石のほとんどあるいは多くが酸化角閃石になっていることもⅡ類の特徴ともいえる。Ⅱ類も3鉱物の量比から、Ⅱ1～Ⅱ3類に細分される。

・Ⅱ1類　Ⅱ類の他の類に比べて単斜輝石の量比が若干高い。試料番号18がこれに相当する。

・Ⅱ2類　全体的に「その他」とした不明変質粒が多く、斜方輝石に対する角閃石の量比が若干高い。試料番号16と20がこれに相当する。

・Ⅱ3類　Ⅱ類の他の類に比べて角閃石に対する斜方輝石の量比が高い。試料番号15、17、22がこれに相当する。

3）Ⅲ類

主要3鉱物の量比はⅡ類に近いが、他の試料にはほとんど認められない黒雲母を少量含むことから、Ⅲ類として区別した。試料番号23がこれに相当する。

4）Ⅳ類

主要3鉱物の量比はⅠ類に近いが、他の試料にはほとんど認められない緑レン石を少量含むことから、Ⅳ類として区別した。主要3鉱物および緑レン石の量比からⅣ1～Ⅳ5類に細分される。

・Ⅳ1類　斜方輝石と角閃石がほぼ同量含まれ、単斜輝石はこれらよりやや少ない。試料番号7がこれに相当する。

・Ⅳ2類　斜方輝石と単斜輝石がほぼ同量含まれ、角閃石はこれらよりもかなり少量である。試料番号8がこれに相当する。

・Ⅳ3類　斜方輝石が最も多く、次に単斜輝石が多い。角閃石は微量である。試料番号3がこれに相当する。

・Ⅳ4類　斜方輝石と単斜輝石それに緑レン石がほぼ同量含まれ、角閃石は微量である。試料番号25がこれに相当する。

・Ⅳ5類　単斜輝石と緑レン石がほぼ同量含まれ、斜方輝石と角閃石は少量である。試料番号26がこれに相当する。

(2) 出土遺跡・遺構別にみた胎土および河川砂の重鉱物組成の状況（第40図）

1）北平1号墳

a）1号主体部　9点の試料のうち、Ⅰ類が6点、Ⅳ類が3点あり、Ⅱ類およびⅢ類は認められない。Ⅰ類ではⅠ1～Ⅰ5までの全ての種類が認められ、Ⅳ類ではⅣ1～Ⅳ3類の3種類が認められる。

b）2号主体部　4点の試料のうち、Ⅰ3類が3点あり、残る1点はⅠ1類である。Ⅱ～Ⅳ類は認められない。

2）松原遺跡

a）ⅠBグリッド　3点の試料は、Ⅰ類が1点、Ⅱ類が2点である。Ⅰ類はⅠ1類であり、Ⅱ類はⅡ3、Ⅱ2の各類を示す。

b）SB71　7点のうち、Ⅰ類が2点、Ⅱ類が4点、Ⅲ類が1点ある。Ⅰ類はいずれもⅠ3類であり、Ⅱ類はⅡ1、Ⅱ2類が各1点、Ⅱ3類が2点ある。

3）河川砂

3点の試料のうち、千曲川左岸の砂はⅠ5類であるが、他の2点すなわち蛭川の砂はいずれもⅣ類である。これら2点のうち、上流の砂はⅣ4類であり、下流の砂はⅣ5類である。

4　考察

(1)　土器胎土からみた北平1号墳と松原遺跡との関係について

結果で述べたように、北平1号墳出土の土器には複数種の胎土が混在し、かつ1号主体部と2号主体部とでは出土する土器の胎土の種類の傾向が異なっている。本分析試料でみる限り土器胎土と型式および器種との間に関連性はなく、また東海系、三河系とされた土器の胎土も他の在来系とされた土器の胎土の中に類似したものが認められることから、区別されない。

松原遺跡出土の土器は、北平1号墳出土の土器と明らかに胎土の傾向が異なることから、北平1号墳に供えられた土器とは、その製作をめぐる事情（砂や粘土の採取場所、土器の製作地、素地土を作る際の砂や粘土の種類とその混合比など）が異なっていたと考えられる。すでに指摘されている土器の型式および時期の違いも考慮すると、それぞれの遺跡に関わる集団の差異は、地理的な近さに比べると大きかったといえる。

ここで、両遺跡の土器胎土の違いと型式による新旧関係とを対応させてみると、松原遺跡の土器の主体をなすⅡ類の土器がより古く、両遺跡に認められるⅠ1類とⅠ3類の土器が中間であり、北平1号墳にしかないⅠ2、Ⅰ4、Ⅰ5類およびⅣ類の土器が新しいという図式がみえてくる。

(2)　土器胎土中の重鉱物の由来について

河川砂試料の重鉱物組成は、土器胎土のⅠ類またはⅣ類と類似した組成を示す。すなわち、本分析試料のうち、少なくともⅠ類やⅣ類の土器は、遺跡周辺の砂または粘土を使用して作られた可能性が高い。Ⅰ類の特徴である斜方輝石、単斜輝石、角閃石という鉱物の組み合わせは、長野盆地南西部を取り巻く山地の地質を反映している。加藤・赤羽（1986）の記載から、これらの鉱物は主に河東山地を構成する新第三系（皆神山のみ第四系）の安山岩質溶岩や同火砕岩および長野盆地の千曲川上流側に分布する西部山地を構成する新第三系の安山岩質溶岩や同火砕岩に由来すると考えられる（なお、以下の文中で使用する地質名および岩質も全て同文献によるものである）。より詳細にみるならば、斜方輝石の多い傾向は河東山地の中でも奇妙火山岩や皆神火山岩にみられ、単斜輝石の多い傾向は西部山地の聖山火山岩や桑原火山岩にみられる。また、角閃石の多い岩石としては、河東山地に点在する中新世貫入岩類といわれる石英閃緑岩がみられる。現段階では、Ⅰ類の中の各類をそれぞれの地質の分布域と対応させる（例えば、Ⅰ1類は貫入岩の周辺、Ⅰ3類は奇妙火山周辺、Ⅰ5類は千曲川上流側の西部山地周辺）ということはできない。本分析でも試料番号24に認められるように、聖山火山岩や桑原火山岩の分布域からやや下流側の砂でもⅠ5類の組成を示している。つまり、土器の材料とされるような砂や粘土などの表層堆積物の重鉱物組成は、局所的な地形や水系およびその力関係（基盤地質の分布の広さ、山地からの距離、傾斜の程度や河川の規模など）によって左右されるために、重鉱物組成からみた表層堆積物の分布は実際にはかなり複雑な様相を呈していることが予想される。したがって、長野盆地南部地域における各地の表層堆積物の重鉱物組成のデータを蓄積することができれば、Ⅰ類各類のより具体的な材料採取地の推定が可能になるであろう。

一方、Ⅳ類の重鉱物組成は、本分析結果から蛭川沿いの表層堆積物の重鉱物組成に対応する可能性がある。すなわち、Ⅳ類の胎土を示す土器の材料の採取地は蛭川沿いに限定されるかも知れない。Ⅳ類の特徴である緑レン石は、蛭川上流の河東山地を構成する豊栄部層の変質した火山岩類に由来する可能性がある。

さて、Ⅱ類およびⅢ類の組成は、今回の分析では河川砂試料には認められなかった組成である。まずⅡ類の特徴である斜方輝石が卓越し単斜輝石が非常に少ないという組成は、長野盆地南部周辺の地質では、河東山地に分布する別所層の一部に認められる。その分布域は比較的限定されているが、北平1号墳の載る山麓を構成しているのは、まさにこの地質であることから、Ⅱ類の胎土との関係があるかもしれない。また、Ⅱ類のもう一つの特徴である酸化角閃石については、皆神山火山岩に由来する可能性がある。ただし、酸化角閃石は普通角閃石（本分析では単に角閃石と表現している）が800℃程度の高温酸化で変化して生成するものであるから、土器焼成の状態により胎土中の角閃石が酸化角閃石に変化した可能性もある。したがって、Ⅱ類の酸化角閃石は、材料の採取地を示すものではなく、焼成状態の違いを示しているとも考えられる。皆神山周辺の自然堆積物中における酸化角閃石の量比を確かめることによって、どちらの可能性が高いかを判断することはできるであろう。

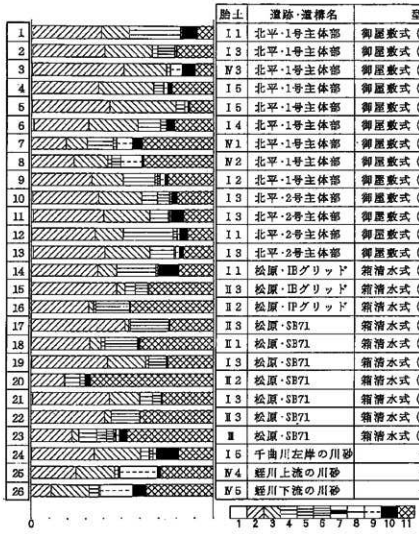
Ⅲ類の組成の特徴は黒雲母である。長野盆地南部地域周辺で黒雲母を比較的多く含む地質としては、西部山地に分布する流紋岩質の裾花凝灰岩をまずあげることができる。主たる分布域は、茶臼山以北の西部山地東縁部であるが、前述の聖山火山岩や桑原火山岩の東縁部にも分布している。斜方輝石の多いⅢ類の組成は、裾花凝灰岩の分布域のうち安山岩質の地質と接する後者の分布域に由来する可能性がある。裾花凝灰岩以外に広い火成岩き分布がない前者の分布域周辺（例えば犀川沿い）では、より黒雲母の量比が高い組成が予想されるからである。

ところで、北平1号墳出土の土器には、胎土肉眼観察により含まれる砂の粒径により違いが認められたが、本分析結果では重鉱物組成との対応関係は認められない。したがって、砂の粒径だけでは、土器の材料となった砂や粘土の採取地や製作事情の違いを考える際の指標とはならない。また、現段階ではその違いの意味するところも不明である。今後薄片作成鑑定を同一試料について行い、重鉱物組成との組み合わせを検討することによって胎土の種類をより細分する指標を得、この地域の胎土分析を進めていけば、それが材料採取地の違いなのかあるいは素地土の調整などの製作に関わる違いなのかを考えることができるであろう。

5　まとめ

本分析では、2カ所の遺跡で20点程度の土器だけでも、大きく分けて4種類、細かく分ければ10種類以上の胎土が存在することがわかった。この違いは、墳墓と集落、時期差そして複雑な地質分布などの条件を反映していると考えられる。今後この地域の土器胎土分析のデータを蓄積していく際には、まず本分析結果で示されたⅠ類～Ⅳ類までの分類と比較し、類似するならば同じ分類とし、基準にあわなければⅤ類以降の類を設定すればよい。そうすることにより、長野盆地南部松代地域における土器の地域性が系統的な分類の上に認識することができるであろうし、他の地域の分析例も加えることができれば、より一層地域性を明瞭に捉えることが可能になると考えられる。

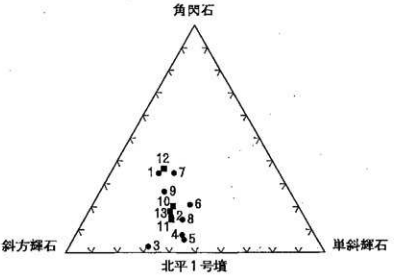
〈引用文献〉
加藤碩一・赤羽貞幸（1986）長野地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），120p.，地質調査所．

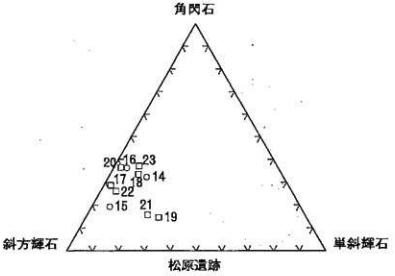


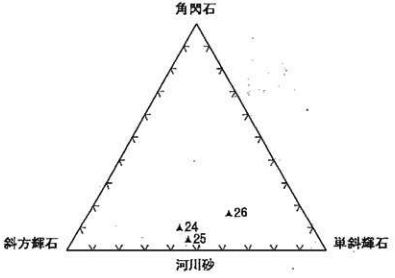
	胎土	遺跡・遺構名	型式	器種	胎土肉眼観察	備考
1	I 1	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ａａ	在来系
2	I 3	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ａｂ	在来系
3	N 3	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	ひさご壺	Ｂａ	東海西部系
4	I 5	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	受口甕	Ｂｂ	三河系
5	I 5	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ｃｃ	在来系
6	I 4	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｃａ	在来系
7	N 1	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｃｃ	在来系
8	N 2	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｃａ	在来系
9	I 2	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ｃａ	在来系
10	I 3	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ｂｂ	在来系
11	I 3	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	甕	Ｃｂ	在来系
12	I 1	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ａａ	在来系
13	I 3	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｂｂ	在来系
14	I 1	松原・IBグリッド	箱清水式（３Ｃ前半）	高坏	－	在来系
15	II 3	松原・IBグリッド	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
16	II 2	松原・IPグリッド	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系（北平の胎土に最も近い）
17	II 3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
18	II 1	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
19	I 3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
20	II 2	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
21	I 3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
22	II 3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
23	II	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
24	I 5	千曲川左岸の川砂	－	－	－	長野市篠ノ井東福寺地籍
25	N 4	姫川上流の川砂	－	－	－	長野市松代赤柴地籍
26	N 5	姫川下流の川砂	－	－	－	長野市松代屋地地籍

第40図　試料の重鉱物組成

1.カンラン石 2.斜方輝石 3.単斜輝石 4.角閃石 5.酸化角閃石 6.黒雲母 7.ジルコン
8.ザクロ石 9.緑レン石 10.不透明鉱物 11.その他

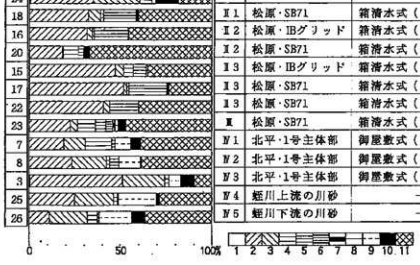






第41図　斜方輝石－単斜輝石－角閃石三角ダイアグラム

角閃石は表1の酸化角閃石も含む。図中の数字は試料番号。●：1号主体部
■：2号主体部　○：1Bグリッド　□：SB71　▲：河川砂



	胎土	遺跡・遺構名	型式	器種	胎土肉眼観察	備考
1	Ⅰ1	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ａａ	在来系
12	Ⅰ1	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ａａ	在来系
14	Ⅰ1	松原・Ⅱグリッド	箱清水式（３Ｃ前半）	高坏	－	在来系
9	Ⅰ2	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ｃａ	在来系
2	Ⅰ3	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ａｂ	在来系
10	Ⅰ3	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ｂｂ	在来系
11	Ⅰ3	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	甕	Ｃｂ	在来系
13	Ⅰ3	北平・2号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｂｂ	在来系
19	Ⅰ3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
21	Ⅰ3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
6	Ⅰ4	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｃａ	在来系
4	Ⅰ5	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	受口甕	Ｂｂ	三河系
5	Ⅰ5	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	壺	Ｃｃ	在来系
24	Ⅰ5	千曲川左岸の川砂	－	－	－	長野市篠ノ井東福寺地籍
18	Ⅱ1	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
16	Ⅱ2	松原・Ⅱグリッド	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系（北平の胎土に最も近い）
20	Ⅱ2	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
15	Ⅱ3	松原・Ⅱグリッド	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
17	Ⅱ3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	甕	－	在来系
22	Ⅱ3	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
23	Ⅱ	松原・SB71	箱清水式（３Ｃ前半）	壺	－	在来系
7	Ⅳ1	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｃｃ	在来系
8	Ⅳ2	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	高坏	Ｃａ	在来系
3	Ⅳ3	北平・1号主体部	御屋敷式（３Ｃ後葉）	ひさご壺	Ｂａ	東海西部系
25	Ⅳ4	蛭川上流の川砂	－	－	－	長野市松代赤紫地籍
26	Ⅳ5	蛭川下流の川砂	－	－	－	長野市松代屋地地籍

第42図　試料の重鉱物組成（胎土の種類別）

1.カンラン石　2.斜方輝石　3.単斜輝石　4.角閃石　5.酸化角閃石　6.黒雲母　7.ジルコン
8.ザクロ石　9.緑レン石　10.不透明鉱物　11.その他

写　真　図　版

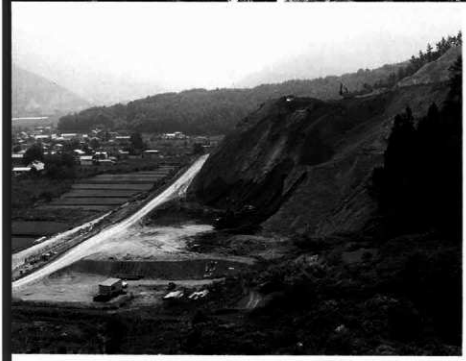
大星山古墳群・北平１号墳

大星山古墳群の遠景

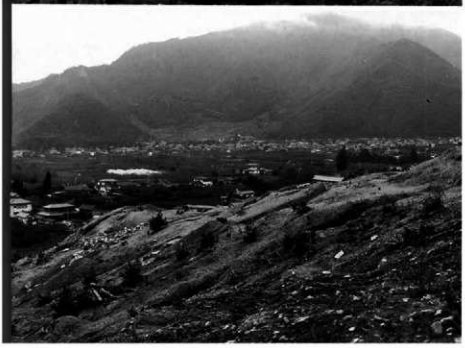
東方より
(左から4、1、2、3号墳)

大星山古墳群周囲の景観

古墳上から川田条里の高速道調査地を望む



隣接尾根を望む（奥が和田東山）



東方を望む
（中央の住宅地が長原古墳群、手前左から３、２、１号墳）

3 号墳の調査経過

調査前

表土剝後

石槨上面の露出

3号墳第1石槨の遺物出土状況

石槨の状況（手前が第1石槨、奥が第2石槨）

左：小型器台の出土（その左、帯状に黒色土）
右：　〃　（土層断面に黒色土）

左：副葬品の出土状況
左下：　〃　細部（手前に勾玉）
右下：壁と副葬品の位置

3号墳第1石槨

第1石槨（左）・第2石槨（右）

側壁（奥は第2石槨）

短壁の立石

3号墳第1石槨の細部

壁体断面

側壁の立石

裏込と墓壙の断面（右端は第2石槨）

同上細部

3号墳第1石槨の墓壙

第1石槨撤去後

墓壙断面（左端が第1石槨）

第1石槨解体後の断面

墓壙壁の立石

一次墓壙（左の凹みが第1石槨）

3号墳第2石槨

床面に鉄剣

北側壁

南側壁

石槨断面と墓壙

3号墳葺石

西方より

墳丘北東側

墳丘西側

3号墳葺石・組合式箱形石棺

石棺（南より）

石棺（東より）

葺石細部

3号墳墳丘

左：墓壙西側の盛土
右：　〃

左：墓壙北側の盛土
右：葺石と盛土

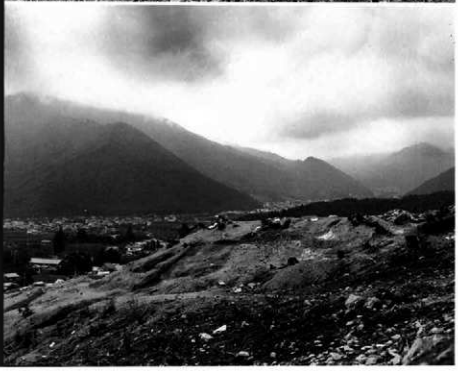
墳丘下方の岩盤

PL.12

1号墳の調査経過

調査前（川田条里・春山遺跡を望む）

同上（和田東山を望む）



表土剥後

1号墳礫床

鉄剣出土状況

壁体と礫床の二次的移動状況

遺物出土位置（竹串）

PL.14

1号墳第1石槨

礫床の細部と副葬品

第1石槨全景

西側壁

第1石槨（奥）・第2石槨（手前）

1号墳第1石槨の細部

礫床縦断面

礫床・石槨の横断面

礫床・石槨短壁の縦断面

壁体と裏込の断面

1号墳第1石槨墓壙・第2石槨

第1石槨墓壙

第2石槨

第2石槨側壁（手前は第1石槨）

1号墳第2石槨の細部

西短壁の立石

立石背後の短壁と側壁断面

東短壁と側壁断面

床面の状況

1号墳第2石槨の細部・墓壙

側壁と立石

壁体最下段の石と墓壙

墓壙

1号墳周溝

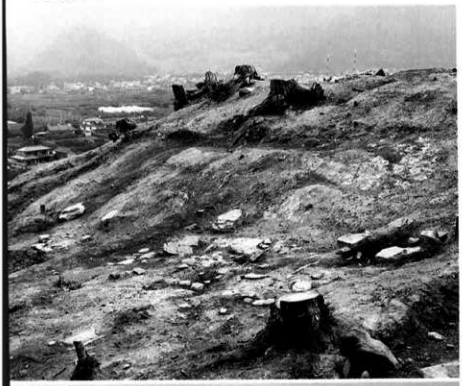
西周溝とテラス

北周溝（上方より）

北周溝の東端

南周溝（右上隅が第2石郷）

1号墳墳丘



周溝中の礫とテラス

墳丘東側（右下は3号墳）

第1石棺基壇下の岩盤

1号墳墳丘

右：西周溝の北端
下左：石室背後
下右：北隅

左：第1石槨中央　中：第1石槨北半　右：第1石槨の東

4号墳遠景・石槨

4号墳（中央）手前は1号墳第1・第2石槨

4号墳遠景（東方より）

墓壙と石槨

4号墳石槨

4号墳石槨の細部

南西隅の側壁

南側壁の断面

壁体と墓壙礎

東短壁の断面（北・南壁の解体後）

4号墳石槨の細部

壁体と裏込の断面

西短壁の延長部（南壁上部の解体後）

北・西・南壁（上方より、同上）

同上、北壁の延長部（西・南壁の上部解体後）

4号墳石槨の細部・墓壙

東壁の延長部（南・北壁は最下段のみ）

同上、上方より（南・北壁の解体中）

同上、南より（壁体最下段のみ）

4号墳墓壙

東外郭

西外郭

石郭最下段の石と墓壙内郭

4号墳墓壙

南外郭の石垣（部分）

北内郭と石郭最下段

内郭全景（東より）

南外郭外側の土層（上図の左上の細部）

墳丘（北より）

墳丘外の石棺と周溝

周溝断面と礫

周溝底と礫の関係

PL.30

2号墳石棺

検出時の天井石と側石上面

中左：石棺と掘り方
中右上：天井部の状況
中右下：側石と天井石の関係

副葬品の状況

2号墳石棺の細部

金銅製品の出土状況

礫床と鉄鏃

石棺の東側面

南短壁

南短壁と礫床

2号墳石棺の細部・墳丘

礎床除去後

石棺の掘り方

墳丘南側のテラス状地形

石祠・木造祠

石祠全景（木造祠撤去後）

左：祠の原状
中：木造祠
右：木造戸

木造祠（部分）

垂木と屋根

石仏(1)

安永四年銘石仏

右：台座（上面）

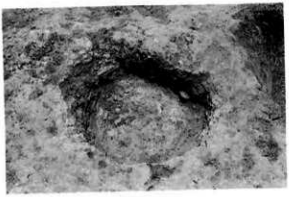
元禄三年銘石仏

右：台座（上面）

平安時代墓・中世火葬墓

4号墳石槨内の平安時代墓

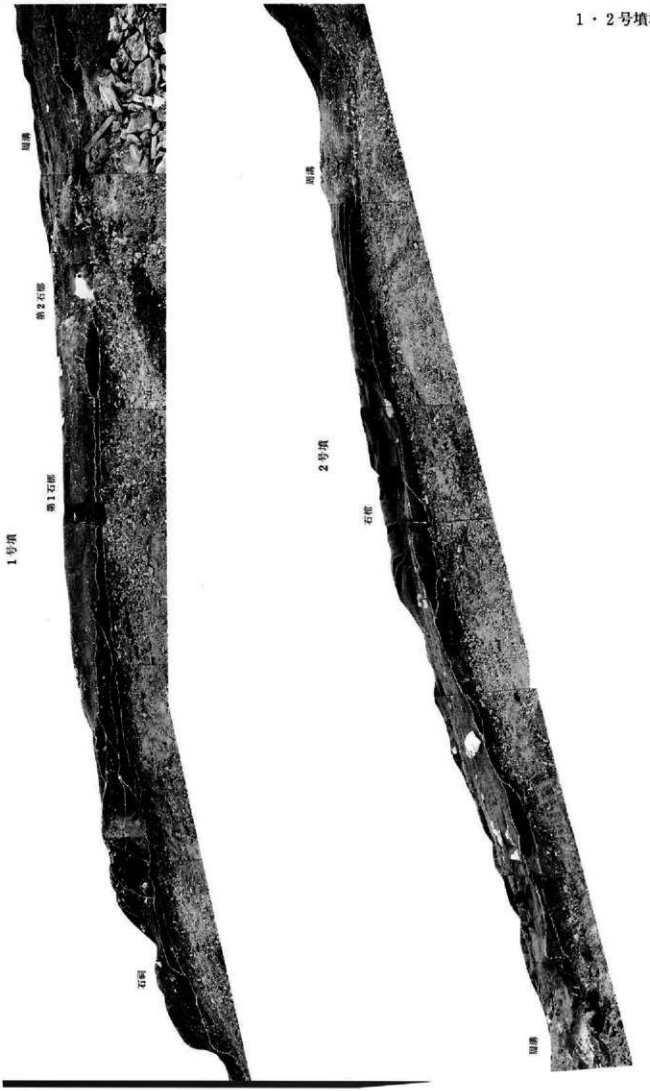
同上



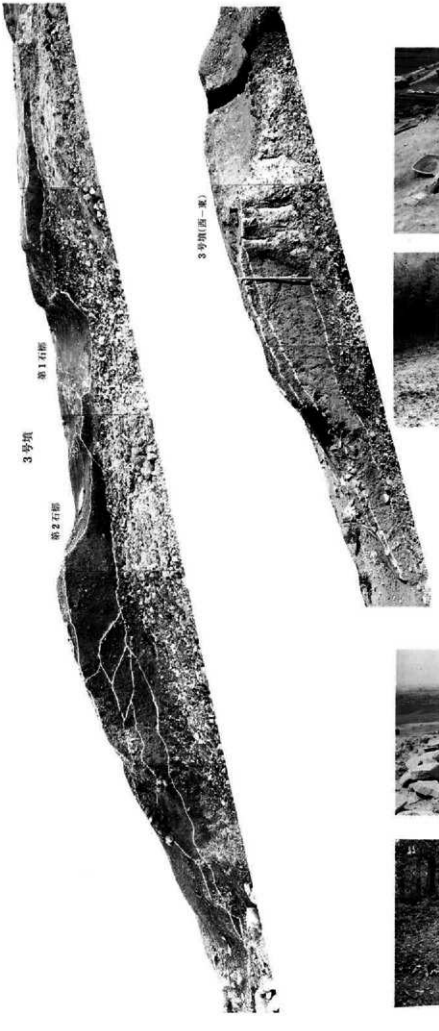
左：ピット内の火葬人骨
右：ピット

SX1

1・2号墳墳丘断面



3号墳墳丘断面



出土土器(1) (×1/3)

301

403

116

404

115

401

101

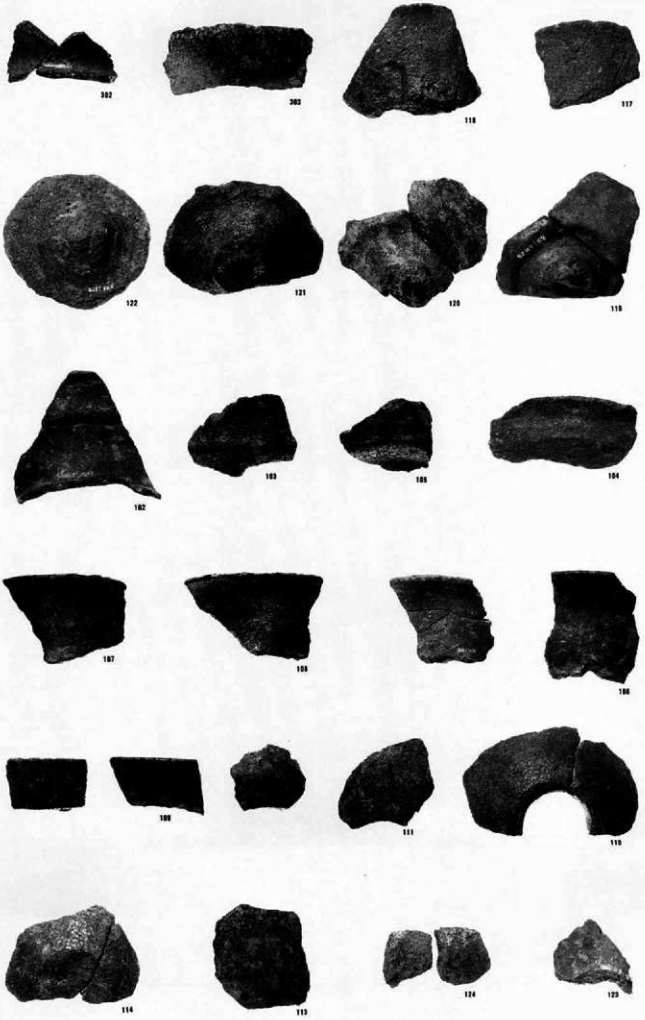
402

301
3号墳

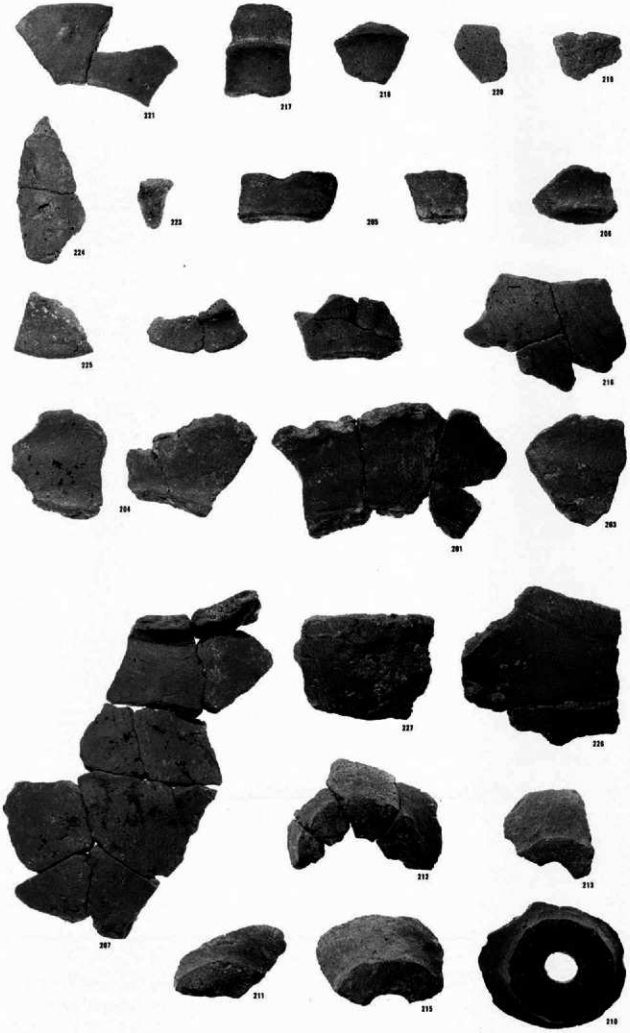
116・115・101
1号墳

401～404
4号墳

出土土器(2)（×½）302・303：3号墳　他：1号墳



出土土器(3)（×½） 2号墳


221
217
218
220
219
224
223
205
206
225
216
204
201
203
207
227
226
212
213
211
215
210

3号墳出土金属器（×½）

303

304

305

306

307

314

309

310

311

312

313

305（×2）

306（×2）

308
（×1）

314（×2）

1号墳出土金属器（×½）

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

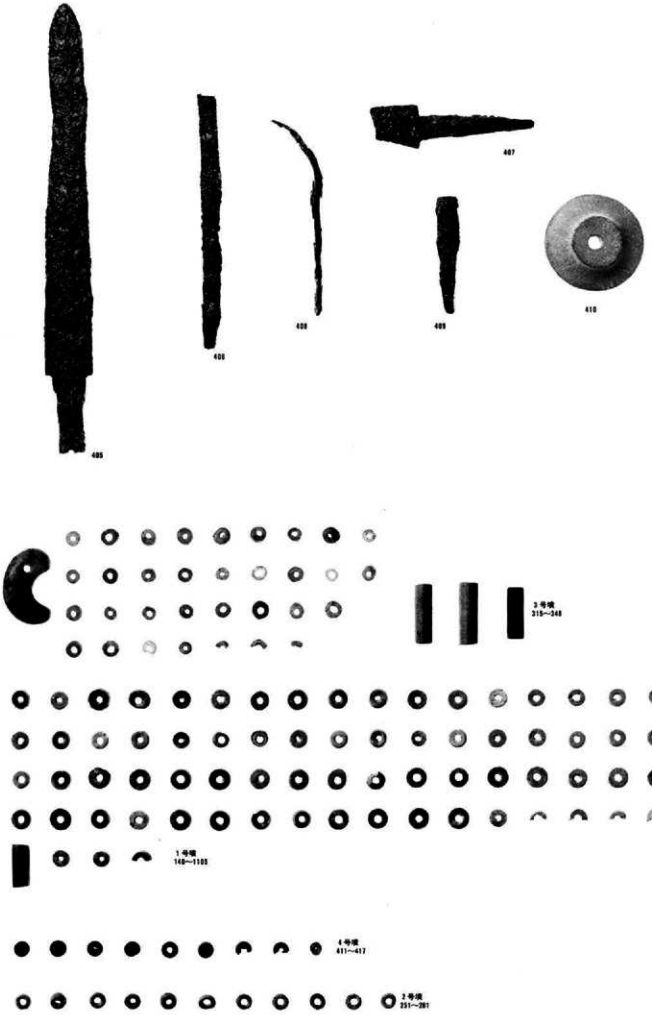
137

138

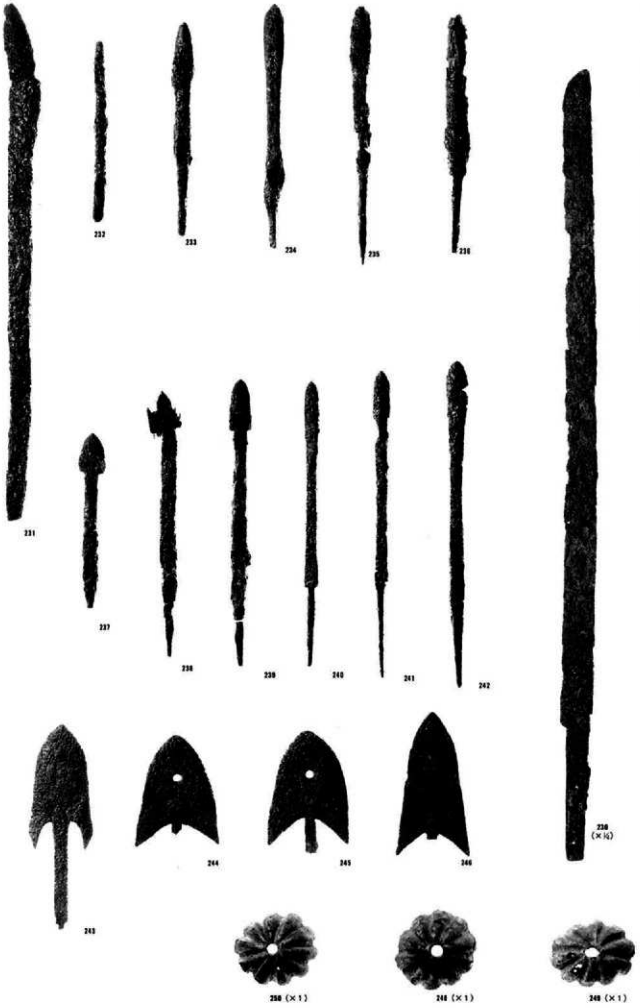
136

127（×2）

4号墳出土金属器（×½）・玉類（×1）



2号墳出土金属器（×½）


231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
(×½)
(×1)
(×1)
(×1)

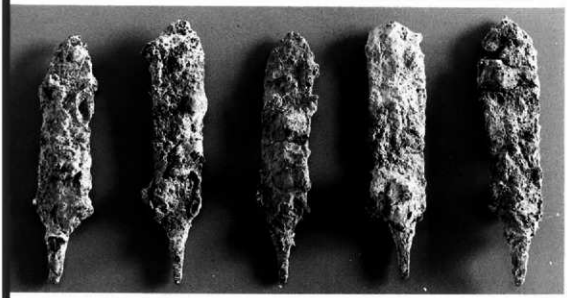
平安時代墓・3号墳出土品（参考図）

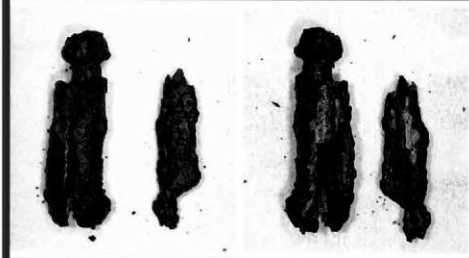
501

502

503

504

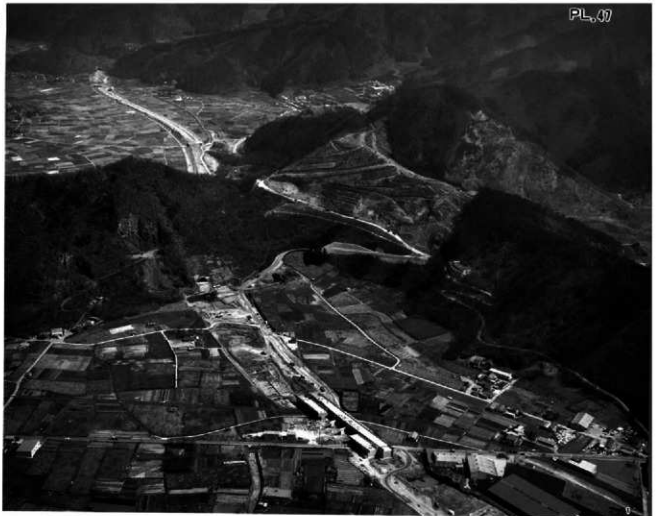

保存処理前の鉄鏃（309～313）


劣化破損時の弓飾鉄（308）

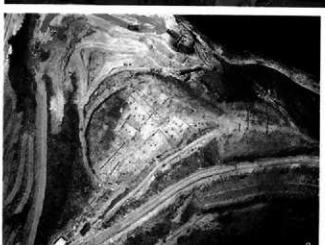
小型器台（301）

遺跡全景

北平峰と松原遺跡
（長野インター上空より）



北平峰全景
（上空より）



北平峰および
松代扇状地遠景
（北より）

長野盆地南部
沖積地遠景
（手前　北平１号墳）

北平1号墳遺構(1

5．調査以前状況
6．松原遺跡より遠景

7・8．全景

9・10．墳丘

11．墳丘および長野盆地
南部沖積地

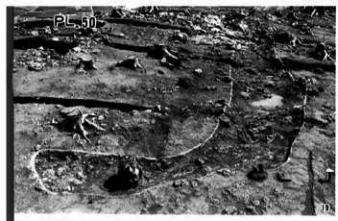
七平１号墳遺構(2)

12. 第１・２号
埋葬主体部

13. 第１号埋葬主体部
14. 第２号埋葬主体部

15. 第１号埋葬主体部
礫郷
16. 埋葬主体部と墳丘

17. 墓壙掘り込み状況
18. 第２号埋葬主体部
小口部



北平１号墳遺構(3

19. 周溝
20. 周溝断面

21. 第１号埋葬主体部
棺上土器出土状況
22. 第２号埋葬主体部
棺上土器出土状況

23. 第１号埋葬主体部
ひさご壺出土状況

24. 調査スタッフ
下島浩伸撮影
25. 岩崎卓也教授
現地指導

北平塚・北平尾根遺構(1)

北平1号塚
調査前　北より

北平2号塚
調査前　北より

29. 北平1号線
構築状況　北東より

31. 北平2号塚
構築状況
30. 北東より
31. 南東より

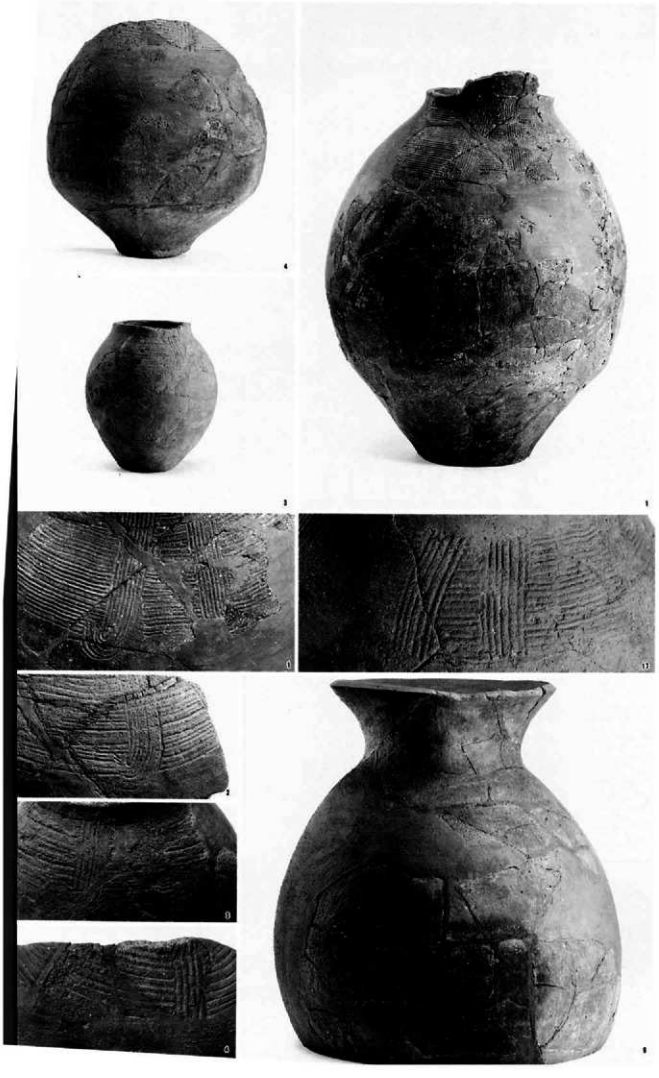
北平峰全景
東側尾根より

斜面での調査

35. 北平尾根の調査

北平1号墳土器(1)

第1号埋葬主体部



1・3・4・9 縮

比平1号墳土器(2)

第1号埋葬主体部

10

11

10

11

12

13

15

16

9・11・12・13・15・16
縮尺1／3

北平１号墳土器(

第２号埴輪主体部

17

18

19

20

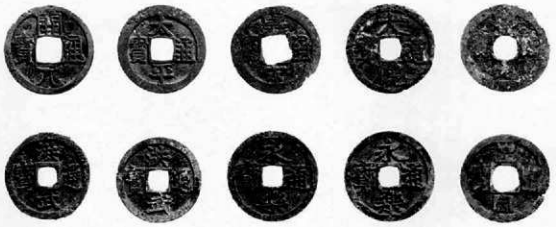
21

23

22

17・18・19・20・21・22
縮尺１／３

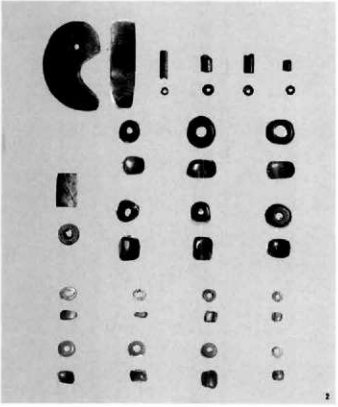
北平２号塚出土銭貨



1

北平１号墳出土玉類

北平１号墳出土土器



2

3

4

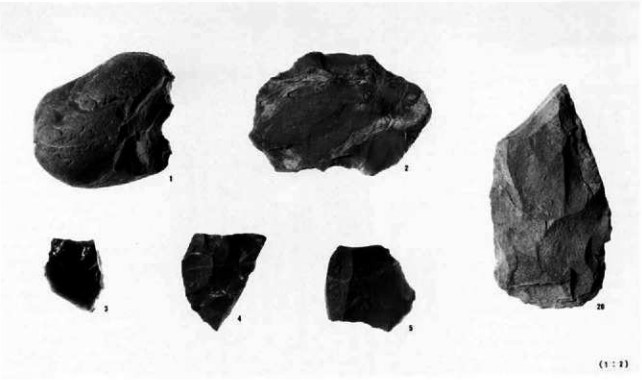
5

6

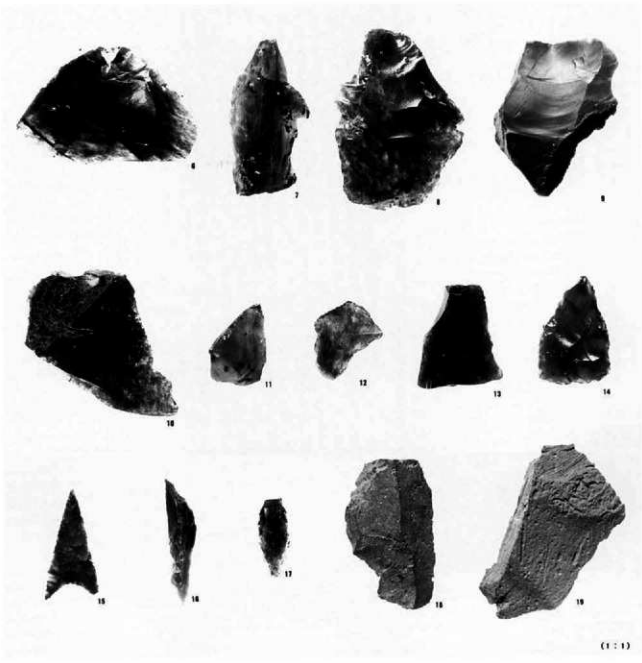
7

北平尾根
出土遺物(2)

石核1～4
剥片5
打製石斧20



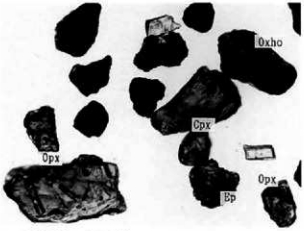
剥片6・7・18・19
微剥有石屑8～13
石鏃14・15
石錐16・17



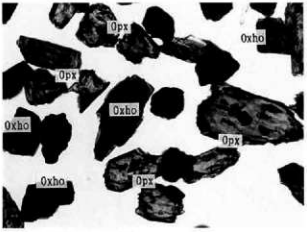
北平1号墳胎土分析

試料中の重鉱物

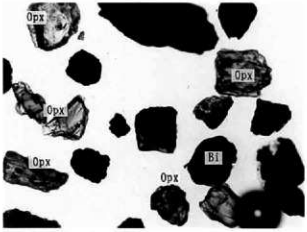
1．試料番号1（Ⅰ1類）



2．試料番号8（Ⅳ2類）

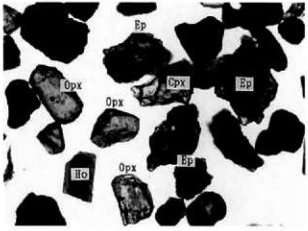


3．試料番号17（Ⅱ3類）



4．試料番号25（Ⅳ5類）

5．試料番号24（Ⅰ5類）



6．試料番号25（5類）

0.5mm

Opx：斜方輝石，Cpx：単斜輝石，Ho：角閃石，Oxho：酸化角閃石，Bi：黒雲母，Ep：緑レン石．

（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

書名	収録遺跡	刊行年
①長野線１－岡谷市	大久保Ｂ 大洲 中島Ａ・Ｂ 他	1986
②長野線２－塩尻市１	御倉垣外 上木戸 吉田向井 他	1987
③長野線３－塩尻市２	吉田川西	1988
④長野線４－松本市１	総論	1989
⑤長野線５－松本市２	神戸 上二子 中二子	1988
⑥長野線６－松本市３	下神	1989
⑦長野線７－松本市４	南栗	1989
⑧長野線８－松本市５	北栗	1989
⑨長野線９－松本市６	三の宮	1989
⑩長野線10－松本市７・豊科町	北方 上手木戸 他	1988
⑪長野線11－明科町	北村	1992
⑫長野線12－坂北村・麻績村	向井六工 古町 子尾入 他	1993
⑬長野線13－長野市１・更埴市	島林 塩崎城見山砦 他	1993
⑭長野線14－長野市２	鵜前	1993
長野線15－長野市３	石川条里	Ｈ８
長野線16－長野市４	篠ノ井	Ｈ８
長野線17－長野市５	総論	Ｈ８
⑮上信越１－佐久市１	下茂内	1991
⑯上信越２－佐久市２	栗毛坂 西赤座 枇杷坂 他	1990
⑰上信越３－長野市１	大室古墳群	1991
上信越４－長野市２	松原－縄文－	Ｈ８
上信越５－長野市３	松原-弥生・総論-	H11
上信越６－長野市４	松原-古代・中世-	H10
⑱上信越７－長野市５	北平 大星山	Ｈ７
上信越８－長野市６	村東山手	H10
上信越９－長野市７	小滝 北の脇 前山田	H10
上信越10－長野市８	川田条里	H11
上信越11－長野市９	峯山Ｂ 峯山	Ｈ９
上信越12－長野市10	榎田	H10
上信越13－小布施町・中野市１・２	清水山古墳他	Ｈ８
上信越14－中野市３・豊田村	対面所他	Ｈ９
上信越15－信濃町１		H11
上信越16－信濃町２		H11
上信越17－佐久市３・小諸市１	宮ノ反Ａ 他	Ｈ９
上信越18－佐久市４・小諸市２	芝宮 中原 他	Ｈ９
上信越19－小諸市３	岩下 郷土他	Ｈ９
上信越20－東部町	真行寺 桜畑他	H10
上信越21－上田市・坂城町	陣馬塚 宮平 東平他	Ｈ９
上信越22－更埴市１	清水 大穴	Ｈ８
⑲上信越23－更埴市２	屋代木簡	Ｈ７
上信越24－更埴市３	更埴条里・屋代・篠河原－縄文	H11
上信越25－更埴市４	同上－弥生・古墳	Ｈ９
上信越26－更埴市５	同上－古代	H10
上信越27－更埴市６	同上－中世	H11
上信越28－更埴市７	同上－総論等	H11
新幹線１－佐久市他	金井城 砂原 中平・田中島他	Ｈ９
新幹線２－上田市・坂城町	国分寺周辺他	Ｈ９
新幹線３－更埴市	更埴条里 屋代	Ｈ９
新幹線４－長野市１	石川 篠ノ井 築地他	Ｈ９
新幹線５－長野市２	浅川 三才	Ｈ９
野尻バイパス－信濃町	西岡Ａ 貫ノ木	Ｈ９
あずみの		
⑳長野大町線－美麻村	千見 米山	1993
㉑中野豊野線－中野市	寒林 七瀬	1993
夢科ダム		

※丸数字：センター報告書番号（既刊行順）

刊行年：Ｈ８以降は予定

長野線　：中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書
上信越　：上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書
新幹線　：北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書
野尻バイパス：国道18号線野尻バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書
あずみの　：国営アルプスあずみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書
長野大町線：主要地方道長野大町線埋蔵文化財発掘調査報告書
中野豊野線：県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書
夢科ダム　：夢科ダム埋蔵文化財発掘調査報告書

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 20

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 7

—長野市内その5—

大星山古墳群・北平1号墳

発行　平成8年3月31日発行
発行者　日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(財)長野県埋蔵文化財センター
印刷　信毎書籍印刷株式会社